

ネプテューヌの保護者的な感じの男

煉獄姫

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ネプテューヌには一人の秘書がいる。

その男は全身黒ずくめで身長は175cmほどで、目つきが悪い20歳ほどの男はネプテューヌが女神になる前から彼女を見守り、育て、今もなお彼女を支えているのだった。普段は厳しいが、本当はとても優しい彼の背中に、いつしかネプテューヌは憧れていた。

しかし、その男は女神化した彼女たちを軽く倒せるほどの実力を持っているとつもない人間だった!?

ネプテューヌでのオリジナル主人公は異世界から飛ばされてくる系が多かったので、昔から女神のことを知っている主人公を書いてみました。

評価を見ると、好きな方と嫌いな方で分かれる作品なので嫌だなと思った方はブラウザバックをお願いします。

## 目次

### 女神の保護者編

女神の秘書官 | 1

ラストイシヨンの女神 | 6

抱き上げて | 13

トウカの強さ | 17

二流になるな | 23

ネプテユーンとトウカ | 32

### 雪国の事件編

ルウィーへ | 35

黒い鎧 | 40

テレビはアポを取りましょう | 44

誘拐犯にお仕置きを | 49

ネプギアの心 | 55

### 女神誘拐編

怒りと殺意 | 64

強き者も、弱き者も | 71

怖さと戦う強さ | 80

決戦アイリス | 87

泣き顔スマイル | 96

好きな人の看病をしようとしたら変態と言われることがある。

104

発砲、そして加入 | 113

反抗期が来ない？ | 119

### ノワール盗撮編

教会の迷子

124

アイリスは犯人の場所を突き止め、トウカはプラネテューヌの未来を心配する。

129

グラタンじゃないクラたんよ

135

犯人発見、しかしオカマ

141

空からもう一人

145

プルルート歓迎

155

フルダイブ式ゲーム

160

ゲーム開始

167

ゲーム決着

174

トウカ奪還編

トウカの弱点

180

敗北の女神

187

昔の記憶

194

譲れないもののために

198

ネプテューヌVSライト

204

プルルートVS黒ネプギア

209

カイナVS黒ネプギア

213

トウカ救出

217

日常編

予告

221

嫌な夢と恐怖？

230

ネプギアとの模擬戦闘

236

見えないところで頑張っている人間は敏感な所が多い

245

寝落ちして回想

251

番外編 ネプテューヌのヤンデレ

ノワールとの出会い回想の終わり

### 女体化編

罰ゲームは性別が変わる時がある。

イツカとカナちゃん

トウカさんご乱心？

### ネプギアの訓練編

サバイバル演習開始

訓練の夜

訓練終了

### トウカとの亀裂編

亀裂

大切な友だち

我が生涯、一片の悔いはある

トウカの弱点？その2

トウカの秘密

カイナの決意とトウカの考え

番外編 女神の学力テスト

ノーウエルピース

いじけんな

ヴェアフル

ヴェアフルとの戦闘

エディン創立

命の重さは同じじゃない

だから殺す、私も……あなたも

259

268

275

280

286

295

299

304

309

316

321

327

332

339

344

351

357

362

368

374

378

386

お互いの思いを賭ける戦いを	397
番外編 七夕	402
一つの戦いが終わるとき	409
コメント返しのコーナー	416
戦艦を落とす者、壊す者	424
ベーネの憎しみ	431
ヴェアフルとトウカ、勝負の行方は	435
そばにいてくれる？	439
悲痛な叫び	443
コメント返し2	448
コメント返し3	457
トウカとの別れ編	
彼のいない世界	464
姉妹の道	469
別れの時	474
トウカさんの後任探し	481
お祭り準備	485
コラボその1	488
ルウィーとの確執	494
自分なりのやり方で	498
コメント返し4	503
ルウィーの女神とプラネテューヌの青い魔導師	508

## 女神の保護者編 女神の秘書官

ゲームギョウ界

それは地球とは違い、四つの国が四人の女神によりそれぞれ統治されている世界のことだ。

この世界は千年間、4国でシェアを武力で奪い合う戦争がほんの少し前まで続いていたが、今まさに友好条約が結ばれ武力でのシェアの奪い合いが禁止され平和へと向かっている。

「女神ホワイトハートが治める国、ルウイー。女神グリーンハートが治める国、リーンボックス。女神ブラックハートが治める国、ラストイシヨン。そして、私女神パープルハートが治める国、プラネテューヌ」

俺の目の前では友好条約締結の式典が行われており、俺の上司の女神、パープルハートが宣誓をしている途中だ。俺はこういう堅苦しいものは嫌いなのだが、教祖のイストワールに言われて参加している。そうは言っても、参列席には並ばず建物の頂上に腰掛けて見ているだけなのだが

「四つの国が国力の源であるシェアエナジーを競い、時には女神同士が戦って奪い合う事さえしてきた歴史は、過去のものとなります」

どこの世界にも戦争はあるのだと落胆したのはもう遥か昔のことだ。これからはもう、そんなことをせずに済む。

「本日結ばれる友好条約で、武力によるシェアの奪い合いは禁じられます、これからは国をより良くすることでシェアエナジーを増加させ、世界全体の発展に繋げていくのです」

それにしても、本当にパープルハートは普段の姿からは想像できないほど大人の女という感じだ。普段からあんな感じにしてくれればいいんだが、いや……無理だな。

「二」私たちは過去を乗り越え、希望が溢れる世界を作ることを、ここに誓います「二」

四女神がそう言った瞬間、まわりから歓声が聞こえてくる。これからは明るい時代の幕開け、そう信じていきたいものだ。



式典の数日後、俺の目の前には数日前見事に宣誓していた女神パープルハートが正座をしている。いや、正確にはパープルハートの普段の姿か

「それで？今日の仕事は終わったのか？」

「お、終わったよ？本当だよ？」

「見せてみる」

俺は女神パープルハート、もといネプテューヌから今日やった書類を受け取り内容を確認する。確かに内容はきちんとしている……：……：内容は

「きちんと出来てるな」

「でしょー!?私だってやればできるんだから」

「一枚だけだな」

そう、今日きちんと言ったのは一枚だけ、他全ては昨日やったものだったのだ。つまり、昨日やった書類を今日やったと誤魔化したことになる。

「今日は50枚のうち20枚は片付けると約束したな？」

「し、しました……………」

「残り19枚、出来るまで夕飯抜きだ。トイレ以外執務室から出ることも許さん」

「ねぶ!?そ、そんなの無理だよー!死んじゃうよー!」

もう既に分かったと思うが、女神になっていてる時とは天と地ほどの差がある。普段のこいつは仕事はしない、女神としての自覚はない、能天気、バカ、それで良いのか女神よ。

「仕事しないお前が悪いんだろうが」

「だって面倒なんだもん!それに積みゲーだっていっぱいある「ああん?」「ごめんなさいすぐにやるのでその振り上げた拳を下ろしてくださいお願いしますー!」



残像が見えるほどの速度で土下座するネプテューヌ、そんなに早く動けるなら仕事しろ。気が向いたときはやる癖に。

「まあ俺だつて鬼じゃない、仕事はしなくていいが条件がある」  
「えっ！なに!?!」

「24時間連続クエストマラソンをするならキャラにしてやる」

「ネプ ギ アアアアアアアアアアア！ トウカが苛めるウウウウウウウウウ！」

今ネプテューヌが泣きついた相手はネプギア、女神候補生でネプテューヌの妹だ。妹に泣きつく女神……はあ、こんなのが女神だと思うと嫌になってくる。

「トウカさん、もう少しだけ減らしてあげてください」

「却下だ、こいつがサボった分の仕事は俺とイストワールに回って来るんだ。俺はまだしもイストワールのことを考えろ」

気が向いたときは恐ろしいほどの仕事をするくせに……一から訓練し直してやろうかこいつ。

「ネプテューヌさん！」

執務室の中に本に載った少女が現れる。名前はイストワール、このプラネテューヌの教会で働いている教祖だ。

「どうしたイストワール」

「トウカさんにネプギアさんも丁度良いところに！少しこちらにいらっしやってください！」

そう言われた俺たちはイストワールに続き、すこし薄暗い部屋にたどり着くと、その中央には小さなクリスタルが浮かんでいた。名前はシエアクリスタルというものだ。

「シエアクリスタルがどうかしたの?」

「はい、クリスタルに集まる我が国のシエアエナジーが、最近下降傾向にあるんです」

シエアエナジーのグラフを見ると、最近シエアエナジーがだんだんと下がっている様子が見て取れた。やれやれ……どうせこんな事だろうと思った。

「まだたくさんあるんでしょ?それなら心配ないんじゃないかな?」

「アホかお前は」

ネプテューヌの耳を引つ張りながら話す。

「いいか、シエアエナジーが減ってるということはお前への信仰が薄れてるといふことだぞ?」

「トウカさんの言う通りです!この下降傾向は国民の皆さんの心がネプテューヌさんから、少しずつ離れているのですよ!」

「ねぶく、でも嫌われるようなことしてないよ?」

さつき俺が耳を引つ張ったところを摩りながらイストワール言葉に反論する。

「好かれるようなこともしてないかも」

「ねぶう!」

「ネプギアの言う通りでしょ」

すると、部屋の中に2人の少女が入ってきた。オレンジ色の髪のはコンパ、プラネテューヌの病院で看護師をしているらしい。そして、片方がアイエフだ。

「すみませんイストワール様、会話が聞こえてしまったもので……」

「いえ、コンパさんとアイエフさんなら別に」

「ええー!あいちゃんもいーすとトウカの味方なの!」

「ねぶねぶ、これを見るのです!」

そう言つてコンパが見せつけたのは女神いらなという内容が書かれたビラだった。こんなものまで出回ってるのか……

「女神いらない………はうう」

「これはもう一度鍛え直しだなネプテューヌ」

「いやあー!」

さて、どうやってこいつを鍛え直すか

「もしかして私大ピンチ!」

「ピンチなのはこの国だ」

ネプテューヌにゲンコツを落とす。

「さて、どうやってそのダラけきつた根性を叩き直すか……」

(どうしよう……このままじゃ地獄が再臨しちゃうよ………なにかこの場から逃げる手は………あっそうだ!)

ネプテューヌは何かを思いついたかのように顔を笑顔にする。

「私、ラストイションに行って女神の心得を聞いてくるよ！いつまでもトウカだけに教えてもらうより同じ女神仲間に教えてもらうのもいいと思うんだ！」

確かに一理あるが………こいつの場合はただ遊びたいというのが本音だろう。

「良いよね!?!」

「まあ、構わん」

やったあ！と喜びながら飛び跳ねるネプテューヌは女神の威厳も何もない。まだまだガキだな

「もう知らん、勝手にしろ」

「え？トウカ付いてこないの？」

「なんで俺が付いていく必要があるんだ」

俺はクエストをやらなきゃいけないから少し忙しいのだ。

「一緒に行こうよ！トウカは私の秘書でしょ!?!」

「保護者だ」

「保護者ね」

「保護者ですな」

俺の他にアイエフとイストワールが同意してくれた。一応役職は女神秘書となっているが、ネプテューヌとはこいつが女神になる前からの知り合いなのでもう保護者のようなものだ

「ねえ〜行こうよトウカ」

「そうですよ、行きましようトウカさん」

「そうよ、あんたネプ子のお目付役でしょ」

「トウカさんも一緒にいいですよ」

イストワールに助けられてくれという目線を送るが、行ってこいよというような目で見られたため仕方なく付いていくことにした。

## ラスティションの女神

「で？なんでプラネテューヌの女神が私の教会で寝てるのかしら？」

「あゝ、気にしないで仕事してゝ」

「気にするわよ！」

現在、俺たちはラスティションの教会のテラスに来ているのだが、まあ予想していた通りネプテューヌはサボり始めていた。

「やれやれ……………」

「ほらトウカ、あんたもこっちに来なさいよ」

アイエフに引つ張られてノワールたちのところへと向かう。

「ちよっ！ちよっ！と待ちなさい！」

俺に気づいたノワールは突然手鏡を取り出して髪の毛を確認した後、顔を少し赤くして俺に怒鳴る。

「なっ、なんで貴方まで居るのよ!？」

「開口一番がそれか」

全く嫌われたものだな。

「行く気はなかったがこいつらが付いて来いって煩くてな」

「だってトウカは私の秘書だもん」

「保護者の間違いじゃないの?」

ノワールにまで言われているならもう俺は秘書じゃなくて保護者として認知されているな。概ね間違っではないが。

「そんな事より、早く女神の心得とやらを聞け」

「ええー、いいじゃん別にー」

こいつは何のためにここに来たんだ。というより、俺から逃げる為に来たなら俺を連れてきたらダメだろうに。

「悪いけどお断りよ、私は敵に塩を送るつもりはないから」

確かに、友好条約を結んだからといって仲間になったわけではない。シエアの奪い合いが武力から他のものに変わっただけだ。まあネプテューヌはそう思っではないようだが

「もうー、そんなんだから友達居ないんだよ?」

「い、いるわよ友達くらい!」

ノワールはネプテューヌと違いコミュニケーション能力に難ありかもしれない、というか……素直じゃないのだろう。俺もあまり人のことは言えないけどな。

「だ、大体私に聞くならトウカに聞きなさいよ！」

「トウカはもういっぱい教えて貰ったもん！」

ノワールは友達の話から見事に話を逸らした。もう自分には友達がいませんと云っているようなものだろう。

「それよりネプギア、今日の訓練は休みでいいぞ。その分駄女神の面倒を見てやれ」

「え？はい……………」

少しだけネプギアはしゅん、と落ち込んでいた。いや、普通は喜ぶところじゃないのか。訓練が無いんだぞ。

「ネプギアってトウカに稽古つけてもらってるの？」

「はい！トウカさんのアドバイスは本当に為になってるんですよ！」

「知ってるわよ、私もちよつとだけだけど見てもらったことあるから」

俺はネプテューヌがアイエフに会う前に既に面識があったから、アイエフを連れて来た時は本当に驚いたことを覚えている。

「ちなみに言っておくけど、まだ私は負けだつて認めてないから！」

「勝手にしろ、俺はどうでもいい」

「女神相手に勝ち逃げは許さないわ、次こそ絶対に勝つてやるんだからー！」

ノワールには少し前、シエア戦争の時に戦って以来目の敵にされているのだ。少し面倒なのだが……まあこいつの性格上仕方ないといえれば仕方ない。

「お姉ちゃん、仕事終わったよ」

俺たちが話していると、ノワールの妹であるユニがやって来た。あの量の仕事を女神候補生でありながらやり遂げるとはな……ネプテューヌにも見習わせたい。

「お疲れ様ユニ、そこ置いといて」

「うん、それでね…………お姉ちゃん。私、今回早かったでしょ？私すごく頑張つて…………」

「そうね、普通レベルにはなったわね」

あの数が普通レベルならネプテューヌは素人以下になるぞ。あれだけの書類量を処理出来るなら大したものだと思うんだがな……………

「あっ！もしかして友達ってユニちゃんのこと？妹は友達とは呼べないんじゃないかな」

「ち、違うわよ！ちゃんというわよ！」

「そんなこと言ってる、ほんとにボツチなんじゃ無いの……？」

「そんなこと無いわよ！」

そんな言い合いを続けている間にユニは深く思い悩んだ表情を浮かべながら何処かへと出て行ってしまった。全く……………

「ネプギア、行こう」

「はい！」



「あれ？トウカとネプギアは？」

「二人が話してる間にどっか行ったわよ」

ネプテューヌが2人がいないことに気づくと、アイエフがどこかに行ったと伝えた。

「なーんだ、どこ行ったんだろ二人とも。それよりお腹すいたなあ」

ネプテューヌがポケットから懐中時計を取り出して時刻を見ると、既に11時が過ぎていた。

「もうこんな時間か、お昼ご飯食べようよ」

「なによそれ」

「知らないの？懐中時計っていう時計だよ」

ゲームギョウ界の時計はほとんどデジタル化されているので懐中時計などはほとんど無い。それ故ノワールのように懐中時計を見たことがない人も少なく無いのだ。

「へえ、でも面倒くさがるのあんたがよくこんな物使ってるわね」

「えへへ、トウカにこの服と一緒に貰ったんだ」

ネプテューヌが持っている懐中時計と今身につけている服は昔女神になった祝いの時に貰ったものなのだ。それ故もう何百年も使っている。

「私がトウカの懐中時計を羨ましそうに見てたから、持ってるうちの一つをくれたんだよ」

昔、トウカの部屋に入ってたたくさんの懐中時計が入った箱を見つけたネプテューヌはそれを眺めていた時がある。その際トウカに見つかり怒られるかと思っただが、トウカはネプテューヌを抱き上げてから膝に乗せて懐中時計のことを教えてくれたのは彼女の中でのいい思い出の一つである。

「そうなんだ。ちよつと見せてよ」

「これはダメっ!」

「良いじゃない、少しくらい見せなさいよ!」

「ダメなの〜!」

「コンパ、この2人はほつといてお昼いきましよ」

「はいですう」

コンパとアイエフは二人を置いて昼食を食べに出かけてしまった。



「はあー」

ユニは噴水の近くで座っていた。やはり褒めてもらえなかったこと、というより認めてもらえなかったことがショックみたいだ。

「ユニ」

「あ、トウカ」

呼び捨てにされているがこの際気にしないでおこう。

「ネプギアまで」

「えへへ」

俺たちはユニの近くへと向かい、ネプギアはユニの隣に座って俺は柱に寄り掛かる。

「ごめんね、お姉ちゃんが話の邪魔しちゃって」

「ううん、お姉ちゃんには私にはいつもあんな感じだから」

いつもあんな感じって……あいつは妹も素直に褒められないのか。

「お姉ちゃんよりも上手くできないと褒めてくれないみたい。そんなの、無理に決まってるのに」

「ユニちゃん……………」

「そうだな」

「トウカさん！」

「事実だろう、今現状でノワールよりも上手くやることは出来ん」

なんせ女神と女神候補生なのだ。経験も実力も全く違い過ぎる。そんなことは不可能に近い。ネプテューヌのような怠け者ならば別だが

「だが、お前たちの可能性は無限にある。これから先努力をすればネプテューヌやノワール達を越えることができるかもしれないぞ」

絶対に、とは言えない。この世界に絶対というものはないからだ。でも、この子たちならそれを成すことができると思う。

「少なくとも、あの書類整理は一人前だ。じきにノワールよりも上手くこなせるようになるさ」

あれが普通ならプラネテューヌはすでに滅びてる。

「本当に？」

「ああ、俺に褒められても嬉しくないだろうけどな」

「そんな事ないですよ！ねえユニちゃん」

「えっと、ま、まあ悪い気はしないわね」

てつきり嬉しくないと思っただが、そんな事はなくて良かった。

「でも、私まだ女神化も出来ないのよ？」

「それは私もだよ、ラムちゃんにロムちゃんだって」

こいつらが女神化できるのはいつになるのだろうか。

「ま、まあ一番最初にできるのは私でしょうけどね」

「うん！私も負けないんだから！」

そうだな、すこしだけやる気にしてみるか。

「じゃあ、女神化したらなんでも好きなものをやろう」

「「本当に!?!」」

二人とも目を輝かせて喜んでいた。こういうことで喜ぶところは、普通の子供なのに。

「ああ、先に言っておいてもいいぞ」

「じゃあ私…………トウカさんと同じ懐中時計が欲しいです！」



「俺と同じ懐中時計?」

俺はポケットから懐中時計を取り出す。こんな物が欲しいとは、やはり好みはネプテューヌと同じということか。

「お姉ちゃんが使ってるのを見て私ずっといいなあって思ってたんです!」

「綺麗……………それって時計なの?」

「ああ、全部時計がデジタル化されてるゲームギョウ界では珍しいだろう」

俺はユニに懐中時計の中身を開いて見せると、もつと目を輝かせていた。珍しいからマジマジと見ている。

「持ってみるか?」

「いいの?」

俺はユニの手のひらに懐中時計を乗せてみる。

「意外と重いのね」

「ああ、ずっと使ってる骨董品だ」

これを手に入れたのはかなり昔だから……………もう俺は懐中時計を何百年も使っているのか。

「だが本当にこれでいいのか?」

「はい!」

ネプテューヌには紫をやったから……………ネプギアには薄紫色の懐中時計をやる事にしよう。ちょうど家にあつたはずだ。

「ユニは何がいい?」

「……………それ」

「うん?」

よく聞き取ることができない。

「だから……………私もそれがいい」

「お前も懐中時計がいいのか?」

「そうよ!悪い!」

別に悪くはないが……………少し意外だ。

「わかった、ユニにも懐中時計をやろう」

今の子供の好みはあまりよく分からないな。珍しいから欲しいだ

けなのだろうか。まあいい、とりあえず元気が出たならいいだろう。  
「よし、そろそろ帰るぞ」

そして俺たちはネプテューヌ達のもとへと帰った。その際、ネプテューヌとノワールが女神化して喧嘩していたので蹴り飛ばしておいた。女神としての自覚がないのかこいつらは

## 抱き上げて

あの後、ネプテューヌはノワールの書類整理を手伝おうとしたのだが、物の見事にやらかしてしまい余計に時間を食ってしまう結果になっちゃった。

それゆえ、今回は書類整理よりも簡単なクエストへと行くことになった。

「ふえー、疲れたですう」

「大丈夫コンパ？」

「一般人には少し厳しいかもしれないな」

もうすぐプラネテューヌの国境付近だ。よくも徒歩でこんなところまで来たな……

「今回のモンスター退治の場所は二箇所、ラスーネ高原と近くのトゥルーネ洞窟よ。どちらも難易度は高くないから「お姉ちゃん」……なに？」

「誰も聞いてない」

ここから先はコンパを抱き上げていくとするか、というよりネプテューヌは何をしてる。

「おお！これが表から見ないと読めない看板！」

「お姉ちゃん、看板ってどれもそうだと思うよ？」

何をバカなことを言ってるんだかこいつらは。

「よしコンパ、もうすぐだから行くぞ」

「えっ？ちよつ、トウカさん!?!」

俺はコンパを抱き上げて歩き始める。これ歩いても辛いだけだからな。高原に着くまで嫌だろうが我慢してもらおう。

「すまん、嫌だと思いが無理に歩くと体に毒だ。高原まで我慢してくれ」

「い、いえ……むしろ、その…嬉しいですよ」

顔を赤くしながら目をそらす、やはり少し熱っぽいのだろうか？いや、コンパは看護師だからそんなことはないだろう。

「……………」

「どうしたアイエフ？」

「別に」

コンパを抱き上げたから機嫌が悪くなっているみたいだ。本当にこいつはコンパが好きだな……あれか？百合という奴なのだろうか？別に否定はしないから好きな人と付き合えばいいと思うぞ、俺はノーマルだが。

「おい、蹴るな」

「ふん」

機嫌が悪いからって脛を蹴り続けるのはやめろ。痛くないけど歩きにくい。

（トウカさん、きつとあいちゃんは自分も抱き上げて欲しいんですう）  
（うん？俺がコンパを抱き上げているから機嫌が悪いんじゃないのか？）

（間違つてはないですけどたぶんトウカさんが思ってる事ではないですう）

ふむ、女の子というのは何百年たっても難しいものだな。それにしても抱き上げて欲しいか……もしかしたら何年前のことを思い出して懐かしくなってしまうんだろうか？俺に抱き上げてもらいたいなんて物好きいな奴だ

「聞きなさいよあんたたち！」

あ、そういえばクエストに来ていたんだったな。すっかり忘れていた。



「いい!？」

「ペース落ちてる」

もうすぐ高原、という所でネプテューヌはノワールに木の棒で背中を突かれながら歩いている。普段グータラしてるこいつには運動になるだろう。

「ていうかなんでコンパだけトウカに抱かれてるのー!ずるいよー!」

「あの、私はそろそろ大丈夫ですから、次はあいちゃんをお願いしま

す」

「ちよつ！コンパ!？」

まあ機嫌が悪いまま居られても困るからな、抱き上げてやるか。俺はコンパを下ろしてアイエフに近づく。

「べ、別にいらないから！歩けるから！」

「これから討伐に向かうんだ。体力は残してもらわなきゃ困る」

俺は適当な言い訳をつけてアイエフを抱き上げた。コンパに比べたらやはり軽いな。胸の差か。

「ちよ、ほ、本当にいいから！」

「普段ネプテューヌたちを見てくれている礼だと思ってくれ」

俺なんかに抱き上げられても礼にはならないと思うがな。

「あー！あいちゃんまでずるいってば！トウカトウカ！次は私だからね！」

「お前はプラネテューヌまで歩け」

「最近私の扱いがひどいと思わない!？」

ならもう少し女神らしくしてくれ。

「ねえ、先生」

「先生はよせとittedらろう?」

アイエフが誰にも聞こえないように話してくる。先生と呼ぶなど何度言えばわかるんだ。

「先生にもらった時計、ネプ子も持つてるのね」

「色違いだな」

アイエフにも藍色の懐中時計を渡している。それはこいつがプラネテューヌの諜報部員になった時の記念にあげたものだ。

「私が初めてだと思ってたのに………」

「なんだ？だから機嫌が悪かったのか？」

アイエフは何も答えない。確かにネプギアよりも早くアイエフには色々教えていたが、ネプテューヌは女神になる前から知ってるからな、さすがに時代が違う。

「でも、なんか懐かしいわね。何年振りかしら、先生に抱き上げられたのは」

「三年前くらいだな」

あの時のアイエフはまだ諜報員見習いで、任務中の事故で足をくじいてしまったのだ。その際こいつを抱き上げて詰所に帰ったというのが1度目だ。それからも度々抱き上げていたのは覚えているが……なぜ抱き上げていたのかは覚えてない。

「ねえ、もう少しだけこのままでもいい？」

「ラスーネ高原に着くまでならな」

アイエフは少し目を閉じて俺に体を預けた。やれやれ、こいつも大人びてはいるがまだまだ子供だな。

「はあ……」

なんだこの後ろからの殺気は。見たいとも思わないし知りたいと思わない。できるだけ見ないふりをしておこう。そうしておいたほうがいいはずだ。

## トウカの強さ

「ねえトウカ、私歩くの疲れたとは言ったけどさ、これはないよね？」  
ネプテューヌがあまりにもうるさいのでアイエフを降ろした後、俺はネプテューヌを小脇に抱えて歩いている。

「歩かなくていいだろう？」

「私は抱き上げて欲しいんだよ！コンパとあいちゃんみたいに！」

なんでそんな面倒なことをこいつにやらなきゃいけないんだ。

「ならネプギアにでもしてもらえ」

「トウカが良いんだよ！わっかんないかなあ〜鈍感も大概にしないとヒロイン逃げちゃうよ？」

「お前が何を言ってるか理解できないし理解もする気はない」

「やーい鈍感、朴念仁、唐変木、ターコ！」

とりあえずイラついたので草むらにネプテューヌを投げ捨てて先に進むことにする。こいつは意外とバイタリテイが強いからどこでも生きていけるはずだ。

「ここがラスーネ高原の集落か」

澄み渡るような青空の下に広がる草原は風になびいてとても空気が澄んでいてとても絶景だった。異常発生したスライヌが居なければさぞいい景色だっただろう。なんだこの数…………

「いけない！アクセス！」

集落の人間がこちらに手を振ったことを確認したノワールは俺たちの目の前で変身を開始する。いや、集落の人間に見えているんだが……

「ええー……ここで変身しちゃう!？」

そうしてノワールはドレスのような服から機械的なプロテクトアーマーのようなものに身を包み、黒い髪も白くツヤのある長い髪へと変貌を遂げた。この姿こそ、ラスティシヨンの女神ブラックハートの真の姿だ。

「女神の心得その二、国民には威厳を感じさせることよ？」

そうやってノワールは集落の民のところへと飛んで行った。威厳

か……………

「目の前で変身して威厳はあるのか？」

「トウカさん、それは言っちゃダメです！」

ネプギアに怒られたためこれ以上は言わないでおこう。そして俺たちがラスーネ高原に足を踏み入れると、やはりスライヌが大量発生していた。これはある意味気持ち悪い……………

「なぜスライヌがこんなに大量発生したんだ？」

「さあ、私たちも朝目覚めたらこんなことになって……………」

なるほど、とにかく原因は不明ということか。とりあえずは全員で取り掛かるほかないだろう……………いや、ネプギアの訓練はこれを使えば良いのではないだろうか？久しぶりにネプテューヌの太刀筋も見れるし、ちょうど良い

「今回はお隣の国のネプテューヌさんとネプギアさんが対処してくれるそうです」

「ねぶう!?なんで私たち!？」

「好都合だ。ネプギア、今回の訓練はスライヌの討伐にする。うまく立ち回って攻撃を受けないように戦え」

俺がそう言うのとネプギアはすごく嬉しそうに返事をした。こいつは頑張り屋だな……………この頑張り屋の精神がもう少しだけ姉にあれば良かったのに。

「ネプテューヌは不甲斐ない戦いをした場合リーンボックス辺りまで投げ捨てるからな」

「だから私だけ扱いひどいよ!？」

女神がスライヌに苦戦してどうするんだ。それにしても、どうしてわざわざワールはこんなプラネテューヌの周辺までやってきたのだろうか？早く帰らせたいからと言ってたが……………なるほど、そういう事か

「さあいけー」

俺の号令とともに2人は坂を駆け下りて獲物をコールドしてスライヌを切り裂いていく。ネプギアはビームサーベルのようなエネルギーの刃、そしてネプテューヌは刀剣だ。



「常に相手との間合い、そして囲まれてないか注意して戦え！早速囲まれてるぞー！」

「はいー！」

ネプギアの剣戟は手数が多い、つまり速度が早いのだ。しかし、パワーもイマイチで太刀筋も読まれやすい。少し訓練した相手なら避けられてしまうだろう。

「速さだけじゃなく変則的に攻撃しろー！」

反対にネプテューヌも同様でパワーとスピードはあるが太刀筋が読まれやすい。こいつら共通の欠点だなこれは。

「先生！私たちも手伝うわ！」

「ふう、そうだな。頼むぞ二人とも」

そう言つてコンパとアイエフは坂を駆け下りていった。アイエフの武器はカタール、ナイフより少し大きめの刃物だ。そしてコンパは………巨大な注射器、刺されただけでも痛いだろうが中身は一体なんなんだ………酸でも入ってるのか？

「よーしーこの調子ならいけるよー！」

と言つた瞬間、スライヌが雪崩のように流れ込み全員の体にまとわりついた。

「ちよ、どこ入って………」

「ああん、ネバネバするですう」

「あん、そこはだめ………」

「アハハハハハ！そこだめっ！くすぐったい！」

お前ら………スライヌに苦戦するのはどうなんだ。はあ、本当にネプテューヌは一度リーンボックス辺りまで投げ捨てたほうがよさそうだ。

「お姉ちゃん、私たちも………」

「だめよ、あの子達がやることに意味があるの。いいわね？」

ユニは渋々納得したようだ。ネプテューヌたちがやることに意味がある………なるほど、そういう事か。全く、敵だとかなんとか言つておいて、結局思うことは一緒だったわけか。

「トウカ、あなたも見てないで行って来なさい」

「そうだな、そうするか」

俺は坂を下りていく。



「ええい！お前らの魂、冥界へ送り返してやるよ！」

「落ち着け」

坂を下り終えた後、トウカはブチ切れてしまったアイエフの後頭部を軽く殴りつけて怒りを止めた。軽くと言っても、その衝撃でアイエフは前のめりに倒れてしまったのだが

「すぐ暑くなるのはお前の悪いところだと昔言っただが？」

「だってあいつらが……」

確かに怒る理由は正当なものである。

「ちなみにネプギアは背後の警戒を怠ったため――10点、ネプテューヌは一週間後24時間耐久クエストマラソン決定だ」

「うう、――10点か……あと50点で耐久クエストマラソンだよ……」

「ていうか私はそのルールまだ続いたの!？」

「今までは無くしていたが今回から追加だ」

そんなあああと叫ぶネプテューヌをよそにトウカは周りを見渡す。全てスライヌの軍勢で埋め尽くされている光景を見たトウカは思わず顔をしかめる。

「さて、面倒だからさっさとするか」

トウカは後ろから襲い掛かってきたスライヌの攻撃を躲そうとはしなかった。する必要がないからだ。なぜならトウカの体に届く前に爆せていたから

「ネプギア、お前の剣は早い。それゆえ太刀筋とパワーが疎かになりがちだがスライヌを相手にするなら問題はない。あとは戦い方の問題だ」

トウカはネプギアに話しながら一歩もそこから動かず、スライヌを手刀で倒していく。この時、ネプテューヌはトウカがネプギアに説明しながら戦っているためかなり手加減しているのだと察した。なぜなら、トウカの腕があればたとえ大軍のスライヌだとしても10秒

ほどこで決着がつくからだ。

「まずい、こういう耐久度が少ない相手は一番近くにいるやつを倒すのが基本的なやり方だ」

ネプギアは先ほどから目に付いた相手を倒していたが、それでは一番高くにいる相手に隙を突かれてしまう。だからこそ今回はスライヌにベトベトにされてしまったのだ。

「そして、慣れてきたらこんなこともできる」

そう言つてトウカは一番近くにいるスライヌを倒した後間髪入れずその次に近いスライヌへ、それを繰り返していき、20体のスライヌが消滅した。倒すのにかかった時間はたった5秒だ。

「そして、これは広範囲技を持つている場合はこうだ」

トウカはそう言うのと足を地面を軽く踏みつけると、その衝撃波が地面に波のように伝わってスライヌを全て消滅させるほどの衝撃が響き渡った。

「スライヌの駆除はこれが一番楽だ」

「凄い……………」

ネプギアは何も言えなかった。レベルが違いすぎるからだ。

「さっすがトウカ！相変わらずやるやる」

「お前が出来なさすぎるんだ」

二人のいつも通りの絡みを見ながらネプギアは一人思う、トウカに追いつくなど、本当に可能なのかと……



「凄い……………」

場所は同じラスーネ高原だが、集落でトウカ達を見ていたユニもネプギアと同じように感嘆の声を上げていた。強いとは聞いていたが、トウカが実際に闘うところを見たのは初めてで、まさかここまでとは思わなかったからだ。

「やはり強いわね、あいつは」

ノワールは少し誇らしげな表情を見せていた。もちろんトウカはラストেশヨンの人間ではないので誇りに思うのはおかしいことなのだが。

「あれであいつは実力の5%も出してないのよユニ、信じられないでしょう?」

「そうだね……………びっくりした……………」

ユニは戦争が終わってよかったと本気で思っている。みんなが仲良く手をとりあつて世界の発展に繋がるから、そして、トウカが敵に回るなど想像しただけで震えが止まらなくなる。それと同時に、トウカがラステイションに居たらどれほど心強いかと思う。正直に言う、あんなに強い人に教わっているネプギアが羨ましいと思つていた。

## 二流になるな

「はあ、疲れたあ」

スライヌを全て倒した後、俺たちは高原に座り込んで休憩をしている。ちなみに俺はネプテューヌの24時間耐久クエストマラソンの内容をどうするか考えている途中だ。

「さすがねトウカ」

コンソールを眺めていると、ノワールとユニがこちらにやってきた。

「お姉ちゃんから聞いてたけど、本当に強いよね」

「あれくらいならユニ達もいずれ出来るさ」

パワータイプのブランなら出来るかもしれないな。なんにせよ、そんなに難しいことはしていない。

「それよりもネプテューヌ！なんで女神化しなかったの!？」

「ええ、まあなんとかなったからいいじゃん」

ネプテューヌは疲れるという理由であまり女神化をしない。それでいいのだろうか、とは何度も思うが言っても聞かないから言わない。

「女神化すればあんなの楽勝だったでしょう!？」

「ノワール、こいつに何を言っても無駄だ。いずれ慢心して痛い目を見るから放っておけ」

「ちよ、人を犬みたいに言わないでよ!」

「馬鹿が、お前は犬以下だ」

「だから私に対するトウカの評価が酷い!」

仕事をしないお前が悪い。

「ねぷう、トウカは私のこと嫌いなのか!？」

「嫌いならとつくにお前のようなグータラなんて捨ててると何度言えはわかる?」

「トウカの愛情表現はわかりにくいよ!」

うむ、確かに昔からストレートに伝えろと言われることが多いな。だが俺などにストレートに言われても気分を害するだけだと思うが

「……まあいい、やってみるか」

「ネプテューヌ」

「なに……っつてうわあ!」

俺はネプテューヌを抱き上げながら言葉を紡ぐ。

「お前のことを大切に思ってる」

「ね、ねぶう、こ、困るよそんないきなり……」

「といえは満足か?」

へっ?と変な声を上げながらパチクリと瞬きしながらとぼけた顔をするネプテューヌ、こう言えば満足ならこれからそうしよう。

「……………つまり今のはなんとなく気分だったからやっただけ?」

「満足したなら下ろしてもいいか?」

持つのが面倒だから早く下ろしたいのだが。そう思い俺はネプテューヌを降ろした後、突然笑い声を上げた。相変わらず騒がしいやつだなこいつは……

「私の乙女心を弄んで……………万死に値するわ!!」

いきなり女神化して斬りかかって来たため地面へと叩き落とした。何がしたいんだこいつは……

「くうう、絶対に許さないんだから……………」

「ああ、そうだネプギア」

「聞きなさいよ!」

「どうしたんですか?」

ネプテューヌの攻撃を片手間に弾きながらネプギアと話す。とうよりネプテューヌは何故か怒ってるため攻撃が単純になってるから弾くことは難しくくない。

「確か機械部品が足りないと言ってただろう、ラストイシオンは工業が盛んだからあるかもしれん。後で行ってくるといい」

「本当ですか!」

「クロスコンベーション!ってカウンター!」

ネプギアは目を輝かせながら喜んでいる。やはり機械のことに関しては目の色が変わるな。ちなみにネプテューヌは刀を弾き飛ばしてヘッドロックで捕まえている。

「あの、出来ればトウカさんも一緒に行きませんか？」

「別に構わんがユニと行った方がいいんじゃないか？」

「ちよ、離しなさい！痛い痛い！」

「こんな無愛想な男よりも親友と回った方が楽しいだろう。」

「ユニちゃんとも良いんですけど、たまにはその………トウカさんともお出かけしたいなあって」

「変わったやつだな」

「相変わらず私のことは無視なのね!?ちよトウカ本当に痛いから離してお願ひよー！」

「ふむ、最近ネプテューヌのサボった仕事をしていて時間が全く無かったからな………気晴らしにはちようどいいか。」

「分かった、たまには付き合おう」

「やった！ありがとうございます！」

「トウカさん！ねぶねぶが白目むいてるです!!」

「おっと、やり過ぎたか。俺はネプテューヌを開放して投げ捨てる。」

「はあ、はあ、死ぬかと思つたわ………」

「先に仕掛けてきたのはお前だぞ」

「自分から仕掛けて返り討ちにされて恥ずかしくないのかこいつは。」

「先生、もしかしてストレス溜まつてるの？」

「そんなことないさ、ネプテューヌの仕事が全て俺に回ってきたからってそんなことない」

「絶対に怒ってるわよねトウカ？だから今日私に冷たいのよね？そうよね？」

「なんのことかわからんな。」

「そんなことよりノワールはどうした？」

「お姉ちゃんなら次のクエスト場所に向かったわよ」

「どうやらのんびりしすぎたようだ。俺たちも早く行かなければ………と思つたが、みんな疲れてるだろうから俺一人で行くとするか。」



「なによ、二人の世界に入っちゃって………」

ノワールは現在モンスターを討伐するために洞窟へと赴いていた。

みんながあまり相手をしてくれないため拗ねながら。

「そもそも………なんで今だにプラネテューヌに住んでるのよ、もうあの子に構う理由はないはずなのに……」

ノワールがトウカに出会ったのはほんの少し前、まだ女神たちが天界で守護女神戦争をしていた時だ。

「あの時はただの優男だと思ってたのに………」

少し前のことを思い出しながら雑魚モンスターを倒していく。

「さて、この洞窟はここで打ち止めね」

そう思い、ノワールは洞窟から出て行こうとした時、何かのうなり声が聞こえてきたため振り向くと、そこにはエンシエントドラゴンと呼ばれる接触禁止種が居た。

「面白いじゃない！」

エンシエントドラゴンの攻撃を躲し、隙をついて突撃するがエンシエントドラゴンの頭上からモンスターが攻撃を仕掛け、ノワールの腹部へと命中してしまう。

「がはあ、はあ、油断した……」

しかし、それだけでは終わらずノワールの女神化が解けてしまう。

「どうして変身が!？」

何度試みても再度変身することができない。そうしている間にもエンシエントドラゴンは刻一刻と近づいてくる。完全に油断した、変身して突っ込む癖は自分の悪いところだと分かっているのに、大丈夫だろうという慢心が起こってしまった結果だ。

「くう、体が……動かない……」

不意に、トウカの言葉が思い出される。

(何を言っても無駄だ。いずれ慢心して痛い目を見るから放っておけ)

慢心、そんなことをした覚えはなかった。だが、知らず知らずのうちにしていたのかもしれない。一人で出来ると、一人でやらなければいけないと。だって、自分は女神なのだから

「ノワール！」

不意に頭上から声が聞こえてくる。薄紫色の髪をたなびかせる少



女、いつもグータラとして女神としての威厳など皆無に等しいプラネテューヌの女神

「変身っていうのは、こういう時にするものだよ！」

そうして、ネプテューヌは変身してエンシエントドラゴンに攻撃を仕掛ける。その姿は、普段の姿からは想像できないほど凛々しいものだった。

「大丈夫か？」

ぐいっと体を抱きしめられたと思ったら、後ろにはトウカが立っていた。どうやらノワールの体を気遣って立ち上がるのに手を貸してくれているようだ。

「二人とも……………」

「エンシエントドラゴンはネプテューヌに任せて大丈夫だ、お前は下がってろ」

「い、良いわよ別に！私だって……………」

しかし、立ち上がるとしても体が言うことを聞かない。

「良いから休め、あとは任せろ」

そして、トウカが手刀で空を切ると、周りにいたモンスターが全て消え失せていた。トウカから放たれた手刀の斬波が周りにいたモンスターに直撃したのだ。

「ネプテューヌ、そっちはどうだ」

「こっちは終わったわよ」

エンシエントドラゴンはネプテューヌが討伐を終えたらしい。

「この洞窟はこれで終わりだ、帰るぞ」

「……………」

女神なのに、なにも出来なかった。それがノワールの胸に突き刺さった。しかし、トウカから出た言葉は意外なものだった。

「すまなかったな、お前にまで気を遣わせて」

「何言ってるのよ……………」

「ネプテューヌのシエアを回復する手伝いをしてくれたんだろう？」

そう言われた瞬間、全身が沸騰したように暑くなるのを感じた。全てトウカには見透かされていたのだ。

「なななな何言ってるのよ!?そんなわけないでしょ!?どうして私  
が」

「ならどうしてわざわざプラネテューヌの国境付近のクエストを受け  
たんだ?早く帰ってもらいたいなら近場のクエストを終わらせてそ  
のまま解散という流れにも出来ただろう?そういうことなら今回の  
スライヌ退治の時に俺たちに任せて写真撮影をしていたことも領け  
る」

「だめだ、全てばれてしまっている。それが分かっちゃいまいノワール  
はトウカを直視することができない。」

「こいつはお前と違って未熟な所が多い、これからも俺共々よろしく  
頼む」

「ちよ、なんで私まで」

自分がは未熟じゃないと言いたそうなネプテューヌの頭をつかんで深く二人で礼をするトウカは、娘の友達にこれからも自分の娘と仲良くしてくれと言っている父親のようだった。

「べ、別に構わないわよ。どうしてもっていうならね」

「ああ、ありがとう」

その時のトウカの顔は微笑んでいた。

「さて、そろそろ帰りましょう?みんな待ってるわ」

「そうね、早く帰りましょ……うっ」

先ほど墜落した時、ノワールは足をひねってしまったようで歩きたび足に痛みを感じてしまう。到底ラストアクションまで帰るのは無理だ。

「歩けないの?」

「大丈夫よ、これくらい……」

「失礼するぞ」

そういうとトウカはノワールを抱き上げて歩き始めた。もちろん、素直ではないノワールはジタバタと暴れ始める。

「何してるのよ……下ろしなさいー」

「暴れるな、お前の歩くスピードに合わせてたら日が暮れる、それに少しは人を頼れ」

そうして、トウカはノワールにこう続けた。

「お前は一流の女神だろう？」

優しく語りかけてくるトウカを間近で見ってしまったノワールはもちろん、顔を赤くせざるをえない。ノワールも女神といえど女、憧れの人に優しく微笑みかけられたら照れてしまうのも無理はない。

「人に頼ることができない奴は二流だ。俺のような二流にだけはなるな。少なくとも、ネプテューヌはその面では無事に一流に育ってくれた」

ネプテューヌは少し人に頼りすぎ、というのはここでいうのは野暮だろうと思いノワールは喉元まできた言葉を飲み込む。

「あいつもお前も、負けなくらい素晴らしい女神だ。だからこそ、これから頑張り過ぎないように頑張ってくれ」

「……………当たり前じゃない」

ノワールは少し照れながらそう呟いた。



その日の夜、俺たちはみんなの元に戻りノワールは治療を受けて明日はラスティションを観光しようということでもノワールの教会に泊まることになった。

「ネプ子、いい加減機嫌直しなさいよ」

「別に怒ってないよーだ！」

夕食は各自で取るという事になったのだが、ネプテューヌがみんなで食べようということでも全員が集まって食べている。そこまでは良かったのだが……………なぜこいつは機嫌が悪い？

「どうしたんだネプテューヌ」

「今日はトウカと話さないもん」

ふんっ、とそっぽを向くネプテューヌ、なるほど……………これが反抗期というやつか。女神になっていろいろ成長したということだろうか？

「全く、話さなくても構わないが今日は早く寝ろ。明日は名物のプリンを食べに行くんだからな」

「え？なんでそれを？」

「ずっと前から食べたいと言ってただろう？ラステイションに来たんだから連れて行ってやろう」

「ずっと前から食べたいと俺にせがんで来ていたのだが最近はずいぶん忙しくて連れて行ってやれてなかったから、この機会に連れて行ってやろうと思ったんだが……そんなに意外だったのか？」

「覚えててくれたんだ……」

「あれだけ言われたら覚えてるさ」

「買ってきてやろうかとも思ったが、やはり現地で食べたほうが美味しいだろう。それに……今回は少し怒りすぎたかもしれない」

「トウカさんも怒りすぎたかなって思ってるんですよねぶねぶ」

「なあんだ！それならそうと云えばいいのに、トウカはノワールと一緒にでツンデレだなあー！」

「誰がツンデレだ（よー）」

俺とノワールの声がかぶった。まあノワールの声にかき消されてしまったのだが

「そういう事なら着いて行ってあげるよ！しょうがないなあトウカは」

「わかったわかった、ありがとう」

隣の席にいるネプテューヌの頭を撫でながら言う。

「よしっ！じゃあ明日に備えてお風呂に入って寝よう！トウカ背中流して〜」

「はあ、全くお前は……」

「ほらほら早く！」

笑顔で俺の下から手を伸ばしてくる、まだ抱き上げて欲しいのかこいつは。仕方ない奴め

「ほら、行くぞ」

「わーい！」

俺はネプテューヌを抱き上げて風呂場へ向かった。

( ( ( えっ、あの二人って一緒にお風呂入ってるの？ ) ) )

( ( ( 二人ともこの空気に気づいてないんだろなあ…… ) ) )

戻ってきたときみんなが顔を赤くしていたが一体どうしたの  
うか？それにしても、なぜ風呂の時にネプテューヌは疲れるのに女神  
化するのだろう。まあいいか

## ネプテューヌとトウカ

「ねっぷねっぷ、ねっぷねっぷー♪」

「ご機嫌だな」

現在、俺とネプテューヌはラスティシヨンの市場にやってきている。当初はネプギアの買い物に付き合うつもりだったのだが

「お姉ちゃんをいろんな所に連れて行ってあげてください」

そう言われたので今回はネプテューヌと二人きりだ。こうして歩くこと困ることは

「おやおや、娘と買い物ですか？」

「いや、娘じゃないんだが……」

なぜかネプテューヌの父親、または兄に見られてしまうことだ。その度にネプテューヌは反論するがからかわれてしまう。気持ちからはからなくもないが俺も複雑な気分だ。まあ父親や兄という表現はあまり間違えてはいないがな。

「トウカ！次はあの屋台行こうよ！」

「食べ過ぎると昼食が食べられなくなるぞ」

「いらっしやいお嬢ちゃん、お兄さんと買い物かい？」

だから兄妹でもないと言ってるのに……はあ、もう割り切るしかないのか。

「むうう……」

「どうした？口に合わなかったのか？」

「クレープは美味しいけど……やっぱり私トウカの娘とか妹としか見られてないような気がする」

やはりこいつも気にしていたのか。まあいつものことだから仕方がないだろう。

「女神化したら変わるかな……」

「大騒ぎになるからやめてくれ」

こんなところにプラネテューヌの女神がいたらどんな事になるか、想像しただけでも面倒に思えてくる。

「はあ、なんか複雑な気分だなあ」

「……………楽しくないか？」

「そんなことないよ?! トウカは自分のこと卑下し過ぎだよ?」

自分のことを卑下し過ぎだと、もうネプテューヌになんと言われただろうか。

「トウカは? 私と観光出来て楽しい?」

「俺はお前が一緒ならどんな場所でも楽しいさ」

あまり表情には出ないが、これはきつと楽しい気持ちなのだろう。

「お前は俺の代わりに怒って、泣いて、笑ってくれる。それだけで十分だ」

「もう、こんな時に微笑まないでよ」

きちんと仕事をしない場合は怒るとは言わない。さすがに今言うほど空気が読めないわけではないからな。

「そっか、トウカは私とずっと一緒に居たいんだね?」

「ああ、そうだな」

ネプテューヌだけじゃない、ネプギアも他の国の女神たちも、アイエフもコンパも、みんなが笑って居られる世界であって欲しい。そんな世界に、俺が存在することを許されるのであれば…どれだけ嬉しいか

「トウカはさ、もう少し笑ったほうがいいよ。私もトウカが笑ってる姿をずっと見てたいから」

「笑う……………か」

俺は口の両端を釣り上げて笑ってみせる。すると、ネプテューヌは急に笑い始めた。そんなにおかしいだろうか。

「あははははっ! トウカつてば顔ひきつってるよ!」

「笑うというのは難しいな……………」

俺は昔どうやって笑っていたのだろうか。遠い昔のことだから思い出せない、あの頃は確かよく笑っていたと思うんだがな…最近は微笑むのが精一杯だ。

「無理に笑わなくてもいいよ、とりあえずトウカが居てくれるだけで……………私は幸せだから」

ネプテューヌはそう言って、いつもの無垢な笑顔を俺に向けた。あ

あ、そうだ。俺はこの無垢な笑顔を守りたかったんだ。俺は、こいつの笑顔を守れているのだろうか。

「帰ろうトウカ！プラネテューヌに！」

「観光はもういいのか？」

「うんっ！その代わり帰ってゲームしよ！」

観光よりもゲームを優先か……全くこいつは。呆れたやつだが、こいつらしくていいか。

「だが昨日の仕事がまだ残ってるぞ」

「うっ、それは………ね？」

ねっ？じゃない。やれやれ………また俺が徹夜しなければならぬのか。

「お前がサインしなければならぬ書類だけ片付けろ、そのあとなら特別に何時まででも付き合ってる」

「本当に!?よしっ！じゃあ早く帰ろうトウカ」

俺の手を握る此の手は小さく、そして暖かい。俺のような血で汚れた冷たい手には触れる資格もないものだが、もし、まだ触れていてもいいのなら……俺はこの時を全力で生きよう。

それが、俺のやりたいことだと思うから。



## 雪国の事件編

### ルウイーへ

自分でこれは夢だとわかる夢は明晰夢というらしい。なぜこんなことを言うかというところ、今現在体験しているからだ。もう殆どない昔の記憶の中で、俺は今荒れ果てた荒野の中にいる。ふらふらと当てもなく歩き、血と硝煙の匂いが充満したこの世界は、俺の望んだ世界ではなかった。

俺は……存在しないほうがよかった。



「トウカはよく座りながら眠れるね」

「しかも馬車で揺れまくってるのに、余程疲れてたのね」

現在、俺はルウイーの街中を馬車で走っている。少し眠るだけと思ってたが一時間ほど眠ってしまったようだ。

「でもトウカさんって、意外と可愛い寝顔だよね？」

「そうよね、普段はあんなに凶悪なのに」

「悪かったな凶悪で」

ビクツと全員が硬直した。まさか起きてるとは思わなかったのだろう。

「起きてたなら言いなさいよ！」

「今起きたんだ」

そんなことで怒られても困るんだが。というより凶悪とか言うな。そんなに酷いことはしてないだろう……いや、最近ネプテューヌには厳しかったか？

「トウカさん、最近ちゃんと寝てますか？」

「寝てると思うが？」

「いえ、すこし顔色が悪いなあって」

「あつ、確かにちよつと顔色悪いね」

自分で見てもあまり分らないが、こいつらが言うならそうなんだろう。しかし、最近は特に変わったことはないんだが……ああ、昔

の夢を見たからか

「少し悪い夢を見てな」

「どんな夢？」

「……………ネプテューヌが茄子を好んで食べる夢だ」

「それはとんでもない悪夢だね!？」

とりあえずごまかしておくことにするか。そもそも、夢の内容をきちんと覚えていないから説明のしようもない。

「ほらあんた達、そろそろ着くわよ」

しばらくすると、ルウイーの教会へとたどり着いた。

中に入ると、そこにはブランだけでなくリンボックスの女神、ベールの姿もあった。こんな偶然があるんだな

「お久しぶりですわトウカさん！」

「久しぶりねトウカ」

「ああ、二人とも久しぶりだな」

最後に会ったのは友好条約の時だったか。

「ああつ！トウカだあ！」

「トウカ、久しぶり」

「お前たちも元気か、ラム、ロム」

ブランの妹であるラムとロム、こいつらはよく俺に懐いてくれている。数回遊びに付き合っただけなのだが……………まあ嫌われるよりはいいか



「それでね!!ルウイーに新しいテーマパークが出来たからみんなで一緒に行こうよ！」

「イストワールからは女神の心得を教えてやれって言われたんだけど」

中庭に移動した俺たちはテーブルを囲み雑談をしていた。ちなみに妹たちは雪だるまを作って遊んでいる。微笑ましい光景だな。俺はみんなから少し離れたところで話を聞いている。

「あー、それはいいやもう。前回そんなに役に立たなかったしね〜」  
「悪かったわね役に立たなくて」

まあ不足の事態もあつたから仕方ないといえば仕方ない。役に立たなかったわけではないしな。

「ていうかトウカー、そんなところ居ないでこっち来なよー。ノワールみたいなぼっちになるよー」

「誰がぼっちよー!」。

「俺はここで構わん」

あの中に入るのは少しだけ抵抗がある。美人が揃ってるあのテールに俺のような目つきの悪い男が混ざるのは場違いだろうしな。

「ねえねえトウカー!こっちで雪だるまつくろう!」

「トウカと、一緒に作りたい」

「お、おい、引っ張るな」

ラムとロムに引っ張られて半ば強引に妹たちとともに雪だるまを作ることになってしまった。

「ネプギアが作ってるのはネプテューヌの雪だるまか」

「はい、ユニちゃんはノワールさん?」

「そうよ、あんまり似てないけど」

「見て見て! 私たちはお姉ちゃんだよ!」

全員が自分の姉を作ってるのか……俺はネプテューヌを作ろうと思つたが被るな。なら俺が作るのはいはべールか。一人だけ作られないのは寂しいだろう

「俺はべールを作ることにするか」

「お姉ちゃんじゃないんですか?」

「ネプギアと被るからな」

さて、少しだけ本気を出して雪だるまを作るとするか。

「さて、始めるか」

「ちよつと!?!今から作るの雪だるまよね!?!なんで本格的な道具出してるのよ!?!」

「やるからには本気だ」

「トウカさんの目が本気になつてる……」

みんなきちんと作ってるんだ、俺だけ適当というわけにはいかない。さあ、本気を見せてやろうか!

「今からお前達にアートというものを見せてやる、よく見ておけ！」

「頑張れトウカー！」

「フアイト！」

ラムとロムの応援を背に俺は雪をかき集めてだるま状に置いて余分な部分をそぎ落とし、アイスピックで顔などに奥行きを持たせる。なかなか難しいができないわけではない、胸が崩れないように丸く固めて固定、これで大丈夫だろう。

「ふう、完成だ」

「うわあ！本当にそっくりだ！」

「トウカすごいっ」

「いや、これもう雪だるまじゃないわよ……」

「どちらかといえば雪の像だね」

完璧な仕上がりがだ。やはり物作りというものは楽しいな。らしくもなく子供のようにはしゃいでしまった。さてと、ネプテューヌたちに見せるか

「悪いけど……妹たちを連れて行ってあげてもらえるかしら」

「仕事？やめなよー昔の偉い人も言ってるよ？働いたら負けかなと思ってるって」

近くに来てみれば何を言ってるんだこいつは。それは偉い人でもなければ昔でもない。そもそもそれはお前が一番思ってることだろうが

「とにかく、私は行けない」

ブランの顔は少し険しかった。顔色も少し悪い………成る程

「ブラン」

「なに？」

「仕事もいいが、ちゃんと寝ることも大切だぞ」

「っ！分かってるわ」

そう言っても、こいつは無理をするんだろうな。

「さて、話は変わるが4人とも、妹たちがお前達の雪だるまを作ったから見てやってくれ」

「おお！今行く今行く！」

ネプテューヌははしやぎながら雪だるまの元へと走って行き、他の三人も歩いて雪だるまの場所へ向かう。

「おおー！上手にできたねネプギア！」

「ありがとうお姉ちゃん」

ノワールとブランも心なしか顔が緩んでいる。やはり嬉しいのだろう。

「これは……どなたが？」

「俺だ、ベールのだけ無いのは寂しいだろうと思って作ったんだが………気に入らなかつたか？」

「気に入らなかつたなんてとんでもない！素晴らしいですわトウカさん！細部にまでこだわって作られてるこの雪の像はもはや芸術、ああ、出来ればリーンボックスに持って帰って保存したいですわ！」

そこまで言われると照れるんだが。

「おお！ベールとそっくりじゃん！さすがトウカ、見かけによらずなんでもできるよね！」

「見かけによらずは余計だ」

そんな雑談を繰り返しながら、俺たちはテーマパークへと歩みを進めた。ブラン……無理をしなければいいが

## 黒い鎧

「わーい！」

「待ってラムちゃん……！」

「二人ともちゃんとコート着て！」

「ネプギア！入場券忘れてる！」

妹たちははしやぎながらテーマパークへと入って行った。やはり子供は無邪気じゃないとな。

「みなさん楽しそうですわね」

「そうね」

国から出ることを許してもらえないラムとロムにとって友達と過ごす時間はかけがえのないものなのだろう。

「三人ともー！早く早くー！」

本当にネプテューヌは妹たちと変わらないな。まあ、それがあいつのいいところでもあるんだがな。そんなことを思いながら、俺たちはテーマパークへと足を踏み入れた。ネプギアとユニはラムとロムに振り回されているらしい。

「ねえトウカ！あれ食べたいな！」

「なんだあれは？桃か？」

とりあえず一袋買ってネプテューヌに渡す。

「ありがとう！トウカも食べる？」

「いや、俺はやめとく」

そう言っただけ俺はテーマパークを見回す。あまりこういうところに来たことがないから少し新鮮だ。

「ねぷうー！」

「どうしたネプテューヌ」

振り向くと、ネプテューヌが亀に襲われていた。どうやら桃を狙っているらしい。よく見ると看板に注意書きがあった。

「このカメラ私のピーチを狙ってるよ！いやー！助けてトウカ！ねぷうー！」

「そのまま頭から齧られたらどうだ？少しは能天気な頭がマシンになるかもしれないぞ」

「うわぁーんトウカのバカー！ねぷうー！」

さて、俺はラムとロムの様子でも見に行ってみるか。



トウカがしばらく歩いていると、辺りに誰もいないことに気づく。平日でもオープンしたばかりなのだからもっと人はいるはずだ。

「様子がおかしいな……………」

その瞬間、トウカの頭上からとてつもない衝撃が起き土煙に襲われる。

「いきなり頭上から落ちてくるとは……………品が無いな」

「……………」

全身黒いローブと軽装の鎧、そして仮面を付け無骨な黒い大剣を持った何者が居た。

（こいつは明らかに異質……………何者だ）

トウカは瞬時に危険を察知して大剣を取り出して肩にかける。目の前の黒い奴とは違い、赤い外殻のついた機械的な大剣だ。

「一応聞くんが、退く気は無いのか？」

トウカがそう聞くとや否や、地面がえぐれる程の衝撃でトウカの元へと跳躍してきた黒い鎧は身の丈よりも大きい大剣を振り下ろす。

「重い……………」

まともに受け止めた瞬間にテemapパークの地面にクレーターが出来る。並の人間ならばなすすべなく押し潰されていただろう。しかし、トウカは並の人間ではない、黒い鎧の攻撃を左手に持った大剣で弾き、空いた右腕で黒い鎧の腹部を殴った。黒い鎧は50メートルほど飛び壁にめり込んで停止する。

「ブランに怒られるなこれは……………」

開園したばかりのテemapパークを壊してしまったことをブランに心の中で詫びながら再び黒い鎧へと向かって行く。早めに決着をつけなければ騒ぎを聞いてネプテューヌ達が現れかねない。

「何者かは知らんが…………弁償させられるこっちの身にもなれ！」

一回一回剣が打ち合うたびに鈍い音がテーマパーク中に木霊する。これ以上辺りに被害を出さないためにも大きい技を出すことはできないがあまり長引かせるわけにもいかない、そう考えたトウカは八か技を使う。

「悪いが今は他人の妹を預かってるんでな、決着をつけさせてもらおうぞ」

剣が激しい音と火花を散らしながら変形していき、中から熱を帯びた刃が姿を表し、トウカの右腕が炎に包まれた。

「タイラントウェイブ！」

大剣を振るつたと同時にとてつもない爆発と炎が舞い上がり辺りを火の海にする。トウカは力が強大すぎるため普段武器を使うことは滅多にしない、使うとしてもネプテューヌの相手をするため木刀を使うことぐらいだ。しかし、今の相手は油断ならない相手ゆえ、武器を使うことにしたのだ。

「はあ、絶対に怒られる……」

テーマパークの地面はすっかりトウカの技で溶け出してマグマの様になっている。絶対に復興作業を手伝わなければならないと思うトウカの前に、半ば予想通りの光景が広がっていた。

「やはりか……」

黒い鎧は生きていた。タメージは入ったものの、到底行動不可能という様子ではない。

「ヴェアフル様……こっちの計画はもう大丈夫です！化け物の惹きつけありがとうございます……ってなんじゃこりや!?!」

フードを被った怪しげな少女が黒い鎧の名前を呼んだ。どうやら黒い鎧の名前はヴェアフルというらしい。

「トウカ！」

トウカの後ろからはネプテューヌとノワールが駆けつけた。

「大変だよ……ってそっちも結構やばい事になってるね……」

「そんな事よりよ！大変なの、ラムとロムが攫われたわ！」

「なに？ちっ」

トウカは今になって自分がラムとロムから遠ざけられていたとい



うことに気づく。

「やばいつすよヴェアフル様！あの化け物だけでなく女神たちまで……」

そうパーカーの少女が言った瞬間、ヴェアフルは片腕に黒い炎を纏わせ、トウカ達に向けて豪炎を放つ。先ほどのトウカの技と同レベルの豪炎、まともに食らえばどうなるかは想像がつく。

「下がれ！」

トウカはネプテューヌ達にそう叫ぶと目の前に手をかざしエネルギー状のシールドを展開させて炎を防ぐ。防ぐことは成功したものの、炎が止んだ頃にはもうヴェアフルと少女の姿はそこにはなかった。

テレビはアポを取りましょう

「こ、困ります……ここから先は通すなどブラン様から」

「へえー、私たち女神仲間なだけどなあ」

「せめて謝らせてください！ 私たちがきちんと見てたら……こんな事には」

俺たちは帰ってすぐにブランに報告しようとするが、もうすでにブランの妹たちが誘拐されたということは広まってしまっていた。

「帰って、あなたたちはいつも迷惑よ」

返す言葉がないというのはこのことか……

「今は何を言っても無駄だ、こちらはこちらで探すしかないだろう」

ひとまずここにおいても仕方がない、計画を練らなければならないが時間はかけられない。今日中に助け出さなければ

「すまなかった」

俺はそう言い残してみんなと外に出て行った。



「ブランったら、これ以上意地張っても仕方ないじゃない！」

「素直じゃないのはノワールの専売特許なのにね」

「はい？」

トウカは一人、あの黒い鎧ヴェアフルについて考えていた。あの男は何者なのか、トウカと同等の力を持つヴェアフルに手加減を加えることはできなかった。

「そんなことより、あの黒い鎧はなんなのよ？」

「トウカが自分の武器使うほどだもんね……」

トウカは四女神と戦う時も基本的に素手で渡り合うためネプテューヌですらトウカが殆ど武器を使ったところを見たことがない、あるとしてもネプギアに戦闘を教える時に使う木刀くらいだ。

「トウカさんと渡り合う敵……油断なりませんわね」

「そうですよね……私じゃ絶対に勝てません……」

「そんな弱気になつてちゃダメだよ！ 私たちが倒すくらいの勢いで行かなきゃ！」

「ダメだ」

トウカは戦おうとするネプテューヌに間髪入れず止める。

「絶対に戦うことは許さん」

「なんで!?! やつてみなきやわかんないじゃん!」

「そうよ、あんまり女神をなめないで」

トウカが地面を踏み込むと、地面に少し亀裂が入る。あまり怖がらせることはしたくないが安全の為だ。

「絶対に奴と戦うことは許さん、良いな」

先ほどよりも低いトーンで皆に言った。

「……………トウカは私の力が信用できないんだね」

「相手が悪過ぎると言ったんだ」

「そうやって子ども扱いして! 私はもう子供じゃないんだよ!?! 私だって女神なんだから自分の身ぐらい自分で守れるし、いつまでも守られるのは嫌だよ!」

「偉そうに言うのは俺に一太刀入れられるようになってか言え」

ぐつ、と何も言えなくなるネプテューヌ、可哀想だか仕方ない。トウカはネプテューヌ認めていないわけではない、ただ、心配なだけなのだ。うまく言葉に出来ず、売り言葉に買い言葉になってしまうために伝わらないが。

「ねえ、お姉ちゃん、なんだろうあれ」

ネプギアが指差す場所を見てみると、そこにはカメラに囲まれたブランの姿だった。

「行くぞ、あの失礼なカメラにおかえり願おう」

トウカ達はブランの元へと走り出す。



俺たちが入ると、そこには2人のテレビクルー、そして金髪の……小さい子がいた。何はともあれやめさせるか。

「見てください! 幼女女神は何も弁解できません!」

何も知らないのに好き勝手言うとはな……………これだからメディアというものはあまり好きになれん。

「ちよつとーなにやってんの!?!」

ネプテューヌがブランの前に出る。すると、金髪の少女は訝しげな表情を浮かべた。

「あんた誰よ!？」

「私はネプテューヌ、プラネテューヌの女神だよ!」

その姿で言ってもあまり威厳はないだろうがこの際仕方ないだろう。

「あなたも女神い?見た所少女と言えなくもないけど……体が未発達だわ!あなたは幼女、幼女決定よ!」

「ええー!自分より小さい幼女に幼女認定された!」

どうでもいい幼女合戦が目の前で始まったんだがどうすればいい?幼女とか少女か、そんなものはどっちでもいいだろう。俺からしたらどちらも子供だ。

「はあ、そろそろいい加減にしてもらおうか」

俺は見兼ねたためネプテューヌの前に出る。しかし、金髪の少女

……幼女?はさらに機嫌が悪くなった。

「なによこの男!目つきが完全に犯罪者だわ!殺人鬼の目じゃない!」

「ちよつと!私のことはどう言っても関係ないけどトウカのことバカにするのは許さないよ!」

ネプテューヌが自分に言われた時よりも怒り出したため諫める。それだけ大切に思ってくれているのに……俺はちゃんとした言葉で伝えられない。

「良いんだネプテューヌ」

「ダメだよ!トウカは殺人鬼なんて言われて悔しくないの!？」

「何も……間違ってるんかい」

そう、何も間違ってるんかいなのだ。俺は、血にまみれた殺人鬼、化け物なのだから。

「さて、お前たち今何をしているか分かっているんだろうな?」

「なによ、私はただ放送してるだけよ!」

「その放送が合法なら、俺は何も言わん」

「この放送は合法ではない。なぜなら

「お前たち、教会にアポは取っているのか？」

「それは……………」

突っ込まれると痛いところを突っ込んだようだな。やはり叩けば埃が出てくるようだ。

「まず、ここは教会でも一般公開していない区域だ。許可もなく入れば罪に問われる。そして、許可もなくブランを映すことにも問題があるぞ。これはブランが不快に思ったとしたら肖像権の侵害としてお前たちを訴えることもできるのだからな」

ここまでまくし立てるとさすがに本人たちも萎縮してしまったようだ。すこし言い過ぎかもしれないが早急に帰ってもらうための措置だ。今はすぐにもラムとロムを探さなければならぬ。

「今すぐここから出て行くなら何もしないとブランも言っている、さあ……………どうする？」

俺が睨みながらそう言うと、金髪の少女は捨て台詞を吐いてどこかへと消えていった。殺人鬼というくらいだ、睨まれたら怖いだろう。「相変わらず怖いわねあんた……………」

少しノワールが青い顔をしていた。そんなに怖かっただろうか……………少し傷つく。

「ブランさん！」

ネプギアの叫びを聞いて振り向くと、ブランがネプギアに支えられていた。すぐさま駆け寄るが気を失っているらしい。見た所疲労が溜まっているようだ。大事には至らないだろう。

「だが、なぜこんなに疲労が溜まっている？」

なにか大事な仕事でもしていたのだろうか、それにしても無理にし過ぎだな。

「皆様に、お話がありますわ」

ベールから話された言葉は信じられないものだった。ルウィーで少し前打ち上げられていた人工衛星を利用してリーンボックスの研究所とともに地上の映像を見られるようにしたらしい。やはりリーンボックスが一番進んでいるな

「それって、あなた達だけが世界中の映像を見られるってこと!？」

「ええー!? それじゃあ私たち見られすぎて困るじゃん」

「安心しろ、女神化してないお前なんて物好き以外誰も見ん」

「どーいう意味かなあトウカ!？」

飛びかかってきたネプテューヌの頭を鷲掴みにしながら話を聞く。

「サプライズプレゼントみたいで洒落てるでしょう? ブランが言い出したんですのよ? 友好条約を結んだんだからみんなで等しく利用するべきだって」

サプライズプレゼントか…………… ブランもなかなか粋なことを考えるじゃないか。だが、それで本人が倒れていたらせつかくのプレゼントも台無しだろう。

「ふつ、やはり良い女神だな。お前も倒れるくらい誰かのために何かやってみるかネプテューヌ」

「あははははは…………… さすがにやめとくよ…………… そろそろ離して……………」

そして、俺たちはブランが研究していたシステムを使いラムとロムが攫われた場所を見つけた。これは……………

「灯台下暗しという奴だな、さあ、取り戻しに行くぞ」

俺たちはラムとロムが拉致されると思われる場所、ルウイーのテーマパークへと向かう。さあ、犯人たちにどういう裁きを下してやるろうか。

## 誘拐犯にお仕置きを

現在時刻は夕方、人質の身の安全を考える以上突入を悟られるわけにはいかない。闇とともに紛れて敵を討つ他ない。それゆえトウカ達は夜になるまでテーマパーク付近で待機しておくことになった。今すぐにでも助けに行きたいが安全のための仕方ない措置である。

「トウカー、夜まで退屈だよお……………」

「パフエ頼んでもいいから大人しく待ってる、あつ、俺はこのDXツインパフエを頼む」

「いやなんて物を頼もうとしてるのよ、今から人質救出に行くのにそんなゴツイもん頼んでんじゃないわよ！」

ちなみにこのDXツインパフエ、通常サイズの6倍である。

「作戦の直前に甘いものを取るのは体に良いんだ。集中力が高まり疲労を回復させる効果も持つ」

「限度があるのでしようが！作戦前にデカイパフエ食べる奴なんか見たことないわよ！」

「ラムとロムが捕まっている建物をずっと見張ってるから普通の糖分補充では足りん」

「見張ってるって……………こんな場所から見えるわけないでしょう!？」

トウカは特殊な人間のため目を望遠モードに切り替えることができるためかなり離れた距離にいるこの場所からでも建物の入り口を見ることができる。

「目が望遠モードになってるんだ。分からないか？」

「分からないわよ、あんたがバカということ以外分からないわよ」

ノワールの冷ややかな目を物ともせずトウカはDXパフエを食べながら見張りへと戻る。

「はあ、あんたが常識人だと少しでも思った私がバカだったわ」

「まあまあ、トウカは食生活以外ほとんど常識人だから」

「あんたもあんたでプリン頼んでんじゃないわよ」。

「まあ作戦前ですし、好きにさせて差し上げましょう」

そういうベールは大人にコーヒーを飲んでい。しかもブラック

コーヒー、こんな所もいちいち大人である。

「ベールはよく飲めるよねブラックコーヒーなんて」

「トウカさんは飲まないのですの?」

「コーヒーは気分だな、ブラックだったり普通に砂糖を入れたり、うん? そういえばネプギアもブラックコーヒーを飲むんだったな」

「いや……………これブラックコーヒーじゃないから……………」

ユニがこめかみをピクピクと動かして爆発寸前だが、ネプギアは何を怒ってるのかわからずオロオロしていた。

「どうしたのユニちゃん? 何か嫌なことでもあった?」

「嫌なこととかそういう問題じゃないわよ! なによそれ! あんたが飲んでるそれ!」

ユニが指差すものを見てみると、ネプギアが手元に持っているコーヒーだった。ネプギアもベールと同じくブラックコーヒーを頼んでいたはずなのだが、何故か真っ白いものが山のように乗っている。

「なについて、ブラックコーヒーだよ?」

「どこにブラックの要素があるのよそれ!? もはや白い何かになってるじゃない固形物じゃない!? もうブラックじゃなくてホワイトのコーヒーじゃない何かでしょ!?!」

ネプギアはキョトンとしているが、辺りは軽く退いている。

「誰からそれがブラックコーヒーだって教わったのよ!?!」

「トウカさんが飲んでるのを見て……………」

全員の目がトウカへと向く、しかしトウカはそんなこと知らないと言わんばかりにパフェを平らげていた。

「あれは武器改造に忙しかった時糖分が欲しくて食べに行くのが面倒だったから手近にあるものが砂糖とコーヒーしかなかったから適当に飲んでただけだ」

「いや、そんな事するならもう砂糖直に食べてたほうが早いじゃない!?!」

そんな中でもネプギアは何がおかしいのかわからずコーヒーを飲んでいた。





現在、ベールが誘拐犯と交渉しに行ってるが……おそらく相手はロリコン、効果は薄いだろうな。

ちなみに俺の役割は広場で敵の逃走の阻止、だがネプテューヌ達は優秀だ。俺の出番はないだろう、ネプテューヌとネプギアの役割は俺とそんなに変わらないが。

「つで、どうしてこうなった？」

突如として目の前にドラゴンらしき何か降ってきた。ベールのやつ……交渉しに行ったんじゃないのか。

「幼女何が何でも守る、それが紳士のジャスティス！」

気持ち悪い舌をヨダレだらけにして……流石の俺も気持ち悪いぞ。

「ラムー・ロムー！」

「トウカ!!」

ラムとロムが駆け寄ってくる。怖い思いをさせてしまったようだ。

「遅くなったな二人共、俺がきちんと見ていればこんなことには」

「ううん！みんな助けに来てくれたでしょ!？」

「全然、大丈夫だよ」

2人の頭を撫でてやる。たくさん怖い思いをさせてしまった。

「活きの良い幼女……やっぱり幼女は最高だぜ！」

「なんだあれは？」

「知らない！」

「気持ち……悪い！」

ドラゴンなのか？それとも別の生き物なのか……いや、そこはどうでもいいな。

「悪いがおかえり願おうか、この二人は女神の妹だ。手を出せばどうなるかわかるだろう？」

「知らん！俺は幼女を愛するために生きているのだ！男に興味はない、痛い目を見る前に消えろ！」

「痛い目を見るのはめえだ」

後ろを見ると、心底怒った表情を浮かべたルウィーの女神、ホワイトハートことブランが居た。

「人の大事な妹に、舐めた真似してくれたな、この変態野郎」

「遅かったな」

「うるせえ、ぶん殴るぞ」

八つ当たりするな。

「変態？それは褒め言葉だ！」

「そうかい、なら誉め殺しにしてやるよ！」

ブランが女神化しホワイトハートを姿を変えドラゴン？に向かい斧を振り下ろす。変態と言われて喜ぶのか……よく分からんな。世の中は分からないことだらけだ。

「おらああああああああああああ!!」

「その辺にしておけ」

俺はブランの斧を防いだ。これ以上やるとどこかに吹っ飛んで行きかねない。

「なにしやがる！止めるんじゃねえ！」

「まて、お前がいくら殴ろうと喜ぶだけだ」

もっと別の方法じゃないと懲りないだろう。

「じゃあお前が殴れ！」

「だから殴る事から離れろ」

四女神の中でも一番頭脳派じゃなかったのか。

「一つ心当たりがある」

こいつを痛い目に合わせるならあれが一番だろう。



プラネテューヌ刑務所、ここにはたくさん犯罪者が入れられている場所で軽犯罪房から凶悪犯罪房まである。

「トウカ様、おはようございます」

「ああ、おはよう」

「トウカ様！こちらにはどういったご用件で!？」

「少し所長に用事があるんだ、案内してもらえるか？」

「」「」「」「」「」「」「」

厳つい看守の間をネプテューヌたちは戦々恐々としながら通り抜けているが、看守たちは俺に敬語を使っているから害はない。思い出すな昔のことを…

「で、どうするの?」

とりあえず俺たちはプラネテューヌまでドラゴン?を連れてきた。  
この看守長へ合わせるためだ。

「入るぞ」

そこには一人の少女……と言っているのか分からんほど小さい  
女の子の様な人物が踏ん返り返っていた。

「何ですかトウカさん、あなたが頼みごとなんて珍しい」

「久しぶりだなコーエー」

プラネテューヌ刑務所の所長コーエー、こいつとは長い付き合い  
だ。

「このドラゴン?をお前の監視下において欲しい」

「何ですかこれ?」

「うおおおおお!!?幼女所長キタコレ!」

ピクツとコーエーのこめかみが動く。あーあ、第一段階突破だな

「何ですかこの気持ち悪いドラゴンは……こんな僕に面倒見ろと  
?」

「嫌なら独房にぶち込んでおいてくれても構わない、頼む」

「トウカさんにそう言われたら断れないの知ってるでしょう

……」

「美少女の照れ顔最高!やっぱり幼女は最高だぜ!」

ぶちんっ、という音が聞こえてきた。やってしまったな。

「幼女幼女……うるさいんだよ!」

「ぐはあ!」

ドラゴン?に鋭い蹴りが入り壁へとめり込んだ。こうなっては誰  
にも止められない。

「さつきから聞いてりや幼女幼女って、いいか!?良いこと教えてやる  
よ!」

(ねえ、あの子確実に怒ってるけどなんで?どう見ても幼女だよ?)

(そう見えるだけだ)

そう、あいつは幼女ではない。



## ネプギアの心

「トウカー！仕事終わったよー！遊ぼう！」

ネプテューヌが教会でトウカの部屋に入ったところ、そこでは既にネプギアがトウカの膝で眠っていた。

「何やってんの……………」

「いや、実はな」

仕事の相談事があつたらしく、しばらく相談に乗り一緒にその仕事を終えたと思つたらいつの間にかネプギアが眠つてしまつていたのだ。起こすのもかわいそうかと思つたのでそのまま仕事をしていたのでという。

「私だつたらすぐ起こすくせに」

「お前は普段寝てばかりだからだろうが」

ネプテューヌはすこし拗ねるがトウカはいつもの事のようにスルーする。

「遊ばないのか？」

「遊ぶけどさ……………」

そう言うトウカは膝の上で眠つていたネプギアをソファアに寝かしつけ上から普段着ているコートを掛ける。

「さて、今日は何をするんだ？」

「今日は前々から言つたゾンビゲームだよ」

ネプテューヌが取り出したのは前からやりたいと言つていたZ指定のゾンビゲーム、マルチプレイにも対応しているものだ。

「長丁場になりそうだな」

「そうなんだよね〜お菓子も何も買つてないよ」

「買いに行くか、どうせ明日は休日だ。徹夜でもするんだろう？」

「さつすがトウカ！分かつてるじゃん！」

そう言つて2人が外に出ようとした時、トウカが動きを止めた。

「どうしたの？」

「いや……………」

トウカの服の裾をネプギアが寝ぼけて掴んでしまつていて動けな

いのだ。

「もう、ネプギアは甘えん坊だなあ」

「お前が言えるのか？」

「私はお姉さんだから良いの！」

お姉さん、というフレーズをトウカは否定したかったがそんなことをしている場合ではないのでネプギアの手を離して行こうとするのだが、離れない。

「何してんのトウカ、早く行こうよ！」

「いや、ネプギアが離れてくれん」

「何言ってるのさ、ほら早く」

ネプテューヌがトウカを引っ張るとそれにつられてネプギアの体も動いてしまう。かなり強い力でトウカを掴んでいるようだ。

「ほんとだ………。どんだけ強い力で裾掴んでるの？」

「仕方ない、手を直に解くしかないな、頼むぞネプテューヌ」

「私がやるの？」

訝しげな表情を浮かべながら仕方なさそうにネプテューヌがネプギアの手を解こうとするが一向に解ける気配はない、それほど強く握りしめているらしい。

「全然解けないよ!?!ネプギアってこんなに力強かったっけ!?!」

「はあ、普段からこれくらいの力を出してくればいいんだがな」

仕方がないためトウカは近くまで行きネプギアの手を優しく解いていく。

「ふう、これでいいだろ……う」

「……………ネプギア、本当は起きてるんじゃない？」

手を解いて出て行こうとすると、今度は腕にしがみついて離れない。がっしりと力強く掴んで離れないのだ。

「はあ、ネプギアが起きるまで行けそうにないな」

「そうだね」

二人は仕方がないため座りなおす。ネプギアが起きるまでゲームをしようということになったからだ。

「何時間くらいで起きるかな？」

「昼寝なんだから2時間ほどで起きるだろう」

そうしてネプテューヌはトウカの膝に座りゲームをし始めるのであった。



トウカさんは私が生まれたときからずっと一緒にいて、いろんなことを教えてくれた。たまに怒ることはあっても、すぐに許してくれる優しい人、トウカさんはお兄さんであり、先生でもある、これからもずっと一緒にいてほしい人、本当は凄く甘えたいけれど、それはダメだ。

なぜならトウカさんはお姉ちゃんと一緒にいる時が一番楽しそうだから、二人の時間を邪魔しちゃいけない。それは当たり前だと思う、だってお姉ちゃんとトウカさんはずっと一緒に居るんだもん、二人の間に割って入ることなんかできない。本人たちはそんなつもりないんだらうけど、私は2人の中に入ることにはできない。

(どうしよう……………)

お姉ちゃんが予想した通り、わたしは実は起きてます。いけない事だってわかってるけど……………我慢できなかった。行って欲しくなかった、そばにいて欲しかった。お姉ちゃんに……………取られたくなかった。

(二人の邪魔しちゃった……………)

心の中に罪悪感が湧く、二人に悪いことしちゃったのはわかるけど……………私はトウカさんに隣にいて欲しかった。振り向いて欲しかった、構って欲しかった。トウカさんの心の中に少しでも私への気持ちを持って欲しかった。ただ、それだけの淡い……………なんだろう？この気持ちは

「ちよつと、置いてかないでよトウカ!!」

「すまんなネプテューヌ、このハシゴは一人用なんだ」

「ねぷう!?!協力プレイしてるのに協力する気ゼロだよ!?!っていうか手榴弾上から投げないで!巻き込まれちゃうじゃん!!」

「ゾンビが多いからな」

「この人やばいよ!殺す気満々だよ!?!」

「さて、ゾンビが来るといけないな、ハシゴは落としておくか」  
「私まだ登ってなあああああい！」

トウカさんとお姉ちゃんは楽しそうに……いや、協力プレイなのにトウカさんが勝手に進んでお姉ちゃんをゾンビの大群に放ったらかして地獄絵図が広がっていた。協力プレイの欠片もない。

「弾無くなっちゃった!!トウカ弾ちようだい!？」

「すまん、俺も弾切れだ」

「捨てたよね!?今メニュー開いて捨てたよね!？」

「言いがかりだな、ただボタンを間違えたただけだ。それよりもマシンガンの弾ならあるぞ?」

「それで良いから早く!!ナイフも限界だよ!!」

「おっとボタンを間違えてリロードしてしまった」

「何してんのさああああああああ!!」

……お姉ちゃん、本当の敵はゾンビじゃなくてトウカさんだと思うよ。そんな漫才にも似た事をやっていると、お姉ちゃんのキャラクターはゾンビに食べられて蘇生待ちになった。

「もう!トウカのせいで死んじゃったじゃん!」

「人のせいにするな、人間はナイフ一本あれば生きていけるんだ」

「そんな格言的なことはいいから早く助けて!」

「おやゾンビの大群だ、じゃあの」

「トウカ完全におふぎけモードに入ってるよね!?じゃあのなんて言わないもん普段!トウカのおふぎけモードはおふぎけのレベルを超えらるから話し進まないよ!!」

こんな風に、トウカさんは普段ふぎけないのにお姉ちゃんと一緒にいる時だけ子供のように遊ぶ、こんな一面を見られるのは私達だけだと思う。私も、あんな関係になれたらいいのにな。

「ネプテューヌ……言いたくないが、お前はこのゲームに向いてない」

「その言葉ブーメランだから、協力プレイなのに協力しないトウカが悪いんじゃない!!」

「やれやれ、そうやってすぐ人のせいにする。お前の悪い癖だぞ」



「あああああもう！言い返せないからむかつくううう！」

そうやってお姉ちゃんを飛びつき、トウカさんは微笑みながら軽く受け流している。本当に仲良いな二人とも。そろそろ起きようかな、これ以上二人の邪魔しちやいけないや

「ううん、あれ？私……………」

ちよつとわざとらしいかもしれないけど…………バレルよりいいよね。

「ネプギアああ、聞いてよ！トウカがひどいんだよ！協力プレイなのに殺しにかかってくるんだよ！」

「だからプレイ前に言ったんだ。付いてこれるかとな」

「そんな赤い弓兵みたいな感じで言っただけじゃない!!」

二人は痴話喧嘩のようなものを目の前で続けている。この二人はずつとこのままなんだろうな、私も……………きつとこのまま一步踏み込まずに居るんだろう。

「ならネプギアも加えよう、これで良いだろう？」

「望むところだよ！さあネプギア！やるよ！」

「え？私もやるの？」

私に気を使ってくれているのだろうか？

「わ、私はいいい……………」

「ほう、ゾンビゲームが怖いのか？」

「ち、違いますよ！」

怖くなんかないもん、ほんとだもん。

「ネプテューヌ、どうやらネプギアはゾンビが怖いらしい。普段は大人数で雰囲気を出しているが、やはり中身は子供だな」

トウカさんは私を少しバカにするような感じでそういった。これにはさすがに私も少しムツとする。本当に怖くなんかないんだから！



「はあ、はあ……………」

結局、ネプテューヌとネプギアの二人はトウカには敵わずゾンビに食べられまくった。途中から対戦プレイに変えて二人掛かりで挑んだが、やはりトウカには勝てなかった。

「やはりネプギアはホラーゲームが苦手のようにだな」

「に、苦手なんかじゃ……………」

「ネプギア、涙目になりながら言っても説得力ないよ?」

「皆さーん!夕食ですよー!」

イストワールからの声が聞こえてくる。夕食が出来たようだ。

「ネプテューヌ、お前は先に行って待つてろ。たまには一番最初に行つてイストワールを驚かせてやるといい」

「さすがのいーすんもそんなことでビックリしないよ」

そう言つてネプテューヌはキツチンへと一足先に向かう。もちろんイストワールの驚いた声が聞こえてきたのは言うまでもない。

「私達も行きましようか」

「ネプギア」

トウカはネプギアの頭を撫でながらいった。

「言つておくが遠慮なんてしなくていいんだ。お前は家族と同じなんだからな」

その言葉を聞いたネプギアは驚きを隠すことができない。どうしてトウカがそれを知っているのか、それが分からなかったからだ。

「どうしたんですか、そんな急に」

「ずっとお前は俺とネプテューヌに遠慮していただろう?」

「そ、そんなこと……………」

無い、と完全に言い切ることができない。そう言つてしまえばこれまでと何も変わらないからだ。

「……………俺には親がない」

「えっ?」

突然、トウカが自分の話をし始めた。トウカのことを何も知らないネプギアは黙つてその話を聞いていた。

「親もいなければ兄弟もない、気が付いた時にはもう剣を握つていた。そうしなければ生きられなかったからだ」

「トウカさんの子供の頃つて……………今からどれくらい前なんですか?」

「俺が子供の頃はネプテューヌの三代前の女神の時代だ」

ネプギアは考えてみるが見当もつかない、ネプテューヌですら数百年女神を務めているのに、それより三代も前など何百年、何千年前の話なのか、それは想像もつかない

「その頃の戦争は少し前まで続いてた守護女神戦争なんて生易しいものじゃない、生きるか死ぬか、国を挙げての殺し合いだった」

それこそ血で血を洗う戦争、人が死なない日などなかった。そんな過酷な時代だったのだ。

「そんな中で生きていたから本当に過酷だった、人だつて殺したし盗みもした。そして捕まった」

昔のプラネテューヌ軍に捕まり、殺されそうになったところをイストワールに救われたのだという。その時の言葉をトウカは未だに覚えてる。

(子供を殺そうとするとは何事ですか!!!)

あの時のイストワールが一番怖かったという。

「それから俺は教会で育てられた。二人の幼馴染と一緒に、その二人は俺に仲良くしてくれたが………俺は少し遠慮していたんだ。二人の間に突然割って入るのはいけないんじゃないかな」

ドクンツと、ネプギアの心臓が跳ね上がる。全てトウカには分かっていたのだ。自分が遠慮していることも、本当は二人の仲に入りたいということも。

「そしてある時、その遠慮がバレてしまったんだ」

「どうなったんですか?」

「二人から思いつきり殴られたよ」

トウカは軽く右の頬を摩る。あの時の二人の剣幕はどんなモンスタ―よりも恐ろしかった。

「散々怒られた後泣きながら聞かれたよ、お前は私たちのことを赤の他人だと思ってるのかって」

赤の他人に気を使うのは仕方ない、でもどうして一緒に暮らしてる私たちに遠慮するんだ。そう言われた時のことを思い出していた。

「だから、遠慮なんてしなくていいんだ。お前が俺のことを嫌いなら構わないがな」

「嫌いなんかじゃありません!!」

突然、ネプギアは声を荒げてそう言った。

「私、トウカさんの事は大好きです!ずっとずっと一緒に居たいって、甘えたいって、でも……私なんかが、私なんかがトウカさんとお姉ちゃんの間に入るなんてダメです!だって、二人はずっと一緒にいたんでしょ?女神になるずっと前から!そんな二人の間に……私なんかが入っていい訳ないじゃないですか!!」

心の中にあつた全てを吐き出した。その時ネプギアは遠慮など微塵も存在しなかった。その言葉に、トウカはネプギアをそつと抱き寄せた。

「ならどうして俺の裾を掴んで放さなかった?」

「……………それは」

何も言えなかった。そうしているうちにトウカはネプギアをさらに強く抱きしめる。

「だから、これからは甘えていいんだ。ネプテューヌの様に」

「でも……………私……………」

「お前はネプテューヌの妹なんだ、お前が俺に甘える理由はそれだけでいい、それだけで……………充分なんだ」

ネプギアはトウカの胸の中で泣いた。これまであつた遠慮や建前など、そこには存在しなかった。



「それで?どうしてお前は俺のベッドに居る?」

「えつと……………あはは……………」

夜、今日はどうしても泊まっていけとネプテューヌに言われたため仕方なく教会にある自室に泊まることになったのだが……………何故かネプギアが居た。まだ先ほどのことを気にしているのだろうか?」

「笑いませんか?」

「笑わん」

話を聞いてみると、先ほどやったゾンビゲームの影響で一人で眠れなくなっただけらしい。

「ふつ……………」

「あー今笑ったー！笑わないって言ったのにー！」

あれだけ怖くないと豪語しながら結局怖いのか

「だから言いたくなかったんです……………」

「怒るな怒るな、それならネプテューヌの所へ行ってくるといい」

「嫌です、罰としてトウカさんは今晚私と寝てください」

なんの罰なんだ…………？

「笑わないって言ったのに笑った罰です！」

「まて、その罰は不当だ。再審を要求する」

「再審なんてありません！ほら、そんなところにいると風邪ひきますよ」

そう言うって当然のようにネプギアは俺のベッドの中に入っていく。  
はあ……………何を言ってもダメのようだ。俺はベッドの中に入る。

「狭くないか？」

「そうですね……………ちよつと狭いですね」

そう言うのとネプギアは俺に抱きしめてくる。寝返りが打てない。

「こうすれば大丈夫ですよ」

「おい……………ネプギア、くつつき過ぎだ。胸が当たってるぞ」

「しつ、知ってますよ！トウカさんのエッチ!!」

いや、寝づらいんだこの体勢は。

「あの、これからトウカって呼んでといいですか？」

「構わん、なんならお兄ちゃんでもいいぞ？」

「そ、それは恥ずかしいです」

もとより冗談のつもりだ。

「なら俺はそろそろ寝る、おやすみ」

「はい」

俺は瞼を閉じて眠りについた。

「おやすみなさい……………お兄ちゃん」

そのか細い声は、トウカの耳には入らない。

## 女神誘拐編 怒りと殺意

また明晰夢というやつか、これで何度目だ？まあ気にする必要はない。

(うええ、気持ち悪い……………)

(だから言っただろう、程々にしろって)

あれは確か敵の基地を落とした後の話だ。俺たちは強固だった敵の前線基地を落として浮かれていたから祝勝会を開いていたのだが、幼馴染が飲み過ぎて吐いていたのだ。あれでも女なのだからもう少し慎みを持って欲しいものだ。

(酒は飲んでも飲まれるなってイストワールにも言われただろ？そのうち本気で禁酒させられるぞ?)

(私も飲まれまいと思ってるのよ？でもいつの間にか記憶が飛んじやってるのよね……………)

窓際でグロッキー状態の幼馴染を見ていると少し涙が出てきた。こんな奴に率いられている部下が可哀想になってきたからだ。

(そんな事でよく特殊部隊を統率できるなお前……………)

(そんなもん適当に酒飲まして褒めて士気上げてきちんと金払ったらなんとかなるのよ)

兵士たちも兵士たちでよくこんな奴について行っていたな……………なんだかんだ言いつつ良い隊長だったのだろう。俺はあまり従軍していないからよく知らないが。

(あんたも人心掌握術を身につけたほうがいいわよ、変な研究ばかりしてないで)

(うるさいな、ほっとけ)

この時、その研究は人の生活を豊かにするものだと思っていた。思っていたんだ……………



「ええー!?トウカ行かないの!?!」

「ああ、あまり騒がしい場所は苦手なんだ」

今日はベールからリーンボックスに招待されているのだが、音楽ライブというものはあまり好かない。

「トウカは人混み嫌いだからしようがないよ」

「ああ、そういえば昔言ってたわね」

「そう、嫌いなものは仕方ないわね」

ネプテューヌとアイエフはこの事を知っていて、ブランも嫌いなものは仕方ないと諦めてくれたようだ。

「人混み嫌いってどこにも行けないじゃない、克服したほうがいいわよ?」

「悪いが昔からなんだ、すまん」

昔から研究室などに引きこもっていたから人がたくさんいる場所はあまり行きたくない。だから友好条約の時も建物の上から見たし、パーティーにも参加しなかった。

「やだやだやだ!トウカと行きたい!」

「私もっ!」

ラムとロムはやはり納得してくれないようだ。

「ラムちゃんロムちゃん、トウカはお仕事なんだって」

ネプギアが横からフォローを入れてくれる。ラムとロムは俺が行けないという所しか聞いていないから人混み嫌いというのは気づいていないようだ。

「ラム、ロム、ワガママ言わないで。トウカにはトウカの予定があるの」

ブランにも諭されようやく納得してくれたようだ。悪いことをしただろうか……………

「ベールにもすまないと言っておいてくれ」

「うん、じゃあねトウカ」

そう言ってみんなはリーンボックスへと向かった。さて、俺はクエストにでも行くか。



「いつもありがとうございますトウカさん」

「気にするな、こつちも報酬をもらってるんだからな」

クエストを4つほど終わらすと時間は既に夜、そろそろネプテューヌ達が帰って来る頃だがイストワールに聞くとまだ帰って来ていないようだ。

「泊まって来るのか？」

別に急ぎの仕事があるわけでもないし、今回は仲間が全員集まったんだ。予定変更があってもおかしくはない。特に気にする必要はないか……………」

「はあ、それにしても……………ここ最近昔の夢を見ることが多いな」

今日も昔の夢を見た、最近はそういうことが多くなっている。昔の夢なんてほとんど見なかったのにな……………」

「あいつはまだ国を恨んでいるのだろうか……………」

俺の幼馴染は2人いたが、うち1人は昔プラネテューヌに殺されたと言っても過言ではない、死んではないが……………死んでいるのと同じだ。今も彼女は眠っている。

「昔のようにならなければいいんだがな」

そんなことがあったから、俺もそのもう一人も理性を失って暴れまわったことがある。破壊衝動、殺人衝動に任せて全てを壊したあの時の事を、俺は鮮明に覚えている。その事件は、今なおプラネテューヌに災厄の物語として語り継がれている。まあ、その事件の真相を知る者は俺と幼馴染、そしてイストワールしか居ない

「俺はいつまで俺で居られるのだろうか」

そう、一人でつぶやいた。今はまだ人の体を保っていられるがいつ壊れてもおかしくない、もう俺はそんなところまで来てしまっているのだ。感情だってもう殆ど残ってない、人間らしさがどんどん無くなっていく。だから、ネプテューヌには早く一人前になってもらわなければ困るんだ、俺に頼らないで生きて行けるように。

「誰からだ？」

知らない番号から電話がかかって来た。間違い電話かもしれないが一応出てみようか。

「もしもし」



「久しぶりねえ、元気にしてる?」

この声は聞き覚えがある、いやでも忘れない特徴的な声、昔散々近くで嫌という程聞いた声だ。

「プル……………いや、アイリス……………」

「覚えてくれて嬉しいわ、もう私のことなんて忘れて女神にご執心だと思ってたもの」

俺とネプテューヌのことを知っているのか……………俺は居場所すらわからないのに。

「なんでその事を知ってる……………」

「だって……………貴方の可愛い女神様は私に踏みつけられてるんだもの」

携帯が割れそうになる。今みんなはこいつと戦っているのか……………

「リーンボックスの離れ小島に来なさい、30秒あげるわ。それ以上遅れたらこの子の首をプラネテューヌの教会に送るわ」

通話を切る暇も無く俺は能力を発動してネプテューヌの生体エネルギーを感知しその場所へと瞬間移動した。するとその場所はすでにギルドではなく夜空が輝く空中、そこで俺が見たものは

「トウカがすぐ来てくれるって、今回もきちんと護ってくれるみたいよ?良かったわね」

首を絞められているボロボロになったネプテューヌだった。



「……………早かったわね」

アイリスと呼ばれた女性はネプテューヌを投げ捨てた後瞬時に剣を呼び出して上から放たれたトウカの斬撃を防いだ。

「まさか10秒掛からないなんて、よほど大切なのね」

トウカは何も言わない、その代わりにその顔は瞳孔が開き切り殺意に満ち溢れている。ずっと一緒にいたネプテューヌでさえそんなトウカの姿は見たことはない。

「トウカッ!」

ネプテューヌの声も今のトウカには聞こえない、ただアイリスに攻

撃を続けている。

「はああああああああああ!!!」

一回打ち合う度に火花が散り、地面がえぐれる。今まで聞いたことのないトウカの絶叫をネプテューヌや女神たちはただ見ていることしかできなかつた。

「変わらないわね、大切なものを守るために全てを犠牲にする………  
本当に何も変わってなくて良かったわ」

アイリスがトウカを吹き飛ばし間髪入れずに左腕から巨大な雷撃を放ち、トウカはその雷撃を剣で受ける。金属は雷を通すため普通は持ち手にも電気が通るが、トウカが使っている大剣はトウカ自身が改造した特別製のため電気は持ち手に伝わらない。

「なぜこいつらを狙った………女神は関係ないだろうが!!」

「私も特に興味なかつたんだけど、雇われたから仕方ないじゃないの」  
「雇われただと?」

辺りを見渡すと趣味の悪そうな服を着た女と変なネズミがいた。

「金さえ払えばなんでもするか、イストワールが聴いたら泣くぞ」

「軍人崩れは傭兵くらいしかやる仕事がないのよっ!」

雷を弾きトウカは右腕で豪炎をアイリスに放ち、アイリスは瞬時に氷でその炎を消し、再び連続で剣を打ち合う。

「でもね、聞けばこの子プラネテューヌの女神だつて言うじゃない。  
本当は捕まえた後に殺す予定だつたんだけど、面倒だからすぐ殺すことにしたの」

「ネプテューヌは関係ない!」

「私にはあるのよ!」

ギヤリギヤリギヤリとトウカの剣が火花を散らしながら変形し中から炎が現れる。

「タイラントウエイブ!」

剣から炎の波が辺りを焼き尽くしさらにそこから爆発が起きる。  
既にあたりの地形は大きく変化して見る影もない。

「私たちにとってプラネテューヌの女神は一人でしょ?それなのに貴方は今何してるの?こんな小娘の面倒を見て……何がしたいのよ」

「俺は……………」

「わかってるんでしよう？ 私たちはもう平穩の中に戻れないことなんて」

アイリスはトウカをまつすぐ見据えながら言葉を紡ぐ、その表情はとても切なそうだった。

「今更この子たちを守ろうと、私たちが昔行ったことは消えない、私は悪いなんて思っていないけど」

「……………俺たちが行ったことは許されることじゃない」

「じゃあプラネテューヌの国民がやったことは許されるの？ 全部あの子が悪いっていうの？ ただ特別な力を持って生まれてきたあの子が悪いの？ 自覚も無いのに、何も悪いことをしてないのに、ただ女神として過ごしていたあの子が悪いっていうのねあなたは!!」

先ほどまでと打って変わり激情に身を任せながらアイリスは剣を変形させて鞭のようにしならせトウカへ放つ。

「今更この世界を恨んじやいない、でもあの子を殺したプラネテューヌでこのうのと生きてるあなたは許せない」

剣を再び集合させてトウカへと向ける。

「どうしてよりによってプラネテューヌの女神なのよ、しかも聞いたところによるとこの子を育てたのはあなただって言うじゃない……………本当に、信じられないわ」

「俺は、この子を女神にしようとしたわけじゃない」

「そう思っただけでも……………結果的にそうなったんでしようが!!」

アイリスもトウカも傷はないが二人とも満身創痍、それだけ凄まじい戦闘が行われたのだ。

「おいアイリスッ、もう女神たちは捕まえたタッチュ！」

「ちっ、ここまでね」

アイリスは剣を収めた。

「おいそこの男！ 今女神は私の手の内にある、下手な気を起こせばすぐに殺してやるぞー！」

アイリスが居なければすぐにネプテューヌ達を助けることができず、今回は部が完全に悪い、それゆえトウカも大剣を収めた所で電

話がかかって来た。

「先生！大丈夫!?!」

「……………すまん、ネプテューヌ達の奪還に失敗した」

「……………そう、とりあえず戻って先生。作戦を立て直しましょう」

そう言つてアイエフからの電話を切った。

「明日の夜、ここからもう少し離れた離れ小島に来なさい、そこなら辺りを気にせず戦えるでしょう?」

「……………ああ、そうだな」

「そこで全部終わらせてあげるわ、貴方の苦しい人生をね……………」

トウカは最後にネプテューヌを見る、すると目が合い、ネプテューヌの口が動いていたのが見えた。

(私なら大丈夫よ、だから……………ネプギアたちをお願い)

そう言ったのが分かったからこそ、トウカは唇を血が出るほど噛み締めた。守ることができなかった自分に怒りを滲ませながら。

「貴方の苦しみは全部、明日で終わるわ」

その言葉を背にしながら、俺はアイエフたちがいるリーンボックスへと向かう。

## 強き者も、弱き者も

俺がリーンボックスに着いた時、そこにはネプギア達女神候補生、そしてアイエフとコンパが居た。

「トウカ！無事なんですか？」

「ああ……………」

何も言う言葉がない、言葉が見つからないのだ。保護者などと言われながらいざという時何もできてない。

「すまない……………」

「やめましょ、こんなこと言っても仕方ないわ

「ごめんなさい……………」

ネプギアが全員に謝った。ネプギアが悪いわけではない、だから謝る必要なんてないんだ。

「私が買い物のとき拾った石、あれがきつとアンチクリスタルだったんです……………あの時……………なんで目眩がしたか考えておけば……………お姉ちゃんたちに知らせておけば……………」

アンチクリスタル……………そんなものがあつたとはな。だが、あいつがいた以上アンチクリスタルが有ろうと無かろうと結果は同じだっただろうな。

「ネプギアのバカ！私のお姉ちゃんは強いのに……………あんたのせい……………ネプギアが代わりに捕まればよかったのよ！」

「やめろと言ってるだろうが!!!」

全員が俺を見る、声を荒げてしまった。

「すまん、だがそんなことを言い合っても仕方がない。そもそも、アイリスが居る以上アンチクリスタルが無くても結果は変わっていないだろう」

「なによ！居なかつたくせに！いつも保護者面してるくせに肝心な時にいないじゃない！それなのに……………偉そうにしないでよ！」

そう言つてユニはどこかに行つてしまった。強く言い過ぎただろうか、全て……………あいつの言うとおりだ。



「あーもう暇〜！ゲームしたーい！」

「ちよつとネプテューヌ」

「私たちは今捕まってるのよ」

トウカ達が対策を練っている頃、ネプテューヌ達は相変わらず捕まっている。

「おい貴様！きちんと辺りを警戒しろ！高い金払ってるんだからな  
！」

「うるっさいわね……………そもそも私の契約は女神を捕まえるところ  
まででしょ？それを勝手に延長したのはあなた、お分かり？」

「延長料金払ってるだろうが！」

「だから、私はあなた達が化け物って呼んでるあの男担当、女神候補生  
の小娘たちはあなたがなんとかしなさい」

そう言っただけでアイリスは地面に横になりながらあくびをしていた。  
不真面目極まりないが仕事をしているのでマジエコンヌは何も言え  
ない。

「ふん、あの小娘どもが助けに来る訳ないだろう」

「来るわよ……………あいつが育ててるのだから、それくらいの度胸はあ  
るわ」

アイリスはどこか期待するような、そんな顔をしていた。

「……………むう」

「どうしたのよネプテューヌ」

「自分よりトウカさんのことを知ってる方が出て来たからやきもちを  
焼いているのではありませんか？」

「だって、私が一番だと思ってたのに！私にとってはあるなのポツと  
出の新キャラだよ!?それなのにトウカの事を語られたくないよ!!」

「うるさいわねえ、寝れないじゃない……………」

ネプテューヌが怒っていると、警備そっこのけで眠っていたアイリ  
スが目を覚ました。

「今何時だと思ってるのよ……………良い子はもう寝る時間よ」

「うるさいよ！誰のせいでこうなってると思ってるの!?!」

「私に負けた自分たちのせいでしょ？最近の女神って弱いよね」

その言葉を聞いた瞬間、四人全員が顔を顰める。自分が弱いと言われて腹を立てない人は居ないだろう。しかも、目を覚ましたのか懐から雑誌を読みながら言われているのだから余計に腹が立つ

「つていうかお姉さん、もしかしてそれジ○ンプ？」

「そうよ、今週号まだ読んでないのよね……………」

「あー！そういえば私もまだ読んでない！後で貸してよお姉さん」

「嫌よ、自分で買いなさい」

「ええー！良いじゃん！」

「ネプテューヌ、あんたいい加減にしなさい……………」

敵に漫画雑誌を借りようとするネプテューヌにいい加減に腹を立てたノワールはこめかみをピクピクと動かしていた。しかし、そんなネプテューヌもついに聞きたいことをアイリスに問いかける。

「ねえ、お姉さんはトウカの何を知ってるの？」

「何でもよ、私と彼はずっと一緒に育って来たもの」

「じゃあトウカの好きなものは!？」

「甘いもの全般ね、何かを研究してる時の飲み物はガムシロップ、普段はイチゴミルクをよく飲んでるわね」

「くっ、じゃあ嫌いなものは!？」

「長い話と虫、食べ物の特にないわね」

完全に当てられてしまったネプテューヌは他に何かないかを考え始めた。自分が一番トウカのことを知っている、それだけは誰にも譲れない。

「じゃ、じゃあとっておき！トウカのほくろは何個!？そして何処にある!？」

「目の下の泣きぼくろ、耳、それから小さいホクロが股にあるから計3個ね」

「なんて3つ目知ってるのさ!!一緒にお風呂に入ってる私しか知らないはずなのに!!」

「だから、一緒に育ったって言うてるでしょう?お風呂だって当然一緒に入ってたわよ」

そんなバカな……………そう呟いて縛られてもなお打ちひしがれるネ

プテューヌ、しかし彼女は諦めない。

「じゃあ逆に聞くけど、あなたは彼の何を知ってるの？」

「それは……………いい、色々だよ!!」

「聞かせて、一つ一つゆっくりでいいから」

ネプテューヌは悔しがりながら一つ一つ話していった。

「トウカは厳しいフリして本当はすごく優しく、本当はすごく強いのにすぐ自分のことを卑下にする根暗で、無表情で、自分の感情を伝えるのが下手くそで、自分の事なんて何一つ大切にしないで……私や他のみんなのことばかり考えて……何に苦しんでるのか全然話してくれなくて……私たちの問題は勝手に背追い込むくせに自分の問題は私たちに何も背負わせてくれない……」

段々ネプテューヌの顔が暗くなって行く、よく考えてみれば自分はトウカの苦しみを何一つ理解できていないのかもしれない。

「私は……………トウカにずっと笑ってて欲しいのに……………トウカにも幸せになって欲しいのに、トウカは私が笑ってくれていればそれでいいって、何も話してくれない」

「ネプテューヌ……………」

ノワールは普段見ないネプテューヌの落ち込んだ顔を見て自分も自然と顔が険しくなる。

「きつとトウカさんは私たちに心配をかけたくないんですわ、それでも……………もつと私たちが頼って欲しいですけど」

「私たちを大切に思ってくれているのはわかるわ、でも……………私たちはいつまでも守られていたくない」

ベールとブランも、ネプテューヌとノワールと同じ気持ちのようだ。自分たちはトウカに敵として立ち上がったことがある、しかし負け、トウカは守護女神戦争でネプテューヌの秘書、本当ならノワールたちの命を取ってもおかしくないのに、彼はそうしなかった。それほどトウカは優しい人間なのだ。

「ねえお姉さん、お姉さんはトウカが何に苦しんでるのか知ってるの？」

「ええ、知ってるわ」



「それは……トウカが不老不死になったことと関係ある？」

ネプテューヌは女神のため歳は取らないのはわかる、しかし人間であるトウカが歳をとらないことを流石に不審に思っているのだ。本来、トウカはネプテューヌよりもはるかに年上のはずなのにどうして今もなお20代の姿をしているのか、ネプテューヌは不思議で仕方がなかった。

「ええ、あいつと私が不老不死になったのはあいつ自身が産み出した物を使ったの」

「それは、なんなの？」

「聞いてどうするつもり？」

「私は、トウカの助けになりたい。私じゃ力になれない？」

「無理よ」

アイリスは迷うことなくネプテューヌの問いを否定する。否定されたネプテューヌは、否定されることを予想していても、面と向かって言われればさすがに辛い。

「あなたじゃ、いえ……あなただけじゃないわ。この世で彼の咎を背負うことができる人間は……もう私しか残ってないのよ」



「……………はあ」

「ここだったか」

「トウカ……………」

夜、部屋の中に居られずテラスでリンボックスの街並みを見ていたネプギアの元にトウカが現れた。

「あの、ユニちゃんのこと、怒らないであげてください」

「怒ってなんかないさ。むしろ、あいつが言った通り、俺は何もできなかった」

トウカは俯きながらそう言った。ネプテューヌを守れなかった事が相当こたえているらしい。

「あのアイリスって人……知り合いなんですか」

「ああ、前に話しただろう？」

「幼馴染の人……ですか」

「そうだ、一緒に育って、一緒に死線を潜り抜けた女だ」

トウカは遠い昔を思い出しながら話す、そんな彼の姿をネプギアは心苦しそうに見ていた。

「ネプギア、一つ頼めるか？」

「何ですか？」

トウカは、ネプギアを見ながら言葉を紡ぐ。

「今回、俺はきつとネプテューヌ達を助ける余裕はない。だから……お前達にネプテューヌを任せたい」

「私には……そんな事……」

「出来るさ」

トウカはネプギアをギュッと抱きしめる。

「お前はネプテューヌの妹で、俺の教え子だ。必ず出来る、自分を信じろ」

「でも……私変身も出来ないんですよ？」

「それは、お前が怖がってるからだ」

その言葉を、ネプギアは理解することができなかった。

「怖がってるって、モンスターですか？」

「いいや、もっと別のものだ」

「何なんですか？教えて下さい！」

「バカ、いつまでも俺に頼るな」

ネプギアの頭部にコツンツと軽いゲンコツが落とされる。

「そんな事までいちいち教えてられるか、それぐらい自分で気づけ」

「そんなの、分かりませんよ」

「はあ、なら一つだけヒントを出してやる」

トウカはネプギアの目をまっすぐ見据えながら言った。

「お前がどれほど強くなろうと、お前がネプテューヌの妹であることに変わりはない、俺の教え子であることに変わりはない、だから……安心して強くなれ」

トウカは、微笑みながらネプギアにそう言った。その姿は夜空に照らされて神秘的な光景で、ネプギアは一瞬トウカの姿に目を奪われて

しまう。

「ほら、早く!」

「わかってるわよ!」

誰かの声でハツと我に返ったネプギアは後ろを見てみると、ラムとロムに押されながらこちらに来るユニの姿であった。

「ユニちゃん……………」

「仲直り、しよ?」

ロムがネプギアに手を差し伸べ、ネプギアはその手を取る。そしてユニやラムが手を合わせた。

「いい……………過ぎちゃった。ごめんね?」

「ううん、いいよそんなの」

ネプギアは優しく、ユニのことを許す。

「トウカも、ごめん……………ごめんなさい……………」

「お、お前が謝ることなどないさ、全て言う通りなんだから」

珍しく慌てるトウカは必死にユニを泣き止まそうとするが、ユニの涙はさらさらとこぼれていく。

「本当はわかってる……………二人のせいなんかじゃないって……………わかってるのに!」

「もういい」

トウカが肩を支える。その顔は普段見せない、優しい顔つきだった。

「うん、もういいよ。気持ち、分かるから」

「泣きたい時は泣けば良いんだ、我慢なんてする必要はない」

「うう、うああああああ!!」

ユニはトウカの胸に顔を埋めて泣き出してしまった。トウカはただ泣きじやくる少女の体をずっと抱きしめていた。



泣き止んだユニはトウカから離れ、それを確認したトウカは教会の中に戻り、テラスにはネプギアたち女神候補生だけが残された。

「私……………お姉ちゃんより強い人なんてトウカしか居ないと思ってた……………トウカとお姉ちゃんさえ居れば心配無いつて、そう思ってた」

「私もだよ、私もトウカとお姉ちゃんが居なきや何もできない、今だって何をすれば……」

「そんなの簡単じゃない!!」

ラムが明るい声で自分たちが姉を助ければいいと言い放った。口ムも、変身できないのであれば覚えればいいと、笑顔で言った。

「お姉ちゃんがね、私が変身出来ないのは心にリミッターを掛けているからだって言ってた」

「心の、リミッター?」

「例えば、何かを怖がってるとか、そういう事よ」

ユニの言葉を聞いた瞬間、ネプギアの脳裏に先ほどトウカに言われたことがよぎった。

「トウカにも、同じこと言われた……何を怖がってるのか、それは教えてくれなかったけど、お前が変身出来ないのはお前が怖がってるからだって」

「トウカも同じことを……」

「私……モンスター怖い」

「私も……」

「でも、トウカはモンスターを怖がってるわけじゃないって」

「じゃあなによ」

「分からないけど……」

トウカに言われた言葉を心の中で何度も反復するが全く見当も付かない。自分は何を怖がっているのだろうか

「とりあえず……モンスターを倒す、練習しよ?」

「ロムの言う通りよ! みんなでモンスターが恐く無くなるように特訓しましよ!」

「いえ、モンスターじゃダメよ」

ユニが口を挟む、その顔は深刻そうだ。

「トウカも苦戦する相手よ、モンスターなんかじゃ無理よ」

「じゃあ、どうするの?」

ネプギアはすこし嫌な予感がしていた。こういう時のユニはなかなか無茶なことを言い出すのだ。

「居るじゃない、モンスターなんかよりも敵に回したら怖い相手が」



「そういう訳だ、頼む」

「分かりました……………」

教会内部に戻った後、トウカはイストワールに一つお願いをしていた。

「止めないんだな」

「止めたら勝手にリミッターを破壊して力を引き出しかねませんからね」

全てお見通しか、とため息をつきながらソファに腰掛ける。

「トウカさん、貴方が行ったことは確かに許されませんが、しかし貴方だけが悪いなんて、思わないでください」

「……………いや、俺が悪いんだ」

「やり過ぎですが、貴方の怒りは当然の物です、私だって……………怒ってないと言えば嘘になります」

イストワールは悔しそうに小さな拳を握り締める。あの時何もできなかった自分に、イストワールはトウカ同様苦しんで来たのだ。

「赤黒の竜を産み出したのは私たちです、だから……………だから一人で抱え込まないでください、プルルートさん……………アイリスさんだってそう思ってるからこそ、貴方と同じになっただけですよ」

「災厄の7日間を引き起こしたのは、赤黒の竜は俺自身から生み出された化け物だ」

「トウカさん！」

「どれだけ言葉を取り繕うと、あの災害を引き起こしたことに変わりはない。プラネテューヌの歴史から、俺の罪が消えることはねえんだ……………」

イストワールの瞳には女神を圧倒する強い男ではなく、いつか見た贖いきれない罪を課され、今にも消えてしまいそうなただの少年の姿が写っていた。

## 怖さと戦う強さ

(はあ……はあ、きついわね)

(ああ、さすがにこの数はな)

決戦が近いからか、俺はあいつの夢を見る。プルルート、アイリスとは何度も一緒に死にかけた。数えようとするだけで面倒なくらい。

(あー、もう相手にするのが面倒だわ、ここは潔く戦士らしく腹でも斬る?)

(なら勝手に死ねバーカ)

俺は立ち上がって剣を構える。

(俺は科学者だ、そんな精神なんか持ち合わせちやいねえよ、無様だろうがなんだろうが生き延びてやるさ、まだまだやりたい事があるんだ)

(屁理屈言って……あーあ、どうしてこんなのに育ったのかしら)

そう言って、アイリスも気だるそうに立ち上がり剣を構える。

(行くぞ飲んだくれ、絶対に帰るんだ)

(わかってるわ、貴方こそ途中でくたばっても骨は拾わないわよマツドサイエンティスト)

そう言って俺たちは敵に向かい駆け出した。



トウカはソファに腰掛けた状態で目を覚ます、どうやら少し休むつもりが眠り込んでしまったようだ。

「トウカッ!」

しばらくソファに座っていると、ユニ達女神候補生がやってきた。その表情は何か決意を固めたみたいだ。

「どうした?」

「トウカ、私たちを鍛えて!」

「そうか……ところでまつ毛が頬に付いてるぞ、取ってやるから来い」  
「話の腰を折るんじゃないわよ!!」

ユニは頬を強引に拭いて再びトウカに言った。しかし、決まらなかったことが恥ずかしいのか少し顔が赤い。

「鍛えて欲しいとはどういうことだ？」

「あんた、ネプテューヌさんを女神まで育て上げたんでしよう？なら私たちを鍛えてよ、あんたなら出来るんでしょ!」

「……………言っておくが生半可なものじゃないぞ？」

「わかってます、でも……………私たち強くなりたいです!」

ネプギアの目を見た瞬間、トウカはある少女の目を思い出した。昔、同じ目をした少女の事をトウカはよく覚えている。

「あの姉あってこの妹あり……………か」

「えっ？」

「言っておくがやるからには生半可なことはしないぞ、しかも時間は今日しかない、かなりの詰め込み作業になる。かなり厳しくするぞ?」

「望むところよ!」

「お願いします!」

「お姉ちゃんを助けるためだもの!頑張るわ!」

「痛いのに、我慢する!」

これは何を言っても諦めそうにない、そう感じたトウカはユニ達の提案を受け入れた。

「だが、一つだけ約束してほしい。アイリスの相手は俺に任せてくれ、頼む」

四人はトウカの思いを受け取ったのか何も言わずに頷いた。



「ユニ様ラム様ロム様、お迎えの方が……………」

アイエフが部屋に入ると、そこではボールが仮想現実を作ることができるゲーム機でトウカがネプギアたちを相手にしている光景だった。しかし、ネプギアたちは満身創痕に対しトウカは息一つ切れていない

「どうした?こんな事では姉を助けるなど夢のまた夢だぞ」

「そんなこと、わかってるわよ!」

ユニの射撃をサイドステップで軽々と躲し、その後連射するも一つとしてかすりもしない。その隙にネプギアがビームソードで真一文

字に切り掛かるがトウカは手首を掴んでユニの元へ投げ飛ばした。

「狙いが単調だ。今のもわざと自分に惹きつけてネプギアの援護をしたのだからバレバレだ」

「今のはいけると思ってたんですけど………」

「何やってるのよ」

アイエフがトウカ達の元へと駆け寄ってきた。

「トウカに特訓してもらってるのー！」

「特訓って………」

トウカに切り掛かり、防がれて腹部を強打されて吹き飛ばすネプギアを見てさすがにアイエフは止めに入った。

「幾ら何でも今のは強過ぎるわよー！もう少し手加減してあげないとー！」

「敵は手加減などしてくれんぞ、それはお前も良くわかってるだろう？」

「それはそうだけど……だからってー！」

「良いんです……アイエフさん」

ネプギアは咳をしながらよろよろと立ち上がる。

「私たちがトウカに無理を言っただけです……鍛えて欲しいって」

「でも、こんな特訓してたら怪我するわよー！」

「怪我するなんて知ってたわよ」

ユニはトウカに銃を向けながら話す。自分たちの姉だって怪我をしながら強くなってきたのだから、自分たちがいつまでも安全な訓練をしてても仕方がない。

「それが分かかってるなら立ち上がれ、それとももう辞めるか？」

「止めないって、言ってるでしょ!!」

もう一度トウカに向かい射撃するがそれは一つ一つ正確ではない乱射、そんな攻撃が当たるはずもなくトウカはユニに軽々と接近、腹部に拳を放ちうずくまった頭部にかかと落としを食らわせた。

「少々の怪我ならコンパが治療してくれる、安心して打ち込んでこい。遠慮などいらん、お前たちの攻撃など痛いどころかすぐつたいくら



いだ」

「なら、遠慮なく行きます！ミラージュダンス！」

ミラージュダンスを繰り出すネプギアはトウカに向かい一直線、その表情には遠慮も何もない、動きはキレがあり思い切りがあった。しかし

「っ！」

トウカの睨みに怯んでしまい途中で無意識にブレーキがかかってしまいスピードが落ちてしまう。トウカはその隙を逃さずネプギアの懐に入り込み刃が当たるギリギリのところまで頭部に蹴りを放った。ミラージュダンスの勢いが殺しきれず蹴られた衝撃でネプギアは地面でバウンドしながらバーチャルで作られた木に激突する。

「っ！」

トウカの顔が一瞬揺らぐ、やり過ぎたと思ったのだろう。もう良いと、お前達が傷つく必要はないと言ってやりたい。お前たちはもう十分頑張った、傷ついた。だからもう良いと言ってやりたい、その心を殺し彼は彼女たちに告げる。

「俺を怖がっているようでは、いつまで経ってもお前たちの姉には追いつけんぞ。あいつらは勝てなくても、俺を恐れはしなかった」

(恐がつてちや、だめ……………)

彼女たちはトウカに恐れず戦った。全力でぶつかり、悔いのない戦いをした。しかし、ネプギア達はトウカを恐れてしまっている。それもそうだが、何故なら自分たちの姉が勝てない相手に自分たちが勝てるわけないと、心の何処かで思ってしまったているのだ。彼女たちからしてみれば女神よりも強い何か、それがトウカという存在だ。

「怖いものは怖い、別にそれは構わん。だが時には怖いものに立ち向かわなければならぬ時がある、それを忘れるな」

「やああああー！」

ラムはトウカの正面から杖で殴りつけるが、その攻撃は軽々しく防がれ杖ごと持ち上げられてしまう。

「……………なるほど、そういう事か」

正面から攻撃してきたラムは囧、本当の攻撃は側面から回り込む口

ム、では無くそれすらも囷だ。

「本命はユニの射撃か」

持ち上げていたラムをロムにぶつけて背後を向く、しかしそこにはユニではなく意外な人物が立っていた。先ほど投げ飛ばされたネプギアである。

「なんだと」

「行きますよトウカ、スラツシユウエーブ！」

しかし、スラツシユウエーブは発動しない、不発か？そう思った瞬間トウカは後ろからの気配を察知する。案の定、後ろにはユニが射撃体制に入っていた。もちろん、先ほどの乱射とは違う、きちんと狙いを付けた一撃を構える。ネプギアは演出、つまり彼女も囷だ。

「行けええええええ！」

「惜しいな、あと一歩だ」

「いえ、これで決めます！」

先ほどフェイントで注意をそらしてネプギアが全力でトウカに向かい突撃する、しかし、彼女にトウカが避けたユニの射撃が襲う、だが彼女は怯まない。足を止めない、何故なら

「ありがとうユニちゃん！」

「ここまですんだから絶対決めなさい！」

ヒュンツとユニから放たれたビームはネプギアの頬を掠めていく、これらは全て即興で編み出された連携技

(怖くない、怖くない！諦めるもんか、絶対に、ここで決める！)

「やああああああああああ！」

トウカが振り向いた時にはすでに遅い、ネプギアは彼の懐まで潜り込んでいる、もう躲すことは不可能だ。彼女は絶叫を上げながらトウカを真一文字に全力で切り裂いた。

「えっ……………」

しかし、その刃は彼には届かない、彼の手には木刀が握られておりネプギアの刃を防いでいた。そして…………トウカのアッパーが炸裂し、勝負は決した。

「……………」

トウカはそう言うと言先ほどまでとは打って変わり、いつもの優しい顔つきに戻っていた。

「まさか武器を出すことになるとはな、思わなかったよ」

「おっしいーあとちよつとだったのにー！」

「残念……………」

ラムとロムはとても悔しがっていた。しかし、本当に悔しいのはネプギア自身だろう。

「ネプギア……………大丈夫？」

「ごめん……………届かなかった」

泣いている姿を見せたくないのか、必死に目を腕で隠しながら震えた声で話す。

「良くやったな、頑張ったぞ」

「でも、一太刀入れることができませんでした」

「咄嗟に木刀で防がなければ確実に入っていた、その木刀もこの有様だ」

トウカはネプギアの斬撃を防いだ木刀をみんなに見せた。その木刀は根元から綺麗に折れてしまってもう使えそうにない。

「良い一撃だった。流石だなネプギア」

「トウカ……………」

「特にみんなの連携、そしてユニの射撃センス、いいチームだ」

トウカに褒められたことが嬉しいのかラムとロムは飛び跳ねながら喜び、ユニは照れ臭いのかそっぽを向いている。しかし、ネプギアはまだ何が怖いかわからない。

「でも、私……………まだ何を怖がってるか……………」

「きつとすぐ分かることになる、分かっても……………もうお前なら大丈夫だ。恐怖と戦って打ち勝てるさ」

「……………はいー！」

笑顔で返事をするその姿からはもう迷いは消えてしまったようだ。

(もうこの子達なら大丈夫だ……………)

そう思いながらトウカは自分の右腕に付けられた腕輪を見る。普段はあるものの侵食を抑えるために付けているものだが、アイリスと

の戦いのためその出力を下げ、力を引き出せるようにしてある。その管理はネプテューヌが女神になった時からイストワールがしていたため、先ほどイストワールに頼んでいたのだ。

「皆さーん、そろそろお昼にするですよー」

この子達ならばきつとネプテューヌ達を助けられる、例え自分がいなくとも。そう確信を得たトウカはコンパたちの元へと向かう。

自分のすべてをにかけて、アイリスを倒すという決意の炎を胸に灯しながら

## 決戦アイリス

「さて、いよいよ時間だ」

現在時刻は夜、アイリス達との約束の時間だ。しかも、女神が囚われているという写真まで流出してしまっている、こんな物が広まればシエアは下がってしまう。

「お前達にはこれから女神を救出してもらおう、アイエフとコンパにも付いててもらおうが……かなり危険だ」

「分かってます、でも……私は行きます」

「私もよ、このために今日一日訓練したんだから！」

「私だって、絶対お姉ちゃんを助ける！」

「私も、お姉ちゃん……助けたいっ！」

全員の決意を確認した後、微笑みながら順番に頭を撫でていった。

「アイエフ、コンパ、悪いがこの子達を頼む」

「はいです！」

「分かったわ、先生も気をつけてよね」

妹たちにしたように、2人の頭を撫でる。これで全て完了、あとは約束の場所に行くだけなのだが、そこでトウカの携帯が鳴った。アイリスからだ

「何の用だ」

「約束場所、離れ小島って言ったけど、予定変更して女神達が捕まってるところまで来て」

「構わんがなぜ急に？」

「寝ぼけて魔法弾撃ったら沈んじゃったの……」

トウカは最後までアイリスの話を聞かず通話を終了させた。こんな下らない理由で約束場所を変えられるとは流石に思ってたのだから。

「どうしたんですか？」

「いや、決戦場所が離れ小島からネプテューヌ達の前に変わっただけだ。心配するな」

そう言ってトウカは部屋から出ようとした時、ネプギアが彼を呼び

止めた。

「一つ約束してください」

「何をだ？」

「絶対………帰って来てください」

今にも泣きそうな顔でネプギアはそういった。彼女も薄々感じているのだろう、この戦いでトウカが居なくなってしまうかもしれないということ。

「………ああ、俺は先に行くぞ」

そう言つて彼はテラスから飛び降り、瞬間的にネプテューヌ達が捕らえられている場所まで飛んだ。その姿をネプギアは心配そうに見ていた。



「来たわね」

トウカがその場所に行くと、アイリスがアンチクリスタルの結界目の前に立っていた。そろそろ来る頃だと思っていたのだろう。

「女神候補生達は置いて来たのね」

「すぐに来るさ」

そう言いながらアンチクリスタルの結界を見上げるとネプテューヌと目が合った。何かを喋っているように見えるが何も聞こえない。

「ちなみに今結界の音声はミュートしてるから話しても聞こえないわよ」

「なるほど、それで？俺をこんな所まで侵入させて…雇い主に怒られないのか」

「倒せば問題ないわ」

彼女は何処からともなく一つのボトルを取り出し、グラスを一つトウカに投げて渡した。

「最後かもしれないだから、一杯だけ付き合いなさい」

「珍しいな、お前がワインなんて」

「私だってもうお上品なお姉さまなのよ」

「お前がお上品？なら世の中の女は全員お上品だな」

「後でその舌引き千切つてあげるから覚悟しなさい」

そう言いながらボトルを開けてグラスにワインを注ぎ込んだアイリスとトウカはお互い地面に腰を落としてグラスをぶつけ合った。

「思い出すわね、戦場でいつも二人で飲んだ時のこと」

「ああ……よく覚えてるよ」

昔、戦が終わるとよく二人で飲んでいた時のことを思い出し懐かしい思いに浸りながら酒を飲む。その様子を見ていたネプテユーンとノワールが何やら騒いでいるが聞こえてこない。

「あら、ヤキモチかしらね？面白そうだから結界の音声出してみましよう」

そう言つて何かを操作したアイリス、するとネプテユーン達の声が聞こえてきたのだが、とてもうるさい。

「なんであんた敵とお酒なんて飲んでるのよ!?ていうかさつきから無視するな!」

「私たち放つておいてなんで呑気にお酒なんか飲んでるのさ!!さすがの私も怒るよ!気が長くて有名な私もいい加減怒っちゃうよ!」

どうやらアイリスと仲良くお酒を飲んでいるトウカが気に入らなくて怒っているみたいだ。2人を見ているブランとベールは呆れたようにため息をついている。

「落ち着け、今は敵とはいえ久しぶりに会った幼馴染だ。少しくらいはいいだろう」

「それは……そうだけど……ていうかネプギアたちはどうしたの!?!」  
「安心しろ、あと少しで来るさ」

トウカがそう言った瞬間、近くで爆発が起きた。マジエコンヌが配備していた雑魚モンスターが次々にやられているみたいだ。

「おい!なぜこいつがここにいる!?!お前は何をしていた!」

「瞬間移動でここまで来たから防ぎようがなかったの」  
「瞬間移動だと………化け物め」

「お褒めにあずかり光栄だ」  
「どうするツチュカババア、あんなのに勝てる気しないツチュ」

マジエコンヌとワレチューが結界前に駆けつけてくるが襲ってくる気配はない。トウカの威圧に気押されているようだ。

「貴方たちは女神候補生の相手をしなさい、私はこの男の相手をするわ」

「ふん、精々女神たちが死ぬまで時間を稼いでもらうからな」

そう言つてマジエコンヌとワレチューはネプテューヌ達を助けに来たネプギアたちの元へと向かい、再び結界前にはアイリスとトウカが残された。

「やっぱりあなたが育てただけあるわね……………自分の怖さの正体を知つて女神化出来るなんて」

「誰の妹だと思つてる、ネプギアなら、いや…………この女神たちの妹なら全員大丈夫だ」

「そう……………さて、向こうも始めたようだし、こつちもそろそろやりましょうか」

「そうだな」

二人はワインを飲み込み空になったグラスを地面に置いた。その瞬間、お互いに地面を踏み込みお互いに剣を交えた。とてつもない剣戟により地面が陥没しえぐれてクレーターが結界前に発生する。

「うおおおおおおおおおおお！」

「はあああああああああ！」

一回一回斬り合うたびに地面がミシミシと悲鳴をあげ、剣を振るつた風圧によつて近くにいたモンスターがどんどん消えてゆく。そして、アイリスの斬撃を防いだトウカはその隙を突いて炎の拳を腹部へと叩き込み彼女はその衝撃で遠くの壁へと激突する。

「タイラントラグルス！」

トウカは手の中にエネルギーを集めて巨大なビームへと変化させてアイリスへと追い打ちと言わんばかりに放つ。その衝撃により地面がえぐれアイリスがいた場所は木っ端微塵に吹き飛ばされていた。数分の戦闘でさえ、二人の戦いは地形を変えてしまう。

「どうした、その程度じゃないだろう」

トウカがそう言つた瞬間、土煙の中から一つの剣が伸び彼の腹部を貫通する。そしてその剣は鞭のように変形していきUターンしてもう一度トウカの身体を貫いた。そのまま彼の体はぐんつと引つ張ら



れ、アイリスの元へと強制的に移動させられた。

「敵を吹き飛ばした後に隙ができる、あなたの悪い癖よ」

アイリスはトウカの頭を掴みそこから高電圧の雷撃を発生させ、身体を麻痺させた後蹴り飛ばし剣を鞭のようにしならせてトウカの身体を連続で切り裂いてゆく。

「調子に、乗るなよ」

鞭のように襲いかかる剣の軌道を読んで自分の剣で防ぎ、躲した後アイリスが剣を集めようとしているのを見計らい手で刃を掴んで彼女の元へと近づき炎の拳を顔面へと叩きつけた。

「そのままっ！」

拳を叩きつけたと同時に踵落としを繰り出し、地面に手について身体を回転させて足払いで体勢を崩してそのまま剣で腹部を貫いて刃の部分を爆発させた。

「これで終わらせるっ！」

両腕が変化し赤黒い異形の腕へと変貌を遂げ、掌をアイリスに向ける。すると掌から巨大な炎のエネルギー砲が放たれとてつもない爆発と熱が辺りに広がる。

「はあ、はあ……………」

「そろそろ体が温まってきた頃かしら!？」

「さあな！」

拳を振りかぶったトウカの腕をアイリスが手で弾いた後あらゆる方向へとへし折り、そのまま腹部へと膝蹴りを叩き込んだ後、彼の頭部へと向かい剣を振るう。とっさにその斬撃を躲すが完全に躲し切る事が出来ない。

「っ!？」

その様子を見ていたネプテューヌは思わず目を背けそうになると同時にこんな時に何もできない自分に対して怒りが込み上げてくる。

「ライトニングランス！」

そう思うネプテューヌをよそに戦いはさらに勢いを増していく。アイリスは空中に何本もの雷の槍を出現させ時間差でそれをトウカに向かい射出、うち数本が彼へと突き刺さった。

「思い出すわ、貴方と特訓した子供の頃」

「あの頃のお前はふわふわした女の子だったな」

「それ黒歴史だから言わないで」

へし折られた腕を戻し動くかどうか確かめるが、どうやら限定的にしか動かすことができないようだ。

「左腕、使えなくなったわね」

「いいハンデだろう？」

「そうね…………子供の頃ならいいハンデになったかもしれないわ！」

アイリスは懐からナイフを投げつけ、トウカは剣を変形させ火花を散らし、刀身から炎を出しながら剣を上から下へと切り上げた。

「お返しだ」

瞬時に足元へと滑り込み、アイリスの右肩の付け根の部分を異形の足に変化させ炎を纏いながら渾身の力で蹴りつけた。アイリスの肩から鈍く嫌な音が聞こえ、彼女は右肩を庇うように雷で牽制する。

「はあ、やっぱり貴方を相手にすると疲れるわ」

「俺も同じだ。こんなにもボロボロになったのは何百年ぶりだろうな」

お互い剣を杖の代わりにして身体を支えている。

「でも、ここまで…………私の勝ちよ」

「何を言ってる…………」

アイリスはそう言うと言と結界を見るように促す、そこではもうすでにアンチエナジーの中に女神たちが取り込まれる寸前だった。

「ネプテューヌ！」

「トウカ！ベールとブランが！」

すでにブランとベールが体の半分以上アンチエナジーに飲み込まれてしまっている。

「もう遅いわ、アンチクリスタルは女神たちのシエアクリスタルとのリンクを邪魔するだけじゃない、行き場の無くなったシエアエナジーをアンチエナジーに取り込むことができる、さらに高濃度のアンチエナジーは女神をも殺す毒になるの」

「なんだと…………くっそー！」

「やめなさい、あなたの力で結界を破壊すれば中にいる女神ごと木っ

端微塵になるわよ」

現時点で結界を破壊できるのはトウカだけ、しかしそのトウカの力は強すぎる為直接攻撃すればネプテューヌ達ごと破壊してしまう。まさに八方塞がり、なす術がない。

「ハーハッハッハ！残念だったなお前たち」

女神候補生たちと戦っていたマジエコングが高らかに笑う、ネプギア達も突然の出来事に戸惑ってしまっている。

「トウカ！」

「ネプテューヌ！」

「あなたの相手は、私でしょ！」

ネプテューヌに気を取られた一瞬の間隙をつき、アイリスは剣を伸ばし、彼の右目を貫いた。

「トウカアアアアアアアア！」

ネプテューヌの声は次第に小さくなり、そして姿が見えなくなった。完全にアンチエナジーに取り込まれてしまったのだ。

「ネプテューヌ……………」

トウカはその場に膝をつき、うつむいて動かなくなってしまった。目の前で守ると約束したものが消えていったのだ、幾ら彼といえど辛くはないだろう。

「終わりよ」

アイリスはトウカに剣を向ける。

「これで、貴方が守るものはもう無いわ。貴方の生きる意味ももう無い。もう……………無理に生きていなくていいの、貴方を縛る枷はないんだから」

トウカのこの世に対する未練は今この時を持って全て断ち切られてしまった。確かに、彼の生きる意味はもうない。咎を背負って生きることにも……………罪に苦しみながら生きることとももうしなくていいのだ。

「あなたの罪滅ぼしは終わったのよ、それともネプちゃんとの子を重ねてたの？どちらにしても、もう終わったのよ……………」

アイリスは彼をトウカ、ではなく別の名で呼び、悲しそうに剣を振

り下ろした。

「お前は幾つか勘違いをしている」

しかし、その剣をトウカは折れた左腕で掴んだ。

「あいつはまだ死んでない」

手から血が吹き出すことなど御構い無しと言わんばかりにトウカは剣を握りしめ足に力を入れて立ち上がる。

「あいつはこんな場所で死ぬわけないだろうが」

彼の目には光が失われておらず、むしろ光が強くなって見える。

「あいつはバカで、能天気で、サボり癖がひどくて、グータラで、そのくせ誰よりもプラネテューヌの国民の事を大切に想っていて、努力家で、底抜けに明るい……俺の一番大切な女神様だ」

微笑むことはあっても、決して笑う事のなかったトウカが、今……確かな笑顔でネプテューヌの事を話していた。

「そして何より……俺の……最高の教え子だ」

彼はいつになく誇らしげに話す。

「だから、あいつはこんな所で死んだりしない、必ず帰って来るさ」

そう言つて、彼はアイリスの剣を握りつぶした。

「だから、そんな所で寝てないで早く起きろネプギア！そんな姿をお前はネプテューヌに見てもらいたいのか！」

彼の視線の先にはネプテューヌが消え打ちひしがれていたネプギアだった。しかし、今はもう違う、彼女は立ち上がり武器を構える。

「小賢しい、そんなことがあるわけがないだろう」

「良いか！自分たちの力が取り込まれるなら相手を取り込めないほどの力でねじ伏せる、一人でダメなら仲間を頼れ、お前には大切な友達がいるだろう！」

「うん、そうだよね……こんな所で負けられない！」

そして、ネプギア達の体がまばゆい光に包まれる。シエアエネルギーが限界以上に増幅しているのだ。

「本当に……しぶといわねあなたは」

「お前にだけは、言われたくない！」

アイリスとトウカ、武器を捨てお互いに顔面に向かい拳を放つ。ト

ウカは炎を、アイリスは雷を纏った拳を放ち、お互いの体を吹き飛ばす。

「そろそろ終わりにしましょう、全てをね！」

「ああ、そうだなー！」

そう言った二人はお互いに炎と雷を体に纏ってゆく。そして、体が異形の者へと姿を変えて行く。

「ドラグーンインストール!!!」

巨大な炎と雷が辺りを支配し、全てが治った時、そこには巨大な炎の翼を広げた人型の赤黒い竜と巨大な雷の翼を蝶のように広げた人型の青い竜がいた。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

お互いに手を天にかざし、そこから赤い円と青い円が出現しその中に巨大な炎と雷が出現した。巨大なエネルギーが二体の竜を中心に渦巻いてゆく。

「タイラントエクスプロージョン!!!!」

「レイジングボルテクション!!!!」

巨大な雷と巨大な炎とエネルギーがぶつかり合い、とてつもない爆発と閃光が広がった。

## 泣き顔スマイル

ネプテューヌが目をさますと、そこは暗い暗い闇だった。体には力が入らず、何も出来ない。

(私……死んじゃったのかな?)

自分が死んだのか、そう思いながら闇の中で漂い続ける。あたりに人影はない、自分一人……まるで昔の様な孤独に苛まれる。

(やだなあ……怖いよ)

孤独、それはネプテューヌが一番恐れるものだ。彼女は友達や妹たち、そして国民の皆がいるからこそ存在していられる。

(トウカ……)

彼女は心の中で一番大切な人間の名を呼ぶ。今まで自分のそばにずっといてくれた人。親代わりであり、自分に全てを教えてくれた師でもあり、心から愛している存在だ。

(大丈夫……なのかな)

彼女が最後に見た彼の光景は目を貫かれるという衝撃的なものだ。今、トウカがどうなっているか分からない。

(トウカ……ネプギア……みんな……)

トウカを昔から知っている彼女だからこそ、トウカを心配してしまう。彼は放っておくと勝手に消えてしまう、だからこそ放って置けないのだ。ネプギアも、まだまだ子どもで甘えん坊だから……：……：自分が見ていないといけない。だが、ネプテューヌ自身も甘えん坊ではないといえは嘘になる。未だに、彼女はトウカにずっと甘えてしまっている。

「終わりよ」

不意に声が聞こえてくる、するとそこにはトウカとアイリスがいて、彼女は彼に剣を突きつけていた。ネプテューヌは必死に体を動かしてトウカの元へと行こうとするが動かない。

「これで、貴方が守るものはもう無いわ。貴方の生きる意味ももう無い。もう……：……無理に生きていなくていいの、貴方を縛る枷はないんだから」

貴方を縛る枷、その言葉を聞いた瞬間ネプテューヌの胸が苦しくなる。自分はトウカの重りになってしまつて居たのだろうか。自分が居るから……トウカはいつまでも辛い思いをしながら生きているのだろうか。自分は、トウカにとって何なのだろうか。それが、ネプテューヌには分からなくなつてしまった。

「あなたの罪滅ぼしは終わったのよ、それともネプちゃんとおの子を重ねてたの？どちらにしても、もう終わったのよ……ナ」

あの子と重ねて居た。ということとは自分はトウカにとって誰かの代わりなのだろうか。そう思うと涙が出てきそうになる。自分は、トウカにとって不必要な、邪魔存在なのではないか……そう思つていた時だ。

「お前は幾つか勘違いをしている」

トウカの声が聞こえてきた。その声はいつものような穏やかな声ではなく、はつきり聞こえる凜とした声だった。

「あいつはまだ死んでない」

そう言つてトウカはアイリスの剣を掴みながら立ち上がる。

「あいつがこんな場所で死ぬわけないだろうが」

その手からは血が噴き出すが、トウカは剣を握つたまま立ち上がる。

「あいつはバカで、能天気で、サボり癖がひどくて、グータラで、そのくせ誰よりもプラネテューヌの国民の事を大切に想つていて、努力家で、底抜けに明るい……俺の一番大切な女神様だ」

その時、ネプテューヌは見た。

「そして何より……俺の……最高の教え子なんだから」

かつて、自分が女神になった日に向けられた、いつものトウカからは考えられない、トウカの華やかな笑顔を。その笑顔を見た瞬間、すべての心配や不安は拭い去られた。先ほどの孤独などない、暖かい何かが胸の中を感じる。そして、今ならわかる。自分は一人ではなく、ノワールやブラン……そしてベールが近くにいることを。

「だから、あいつはこんな所で死んだりしない、必ず帰つて来るさ」  
そうだ。こんな所で死んで居られない。

(絶対……………帰るんだ、みんなのところ！)



トウカが目を覚ますと、そこには焼け野原が広がっていた。辺りには誰もいない、空を見上げるとネプギア達がアイエフとコンパを抱き上げて飛んでいた。

「はあ……………ボロボロだな」

制御したとはいえこれほどの爆発、もしアイエフたちが巻き込まれてたらと思うと怖気がする。自分の甘さを痛感した。

「俺が生きてるということは、お前も死んでないんだろう？」

「ええ、なんとか生きてるわよ」

トウカが倒れているはるか前方にアイリスもズタボロになりながら倒れていた。

「ようやく分かったよ……………お前がどうしてこの仕事を受けたか」

ずっと気にはなっていた。アイリスは強い心を持っている、さらに今では一騎当千の力を持っているのだ。気に入らない仕事は受けないだろう。

「本当は……………俺を殺して自分も死ぬ気だったんだろう？」

「……………ふん、お見通しってわけね」

アイリスは引き捨てるように言いながら立ち上がる。

「俺を殺す事によって、俺を罪から解放しようとしてくれてたんだらう」

「話だけ聞けばただのヤンデレじゃない」

クスツと、二人は笑う。アイリスは苦悩を背負って生きているトウカの人生を終わらせることによって苦しみから解放しようとしていたのだ。普通の人間が聞けば正気の沙汰ではない、だが……………この二人だからこそこの理屈は通る。

「もう許されてもいいじゃない、何百年引きずってるのよ。あんたも悪い、国民も悪い。それで、手を打ちましょう？」

「だが……………俺はあの子との約束を破ってしまった。それが、一番辛い」



彼は一つ、幼馴染の女の子と約束を交わしていた。それは、その子がまだ国民から愛されていた時のことだ。

「俺に何かあったら、俺の代わりにプラネテューヌを守ってくれ」  
二人はその約束を同時につぶやいた。その記憶は、今もなお2人の記憶に鮮明に残っている。

「その約束で苦しみながら生きてるあなたを……見てられなかった」

「なんで苦しんでるって分かったんだ？」

「ネプちゃんたちを助けに来た時、目を見た瞬間に分かったわ。心の中で、ずっと苦しんで来たんでしよう？」

「ふう、隠し事はできんな」

自傷気味に苦笑するトウカはふらふらと立ち上がった。

「私だって、少しだけ悪いかなって思ってるのに……誰よりも優しいあなたが苦しんでないわけじゃないじゃない」

その微笑みは、昔見た彼女のものと変わりはなかった。長い時を生き、いろんな経験をしても、どれほど捻くれてようと、何も変わりはなかった。

「ありがとう……心配してくれて」

「貴方も貴方でおかしいわよね、殺そうとした相手に感謝するなんて」  
自分のことを心配してくれている、それを分かっているからこそトウカはアイリスに感謝の言葉を掛けられる。

「だが、ただ殺されるわけにはいかないんだ」

「そう、ならどうすればいいか分かるわよね？」

二人はすっかり平坦になってしまった地面へと足を延ばす。そして、それと同時にアンチクリスタルで出来た結界が破壊された。

「お姉ちゃん！」

「上よネプギア」

ネプテューヌの声が上から聞こえてくる。すると、そこにはネプテューヌだけでなくノワールやブラン、ベールの姿があった。

「ほらな、あいつがあんな所で死ぬわけがないだろう？」

「ほんとね……さすがはあなたの一番の教え子だわ」

二人は女神たちを見てそう呟いた。ネプギア達はネプテューヌたちに駆け寄り泣き出しながら抱きついていていた。その光景を、トウカは目に焼き付けている。

「本当に帰れると思うの？あんな平和な所へ」

「さあな……………帰れなくてもいいさ」

そして、トウカはアイリスへと言い放つ。

「俺はあの子達の笑顔が見れたらそれでいい」

普段見せない、いつも見てた、いつまでも見たかった笑顔がアイリスの目の前にあった。だが、アイリスは同時に胸を締め付けられる。結局、トウカは自分の幸せを考えてなどいない、人の……………ネプテューヌ達の幸せしか考えてないのだ。

「結局……………あなたはっ！」

アイリスはトウカへ向かい駆け、残った左腕で顔面を殴りつける。しかし彼は倒れず残った右腕でアイリスの腹部を殴る。

「はあああああああああああ！」

2人の拳が交差し、お互いの頬へとぶつかり、戦いの火蓋が再び切られた。



トウカたちの戦いをネプテューヌ達は少し離れたところで固唾を呑んで見守っていた。

「おいっ！手伝わなくていいのかよ！」

「そうよ、もう手負いなんだからみんなでやれば……………」

「ダメよ……………手を出しちゃダメ」

「ネプテューヌの言う通りですわ、ここは黙って見守りましょう」

ノワールとブランはトウカの戦いに加勢しようとするがベールとネプテューヌがそれを止める。

「ここはトウカさんに任せた方がいいと思います。きつと、お互い譲れないものがあると思うから」

ネプギアも心配そうに見つめるが、加勢しようとは一切しない。必ず帰ってくるという約束を守ってくれると、信じているからだ。

「トウカはきつと……………帰って来てくれるわ」

ネプテューヌは信じて彼の帰りを待つ、トウカが信じてくれたのだ。それならば自分も信じなければならない。自分はトウカの最高の教え子なのだから



「があああああああああああ！」

トウカは下から放たれた拳をバックステップで躲し右足を軸にして裏拳を叩き込むがアイリスは吹き飛ばす途中でトウカの顎を蹴り上げ、受け身を取り腹部を殴りつけ吹き飛ばした。

「私があなたの一番嫌いな所を教えてあげるわ！」

アイリスの蹴りがトウカの足を捉え地面へ倒し、そのまま馬乗りになって顔を殴り続ける。

「何でもかんでも自分のせいにして！一人で全部抱え込んで！何も相談しないで一人で苦しんで！自分の幸せなんて一切考えないで人の幸せだけを願うそんな所が一番大嫌いなものよ！」

トウカはアイリスの拳を防ぎ頭突きで馬乗り状態から脱出し、腹部に蹴りを繰り返して吹き飛ばすが、それに屈せずもう一度トウカの元へ駆け出し殴り合う。

「それは違うぞプルルート」

トウカは彼女のガードを崩し

「あの子達が幸せであることが、俺の幸せなんだよ」

彼女の頬へと全力で右ストレートを叩き込んだ。

「ふざけないでよ……………ふざけないでよ！」

彼女の目から涙がとめどなく溢れて行く。

「そんなの……………そんなの、あなたが救われない！報われないじゃない！」

「それで良いんだ」

トウカの目は先ほどまで戦った強い目ではなく  
「報われなくても、救われなくてもいい。ただ……俺のような男が居たと、ほんの少し頭の片隅に覚えてくれていればそれでいい」

親友に向ける優しい眼をしていた。既にもう、トウカはアイリスを敵とは思っていないのかもしれない。

「……………やっぱり、私はあなたの考えが気に入らないわ」

「なら、やる事は分かっているだろう？」

二人はお互いは微笑み、残った腕でお互い炎と雷が纏われる。

「お互い、考えることは一緒みたいね」

「あいつの技をこんな事に使ったと知れたら絶対に怒られるがな」

そうお互いに言い合った後、同時に地面を蹴り駆け出す。お互いの想いをかけ、己の想いを放つ。

「夢幻粉碎拳!!」

炎の拳と雷の拳、剣のように伸びたお互いのエネルギーは二人の腹部を貫いた。

「終わりだ……………」

「そうね……………私はまた……………」

そして、二人は地面へと倒れる。身体中ズタボロになり、傷口から血が溢れ出しており、普通ならば出血多量で死んでいるだろう。そんな二人の元へとネプテューヌ達は駆け寄る。

「トウカ、トウカー！」

「遅かったな……………ネプテューヌ……………」

目を少しでも開けながら優しく右手でネプテューヌの頬へと優しく触れる。その手は血だらけでネプテューヌの頬を赤く染めるが、彼女はそんなことを気にせず彼の手を優しく包み込んだ。

「頑張ったな……………みんなと一緒に……………」

「それは……………トウカの声が聞こえたから、だから私……………頑張れたの……………」

ボロボロと大粒の涙を流しながらそう言うネプテューヌの言葉を、トウカは優しく否定する。

「それはお前の、お前たちの力だ。俺の力じゃない」

「それはそうかもしれないけど、それはトウカが勇気をくれたから、だから……………だから」

そう言い終わる前にトウカはネプテューヌの頭を優しく抱き寄せる。その胸に顔を埋めながらネプテューヌは声を殺して泣く。

「もう泣くな、お前に涙なんて似合わない」

優しく頭を撫でながら、慈愛に満ちた声でネプテューヌに語りかける。

「お前にはずっと……笑ってて欲しいんだ」

その言葉を聞いたネプテューヌは、ゆっくりと顔を上げてトウカへと言い放つ。

「怪我が治ったら、一杯甘えるから……覚悟しなさい」

普段の笑顔ではない、涙を流しながら微笑むその笑顔を見たトウカはゆっくりと目を閉じる。

彼女の笑顔を見られただけでも、自分が頑張った甲斐はあったのだと。

好きな人の看病をしようとしたら変態と言われることがある。

またか……一体何度昔の夢を見せられるのだろうか。いい加減にして欲しいものだ……昔のことはあまり思い出したくない。

「かーくん、見てえ」

「なんだようるさいな」

俺は教会の一室で昼寝をしている時、当時のアイリス……もといプルルートが入ってきた。あの時のあいつは喋るのが遅く天然で、なんというか……ふわふわしてた。

「じゃーん、かーくんのぬいぐるみだよお」

「あれ？あいつのぬいぐるみは？」

「うーちゃんのはもう作ったよ？」

そう言っつてプルルートは赤毛の髪を二つに括った少女のぬいぐるみを取り出して俺に見せた。

「お前もよくやるよなあ、俺はこんな細かい作業絶対無理だ」

「その代わりかーくんはお勉強できるから良いんじゃないかなあ」

「そういえばお前宿題やったのかよ、怒られるぞ」

「また後でかーくんに手伝ってもらおう」

そう言いながら甘えるように膝に頭を乗せるプルルート、ああ……この時は平和で、まだこいつも可愛げがあったんだが……



「トウカ!?大丈夫?」

「ネプテューヌか」

目を覚ますと、そこにはネプテューヌが居た。他の奴らはいないらしい。

「あの後どうなったんだ？」

話を聞くと、俺とアイリスはあの後すぐに病院に搬送されたが、手術の前に致命傷が完全に治癒していき手術の必要がなくなったため通常病棟で入院することになったのだとか。まあ、当然そうなるだろ

うな。

「右眼……見える？」

「今はまだ見えんな、だがすぐ治るさ」

「病院の先生は完全に潰れてるって言ってたよ？」

「お前も知ってるの通り普通の人間じゃないからな、欠損した部位くらいなんとかなる」

「そのうち回復するだろう、回復するまで左目しか見えないから少し不便だが。」

「でも、トウカがこんなにボロボロになるなんて滅多にないよね。珍しいもの見れたなあー」

「そんなこと言ってボロボロ泣いてたくせに」

「泣いてないよ！あれはあれだよ!?!砂埃が目の中に入ったただけだもん!!」

「そういう事にしておいてやる」

するとネプテューヌは膨れてなぜか変身して女神化した。疲れるとか言いながら最近よく女神化するなこいつ。

「そんなことより、今日は私が1日あなたを看病してあげるわ。どう？嬉しい？」

「看病されるといいうのがあまり好きじゃないが、どうせされるならお前じゃなくて本職のコンパがいい」

「そう言うのと得意げな顔から一瞬で不機嫌な顔になり腹部を強打してきた。痛くないが鬱陶しい。」

「私よりコンパの方がいいってどういうこと？」

「あいつは看護師だぞ？女神でも看護のことは素人なんだからプロにしてもらったほうがいいだろう」

「わ、私だって看病くらいできるんだから！」

「お前に任せると部屋がぐちゃぐちゃになりそうだから嫌だ。」

「やはりお前と居ると楽しいな……」

「なによ急に」

「いや、病室に一人は少し寂しいからな、お前が居てくれて良かったよ。ありがとうネプテューヌ」

「こいつがいると退屈しない、かなり騒がしいことになるが……いや、ここは病院だから騒ぐのはまずいか。」

「そ、そうやっていきなり微笑むのは感心しないわよ!？」

「照れてるのか? 珍しいこともあるな」

「からかわないで!」

プクウと膨れている姿を見ると、やはり変身しても根本は何も変わらないなこいつは。

「こうやって、いつまでお前と笑えるんだろうな……」

「そんなの、いつまででもよ」

いや、いつかは本当の別れが来る。それは絶対に避けられないことだ。

「今回の怪我也、気を抜いたら急変するかもしれないから気をつけな  
いと」

「そ、そうなの!？」

ネプテューヌの顔が真っ青になる。冗談で言っただつもりなんだが……いや、普段苦勞をかけられてるんだ。たまにはビビらせてやるか

「ああ、あいつの武器は俺を殺すためだけに作られた特別製だからな、  
何が仕込まれてるかわからん」

そんなことはない、そもそもアイリスが使っている剣は俺が作った  
ものなのだから。

「だから……容体が急変するかもしれん、いざ体験すると……不安なものだな」

「そ、そんなことないわよ、心配し過ぎなのよ……」

そう言いつつネプテューヌも不安なようだ。少し心が痛むが、俺  
だっただまには仕返ししてもいいだろう? 普段苦勞をかけられてる  
んだからイストワールの分まで仕返しするか。

「わ、私売店でジャンプ買ってくるけど、何かいる?」

「そうだな……じゃあプリンを買って来てくれるか」

「プリンね、分かったわ」

そう言っつてネプテューヌは女神化したまま売店へと行った。あの



まま行ったら大騒ぎになる気がするが大丈夫なのだろうか

「買って来たわよ」

いや、扉閉じた数秒後に帰ってきたんだが？幾ら何でも早すぎないか？

「ネプテューヌ、ここは何階だ？」

「4階よ」

「売店は？」

「1階よ」

じゃあどう考えてもこの速さはおかしいだろう。10秒もたつてないのにどうやって帰ってきたんだ。全力疾走したみたいに息を切らしてるが走ってないだろ絶対。

……………もう一度試してみるか？

「すまんネプテューヌ、甘いものなら食べられるかと思ったんだがすこしムカムカしてな……………何かもつとドロドロな」

「ヨーグルトでしょ!？」

だから早いんだよ。まだ言い終わってもないのにどうやって買ってきたんだ。しかも速すぎて発酵してないからただの牛乳だろうが。悟空がクリリン死ぬ前にスーパーサイヤ人に覚醒してフリーザをボロボロにしてきたレベルの速さだぞ。

「すまんネプテューヌ、速いのは嬉しいが速すぎてまだ発酵してないんだが……………」

「あ、あら……………どうりで内容がわからないと思っただらこれ来週号だったわ」

早過ぎて未来の売店にでも行ってきたのかお前は。

「ならお前が飲むといい、牛乳昔から好きだろ？」

「あ、大丈夫よ、もう飲んだから」

早い以前にムカつくんだが？結局俺はゴミを渡されただけだろうが。怪我人にゴミを渡す女神がどこにいるこの馬鹿。

ふむ……………ゴミを渡されたと思うと先ほどまでの愛おしい感情がどこかにフルスロットルで消え去った。

「ネプテューヌ」

「なにかしら?」

「帰れ」

「なんでよ!?!」

俺はネプテューヌに背を向けて眠ろうとするが、納得出来ないのかネプテューヌは体を揺さぶる。仕方ない、どこか気晴らしに行くとするか

「動いちやダメよ、傷が開くでしょ」

「トイレだ」

「ダメ、ここでしなさい」

そう言つて得意げに尿瓶を取り出したネプテューヌの頭にお見舞いで持つてこられたであろう花瓶を叩きつけた。あまりに痛いのかその場でネプテューヌはのたうち回っている。こんな姿を国民に見られたらただでさえ少ないシェアがもつと下がるぞ

「何するのよ!」

「うるさい、黙れ変態」

「わ、私はトウカの為を思つて……………」

「息を荒くしてた奴に言われても説得力はない」

「やめて、そんな目で見ないでええええ!」

俺はネプテューヌを放つて外に出て行つた。大丈夫だ、足は治つてるから問題はない。ネプテューヌ?しばらくしたら帰るだろう。他の男ならいざ知らず、俺は女に排尿なんて見られたくない。いつからあいつは変態になったのだろうか……………今度から洗濯物を別にするか。いや、それはそれで怒り出すからやめておこう。



「はあ……………」

「トウカ!」

トウカが屋上で空を見上げていると、そこにネプギアとユニが走ってきた。トウカが目を覚ましたと連絡でも受けたのだろう。

「目を覚ましたのね」

「良かった……………」

「ああ、一応約束は守れただろう?」

無事というわけではないがなんとか帰ってこることができた事に  
トウカは苦笑する。

「右眼……大丈夫なの？」

「心配しなくていい、すぐ治る」

やはりみんな最初に目がつくのは右眼のことなのか、ネプテューヌ  
にも言われていた。

「それよりお前たちは大丈夫なのか？」

「私たちとお姉ちゃんはたちは大丈夫です。トウカが一番ひどい怪我  
だったんですよ!？」

「そうか……心配をかけたな」

トウカが2人の頭を撫でてやると少し涙目だが気持ちよさそうに  
していた。やはり子供だから撫でられるのは気持ちいいのだろう。  
トウカ自身、確か昔は撫でられるのが好きだったと覚えている。

「あの、お姉ちゃんは……」

「ネプテューヌは眠いと言って俺の病室で寝てる」

ちなみにこれは本当のことである。花瓶で殴られた後、ネプテュー  
ヌは拗ねてトウカの病室で眠ってしまった。あとでどうやって  
謝るかを考えているが、あまり思いつかない。

「ネプギア、お前はネプテューヌと違って変態にはならないでくれ  
……」

「何かあったんですか？」

ネプギアが苦笑しながら聞いてくるが……トウカ自身あまり聞  
かれたくない。

「さて、ちなみにお前たちを探して居たんだ」

「探してたって、何の用よ？」

「二人とも少しだけ目を閉じていてくれ」

そう言つて二人は目を閉じる。トウカはポケットから取り出した  
ものを2人の首にかけた。さっき少しだけ家に帰って取ってきたも  
のだ。

「もう開けてもいいぞ」

そう言つて二人は目を開け、胸元に違和感を感じたのか胸元を見

た。そこには

「女神化おめでどう、二人とも」

薄紫色の懐中時計と黒い懐中時計が掛けられていた。そう、これは前に女神化したご褒美でトウカが二人にやると言っていた懐中時計だ。

「これからも頑張れよ」

「うう、トウカあああああ！」

「痛いっ！飛びつくような痛いだろう！」

ようやく認められた事が嬉しいのか、二人は泣き出してトウカに飛びついてしまった。しかし、傷が治りきってないトウカには身体中に激痛が走る。

（全く、女神候補生として本当に大変なのはこれからだというのに……まあ、今は泣かせておいてやろう）

そう思いながら、しばらくトウカは2人の頭を撫でて居た。



俺が部屋に帰ると、ネプテューヌは起きていたが愚痴を一人で呟いていた。どうやら朝俺が花瓶で殴ったことで不貞腐れてるようだ。

「トウカのバーカ」

俺が帰って来ているという事は気づいていないようだ。ちなみにバカは昔から言われる。あまり学校の成績は悪くなかったんだがな。

「トウカの鈍感」

鈍感も良く言われるな……勘は鋭い方だと思っているんだが。

「トウカのホモ」

ホモは言われたことない。

「私に変身してゆるわくしても全然何にも思わないってどういうこと？一緒にお風呂入ってるのに一回も勃たないとかさあ、ありえないよ。私変身後はかなりのアダルトボディなんだから普通の男の人なら我慢出来ずに押し倒すよ、心のままに犯すよ？前戯もなしで即本番だよっ！」

こいつは………シリアスが終わってようやく日常編に入った

と思つたら下ネタのオンパレードじゃないか。いい加減にしろ。

「そもそも最近全然構つてくれないし……………元々トウカは私だけ構つてくれたのに……………ネプギアは仕方ないとして、最近じゃ他の女の子にも優しくして……………ああもう！なんか思い出したらムカついてきた！トウカのバーカ！女つたらし！」

女たらしも昔からよく言われるな……………女の子に好かれたことなんか一度もないのだが……………

「トウカのアホオオオ！」

「いい加減にしろ」

俺がそう言った瞬間ビクツと体を震わせる。やはり俺がいる事は気づいていなかったようだ。

「えつと……………いつから居たの？」

「私がゆるくしても全然何も思わないってどういうこと？ずっとお風呂に入ってるのに一回も「わあああああああああああ！」の所からだ」

顔を真っ赤にしてベッドの上のたうち回っている。昔から辺りを確認しろと何度も昔から言つてたのに。

「なんで帰つて来たら言わないの!?盗み聞きなんて犯罪なんだからね！」

「すまん、昔の癖でな」

そう言つて俺はネプテューヌをゆっくりと降ろしてベッドに入る。少し早い今日は眠ろう。明日はアイリスにでも会いに行くか、この病院に入院してるのだろうからな。

「それよりも帰らないのか？それとも一緒に寝たいのか？」

「違うもん、トウカとなんて寝たくないもん。かわいいネプギアと寝るもん」

そう言つて膨れながらそっぽを向く。こんな反応をしているときは強がつてる時だ。全く……………

「ふう、しかし病院で一人で寝るとするのは寂しいな、誰でもいいから一緒に寝て欲しいものだ」

俺はネプテューヌに背を向けて眠り始める。

「しようがないなあ〜トウカは、仕方ないから私が一緒に寝てあげる！」

そう言っつてネプテューヌはベッドの中に入ってきた。

「怒ってたんじゃないのか？」

「ふふん、私はノワールみたいにいっまでも引きずらないんだよお〜」  
「そうか」

調子のいい奴め、そう思いながら俺はネプテューヌがいる方へ寝返りを打ち、体をギュツと抱き寄せると、ネプテューヌの体温が直接伝わってくる。

「トウカはあつたかいね……………」

「お前ほどじゃないさ」

この陽だまりのような暖かさに、ずっと触れていたと思うようになったのはいつからだろうか。

「おやすみトウカ」

「ああ、おやすみ」

そう言っつて、俺はネプテューヌと共に眠りについた。

## 発砲、そして加入

「あら、大罪人に女神秘書と女神様、それから女神候補生が何の用かしら？」

俺とネプテューヌ、そしてネプギアはアイリスの病室に来ていた。アイリスは一応女神誘拐に加担した犯罪者、しかもかなりの凶悪犯ということで通常病棟ではない場所にいる。ちなみに、ネプテューヌとネプギアは俺の前に出てアイリスを睨んでいた。

「安心しなさい、もう殺そうなんて思っていないわ」

「そんなの信用できないよ」

「私も、あなたは信用できません」

「嫌われたものねえ……………」

そう言っただけでベッドの中で窓を見ながらタバコに火をつける。

「禁煙だぞ」

「あなたにしか迷惑かかってないからいいでしょ」

俺に迷惑はかけてもいいのか。というよりネプテューヌ達にも煙がかかるとは。だろう。

「体の調子はどうか？」

「回復力だけはあなたより上よ」

俺は眼以外は全て完治しているが、アイリスはもう全ての傷が完治しているようだ。あとは検査待ちというところだろう。

「まあ、一生牢屋の中で過ごすことになりそうだけど」

「お前なら簡単に脱獄できるだろう」

「まあね」

しかし、こいつを捕らえる気はない。せつかくもう一度会えたのだから、もう出来れば遠く離れたくはない。

「二人とも、少しの間だけ二人にさせてくれないか？」

「なっ、なんで!?!そんなのダメだよ!」

「そうですよ!危険過ぎます!」

やはり聞いてはくれないようだ。どうやって説得しようか

「少し大事な話があるんだ」

「大事な話なら私も聞けばいいじゃん！なんで私たちは聞いちゃダメなの!?意味わかんないよ！」

「私たちだってトウカさんの力になりたいんです！だから、だから居させてください！」

そして突如、大きな発砲音が聞こえてネプテューヌの頬を掠める。何をしてるんだこいつは……………

「出て行かないならここで人生から永久退場しなさい」

アイリスの手には大口径の拳銃が握られている。恐らく今能力で取り出したのだろうが……………病院で、しかも子供にそれをぶつ放すか？

「あんた達も女神なら好きな男の頼みごとくらい聞いてあげなさい、そんなことも出来ないような恋心なら……………今ここで終わらせてあげるわ」

昔から力づくでことを進めようとするんだから困ったものだこいつには……………しかも恋心じゃないだろう

「トウカを信じてほんの少し部屋から出て行くか……………この世から永久に出て行くか選びなさい、お姉さん気が短いから3秒以内に決めなかつたらドタマぶち抜くわよ」

1秒だけ数えて3発の弾丸をネプテューヌに向けて発砲し、なんとかネプテューヌはそれを避けた。

「2と3が数えられてないよお姉さん!？」

「知らないわねそんな数字……………女は1さえ覚えてれば生きていけるのよ」

自分が言ってることがめちやくちやだと気づかないのかこいつは。「ギアちゃんはどうするの?出て行くのか死ぬのかはつきりしなさい、ハキハキしなさい」

完全に怯えてしまっているが、その瞳には一つの決意があるように思える。やめとけ、怖がるなど言ったがこれは怖がってもいいんだ。

「わ、私は残ります！絶対出て行きませんかー！」

「だめねえギアちゃん、あなたも退場」

躊躇なく放たれた弾丸をなんとか避けたネプギア、その目はもはや



泣き出す寸前だ。かなり怖いのだろう。

「二人とも、大丈夫だから少しだけ席を外してくれ」

「でもー」

「頼む」

俺は二人に頭を下げた。それが予想外だったのか、二人は目を見開いて驚いていたが、しばらくして静かに二人で出て行った。

「甘いわねえ、ああいう子達にはコルト・パイソンの弾丸を叩き込んだら早いのに」

「もう叩き込んだ後だろうが……」

本当に昔から実力行使でことを進めようとする、本当に昔から変わらないな。

「記憶にないわね」

「そうか、バカだから仕方ないな、すまん」

「死ね」

「お前が死ね、そのまま腐れ」

そう言う暴言も俺たちにとっては挨拶の様なものだ。はあ、全く………どれほど時間が経とうと俺たちの関係は変わらないな。

「………繁栄したわね、プラネテューヌも」

「昔とは全然違うだろう？ ゆっくりと発展させて行っただんだ」

今思えば………気の遠くなるほどの時間を生きてきたんだな。俺はネプテューヌやイストワールが居てくれたが、アイリスはずっと一人で………誰一人知り合いがない中で生きて来たのだ。それは俺よりずっと辛く、寂しいものだっただろう。

「ちなみに私は寂しい、とか、そんなことは思ったことないわ」

「そう………なのか？」

「ええ、私は私でそれなりの人生を送ってきたわ」

そうは言っても、その目は少し愁いを纏っていた。無理をして嘘をついているのだろうか。

「あの子は？」

「相変わらずだな、何も変わらない」

教会の地下深くで眠る彼女は、いったいどんな夢を見ているのだろ

うか。

「だが、一つだけ気になる事がある」

「なに？」

「あいつの記録、そして記憶が完全に消えている」

その言葉を聞いた瞬間、アイリスは信じられないものを聞いた様に驚きを隠せない。

「どういう事よ」

「俺たち以外、あいつを覚えている人間も、記録もすべて消えてしまっているということだ」

「そんな……………どうして!？」

「分からん、ある日突然消えてしまった」

突如として消えたため、俺も何が起きたか全く分からなかった。イストワールさえ忘れてしまったのだ、驚くなど言う方が無理だ。

「俺は……………あいつが生き証すら守ることが出来なかった」

もう、泣かないと決めていたのに、こいつの前だからか……………涙が止まらない。俺は肝心な時に何も守れない。

「あなたのせいじゃないでしょう？」

いつの間にか、アイリス……………プルルートはベッドから降りて俺を抱きしめていた。

「なぜ消えたのかは分からないけど、私たちは覚えてるんだから……………だから、今はそれでいいじゃない」

「でも……………俺は……………」

「私だつて一緒よ、何も出来なかった」

プルルートの声は、いつもと違って少し震えていた。

「辛かったわよね、苦しかったわよね。あなたに一番……………辛い役割を押し付けちゃったわよね……………」

今、プルルートの顔は見えないが……………きつと涙を流しているのだろう。

「その咎は、私も背負わなきゃいけないのに……………あなた一人に全部背負わせちゃったわね……………」

違うんだ、俺が勝手に背負ったんだ。だから、だからお前は何も悪

くないんだ。

「ごめんなさい……………ごめんね……………カイナ」

カイナ、何年振りだろうか、その名前で呼ばれるのは。昔、自分と決別したくて捨てた名前……………俺という存在を、ずっと見てくれていたあいつが呼んでた名前……………何故、名前を呼ばれてこんな暖かくなるのだろうか。

「これからはもう、一人にしないから、だからもう……………大丈夫よ。悲しみも苦しみも全部……………私が一緒に背負っていくから」

「ああ……………ありがとう」

俺はその温もりを、ゆつくりと抱きしめた。そうだったな……………俺の本当の名前は……………カイナだったな。トウカという名前が心地よくて、忘れてしまっていた。

でも……………今だけはカイナで居よう。

女神秘書のトウカではなく、プルルートの幼馴染のカイナとして

……………

◆◆

「えーと?これどういう状況?」

「嫌か?」

「嫌じゃないけど……………うーん?」

今トウカは自分の病室でしよげていたネプテューヌを抱き上げてアイリスの病室へと連れてきていた。ちなみに、今もトウカはネプテューヌをぬいぐるみのように抱きしめている。

「ふう、なんだか落ち着くな」

「ふっふっふー、私は主人公だからねえ、みんなを癒すのは私の役目なんだよ!」

「普段はイライラするだけだな」

「ねぷふう!?そんな風に思ってたの!?!」

「冗談だ」

そう言ってトウカは膨れるネプテューヌの頭を撫でる。こうしてみれば仲の良い兄妹のように見え、誰も女神と女神秘書とは思わないだろう。

「でもさ、あれは大丈夫なの？」

ちなみに、ネプギアはというと。

「いやー！たーすーけーて！」

「もうっ、逃げないでえギアちゃん」

アイリスに抱きしめられ必死に逃げようとしているが、力が根本的に違うためもがくことしかできない。

「どうして私はアイリスさんなんですかあー！」

「あら、私じゃ嫌だっというのお？」

「さつき発砲された人に抱きしめられるのは誰だっ嫌です！」

「ギアちゃん？女っっていうのは昔のことをうじうじ悩んじゃいい女になれないわよ？」

「昔っっていうかつい数時間前の話なんですけどおー！」

完全に遊ばれ、ネプギアではなくネプギャー状態の彼女をさらにアイリスは強く抱きしめる。

「仲良くしろ、これから一緒に働くんだからな」

「はい？」

ネプテューヌとネプギアは完全にトウカが何を言っているかわからない。

「どゆこと？」

「司法取引でな、自由を約束する代わりに女神直属エージェントとして働くことになった」

「いや何勝手に決めてるの!? プラネテューヌの最高権力者私だよ!」

「ダメなのか？」

「ダメに決まって」

ガチャン、とネプテューヌの額に何か硬いものが当たる。アイリス愛用のコルトパイソンだ。

「なあにネプちゃん？お姉さんよく聞こえなかったア、もう一回言ってくれないかしらア？」

「これからよろしくー……………」

そんな訳で、アイリスがパーティ（強制）加入した。

反抗期が来ない？

「アイリス、最近の子は反抗期が来ないのだろうか？」

「なんの話よ」

現在、トウカはアイリスにある相談をするために自宅に呼び出していた。

「いや、ネプテューヌがオレのことを煙たがらなくなてな……」

「煙たがられたい貴方もおかしいけど」

普通、年頃の少女は父親を煙たがるものだろう。しかし、ネプテューヌは育ての親と変わらないトウカの事を一切煙たがらないことにトウカは悩んでいる。

「まあネプテューヌがお前のように非行に走らず育ってくれたというのは嬉しいんだが、少し俺離れをしてほしいんだ」

「非行には走ってないわ、軍に居たらそういう事を自然に覚えちゃうのよ」

そうやってアイリスはタバコに火をつけた。

「教会の中ではずっと俺にべったりでな……酷い時は泊まっていたと言われて一緒に寝ることになるんだ」

「まあいいんじゃないの？あの子愛情に飢えてそうだし、お風呂には入ってないんでしよう？」

「……………」

「え？入ってるの？」

それはさすがに無いだろうと思っていたアイリスは少し引いている。それもそうだろう、ネプテューヌは父親や兄と未だに風呂に入っているようなものだから。

「お前は12歳の頃にはもう一緒に入ってなかっただろう？」

「うーん、そうだったかしら……昔は恥ずかしかったけど、今は恥ずかしくはないわね。だって貴方のこと抱いたし」

「やめる恥ずかしい」

「あの時はごめんなさいねえ、お酒も入ってたし、久しぶりに会ったから舞い上がっちゃって」

「まさか初めてをお前で迎えるとは思わなかった」

「そう？ 私は貴方が良かったから別に満足したけど。すごく可愛かったわよあの時の貴方」

トウカがアイリスを抱いていたのではない、アイリスがトウカを抱いていたのだ。しかも殆ど逆強姦の様なものだったらしい。

「まあその後やってた時はお互いの意思だったからいいでしょう？ 貴方も気持ち良くなってたんだから」

「だ、だから……その話はやめろ」

「顔赤くして、可愛いわね」

ちなみにアイリスがトウカを抱いたのは一回二回の話ではない。

「そんな話してたら久しぶりに犯りたくなっちゃったわ、あなたも久しぶりに気持ちよくなりたいたいでしょう？」

「バカを言うな、それと話がだんだんずれてるから戻すぞ」

そう言っただけでトウカは顔を少し赤くしながら強引に話を戻した。

「だから、これからはもう少し俺から自立してほしいんだ。どうすればいいだろうか」

「そうねえ、貴方精神的な面で甘いから……一回強く言ってみたら？」

「うーん、強く言っただけで関係がギクシヤクしても嫌なんだ」

「じゃあ我慢しなさいよ」

ギクシヤクせず、少しずついいからトウカを離れていってほしいという想いは少し甘いのかもれない。

「もうあなた達付き合っちゃえばいいんじゃない？」

「なんでそうなる？」

「だってネプちゃんあなたの事絶対好きよ？」

「俺も好きだぞ？」

「だからあ……もう、なんて言えばいいのかしら」

アイリスは悩んだ末、こいつには直球で言わなければわからないと思っただけ率直に言った。

「ネプちゃんは貴方の恋人になりたいと思ってるのよ」

「……………なるほど」

これでさすがに分かっただろう、と思ったアイリスは「やっぱり少しずつ離れさせる必要があるということか」「はい?」

あんまり伝わっていないようだ。

「だから、よく小さい子が父親の嫁になりたいと言う事と同じ現象がネプテューヌに起こってると言いたいんだろう?」

「えっ、いや……………」

「なるほどそう言うことか……………」

（そういう事じゃねえよ! そうだった、こいつ頭はいいけど超が付くほどのド天然だった! 根本的などころで頭ゆるかった!）

トウカは一つ謎が解けたように朗らかな顔をしているが、アイリスは全く意味が伝わっていないため頭を抱える。

（しまったあ、もつと直球にすればよかった…………）

「はあ……………いつになったらトウカキモいとか、トウカと洗濯物を別にしてとか言ってくれるんだろうか」

「何に憧れてるのよあなたは」

ちなみにトウカは洗濯物を家ではなく教会で洗濯させられている。

ネプテューヌがそう言って聞かないからである。

「そうだ、あと一つ悩みがあるんだ」

「なによもう……………」

「執務室の鍵をよく掛け忘れるんだ」

「そんなの注意してればいいじゃない」

もう心底どうでもいい、と言わんばかりに話を聞くアイリスをよそにトウカは話を続けていく。

「しかもそれが絶対に部屋で着替えている時なんだ」

「それで? 誰かが来て着替え中を見られたってこと?」

「ああ、よくネプギアが来てしまうんだ。それから絶対にフリーズして10秒間位動かなくなってしまう」

「よくってことは何回も?」

「週に3回はある」

（それギアちゃんワザとやってるんじゃない?）

こういう時の女の勘は鋭い。

「ねえトウカ、部屋の鍵って電子ロック？」

「よく分かったな」

「それ普通の鍵に変えなさい」

「わかった……？」

これでトウカの扉の鍵は開かなくなるだろう。彼女がNギアのハッキングに頼っている限りは

「そうだな……とりあえず今日は洗濯物を別にしてみる」

「そう……もういいんじゃないそれで」

アイリスは心底疲れ切ってしまった。

「ありがとうアイリス、早速行ってくる」

「頑張ってね」

「ふっ、任せろ」

その得意げな顔は昔、戦場に出て行く前の顔を彷彿とさせたため、アイリスは少し涙が出て来そうになった。

ちなみにその日、ネプテューヌにガチ泣きされたことは言うまでも



ない。

## ノワール盗撮編

### 教会の迷子

「ねぶてぬー！遊ぼー！」

「だーかーら、何回も言ってるでしょピー子、ねぶてぬじゃなくてネプテューヌ」

教会に問題児が一人増えてしまった。名前はピーシエ、三週間前にふらりと教会に現れた子どもだ。なのだが……俺とアイリスはこの子の名前だけ知っている。

「でもこんな悪ガキじゃなかったし……同姓同名の別人かしら？」  
「だがあいつの面影があるぞ？」

ピーシエ、その名前の少女は俺たちの知り合いにもいる。しかしこんな子供ではないのだ。

「じゃああの子の娘とか子孫なんじゃないの？」

「……………あいつあの後結婚してたのか？」

「男からしたら優良物件よ、料理できるしスタイルいいし私より胸大きいし、あげく美人だし」

アイリスは面白くなさそうにタバコに火をつけた。だから禁煙だ  
と何回言えばわかるんだこいつは……

「それが気に入らないからお前はパシリに使ってたのか」

「やあね、適材適所ってやつよ。あの子に買いに行かせたほうが早  
いんだもの、ていうか逆にあの子から速さを取ったら何が残るの？」

「パワーも相当だろう」

確か相当な腕力の持ち主のはずだ。

「純粋なパワーならあなたの方が強いじゃない、あの子からスピード  
を取ったらツツコミしか残らないわよ」

そう言われてみればあいつはアイリスのやることに良くツツコミ  
を入れていた思い出がある。バカだが常識人には変わりなかったな。

「懐かしいわねえ、良くあの子を椅子にして酒飲んだものだわ」

「お前と居るときあいつの人権は無いに等しいからな」

まるで女王と奴隸だ。かわいそうに……………

「コラアア！ピー子！」

しかしネプテューヌも小さい子供に同じレベルで喧嘩するとは情けないな……………確かにゲーム機のコンセンートを引き千切るピーシエも悪いが……………

「ネプちゃんの怒りはもつともじゃないの？私なら即ドタマぶち抜いてるわ」

「アイリスさんバイオレンスですう……………」

コンパが怯えるからそういうことを言うんじゃない。

「でもイストワール様、まだご両親の方とは連絡が付かないんですか？」

「はい……………」

「案外無責任な親が捨てた捨て子なんじゃない？」

俺はアイリスのドタマを拳銃で撃ち抜いた後話を続ける。

「まあしばらくは教会で預かるしかないだろう」

「あのお先生？アイリスさん撃つたけど大丈夫なの？」

「トウカさんもバイオレンスですう……………」

「もう、お掃除が大変ですから流血沙汰は控えるようにと昔から言ってるでしょう？」

「いや、昔から流血沙汰が頻繁に起こってたんですか？」

アイエフが少し引き気味に聞いてくる。昔はバイオレンスな時代だったんだよ。

「捕まえたあ！」

「おつとネプテューヌ選手ついにピーシエ選手を捉えたあ」

アイリスが復活して急に実況し始めた。

「びーぱーんち！」

「くはあ！」

「KOピーシエ選手の勝利」

「適当に実況するくらいならするな」

そうして俺たちはボールが来ているためボールの元へと向かった。



「アイリス、これが百合というやつか」

「そうね」

「リリイランクが爆上げですう……………」

「ボールとネプギアがイチャイチャ?してた。」

「あらトウカさん、トウカさんもちちにいらつしやつて」

「ああ、トウカ……………トウカもこっちに来てください」

「目が完全にトロンとしている。なぜ俺があの中に入らなきやいけないんだ。」

「行つてくればトウカ、正直に白状しなさいよ巨乳好きでロリコンですって」

俺はショットガンでアイリスの頭を撃ち抜いた。

「こらあボール!人の妹に何してくれとんじやい!」

口調を徹底するべきだと思うんだが。

「いいじゃありませんの、たまの親睦を深めるくらい」

「このところ毎日じゃん!」

まあそれはともかく、ただネプギアとイチャイチャしに来たというわけではないだろう。ボールならありえる話だが

「今回はあなたを誘いに来たんですよ」

「ねぶう?私も攻略対象、もしかして姉妹丼?そんなあ恥ずかしい  
〜」

「キモいわよネプちゃん」

「ああ、キモいな」

「キモいは言い過ぎだよ二人とも!流石に今のは怒るよ!?!」

「いや、だつてキモいし……………」

「こんな時だけ息びつたり!?!」

終いにはコンパに泣きついていた。

「トウカ最近酷いよ!洗濯物も別で洗うし!なんなのさ反抗期!?親兄弟と洗濯物を別にして欲しいってお年頃なの!?!」

「最近ネプちゃんがキモいからじゃないのお?そういえばギアちゃんもなにか変わった事があるんじゃない?」

「(ギクツ)な、なんのことですかあ?」

「例えばトウカの執務室の鍵がアナログに変わったとか」

冷や汗が止まらないネプギア、一体どうしたのだろうか？俺の部屋とネプギアは関係ないだろう。

「貴方達ブランから聞いてませんか？」

ベールから聞いた話によると、ラストেশションのサーバーから人工衛星にハッキングされたらしい。確かゲームギョウ界トップのセキュリティとか言ってたんだが……それがハッキングされるとは相当だな。

「そうか、なら俺たちも行こう」

そういう訳で俺たちはラストেশションへと向かった。



「バカだなお前は……」

空を飛行中、ネプテューヌはピーシエが暴れたため変身が解けてしまい墜落した。これくらいでは死なないと思っただが、かなり痛そう。下にいたノワールは完全なる巻き添いだな。

「すまんノワール、怪我は大丈夫か？」

「大丈夫よ……心配してくれてありがとう」

最後の方はよく聞こえなかったが……まあいいか。大丈夫というなら大丈夫なのだろう

「あつ、ピー子ご挨拶は？」

ネプテューヌがそう言うのとネプギアから離れてピーシエば自己紹介をした。

「ピーだよ」

「ネプテューヌ、こんな大きい子が居たなんて」

「そうそう、私とトウカの愛の結晶あいた！」

「教会で預かってる迷子だ」

バカなことを言おうとしたネプテューヌを黙らせて訂正した。何が愛の結晶だ……そんなことはこれから先もない。

「ネプちゃん、そういうのはトウカと貫通してからにきなさい」

「……………」

「もう、そうやって銃を向けないで頂戴、機嫌悪いの？カリカリしてる

の？ちやんと糖分摂りなさい」

今日だけで俺は何回アイリスの頭を吹っ飛ばしてるのだろうか。まあいい、もう一回ふきとばそう。

「はあ、もういいわ、場所を変えましょう」

「トウカ行ってらっしゃい」

「いや、ここはお前が行け、俺はネプギアたちを見てないといけな  
これが役割分担というやつだ。こいつもそろそろ女神との信頼関  
係を確立しておいたほうが今後のためだろう。

「はあ？やりたくないからって私に押し付けしないで大人になりなさい  
！私は女神の子守なんて絶対にいやよ！」

「お前が大人になれ！」

大人というものはやりたくない仕事をしなければならない時があ  
るんだ。しかもやりたくないわけじゃない。

「仕方ない、この手は使いたくなかったんだが……」

「何よ？」

「給料を下げるしかないな……」

「汚っ！あなたいつの間に権力に頼る大人になったの!？」

人は変わる生き物なんだ。仕方ないだろう。

「くう………良いわよやってやるわよ。その代わり女神たちにあな  
たの初体験言いふらしてやるから！」

「やめろおおおおおおお！」

「バーカー！バーカー！」

そう言つてエレベーターで行ってしまった。

……………絶対減給してやる。

(子供の喧嘩ね)

(トウカの初体験って………どんなの何だろう?)

ユニはその姿に呆れ、ネプギアは全然違うことに興味を示していた  
ことにトウカは全く気づいていない。

アイリスは犯人の場所を突き止め、トウカはプラネテューヌの未来を心配する。

「それにしてもラスティションのセキュリティが破られるなんてねえ」

私は現在ばか（トウカ）に言われて女神に付き添っている。

「あはははははははははは！そうだよ、ノワール前に言ってたじゃん。ラスティションのセキュリティは世界一いいって！それなのに破られるなんてあはははははは！」

ネプちゃんは心底おかしいのか笑い続けているけど、ノワールちゃんのご機嫌斜めって感じね。まあ自分の自慢であるセキュリティが破られたんだから仕方ないといえれば仕方ないけれど。とりあえず犯人を特定するほかないわね、これを使って人工衛星とかを悪用されたら面倒になりそうだし

「まあ起こっちゃったのは仕方ないじゃない」

「大事なのは再発防止……」

「こんな事をした不届き者を締め上げて何が目的か白状させることよね」

なかなか過激じゃない、お姉さんそういうの嫌いじゃないわ。

「でも勢いだけじゃダメよ、ハッカーは狡猾だからこつちの動きを察知したら逃げる可能性があるから慎重に行くわよ」

「おお、流石は腐ってもトウカの幼馴染……状況判断はお手の物だね！」

「腐ってるのはベールちゃんでしょ」

「否定はしませんわ」

そこはちよつと否定して欲しかったんだけど……まあ人の性癖をとやかく言うつもりはないから流しときましょ。

「なんだかアイリスって適当なイメージがあったけど、やるときはやるのね」

「当たり前じゃない、女っていうのは殺らなきやいけない時があるの





「オリジナルキャラきたああああああああ!!」

またこの子は電波を受信して……………トウカは一体どういう風にこの子を育てたのよ。

「初めまして、ツイーゲですビル、よろしくお願いしますビル」

ものすごい語尾ね、この子地味だと思っただらなかなかなやるじやない……………

「今時ありえない語尾でキャラつけ!?このキャラ絶対失敗する!!」

「ネプテューヌ様、ノワール様、ブラン様ですね、よろしくお願いしますビル、あなたは……………」

「殺せんせーです」

「嘘つけ!!」

そう言えば殺せんせー死んじやったのよね……………最近で一番悲しかったことってそれだわ。女らしくない?何を言ってるのよ、男でも女でもジャンプはバイブルでしょうが、人生のお手本でしょうが

「ちなみに私のキャラはご安心くださいビル、今回だけの使い捨てのキャラですのでビル」

幾ら何でも可哀想すぎるでしょそれ……………

「それで?貴女なら犯人がわかるの?」

「お任せくださいビル」

そんなこと知らないわと言わんばかりにノワールちゃんは事を行かせて行って、ツイーゲちゃんはノートパソコンを流れるようにセッティングして作業を開始した。物凄い真剣な表情ね……………これつきり出てこないから当然と言えば当然だけど。

「まあその間休憩しましょ」

私はパズ○ラを起動した。それよりあのバカ(トウカ)はちゃんと妹たちの面倒を見てるのかしら。



あのバカ(アイリス)はちゃんとネプテューヌたちのことを見ているのだろうか。あいつはやる時はやる奴だと信じているが……………

「あの、トウカ……………ネプギア、ちよつといい?」

ユニが少し暗い顔で俺たちに話しかけてきた。なにか悩み事でも

あるのだろうか？

「ちよつと相談があるんだけど……」

「ああ、構わないぞ」

ユニが相談事というのはかなり珍しい、頼ってくれるのは嬉しいんだが、それだけ深刻なことなのだろう。しかし、そう思ったのは束の間だった。

「ノワールの様子がおかしい？」

話を聞いてみると、ノワールが夜執務室で何かをしているというのだ。なんだそんなことか……ノワールだつて一人になりたい時もあるだろう。そんなに気にすることでもないと思うが

「お仕事じゃないの？」

「仕事なら部屋に鍵を掛けたりしないわ、それに……たまに変な笑い声を上げたり……誰かと話してるような会話も聞こえてくるし……」

変な笑い声ってなんだ………仕事のし過ぎで幻覚が見えているとかじゃないだろうか。

「お姉ちゃん夜な夜な何やってるのかな……」

ユニは心配そうに俯いてしまった。ふむ、確かに一人でいるのに笑い声を上げるといふのは心配だな。少し調べてみるか。

「まあ少し調べてみるでしょう」

「調べるってどうやって？」

「あつ！だつたら良いものがあるよ！ちようど持ってきてきたんだ」

そう言つてネプギアはポケットに手をつ込み何かを取り出した。これは……小型カメラか？いや、そうでないと思いたいが………なんてそんな物を丁度持っているか小一時間ほど問いただしたい。帰つたら聞いてみるか

「これって？」

「映像を遠隔地に無線で送る目立たない大きさの機械だよ！」

「要するに隠しカメラか」

当たつて欲しくない予想が当たってしまった。まずい、機械オタクだということは知っていたがこれはまずい。一歩間違えたら犯罪だぞ。

「こんなに小さいのにHD映像をリアルタイム圧縮するんですよ？凄いですよね！」

「凄いのはそんな物を常時携帯しているお前の頭だ」

「なんでこうなったんだ。やはり育て方を間違えてしまったのだろうか……そんな物の説明を生き生きとするんじゃない。目も輝かせるな。」

「ちなみにお前はそれを使って何をするつもりだったんだ？」

「それは………内緒です」

「後でそれは没収だ」

「そんなー！」

女神の妹を盗撮犯にするわけにはいかん。しかし、ネプギアに一回だけ使わせて欲しいと懇願されたため仕方なく執務室に試しに設置してみた。設置する時もワクワクしながら設置していたため少しネプギアの将来が心配になってしまったのは言うまでもないだろう。

「わあーちゃんと映ったー！」

「こんなにくつきり映るのね」

「ああ、（無駄に）HDだからな」

もう、俺がネプギアに施せることは何もないのかもしれないな………もうノワールの部屋に設置しても何も言わん。好きにしてくれ………

「どうしたのユニちゃん？」

「………なんだかすごい悪いことしてる気分になってきちゃった」

罪悪感を感じているのかユニはまともでいてくれたみたいだ。それだけで俺は嬉しい………本当に嬉しい。

「ユニ」

「なによ？」

「お前はそのままできてくれ」

「??？」

「あれ？なんだかトウカにもものすごく残念な物を見るような視線が送られてきたんですけど………」

すまんイストワール、プラネテューヌはもうダメかもしれない。

「ねえ、やっぱりこれ外してくれないかしら？」

「うーん…そ、そうだね、さすがにそう言われると……」

まだプラネテューヌは滅びないみたいだ。間一髪なんとか持ち直したぞイストワール………

「ねえトウカ、あんたさつきから険しい顔してるけど大丈夫？」

「大丈夫だ、プラネテューヌはまだギリギリ滅びない」

「何言ってるのよ………」

ユニが疑惑の眼差しを向けてくるがそんなことは今はどうでもいい、いや、良くはないんだが……ネプギアのタブレットに映ってるカメラの映像がおかしい。カメラの画面が勝手に切り替わってしまう、一つしかカメラを置いていないからそんなことはないはずなんだが………いや、そういうことか。

「どうやら本当の盗撮犯がいるらしい」

俺はカメラの映像から位置を逆算し、隠しカメラを引きずり出した。

「いよいよきな臭くなってきたな……」

また面倒なことにならないければいいんだが。いや、望むべくもないな。

グラタンじゃないクラたんよ

ノワールの執務室に盗撮犯がいると判明した数時間後、俺たちはネプギアが持っていた電波逆探知を頼りにハッカーの場所を探していた。しかしネプギアはよくそんなものを持ち歩いていたな……軍の特殊部隊が持っているような装備だぞ

「それで？場所は分かったか？」

「この辺りのはずなんですけど……」

ちなみにラム達は俺たちの後ろで歩いている。ユニのペットの……名前はなんだったか忘れたがそれも一応付いてきている。

「もうムカつく!!お姉ちゃんを隠し撮りするようなバカはこのあたしがギツタギタのめつためたにしてやるわ!」

「戦争じゃないんだ、盗撮なんて卑劣だと思わないかネプギア？」

「そうですね……」

できればこつちを向いて言っただけ欲しいなネプギア、誤魔化すのに口笛を吹く奴を俺は久しぶりに見たぞ。

「で？どの建物なのネプギア!？」

「えっと、この電波逆探知機は大体の位置しか……」

「よくそんなの持ってたわよね」

「これはいつも持ち歩いているよ？モバイル充電器と電波逆探知機は女子の必須アイテムでしょ?」

「どこの異世界の女子の常識よ」

モバイル充電器はわかるが電波逆探知機はおかしいだろう。本当にお前は戦争にでも行くつもりか。

「まあとにかくしらみ潰しに探していくしかないな」

「トウカ、あんた電波を辿って犯人見つけられないの?」

「俺には無理だ、アイリスなら出来るかもしれないがな」

アイリスは雷をよく使うためハッキングもできるし、ひよっとすれば電波くらいなら辿れるかもしれない。あいつが本気になれば電気系統を麻痺させることなんて10秒あればできるだろう。

「とーかー!ぴいおなかすいた!」

突然ピーシエが俺の足にしがみつき駄々を捏ね始めた。仕方ない、いつも持ち歩いてるチョコバーをやるか。

「待ってる、今チョコバーを……」

ポケットの中を探るがない、落としたのか？そんなはずはない。内ポケットに入れてるはずだから絶対に落ちることなんてない………まさか

「あの女………」

「顔怖っ！」

あの飲んだくれが！俺のチョコバーをスツて行きやがったな！！人の痴態を言いふらすだけでは飽き足らず俺のチョコ<sup>生</sup>命<sup>線</sup>バーまで盗むとは!!!

「おなかすいたすいたすいた！ぴいおやつ食べたい！」

「すまん、もう少しだけ我慢してくれ。犯人を捕まえたら何か買ってやるから」

「やだやだやだやだやだ!!」

これは困ったな………ネプテユーンの1.5倍は酷いぞ………いや、本気で駄々をこねてるネプテユーンもそんなに変わらないか。仕方ない、瞬間移動して何か買ってくるか

「ピーシエってば子供ね！」

突然ユニのペットの………なにかと遊んでいたラムが得意げに言った。

「わたしはもうお姉さんだから、お腹が空いたって我慢できるわよ？」

「私も………お姉さん」

ラムとロムはピーシエとあまり変わらないのにしっかりしてるな。いや、自分達より下の子がいるからしっかりしてるのか。

「むう………」

それを聞いて対抗心を燃やしたのか頬を膨らましながら俺の足から離れた。

「ぴいもおねえさん！」

「じゃあ我慢できる？」

「我慢する………」

「なでなで……………」

……………この子たちも成長して行ってるんだな。妹は自分より下の子が居る時は姉よりもしつかりするのもかもしれない。

「三人とも偉いな」

あれは三人の頭を撫でてお礼を言った。俺やネプギア達ではどうにもできなかっただろうからな。2人が居て本当に助かった。

「あっ！クラたんが逃げた！」

俺が頭を撫でて力が緩くなったのかユニのグラタンがどこかに走り去っていった。なるほど、グラタンという名前だったのか。忘れないようにしないと。

「ピーシエちゃんが！」

「さすがのピーシエもグラタンには追いつけないだろう、見失わないように追いかけるぞ」

俺たちはピーシエとグラタンを追って走り出した。

「っていうかグラタンって何よ！あの子の名前はクラたんよ！聞いている!?聞きなさいよおおお!!」



やつはろおー、みんな大好きアイリスお姉さんよお。トウカのつまらなーい地の文は飽きただろうからここからは私のポケ100%地の文でお届けするわ。

「ねえ、ノワール？ 今更かもしれないけど、私たちが行かなくても警備兵に任せればよかったんじゃないの？」

状況を説明すると、ツイーゲちゃんが敵のアジトを突き止めたからラストイションからみんなが女神化して空飛んでそこに向かってるって状況よ。

「ふん、それじゃつまらないじゃない……………私にこんな恥をかかせた犯人は私の手でぐつちよんぐつちよんにしてやらないと気が済まないのよー！」

良いわねえ、そういうのお姉さん好みよノワールちゃん。やつぱ舐めたことした奴には徹底的なお仕置きが必要よね。警備兵なんか任せでも面白くないわ。

「そういうわけだから、頑張つてねネプちゃん、私に快適な空の旅を約束してちょうだい」

「くっ、こんなのインチキよ、無効試合よ」

ちなみに私はネプちゃんの上で立ちながら漫画を読んで飛行時間を過ごしてるわ。うーん、僕のヒーロアカデミアは良いわねえ、早くアニメが待ち遠しいわ。

「まあ負けてしまった貴女の責任ですわ。これに懲りたら彼女と勝負事はしないことですね」

数時間前、私はネプちゃんに瞬間移動で犯人の所まで連れて行つてつて言われたんだけど、私は面倒だから女神化して上に乗っけてつて言ったの。双方とも譲らないからあっち向いてホイで決着をつけたわけ

「私の目を指で突き刺すなんて」

「あらネプちゃん人聞きの悪いこと言わないで、刺さつたのよ、事故よ事故」

私がじゃんけんを買つて、指を出したら勝手にネプちゃんの目に刺さつちやつただけよ。それで悶えたネプちゃんが上を向いたから私は指を上に向けただけ。

「そもそも相手の目を突き刺しちやダメなんていうルール聞かされてないもの」

「常識的に考えなさい！つていうかチョコバーのカスを私の背中にこぼさないでくすぐったいじゃない！」

私はネプちゃんの頭を上から踏みつけそこからさらに体重をかけた。

「ネプちゃん？常識に囚われたら勝てる試合も勝てないのよ？どんな勝負でも生きるか死ぬかの殺し合いと思いなさい」

「無理よそんなの痛い痛い！落ちる、落ちるから！」

「トウカと並びたいんでしょう？トウカならこれくらいの困難越えて



くるわよ」

「ち、ちなみにトウカなら私と同じ状況に陥ったらどうやって切り抜けるの?」

「私の指を別方向にへし折って無理やり敗北を回避してくるわ」

まあ私が一番最初に仕掛けたからしようがないといえましょうがないけど、本当に一番最初にやられた時は痛かったわ………もちろんイストワールに怒られたけど。

「てめえらは本当に猟奇的だな」

「しようがないじゃない時代が猟奇的だったんだもの」

あんな時代に育ったら誰でも猟奇的に育つわよ。と、そんなこと言ってたらツイーゲちゃんが言ってたハツカーの隠れ家の上空にいたみたいね。

「さてとあなた達、ちよつと真面目な話するけど、今から犯人の隠れ家に行くんだから静かに、それから迅速に行動しなさい。今から大声上げた奴は即射殺だから」

「だから怖いのお姉さん……」

戦場で大声なんて上げたら狙われるに決まってるじゃない。そんなの殺してくれて言ってるようなもの、それなら私が殺そうが相手が殺そうが同じでしょ? そんな訳で私たちは隠れ家へ降り立った。

「よお……しっ! それじゃあ、犯人を見つけてるよ!!」

「ネプちゃん?」

私はネプちゃんの額にコルトパイソンを突き付けてお話しする。まさか言つてすぐに大声上げるなんてねえ、バカなのこの子? 本当にトウカはこの子に何を教えてきたのよ

「お姉さん言わなかったっけえ? 大声上げた奴射殺って」

「いやあ、ここは主人公としてみんなを盛り上げたほうがいいかなあつて」

「なら主人公としてみんなの為にここで壮絶な戦死を遂げてくれるかしらあ?」

「ごめんなさい静かにします」

初めからそうすればいいのに、おバカねえ。ネプちゃんの所為でノ

ワールちゃんたち完全に怯えちゃってるじゃない。まるでお姉さんがみんなを虐めてるみたいに読者に写っちゃうでしょう？やめてよもお。

「じゃあ全員行くわよ、一人のミスはみんなの死に繋がると思いなさい、一人一人が周囲を確認して変わったことがあれば随時報告、お互いをカバーしながら迅速に行動しなさい。さあ行くわよ！」

「二「サーイエツサー！」二」

そんな訳で捜索開始、あらやだ。軍人時代の癖が出ちゃった♪

## 犯人発見、しかしオカマ

「つかまえたー！」

トウカ達はピーシエを追い謎の工場へとたどり着いた。そこは格子のドアが行く手を阻み中には入れそうにないが、入る用事もない、筈だったのだが

「あつーまたにげたー！」

安心したのも束の間、クラたんはもう一度ピーシエの腕をすり抜け格子の間を通り抜けて工場の中へと入ってしまった。それを追ってピーシエも中へと入っていく

「仕方ない、追いかけるぞ」

そう言つてトウカは格子を通り抜けてピーシエを追おうとするが、当然ネプギアとユニは突っ込むほかない。

「いや、今どうやったのよあんた!？」

「通り抜けただけだが？」

「そんな当然の事みたいに言われても私たち出来ませんから!!」

「俺が先に行つて追いかけるからお前たちは後からこい」

そう言つてトウカは走り出した。



「たぶんここよ、気を引き締めなさい」

アイリス達は薄暗い犯人のアジトの中で一つだけ光が灯っている部屋を見つけた。他の部屋は荒れ放題、さらに電気一つ付いていないのにそこだけは比較的綺麗にされているため怪しいと踏んだのだ。そして、案の定そこにはキーボードに指を走らせる人影があった。

(パワードスーツ? また珍しいものを)

アイリスの合図を元に四人は武器を構え、アイリスを先頭に一気に中へと踏み込んだ。

「動かないで!手を上げてゆっくりこっちを向きなさい!」

自分の獲物を持ち、相手に構えながら叫ぶノワール、しかし犯人と思われる人物は特に抵抗もせず両手を上げてこちらへと向いた。

「あなたね、ハッキングの犯人は」

ノワールがそう聞くも、目の前の人物は何も答えない。

「答えなさい！」

何も答えないことに苛立ちを覚えたノワールは剣をさらに突き付け返事を催促する。アイリスは相手に不気味さを覚える、完全包围されているというのにこの余裕、素直に諦めたのか、もしくははなにかを隠しているのか……そう考えていた時

「あはあん、そんな他人行儀な喋り方しないでえ」

あまりに衝撃的な出来事に一瞬全員の思考が停止した。それもそうだろう、誰もこんな所にいる人物がこんな身をくねらせながらオネエ言葉を使う男だとは思わないのだから。

「私のことはアノネデスちゃんって呼んで♪」

「ねぷう!?オカマさん!?その見た目で!?!」

「予想の右斜め上どころか天空貫いてそのまま宇宙行っちゃったわよ……」

どうやら完全にこの人物はオカマのようだ。全身アーマーで着込んでいるからわからないが声からして男だということが確認できる。

「あくら失礼ね?心は誰よりも乙女よ♪」

「オカマね、典型的なオカマね」

さすがのボケ担当のアイリスもこの状況にはできないようだ。彼女はトウカほど状況適応能力がないのだから仕方ない。

「あなたの性別はどうでもいいのよ!犯行を認めるの?認めないの?」

ノワールの問いかけにアノネデスはふふふと笑みを浮かべながら言い放った。なぜか頬の部分が赤くライトアップされながら

「生で見るノワールちゃん……やっぱいいわあ」

(オカマの女好き……こいつ両刃!?)

アイリスは他のみんなと全然違うことを考えているが、そんなことを知る由も無いノワールは話を進める

「なっ!そんなこと言っただけを逸らそうたって……」

「やだあ本気よ?ホ・ン・キ」

そう言っただけアノネデスが指をパチンと鳴らすと部屋の上からいく

つものディスプレイが降りてそこにある画像が投影された。

「ごーんな写真撮っちゃつてごめんなさあーい♪」

「えっ、ちよっ!のわああああああああ!!」

「うわあ!あっちもノワールこっちもノワール!!」

そこには食事中、着替え中仕事中和すべてのノワールが記録されていた。

「ああ!ノワールがお裁縫してる!」

「そういうことする人だったかしら?」

「そうなの!私以外と家庭的なタイプでね!あははははははははははははは!」

「ノワールちゃん誤魔化すの下手でしょ」

「あの服、どこかで見たことが……」

「気のせい!100%気のせいだから!ちよっと!それじゃないって言うてるでしょ!!」

あー、そういうこと。とアイリスはノワールが何を隠したいかわかってしまった。それゆえ後ろでニヤニヤとしている。

「あら、それじゃないなら……これのこと?」

とアノネデスが指を鳴らすと、そこにはコスプレをしているノワールが映った。もちろん、アイリスは分かっていたため笑いを堪える。

「あれって四女神オンラインの衣装でしたのね」

「見ないでええええ!」

「あああん!取り乱すノワールちゃんもかわいいわ」

状況に適応したのかアイリスもアノネデスのようにノワールを弄り始めた。しかしここで、いつも元氣なネプテューヌが何も言わなくなってしまう。

「あら、どうしたのネプちゃん?」

「ねえ……あのノワールのコスプレってさ……」

「なによ!ってああああああああ!!それだけはダメ!本当にダメ!!」

そのノワールは黒いズボンに黒いインナー、そして身の丈ほどの黒いロングコートを身に纏いテラスから街を眺めていた。そう、この格

好はどこかで見たとある格好だ。ネプテユーンの身近にいる人物

……

「完全にトウカね」

「あらあノワールちゃん、トウカの事そんなに好きなのお？」

「ち、違うわよ！これはトウカじゃなくて！えーと！そのー！」

「白状して楽になりなさいよ、これでトウカのことを思いながら『自主規制』してきたんでしょ？自分のこと慰めてたんでしょ？」

「ちよつとノワール！なに人の秘書夜のオカズにしてるのさ！」

「そんなことしてないわよおおおおおおお！」

そんなノワールを見ながらアノネデスはいいわあと言いながら眺めているのであった。

## 空からもう一人

「はあ……はあ……」

ひとしきり暴れまわった後、とりあえずノワールは落ち着きを取り戻した。しかしそれでもコスプレ姿を公開されたという事は消えず、さらにトウカをオカズに自分を慰めてという疑いまで掛かってしまった。

「ノワールちゃんかわいいわあ、でもちよつと可哀想だから他の子の秘密を大公開♪」

「ちよつ!!!」

「あら、困りましたわねえ」

ベールはかなりオープンに自分の趣味を他の人間に公開しているため大した秘密はないが、ネプテューヌとブランはまだまだ他の人間に言えないような秘密がいくつもある。

「まずは、これよお〜」

「ねぶう!?まさかのわたし!?!」

ブランは自分ではないことに胸を撫で下ろしながら、ネプテューヌは冷や汗を滝のように流しながらモニターを見る。モニターに映っていたのはこそこそと自分の部屋の中に入りカギを閉めているネプテューヌの姿だ。

《いやあ、いけないことだとは分かってるけどやめられないよねえ、トウカ最近構ってくれないし》

「あ………これはちよつとダメかな!?!門外不出のレベルでダメだよ!主人公としてこれは本当にダメ!」

「大人しくしなさいネプテューヌ!私だけ秘密を公開とか不公平でしよー!」

「そうよネプちゃん、ノワールちゃんが一肌脱いだんだからネプちゃんも脱がないと」

そう言っただけアイリスはネプテューヌを捕まえて口を押さえて声を出させないようにする。その間にもモニターの中のネプテューヌは愚痴をこぼすようにトウカへの不満を口にしていった。

《そもそもトウカが悪いんだよ！ネプギアとかユニちゃんとかにばかり構って……私にも構ってよお……》

「ネプちゃん構ってくれないっていうけど昨日一緒にお昼寝してたじゃない」

「構ってもらってますわね」

「贅沢なのね……」

「ていうか妹に嫉妬するなんて……あなた本当に女神？」

「ねぷううううううう！みんなから私の心へ容赦ない攻撃がああああ！ガード値がゴリゴリ削れていくううう！」

そうやってネプテューヌが悶えている間も中の映像の恥ずかしい場面はさらに加速していく。

《だから、こんな事するのはトウカの所為だもん》

そう言つてモニターに映っているネプテューヌはパーカーワンピースの中から黒いインナーを取り出した。もちろん、このインナーはついきつきノワールのコスプレで見たものだ。

「トウカのインナーね……」

「あらネプテューヌ、本当にトウカさんが好きですわね♪」

そう、もちろん言わずもがなトウカの黒いインナーである。

《ああ……トウカの匂いがするよ……やっぱり落ち着くなあ……えへへへへへ》

モニターの中のネプテューヌはベッドでインナーの匂いを嗅ぎながら悶えていた。もちろんこちらのネプテューヌも地面で悶えている。さすがのネプテューヌも恥ずかしいのだろう。

《さあて、そろそろ……えへへ》

そう言つてネプテューヌはベットの中に入り姿が見えなくなったが声ははつきりと聞こえてくる。普段出さないのであろう淫らかな声が《ダメだよおトウカくそんなに激しくしちゃく私のこと好きだつて事は知ってるから》

「わアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「ちよつとネプテューヌ！あなたもトウカの事オカズしてるじゃない！！」



「あらあノワールちゃん、あなたもってことは……？」

「えっ？のわあああああああ！今のなし！今の無し！」

「みんなあ〜ノワールちゃんがトウカで《自主規制》してたの認めたわよお〜」

のわあああああああ！と叫ぶノワール、そして恥ずかしさに悶え苦しむネプテユヌをよそに話は進んでいく。

「で、結局ハッキングの犯人なの？」

「さあて、それはどうかしらねえ」

アイリスの問いにも何も答えない、アノネデスは相変わらず飄々としている。

「じゃあねえノワールちゃん、楽しかったわあ。またねえ」

「あつこら！逃げるなああああああ！」

「仕方ない、追いかけてしまよ」

そうしてアイリスたちは逃げたアノネデスを追いかけることになったのだ。



「ノワールちゃんに会えたんだしアジトの一つくらいドリイムカムトウルウウウウウウウウウ♪」

ノワールに会えてご機嫌なのか舌を巻きながら独り言をつぶやくアノネデスは隠れ家の廊下をホバリングしていた。なのだが、突然目の前に耳の長い生き物が飛び出して、さらにその後ろから金髪の幼女が彼の腹部に激突した。

「あつ、遅かったか……」

その後ろからは少し長めの黒い髪に黒のロングコートという全身黒づくめの男が走ってきた。

「大丈夫か？」

「いたたたた……一体どういうしつけしてるのよ……」

「すまない、コラピーシエ、だから走るなど言っただろう」

そうやって男はピーシエと呼ばれた幼女の頭にげんこつを落とした。なかなか重かったのかピーシエは猫が潰れたような声を出して頭を抑えていた。

「うー！とうか痛い！」

「勝手に一人で行った罰だ、これに懲りたら一人で走り回るな」

「うん？ピーシエ？」

「この金髪少女の名前にアノネデスは聞き覚えがあった。

「あなた、ピーシエ？」

「うん！ぴいだよ！」

「知り合いなのか？」

「トウカー！ピーシエちゃん！」

そして、さらに2人の後ろから続々と女の子がやってきた。



今、パワーアーマーを着た男？にピーシエがぶつかったため謝っておいた。全く落ち着きのないやつだなこいつは。何処かの女神を思い出すよ……………

「しかしすまなかったな……………うん？」

男が持っていたアタツシケースが落とした衝撃で空いてしまっている書類が全てぶちまけられてしまっていた。

しかし、その中に一つ見覚えのある写真があった。

「ノワール？」

「えっ？お姉ちゃん？」

後ろにいたユニが一枚の写真を拾い上げる。そこには全身黒い服を着て窓の外を眺めているノワールの写真だ。ノワールもこんな服を持っていたんだな。

「ゆ、ユニちゃん……………これって」

「こ……………コスプレ……………」

コスプレ……………ということは他の写真もコスプレか。ああ、言われてみればアニメの衣装もある……………ということはこの黒い服も何かのキャラなのだろうか？少なくとも俺は見たことはない

「あんたが盗撮犯ね!!」

「あらやだ！お気に入りをプリントアウトしたのが仇に！」

どうやらこいつが盗撮犯のようだ。ユニは相当怒りが溜まっていたのかすぐさま女神化して銃を向ける。殺さないようにしてくれるな

ら構わんが………

「逃すかああああああああああ!!」

そして男の後ろから女神化したネプテユーンとノワールがドアを蹴破って出てきた。どうやら二人もかなり怒っているらしい。

「観念しなさいこのオカマ!」

「私たちに恥をかかせたこと……タダで済むと思わないで」

すると、さすがに観念したのか男は手を上げて降参した。結局ノワールたちが追いかけていたということはこいつがラスティシヨンのセキュリティをハッキングした犯人なのだろう。

「ノワールちゃん、犯人捕まえたのはいいけど……秘密は大公開されてるみたいよ?」

「えっ? きゃああああああ!!」

俺たちは一枚ずつノワールのコスプレ写真を持っていた。そして、ノワールは女神化して居るのを忘れているかの様にネプギアたちから写真をひったくる。

「ない、あの写真がない!?!」

「これのことか?」

「あ、ああああああ……なんでよりによってあなたがそれを持ってるのよ!!」

そう言っつてノワールに写真を取られてしまった。なかなか似合ってたと思うんだがな。



「結局ハッキングは認めなかったか………」

トウカたちはアノネデスを警備兵に引き取らせた後、現場の後始末をしていた。今回の事件には色々と不自然な場所が多いが、一番の被害者はノワールだろう。

「あつ、忘れてた……ピーシエに何か買ってやらないと」

そう言っつてトウカはピーシエのところへと向かおうとするが、そこには既に先客が居た。ネプテユーンが、ピーシエにプリンをあげていたのだ。全部ではなく、半分だが

「あの子、意外にお姉さんじゃない」

横にいたアイリスが少し微笑みながら言った。

「もう本当はとつくに大人なんじゃない？」

「なら普段から大人らしくして欲しいものだ」

「あえてそうしてるんじゃない？」

「何故だ？」

「逆に聞くけど、あなたはネプちゃんが大になっただらどうするの？」

「どうする……か……」

トウカはアイリスの問いに何も答えることができない。

「どうせあなたのことだから一人で消えようとしてたんでしょ？」

「……バレてたか」

「当たり前でしょう？あの子以外にあなたが生きる意味なんて無いじゃない」

自分の欲というものが無いに等しいトウカにとって、生きる意味などネプテューヌを置いて他にはない。誰にも見つからない場所でその生涯を閉じるだろう。

「だから……ずっと子供のように振舞ってたのか？」

「あなた何処かであの子に言ったんじゃない？お前が大人になったら俺は消えるみたいな感じのこと」

「そんなことは……いや、覚えてない」

なにせ数百年間の話、そんなもの覚えているわけがない。

「そもそも貴方は本当にあの子に大人になって欲しいの？」

「何をいまさら……」

「ならその言葉を忘れてはダメよ？」

「何が言いたい？」

トウカはアイリスの言葉に苛立ちを感じ無意識に声を鋭くしてしまふ。

「これからあの子が辛くて挫けた時、励ますんじゃないかと叱咤して奮い立たせなさい」

「そんなこと当たり前だろう」

「その当たり前前のごとが貴方はできてないの、だからこそあの子は精神面で弱い。もしこの中の誰かがあの子に立ちふさがったら、あの子

はその誰かを斬ることが出来るの?」

「その場合は……………」

「貴方がやるんでしょう?」

自分が言おうとしたことをアイリスに言われトウカは何も言えなくなる。

「そうやって貴方が全部辛いことを被ってるから、あの子は成長しないの、そうしてる限りあの子は弱い子供のままよ」

トウカは心のどこかで、思っていた。自分が全て被ってあの子には幸せになつて欲しいと。

「貴方は自分が辛い経験をしてきたからこそ、あの子には辛い思いをさせないと思つて来たんでしょうけど、貴方が本当にあの子を大人にしたいなら……………これからは辛い経験もさせなきやダメ」

アイリスの言っていることは正しい。考えてみれば、ネプテューヌにはそんなに辛い経験をさせてこなかったのかもしれない。

「……………ああ、そうかもしれないな」

「そうでしょう?分かったなら……………この縄解いて」

ちなみに今までアイリスはチョコバーを盗った罪でトウカに吊るし上げられていた。下にはもちろんトウカが出した豪炎が設置されている。

「それとこれとは話が別だ」

「ネプちゃんを大人にしたいんでしょう?ならまずあなたが大人にならないとダメよ、大人になってチョコバーの件を許さないとダメよ」

「さてネプテューヌ、ピーシエ、帰るぞ」

「ちよつと?本当にここに放置?ねえ、ねえ!ねえつてばあああああああ!」

俺たちはあいつを放置しては帰った。



「何か用か?」

「え、ええ……………」

先ほどノワールはユニと話していた。にこやかな顔をしていたため穏やかな話だったのだろう。恐らくコスプレができる時間ができ

たのはユニのお陰だとか、そんな事だろう。そんなことを思いながらトウカはノワールの元へ向かう

「その、見たんでしよう？（トウカの）コスプレ」

「ああ……見たぞ（普通のコスプレ）」

あの黒い格好はなんのコスプレだったんだろうか、今度ネプテューヌでも聞いてみようかとトウカは思っており、まさか自分のコスプレだとは夢にも思っていない。

「ど、どう思った？」

「綺麗だったぞ」

「本当に!？」

実はトウカのコスプレはかなり完成度が高かった。

「じゃ、じゃあ………これからも（トウカの）コスプレして良いの？」

「当たり前だ、好きなんだろう？（コスプレが）」

「すっ、好きって!（トウカのこと）」

もう気付いているだろうが、全く話がかみ合っていない。トウカはコスプレのことが好きなのだろうと思っているが、ノワールは自分がトウカの事を想っているとバレてしまったのではないかとハラハラしている。

「べ、別に好きかわけじゃ!」

「嫌いなのか？（コスプレが）」

（な、なんでそんなに残念そうな顔するのよ!!）

（ノワールはコスプレが嫌いなのか………ならどうして嫌いな事を？）

トウカは困惑しているだけだが、その顔が険しいためノワールは自分の事を好きかわけではないと言われたトウカが残念そうにしているように見えてしまったのだ。

「でも（トウカの事が）嫌いって訳じゃないわよ!？」

「どっちなんだ？はつきりしてくれ」

トウカは少々面倒になってきたのか顔が真剣になる。しかしそれをノワールの目にはトウカが真剣に自分のことが好きなのかどうかを聞いているように思ってしまったのだ。

（なによこの真剣な目………も、もしかしてトウカも私のこと好きなの

？だとしたら……いい……今ここで私も好きだって言ったら……そ、相思相愛!?)

ノワールの中でどんどん妄想が膨らんでいく。恋人になり、ゆくゆくは結婚、そして……その後のことも

「あ、あわわわわ………」

「どうした？」

「ちよ、ちよっと待ってー!」

ノワールは緊張に耐え切れず走り出してしまふ、トウカはそれを止めようとするがどこからともなく声が聞こえてきたため足を止める。

「どいてどいてどいて……」

「声………空からか？」

上を見上げると、そこには人が落ちてきていた。あの速度で落ちたらまず助からないが、それ以上にトウカが危惧したのは

「ノワール!上だ!」

「えっ?ちよ、のわあああああああああ!」

ノワールの上に人が墜落したのは本日二回目である。とてつもない音がしたため中にいたネプテューヌ達が全員出てきた。

「ただいまーって何事!」

どこからともなく帰ってきたアイリスも合流した。そして土煙から現れたのは

「いた〜い、お尻ぶつけちゃったあ〜」

長く艶のある青い髪を三つ編みに束ね、とてもふわふわとした印象を持つその少女は尻をぶつけてもなおほんわかとした表情を崩さない。しかし、それを見たトウカとアイリスは唾然とし空いた口が塞がらず完全フリーズしている。

「だ、誰?」

恐る恐るネプテューヌはその少女に名前を聞く、しかしトウカとアイリスには必要ない。

「ほえ?ああ、あたし〜?私はねえ、プルルートっていうのお〜プ  
ラネテューヌの〜女神だよ〜」

そう、彼女の名前はプルルート、そこでフリーズしているアイリス





## プルルート歓迎

「あたし〜プルルート〜よろしくねえ〜」

はあ、なんでこんな事になってしまったんだ。はあ、ダメだ……た  
め息が止まらない。

「プラネテューヌの新しい女神さん、ぷるちゃんに乾杯するですう！」  
「ちよつと待った！」

俺の目の前には盛大なパーティーのような風景が広がっている。  
空から降ってきたプルルートを歓迎するために開かれたのだが  
……はあ……

「ふえ？どうかしたんです？」

「その言い方だと私がぷるるんに女神の座を奪われたみたいじゃん  
！」

「でも、ぷるちゃんもプラネテューヌの女神さんです？」

「プラネテューヌはプラネテューヌでも、別のプラネテューヌだから  
！ そこんとこよろしく！」

ネプテューヌが言った通り、このプルルートは別次元からやって来  
たという。別次元というものが存在していることは前から確認し  
ていたが……まさかその住人がやってくるとはな。しかもそれがプ  
ルルートで女神だとは……

「あー、そうだから〜こっちのあたしはどこいったの〜？」

「部屋で引きこもってる」

先ほど様子を見たが……自分の指から小さな電気を放出してそ  
れを棒人間の形に変形させ、その電気がテーブルの上で踊っている様  
子をただただ膝を抱えて眺めていた。しかも目の中に光が灯ってな  
かった、逆に聞くがどう声を掛けたらいい？完全に使い物にならなく  
なってる。ちなみにネプテューヌたちはプルルートが言った意味を  
理解できていないらしい。

「所でプルルートさん、トウカのことをか〜くんって言いますが、そ  
のか〜くんって何ですか？」

「だってえ〜か〜くんはか〜くんだもん〜」



だ。しかし、些細な違いなので遠目からは絶対にわからない。性格は多少違うが

「あたしはくくもつとこつちのあたしとお話したいんだけどくくお部屋から出てきてくれないんだくく」

「あ、ああ……まあ気長に待て」

アイリスにとってプルルートはとてつもない黒歴史だからな。あいつ曰く、存在が黒歴史と言っていた。破天荒な姉キャラを気取つたのにこんな過去の姿があると知られて恥ずかしいんだろう。

「そういえば向こうにもトウカさんは居るんですか?」

「うん、私のくく幼馴染なんだくく」

向こうでも俺とプルルートが幼馴染ということは変わらないのか。

「それでえくく私のお嬢さんなんだあくく」

「ねぶう!?!ぷるるんと向こうのトウカって結婚してるの!?!」

おい、今なんて言った?今結婚してるといったのか?プルルートと向こうの俺が!?!恥ずかしそうに両手を頬に当てて首を振るな!

「でもまだ結婚はしてないんだくく」

「どうしてですか?」

「かーくんが逃げちやうんだあ、俺は結婚なんかしねえくくとか言つて」

「ぷるるん。それお嬢さんって言わない」

ああ……プルルートの一方通行ということか。ご愁傷様だな向こうの俺

「しかもねえくくかーくんってあたしが居るのにくくすぐ他の女の子とデレデレするからくく凄くムカつくんだあくく」

だんだんプルルートの笑顔が黒くなつて行つてる気がするのは俺だけだろうか?いや、他のみんなも感じているはずだ。顔が引きつってるだろ

「あー!ちよつとピー子!」

今度はなんだ……ああ、自分の分を食べきつたピーシエが物足りなくてネプテューヌの肉を強奪してしまつたらしい。全くどこまで欲張りなんだこいつは

「コラピーシエ……人のもの許可なく取るな、それいけないことだ、もうするな」

「だってまだおなかすいてるもん！」

「はあ………まあとりあえず謝っておけ」

渋々納得したピーシエはネプテューヌに謝った。普段からこれくらいおとなしければ良いんだがな

「先生は甘いわね」

「ああ、もう少し厳しくしないと何処かの女神の様になってしまうかもしれない」

「ちよつと！それって私のこと言ってる!? 私は少なくとも人の物を強奪したりしないよー！」

「ネプテューヌ、俺が冷蔵庫に入れてたプリンを知らないか？」

「さあなんの事かなあー!!」

ネプテューヌ、お前も人のことは言えない。俺が気付いていないとでも思っていたのか。今まで刑に処さなかったのは何をするかを考えていたからであつて……お前は今まで見逃されてたんだよ。

「ねぶてぬにはこつちあげる！」

そう言つてピーシエはネプテューヌに紫色の何かを差し出した。

あつ………それは……

「いやあああああああ!? 近づけないでえええ!! 私ナス嫌いなのお!!」

ネプテューヌは筋金入りのナス嫌いなのだ。だからネプテューヌにはできる限りナスは出さないのだが今日は……

「ねぶ子、たまには食べてみなさいよ。今日のは特別製よ」

「ナスに特別も何もないよ!あの匂いを嗅いだだけで力が出なくなつちやうんだからー!」

そんな事はとうの昔に知ってる。だが……

「トウカいつもみたいに食べてよおー!」

「………ま、まあ、一切れだけ食べてみないか？」

「やだよ!トウカまでそんなこと言わないでよおー!」

「………そうか」

俺はネプテューヌから食器を受け取った。まあ、なんとなくわかってはいたけどな。

「あれ？トウカなんで指に絆創膏なんか張ってるの？怪我？」

「あ？ああ……………ちよつと紙で切った」

「トウカもドジだねえ、強いからって気をつけなきやダメだよ？」

「そうだな」

ネプテューヌの食器にはナスが一切れだけ乗っていたが、やはりそれも食べないようだ。

「ね、ねぷねぷ、一切れだけ食べるですう！」

「そうよネプ子！せめて一切れ、いいえ一口でいいから」

「やだつてば！嫌いなものを無理やり食べさせるのはよくないよ！ねえトウカ！」

「ああ、嫌いなものは仕方ないな……………」

俺はナスをすべて食べ終え、食器を片付けにキッチンへと向かう。

……………やはりネプテューヌのナス嫌いは治らないな。たとえ誰が料理しても……………

## フルダイブ式ゲーム

現在、トウカたちは全員ベールに呼ばれてリーンボックスに来て  
いる。

「私どうかしてたわ」

「お前の頭はいつもどうかしてるだろ」

今日の朝、なんとかアイリスは再起動してプルルートと向き合っ  
た。向き合ったのだが、やはり拒絶反応があるようで数分が限界だっ  
た。

「それより聞いたわよ、昨日ネプちゃんのためにナス料理作ったのに  
食べてもらえなかったんだって？」

「なんの事だ……………」

「ナス嫌いを少しだけ克服させようとして玉砕したって聞いたわよお  
」

トウカはその言葉に平然と知らないと言うが、アイリスのニヤニヤ  
は止まらない。

「貴方嘘つく時って右上見て腕を組むのよ？知らなかった？」

「っ!?!いつもの癖だ」

あくまで平然を装っており、普通の人間ならわからないだろうが、  
昔から見ているアイリスには慌てていることが一目でわかった。

「へえ、いつもの癖なんだあ?」

「もしもしプルルート?」

「おわあああああ!」

トウカがプルルートの名前を呼びながら携帯を出すとその瞬間ア  
イリスは光の速さでソファの陰に隠れた。ちなみに光の速さは比喩  
ではなく、あまりの速さに所々稲妻が散っている。

「貴方ね!そんな簡単にオブジェクトクラス<sup>ケ</sup> K e t e r<sup>テ</sup>の s c pを呼  
び出さないでちょうだい!」

「分かりにくいし大袈裟すぎるだろう」

ちなみに s c pとは巷で噂のすごく不思議な物体や生物を題材に  
した創作物の名称である。ホラー要素とグロ要素を含む物があるの

で苦手な人は検索を控えよう。

そしてオブジェクトクラスK e t e rとはs c pの中でも世界を崩壊させるほどの危険度を持つものを指す。

「で、そもそもなんでみんなリーンボックスに集められてるの?」

「ベールがフルダイブ式のゲームハードを開発したからみんなで遊ぼうとかなんとか言っていたな」

ベールが今開発中のゲームハードのテストをして欲しいからといってトウカたちを呼び出したのである。当初トウカはあまり乗り気ではなかったがネプテューヌが物凄く行きたがり、溜まっていた仕事を全て片付けるといふ条件を出してそれをネプテューヌは死にそうになりながらクリアしたため今に至る。ちなみにラムとロム、そしてプルルートとピースェは昼寝中なので来ていない。

「それで?フルダイブ式のゲームってどんなもののかしらん?」

「フルダイブ式は皆さんが知ってる通りVR世界に精神を移動させるのでその世界に入り込んだ様な感覚を味わえる物、そこで私たちが開発したゲームはこちらですわ!」

そうベールが言うと、スクリーンにはあるゲームが映し出された。

そして、そのゲームを見た瞬間アイリスとトウカは驚愕する

「G T A!?!」

「そう!G T Aですわ!」

G T Aとは広大なオープンワールドを舞台に好きなことをして生きたる制作費が億単位の超人気ゲームである。このゲームでは現実世界で行えることがほとんどできると言っても過言ではない。

「ちなみにZ指定ですわ♪」

「好きなねZ指定ゲーム……………」

「すっごい楽しそうだから早くやろうよ!」

「まあ暇つぶしにはなりそうね」

ネプギアとユニはZ指定ということで姉たちが暴走しないか心配だが、面白そうというのも事実なので密かに楽しみにしていた。

「乗り気ではなかったが……………なかなか楽しめそうだな」

「そうね……………ふふふ」

トウカとアイリスは笑いが止まらない。二人はずっとGTAをプレイしてきた故、それがVRで体験できるなど夢の様である。

「今回能力値は現実の能力に自動計算で決定されますが……構いませんわね？」

「ええ、構わないわ」

振り向くと、先ほどまではしゃいでいたネプテューヌが変身してパープルハートになっていた。

「ネプちゃん……あなたズルいわね」

「ゲームには全力よ」

「へえ、面白いじゃない」

そう言っただけでも変身、それにつられてブランとベールまで変身した。全員本気なのだろう。

「では測定を開始しますわ」

そう言っただけで全員の測定が開始されていく。ちなみにネプギアとユニは変身していない。

ちなみにGTAのステータスには

スタミナ、射撃、体力、ステルス、運転、飛行、肺活量というものがある。最大値は100で最低値が0である。ゲーム内で活動していれば底上げできるため最終的にはすべてのステータスがカンストする場合が多い。

「まずは私ね、主人公のチカラ……見せてあげるわ」

ネプテューヌのステータスが測定され結果が出た。

スタミナ80

射撃0

体力100

ステルス40

運転10

飛行60

肺活量70

「……………ぐすん……………」

「ネプテューヌ」



「あらあネプちゃん、どうしたのお？主人公だからチートかと思ったらあ」

そのままネプテューヌは無言でトウカの所へ歩いて行き、そして胸の中でしくしくと泣き始めた。自信満々に言ったのに0と10、しかもGTAではほとんど必須と言ってもいいものが悪いという散々な結果になってしまったのだ。可哀想としか言いようがない。そう思ったのか、トウカは何も言わずアイリスに拳骨を落とした後ネプテューヌの頭を撫でて慰めていた。

「ふん、次は私ね」

そしてノワールも自信満々に機械に乗った。

スタミナ70

射撃0

体力100

ステルス40

運転50

飛行60

肺活量70

「私も射撃0……………」

「あらあ、射撃だけでできないのねえ」

その他は普通なのだが、またまた射撃が0である。そして、アイリスは拳骨を物ともせず茶々を入れていく。

「次は私だな」

ブランは普通に機械に乗った。

スタミナ90

射撃0

体力100

ステルス70

運転20

飛行50

肺活量100

「まあ銃は趣味じゃねえからいいか」

「ステルスは高めなのねえ……ああ、ちっさいから」

「なんだとてめえ……」

「身長のことよ」

またまた射撃0である。ひよつとしたら女神は全員射撃0なのかもしれない。

「次は私ですわね」

ベールは優雅に機械に乗った。

スタミナ60

射撃40

体力100

ステルス20

運転60

飛行60

肺活量50

「あまり満足いく結果ではありませんが仕方ないですわね」

「ステルスは低め……やっぱり大きいからかしら？」

三人が射撃0であるにもかかわらず、ベールは射撃が40あった。FPSをしている影響なのだろうか。

「次は私ですわね」

ネプギアは恐る恐る機械に乗った。

スタミナ50

射撃50

体力50

ステルス50

運転50

飛行50

肺活量50

「えっ？私だけなんだか普通……っっていう地味……」

現実を物語るようにネプギアのステータスは悪くもなければ良くもない普通のステータスだった。しかし、今まで測定した中では射撃が一番高い。

「…………チッ」

「なんで私の時だけノーコメントで舌打ちなんですか!!」

特に面白みもないステータスのため弄れなかったからなのだろう。

「よし、次は私ね」

そしてユニの測定が開始された。

スタミナ60

射撃100

体力50

ステルス20

運転40

飛行40

肺活量40

「ま、まあ当然よね!」

「さっすがユニちゃん!獲物が銃なだけあるわね!」

「あれ?ユニちゃんだけ褒めてる?」

ネプギアは何も言われなかったことを未だに気にしているようだ。

そして、ついにアイリスの番がやってきた。

「じゃあ行ってくるわ」

そうしてアイリスは自信満々に測定を開始した。

スタミナ50

射撃90

体力60

ステルス50

運転100

飛行50

肺活量40

「うーんやっぱり現役時代と比べてだいぶ下がったわね…………タバコとお酒の影響かしら」

それでもかなり高レベルなステータスである。スタミナと体力、そして肺活量も低いが

「俺か……………」

トウカは少しだけ不安になる、最近あまり運動をしていないため体力とスタミナ、そして肺活量が少ないのではないかと。

「行くとするか」

トウカの測定が開始された。

スタミナ40

射撃70

体力0

ステルス100

運転90

飛行100

肺活量20

「.....」

「あはははははははははははははははは！もやし！もやし！もやし！身体スベックもやしじゃない！貴方もう乗り物から降りちやダメよそれ！

あはははははははは！」

そんなメンバーでGTAは始まっていく。

## ゲーム開始

測定が終わり、初期ステータスが決定されたトウカ達は各々ゲームの世界に入り込みスタート地点に転移した。服装は適当に選ばれたのか無難なものが多い。ちなみに全員バラバラの場所へと転移させられたみたいで近くにプレイヤーと姿はない。

「ふう、街でスタート出来たのは運がいいな」

このゲームの舞台はリーンボックスの湾岸に位置する大都市で名前はリーンサントス。そしてもう一つは山岳地帯や砂漠地帯などが広がるボックス郡だ。今回トウカのスタート位置はリーンサントスの中心街からのため、武器などが購入しやすく、車なども奪いやすい。「さて、今どれくらい持つてるんだ？ ベールによるとランダムで決められるらしいが……」

とりあえずトウカは視界の右上にあるGマークを眺めてみると、金額はおよそ5万、武器や装備などは問題なく買える金額だ。

「まずは武器を調達、そして体力強化だな」

トウカの体力はあまりにも少なく、車に轢かれただけですぐに死んでしまうため体力を底上げするまで注意が必要なのだ。それゆえ、車を奪うのも停まっている車でないと危険が伴う。

「さて、行くか」

トウカは手近に停まっていた車の窓を躊躇なく割り車を強奪した後、ガンシヨップへと車を走らせた。



「私は……ダウンタウンからのスタートね」

アイリスもリーンサントスから始まったが、どうやら治安の悪いダウンタウンから始まったようだ。

「所持金少ないわね……現実でもお金少ないからってバカにしてるの？ 腹立つわね」

アイリスの所持金は5000G、武器を買うことはできるがそこまで強力な武器は買えず弾薬も心許ないだろう。だからこそ、ダウンタウンから始まったのは彼女にとって都合なのである。

「ようねーちゃん、遊ぼうぜ」

NPCであろうゴロツキどもがアイリスを囲う、男たちの手には拳銃と金属バッドが握られている。それをみたアイリスはニヤリと口を歪ませる。

「良いわよ別に、特別におねえさんが遊んであげる。かかつてらっしやい……坊や達」

アイリスは手をほぐすようにポキポキと音を鳴らす。

そして、金属バッドを持つていた男へ肘打ちを胴体へ打ち込んで顔面へと躊躇の無い左フックを叩き込むと、流れるような動作で男が手放した金属バッドを空中で掴み発砲しようとした男の腕を叩く。そして、そのまま体全体を使いフルスイングで男の顔面を打った。あまりの衝撃に男の体は空中でなんども回転して仲間へとぶつかり瞬間に襲ってきたNPC達が壊滅してしまった。

「ひっ、ひいひいひいひい！」

リーダー格の男は逃げて行く、こんなところまでリアルだとはさすがグリーンボックス、技術の高さには脱帽である。

「うーん、やつぱり身体能力は普通の人間が鍛えたくらいかしら……現実だったらこの辺り肉片しか残ってないものね」

そんな物騒なことを言いながらアイリスは金属バッドとハンドガンを拾い上げて装備する。どうやら武器スロットはすべての武器が入るため所持数制限はないようだ。

「さて、行こうかしら」

そう言つてアイリスはハンドガンを構え途中で見つけたスポーツカーを奪い走り出した。



そして主人公オブ主人公のネプテューヌ（パープルハート）はリンサントスのビーチからスタートのようだ。

「どうすればいいのかしら……まあまずは武器調達よね」

ネプテューヌの所持金は10万、装備くらいなら簡単に揃えられるだけでなく多少の贅沢もできるほどの金額だ。

「そのあとはトウカと合流でも……いいえ、トウカと協力プレイする

時いつもひどい目に遭うから目的はトウカ打倒にしましょう」

そう決意したネプテューヌは近くにあった車の窓を問答無用で叩き割り走り出した。流石はトウカの教え子、やることは一緒である。



そして主人公（2代目）であるネプギアは……なんとリーンサントスから一番遠い砂漠が初期位置のようだ。

「ええ………中心街まで10キロ以上あるよ……あつそういえばボールさんにタクシーが呼べるって聞いてたんだ！そんなに料金も掛からないって言ってたしそれで行こう！」

そしてネプギアはゲーム内の携帯を使いタクシーを呼ぶ。すると数秒のうちにタクシーがやってきてネプギアは乗り込む。そして一番遠いところまで選択すると料金は500Gだった。自分はどのくらいの金額を持っているのか確かめてみると……なんと

「99G!?なにその微妙な金額!?100でいいよそこは!」

当然そんな金額で行けるわけもなく仕方ないので一番最寄りの場所を選択したのだがその金額はなんと……

「100………G」

1Gだけ足らなかつた。ネプギアはタクシーから降り、ヤケクソでトランク部分を蹴りつけた。もちろんタクシーは走り去り砂漠にはネプギアただ一人が残された。あたりには誰もいない、もうこの世界には自分しかいないんじゃないかと思うほど。

「私………虐められてる?」

ネプギアは属性、いじめられっ子を習得しました。



そしてツンデレ種ぼっち系女神のノワール（ブラックハート）はこちらもリーンサントスから遠い山岳地帯に来てしまった。それだけならまだいいだろう、しかし彼女の場合

「わあ………絶景ね………じゃなあああい!」

このゲームで一番高い山の山頂に来てしまっていた。あたりには人はいるがほとんど乗り物はない。所持金は1万となかなかの金額を持っているがこんなところにタクシーを呼べるわけもない。

「なんで私だけこんなところからスタートなのよ……」

どうやって街まで行くか考えても、何もいい案が思い浮かばない、徒歩などもつてのほかだ。

「……………」

もう諦めようかと考えたその瞬間、目の前にバイクが目に入った。恐らくNPCのものだろう。

「いやいやダメよーゲームとはいえ女神なんだから人のものを取るなんて……」

プラネテューヌの女神はそんなことを気にせず普通に強奪したが、これが常識力の差というものだろう。

「でもこのままじゃゲームに参加できないし……」

女神としてのプライドを取るかゲームに参加して殺伐でもみんなと楽しい時間を取るか……………」

「……………ええいーごめんなさいー!」

そう言つてノワールはバイクを強奪して山を全速力で降りた。しかし、山からのバイク下山は上級者でも成功するのは稀であるため「のわ……………!!」

当然初心者のノワールが成功するはずもなかった。



「あら?」

「うん?」

リーンサントスの4つあるうちの一つ、射撃場もある大きなガンショップにトウカとアイリスが鉢合わせした。

「あらあら…もやしじゃないww」

「もやしじゃないトウカだ」

ニヤニヤとするアイリスに気分を悪くしながらトウカはガンショップに入り彼女も後に続く。

「付いてくるな」

「邪険にしちやいやん♪」

その言葉にイライラしながらもトウカはハンドガンと長距離装備のヘビースナイパーライフルを購入し、念のためにロケットラン



チャーとグレネード各種を買っておく。

「これからどうするのモやし」

「もやしじゃないトウカだ。とりあえず勝敗条件が全員を倒すことだ、作戦を立てないとな」

今回の勝敗条件は全員を倒すこと、つまりトウカは体力が無い状態で全員を倒さなければいけないのだ。一人では戦闘機にでも乗らなければかなり厳しいだろう。

「ねえ、どうせなんだから二人で組みましよう？もやし一人より良いでしょ？」

「もやしじゃないトウカだ」

もやしと言われるのが我慢ならないのか絶対に否定するトウカは仕方なくアイリスとともにスポーツカーに乗り込む。

「さあ行くわよ」

そう言つてアイリスは車を走らせ、トウカがマップを確認していると、赤いマークが高速で近づいてくるのを確認した。

「アイリス、後方400mから敵だ！」

「反応の数は!？」

「一つの車両に二人、名前は………ベールとユニだ！」

後方から緑のスポーツカーが物凄い勢いで近付きながらアサルトライフルを撃ってくる。

「ユニちゃん！チャンスは今ですわ、最強候補2人を潰しますわよ！」  
「分かりました！確実に当てます！」

そう言つて狙い澄ました弾丸がアイリスたちの車のタイヤを撃ち抜く。後輪を撃ち抜かれた車はバランスを崩すがそれだけでは停止させるに至らない。

「アイリス、俺に作戦がある！」

「なんでもいいわ！説明しなさい！」

トウカは端的にアイリスに作戦を説明した

「OK！それでいきましよう！」

トウカは窓からロケットランチャーを構えてユニ達を狙い撃った。しかしベールはロケットランチャーを躲すため進路を変更し、上の道

路から飛び降りてもう一度トウカ達の後ろへ着いた。

「逃がしませんわ!」

「いや、逃げさせてもらう」

トウカは窓からボール達のフロントガラスに向けて二つの何かを投擲する。一つは躲すがもう一つはガラスを破り車内に入った。

「これは!?!」

トウカが最初に投げたものは殺傷用のグレネード、そして最後に投げたのはスモークグレネードだ。殆ど同時に爆発し、車内はスモークで見えずさらに近くで起きた爆発によりバランスを崩して壁に激突した。

「まだですわ……………この先に彼らの反応が」

凹んだ車を走らせ、トウカ達が乗っていた車を追いかけると、建築現場へと入っていった。

「ああ、いらっしやい」

「トウカはどこですか?」

「私のこと見捨ててどっか行っちゃったあ、体力ないから怖くなったのかしらね」

アイリスは両手を上げて降参と言わんばかりに二人の目の前で膝をつく。

「いいえ、彼はそんなことしませんわ。この近くにいるはず……………貴女もこんなところで脱落したくはないでしょう?」

「まあ所詮ゲームだし? 負けても構わないけど……………ただで負けるのは癪よね?」

やはり、トウカはこの近くにいるのだと判断したボールはミニマップを見るがどこにもいない、しかし……………次の瞬間横にいたユニが倒れた。

「なっ!?!どこですの!?!」

ボールはその瞬間アサルトライフルを構えて辺りを警戒する、しかし……………その隙についてアイリスは銃をボールへと向け、ボールもアイリスに銃を向ける。

「銃を下ろしてくださいさるかしら」

「いいえ、あなたの負けよ」

ベールは狙撃を恐れ銃を構えながら壁へと移動する。これで狙撃はされないはずだ。

「ハンドガンとアサルトライフルでは性能が違いますわよ？」

「ああ、その辺は大丈夫よ？私の武器は一撃必殺だから」

ベールはアイリスの銃を確認するが、なんのカスタマイズもされていない普通のハンドガン、一撃必殺のわけがない。ハツタリか……そう思った瞬間

「そうでしょうもやし？」

ガツ！とベールの体が固定される。そんな馬鹿な、反応はどこにもなかったはずだ。そう考えるベールに非常にも刃が迫る

「もやしじゃないトウカだ」

ナイフを持ったトウカが後ろにいたのだ。

「あ、ありえませんか……こんな至近距離に居たら絶対にミニマップに表示されるはず……」

「おや？覚えていないのか？」

トウカはナイフをくるくると回して逆手に構える。

「俺のステルスは100だぞ？」

つまりトウカは至近距離であろうとステルスモードであればミニマップにも映らない、気配も悟られない。絶対的な暗殺者なのだ。無論、銃撃戦などが主流のGTAにとってあまり役には立たないが……それはトウカたちの作戦勝ちと言えるだろう。

「そ、そんなのひ、卑怯ですわ！」

「卑怯者か……だが」

トウカは非情にもナイフを振り上げて笑顔で言った。

「それはGTAでは褒め言葉だ」

そして、そのナイフは振り下ろされた。

## ゲーム決着

ベールとユニを躲したトウカたちだが、建築現場から外に出ることはしなかった。もうすでにほかの皆が集まってきているからだ。今逃げても後ろから迎撃されてしまう可能性があるため、あえて待ち伏せして各個撃破しようと考えたのだ。

「さてと、これからどうするの？優勝者は二人までって言ってたけど」「まあ、ゲームでは負けたくはないだろう？」

「もちろん♪」

そうやってトウカとアイリスは拳を突き合わせてそれぞれの担当場所へと向かう。トウカはヘビースナイパーライフルを構えて屋上、アイリスは先ほどベールの持っていたアサルトライフルを構えて2階部分で待機だ。

「トウカ、地上から車に乗って二人よ。多分ノワールちゃんとブランちゃんね」

「そうか……………こっちは異常無しだ。手伝うか？」

「いいえ、大丈夫よ」

アイリスは2階部分からノワールとブランに話しかける。

「あら、珍しいコンビね？」

「まあな、お前らだけには負けられねえ」

「そういう訳だから……………勝たせてもらうわ！」

「へえ、山岳地帯で山から落っこちた女神と描写もされなかった女神のコンビ……………どこまでやれるかしらね？」

「言うな!!」

メタ発言をするアイリスに向かいノワールはライトマシンガンを発砲する。しかし彼女の射撃スキルは0、反動が大きいマシンガンなど当たるはずがない。

「射撃スキルはGTAでは必須なのよ！」

そうやって発砲が終わった瞬間、カバーしてたところから体を出してアサルトライフルを彼女たちに向かい撃とうとするが、そこにはノワールしかない。

(ブランちゃんは……………)

アサルトライフルを発砲しながら考える。たしか二人の射撃スキルは0、それゆえ長距離攻撃はして来ないだろう。そうなれば近接攻撃しかない、ならば近づかなければならないだろうが……………

(待って……………じゃあなんのためにノワールちゃんは私に射撃を……………はっ!そういう事!?)

アイリスは危険を感じ後ろに銃を構えるが既に遅い、後ろにはもうブランが近接武器を構えながらこちらに向かっていった。

「危なっ!」

「ちっ!」

何とか避けて距離を取り弾幕を張って間合いに近づかせないようにする。

「そう言えばブランちゃんもステルス70だったわね」

先ほどのノワールの射撃はフェイク、全てはブランをアイリスの元へ届けるのが狙いだったのだ。

(油断したわね……………まさか私たち以外にもこういう戦法を取ってくるなんて)

まさかさつき行った作戦をもう一度違う形でぶつけられるとはさすがに思っただけではなかった。それゆえノワールとブランの侵入を許してしまったのだ。

「無駄に硬いのばかり集まって……………あつ、ブランちゃんは絶壁だから硬いのは当然よね」

「ぶっ殺す!」

しかし、それを持ち前の軽口と経験で振りを悟られないようにする。相手は射撃スキル0、どのみち近づくしかない。だがアイリスの装備はアサルトライフルの弾が100発、ハンドガンが残り50発と心許ない。

「トウカ、そっちはどう!?!」

「問題ない」

しかし屋上からはとてつもない爆発音が聞こえてくる。明らかに問題ないことはない。

「上で何やってるのよ！」

「ネプギアがハザード攻撃ヘリで襲撃してきただけだ」

「大問題じゃない!？」

ハザード攻撃ヘリとはミサイルや機関銃などで武装したヘリの事である。

「こっちは二人に追いかけてられるわ！玉も残り少ない！」

「そうか、なら屋上へ来い」

「なんか考えがあるの!？」

「考えもなしに言わんさ」

その言葉を信じ、アイリスは屋上へと続く階段を駆け上がる。そして屋上へと出た瞬間見たものは

「当たるなよ！」

出入り口にロケットランチャーを向けるトウカの姿だった。発射される瞬間アイリスは右に飛び込み

「なああああああ!？」

出てきたノワールとブランの二人に砲弾が直撃した。当然いくら体力があろうと人間の体がロケットランチャーの直撃に耐えられるわけがない。このゲームはそれほど忠実にできているのだ。

「それで？なんでああなってるの？」

「知らん」

ノワールたちを撃退した後室内へと一旦退避する。ネプギアは半ばヤケクソ気味にトウカたちのいる建設ビルを攻撃していた。

「知ってましたよ！私があんまり人気無いことぐらい分かってましたよ!?!だって主人公なのに7位だし！私が活躍したBirth2とVⅡにはトラウマ級のバッドエンドが用意されてるし！二つとも私が一番の当事者だし！」

ミサイルなどを撃ちまくりながらヘリの中で暴れまわっているネプギア、その光景に2人は少し唾然としながら見ていた。

「昨日アイリスさんに『ギアちゃんって銀魂の新八と同じくらい個性無いわねえ、あつ、でも眼鏡がある分新八の方がマシか。あはははははは！』って言われましたし！」

「言ったかしら……あつ、お酒入ってたから覚えてないかも……」

「お前そんなこと言ったのか……」

トウカはアイリスに批難の目線を送りながらネプギアの攻撃を警戒する。

「トウカさんもこの前私のどこが好きですかって聞いたたら『普通な所だ』って言われましたけど普通な所って何ですか!?それだけですか私は!?良いですよ辞めてやるよ清纯派ヒロインなんて!そもそもツンデレとかロリとか巨乳とかいる中で清纯派ヒロインなんか目立たないし!もう私後付け設定でもいいから写輪眼とか直死の魔眼とか複写眼とか欲しいんですよ……」

(平たく言えば魔眼が欲しいの?)

アイリスがそう考えていると、突如ネプギアのへりが炎に包まれ墜落した。アイリスの横には無言でロケットランチャーを持っているトウカがいた。

「あなた……仮にも教え子撃ち落とす?」

「もうあんなネプギアの姿を……見ていられなかった……」

うつ………と目を抑えながらしやがみ込み震声でロケットランチャーをアイリスへと託した。ゲームとはいえ教え子を問答無用で撃ち落としたものを持つていたくは無かつたのだろう。

「いや、私これどうしたら……」

ロケットランチャーを託されても何に使えばいいか考えていたところ。

「お前………女神の妹を撃ち落とすか?」

「ちよつとーなに私に濡れ衣着せようとしてるのよ!?!」

アイリスはネプギアが乗っていたへりを問答無用で撃ち落とした。

「コラー!地の分まで細工しない!」

ふざけるのはここまでにして

「さてと、あと一人ね?」

「ああ………」

最後の一人、それは既に屋上の出入り口に立っていた。

「……………ねえ」

「どうしたネプテューヌ」

ネプテューヌは少し不機嫌そうに言った。その手には刀が握られている。

「私がここに来るまでにもう全員やられてるの?」

「そうだが?」

「どうしてよ!ちよつとくらい残してくれてもいいじゃない!ここに  
来るまでに3台は車を廃車にしたのに!」

(車の運転下手くそか)

プンスカと怒るネプテューヌにトウカ達は呆れるが、本人はゲーム  
に参加できなかったことがご立腹のようだ。

「私だってみんなと遊びたかったのよ!?!」

普段落ち着いているネプテューヌ(パープルハート)がゲームに参  
加できなかったただけで怒る、それを国民が見たらきつと呆れて涙が出  
るに違いない。

「まあネプちゃんが車の運転下手くそなのが悪いんじゃない?」

「だって運転10だもの!そんな状態でスポーツカーに乗ったらそう  
なるわよ!挙句パトカーにぶつかって追いかけるし……………もう!」

「じゃあなんでスポーツカーに乗ったんだ?」

「カッコ良かったから」

真顔でそう答えるパープルハートにはあ、とトウカはため息をつい  
た。

「とにかく、私は必ずトウカとお姉さんを倒して、トップになってみせ  
るわ!」

「あらそう?」

「分かった」

そう言つてトウカとアイリスはネプテューヌに向かいアサルトラ  
イフルを向ける。

「えっ……………もしかして二対一?」

「正解」

そうして2人はアサルトライフルをネプテューヌに向かい発砲、か



くしてこのゲーム勝負はアイリスとトウカの優勝で終わったのだ。



「バカアアアアアアアアアアああああ!!」

「いきなりなんだ?」

現実世界に戻るといきなりネプテューヌが殴りかかってきた。一体どうしたんだ。

「なにあれズルイよ! 私今回主人公なのに何もしてないじゃん! 描写されてない所で警察に追いかけて回されて大変だったんだからね!」

「仕方ないだろう、まさかお前があんな馬鹿正直に突っ込んでくるとは思わなかったんだから」

作戦を立ててネプギアと二人で来るかと思っただらまさか一人でくるとは思わなかった。そもそも俺とアイリスがチームを組んでいると分からなかったのか?

「まあまあネプちゃん、そんな事気にしないで。ねえギアちゃん?」

「あの、私途中から記憶がないんですけど…」

「気にしないでいいのよ」

ネプギアはしばらく考えていたが嫌な予感がしたのか思い出すのをやめたようだ。今はおとなしくアイリスの腕の中に収まっている。

「まあまあ落ち着け、帰ったらゲームに付き合ってるよ」

「トウカのプリンも頂戴」

「……………分かった」

「やったあ!!!」

「現金な奴め……………」

こうして、俺たちのゲーム勝負は終わりを告げたのだった。

## トウカ奪還編 トウカの弱点

ある日の朝、とてつもない悲鳴が聞こえてきた。それゆえネプテューヌ達は急いでトウカの執務室へと向かう。普段大声を上げないトウカが叫び声をあげるなどただ事ではないと感じ全員臨戦態勢でトウカの部屋へと踏み込んだ。

「どうしたのトウカ!？」

ネプテューヌが部屋に入るがトウカの姿は見当たらない。

「なによ煩いわね……………」

アイリスが意外にも仕事のプリントを眺めながら入ってきた。

「トウカの悲鳴が聞こえてきたんです」

「あー、成る程ね」

そう言うときアイリスは持っていたペンを天井の角へと軽く投げる。するとそのペンは天井に当たる前に何かに当たって地面へと落ちた。そして、本来ペンが当たるはずの天井の角には透明の何かが居た。

「トウカ、姿出しなさいよ」

そう、何を隠そうトウカが透明になって隠れていたのである。

「トウカ!?! どうやって透明に!?!」

「そんな事よりなんで叫んでたの?」

「多分くくあれじゃないかなあくく」

そう言っただけでプルルートは床にある何かを指差した。かさかさ動く人間なら誰しもが嫌悪する生き物がそこに居た。

「ゴキじゃん」

「あー、成る程。確かあなたゴキ嫌いだったわね」

「そういえばくく私のかーくんもゴキちゃん嫌いだったつけくく」

生物の最底辺、ゴキがトウカの執務室に発生したのだ。

「全くトウカはー、まだ虫嫌い治ってなかったの?」

「いいから……………はやく……………殺せ!」

天井の角に張り付きながら必死に言う。その顔はこれまでに見た

ことがないくらい焦燥が滲み出て冷や汗が溢れ出ている。

「しようがないなあ、ほい」

そう言つてネプテューヌは躊躇なく木刀でゴキを潰した。

「もう大丈夫だよトウカ」

「いや、一匹いたら100匹いると思え！」

「そんなのきりないよ、ほら早く降りてきて」

ネプテューヌにも諭されしようがなくトウカは床に降りた。

「ネプちゃん躊躇ないわね……」

「いやあトウカがゴキ嫌いだから私がちゃんとしないとね！私が居なかつたらトウカはゴキを処理できないもん」

ネプテューヌは誇らしげに無い胸を張る。しかしトウカはそれどころではなく未だに冷や汗が止まらない。

「トウカ、立ってられますか？」

「やばいかもしれない……」

もはやふらふらで立ってられない状況まで追い詰められているトウカは普段からは想像できないほど弱っていた。よほど嫌いなのだろう。

「ほら、捕まりなさい」

「すまない……」

トウカはアイリスに捕まりふらふらと歩き始める。

「いや、だが今日はネプギア達に歴史を教える約束が……」

「それくらい私がやってあげるから、休みなさい」

そう言つてトウカは教会内にあるソファで横になったのだった。



「はい、じゃあ今回トウカが殺られたので私が教えまーす」

「トウカどうかしたの？」

「ゴキブリ人類の敵にやられたのよ」

「??？」

ユニは状況を分かっているがそのまま話が進んでいく。

「とりあえずキングダムの4巻を開きなさい」

その後、アイリスの頭に銃弾が突き刺さる。

「真面目にやれ」

「ごめんなさい……………違ったわね」

そう言つて頭を掻きながら立ち上がったアイリスはもう一つの本を取り出す。

「じゃあアルスラーン戦記の1巻を開きなさい」

「さつきと変わってないじゃない!」

しかしトウカから銃弾は飛んでこない。

「あれでいいんですか?」

「良いのよ、歴史なんてアルスラーン戦記かキングダム読んでりやわかるのよ」

「アバウト過ぎませんか?」

そういう人間のため仕方がない。

「さあて、歴史つて言つてもプラネテューヌの歴史しか殆ど知らないわよ?」

「はい、お願いします!」

そもそもなぜ歴史を教えるかというと、ただトウカが昔のことに詳しいから興味本位で教えてもらいたかっただけなのだ。

「さてと、何が聞きたいのかしら?」

「ええーと、プラネテューヌつて昔から繁栄してたんですか?」

「そうねえ……………私たちが15歳から20歳に掛けて発展して行ったわ。科学力自体ならリーンボックスが一番上かもしれない、でもね、科学力と技術力を合わせるならプラネテューヌの他に並ぶ国なんてないわ。そう断言できる」

アイリスは真面目な顔でそう断言した。それに対し、ユニは少し食つてかかる。

「なんでそう言い切れるのよ、ラスティションだつて技術力は負けないわ」

「別にバカにしてるわけじゃないのよ?確かにラスティションの技術力は高い、でも自然環境が良いとは言えないわ。反対にルウィー、こっちは魔法が異常に発達してるけど科学力も技術力もない。リー

ンボックスはバランスがいいわね。そしてプラネテューヌ、科学力単体ならリーンボックスに劣るかもしれないけれど、科学力と技術力ならどの国にも負けないわ」

確かにプラネテューヌはたくさんの高層ビルが立ち並ぶが自然環境は悪くはなく公害なども発生していない。これだけ科学が発達して自然環境が良いのはプラネテューヌだけだろう。リーンボックスですら、流石にプラネテューヌの様に高層ビルは建っていない。

「昔はプラネテューヌに勝てる科学力も技術力も無かったのにね……革新する紫の大地はどこに行つたのかしら」

アイリスは何かを思い出すようにはあ、とため息を吐いた。

「戦争だつてプラネテューヌの兵器が一番強かつたのよ？非人道的だつたけど」

「非人道的つて？」

「教えてあげてもいいけどご飯が4日は食べられなくなるわよ？特に肉」

「遠慮しときます」

そうよねえ、と言いながら笑顔で話を話し続けるが、ネプギア達は当然アイリスとトウカが過酷な時代に生きていたことを改めて痛感した。だからこそ、よく現実味のあることを言うのだろうか。

「はい、とりあえずこれだけ……他は？」

「えっと、じゃあ歴史物のゲームに出てきたプラネテューヌ聖騎士団つて知ってますか？」

「またマニアックなの聞いわね……まあ良いわ」

プラネテューヌ聖騎士団とは、当時の軍人の中でも希少な魔法を使うことができる兵士が集められた部隊のことだ。もちろん魔法の才能はトップクラス、さらにはプラネテューヌ特有の兵器も使うため他国からは最強と恐れられた部隊だ。

「まあその聖騎士団も壊滅的損害を受けて解散するんだけど」

「それだけ強い部隊がどうして？」

「もしかして……プラネテューヌ災厄の7日間ですか？」

そうネプギアが入った瞬間、明らかにその場の空気が凍りつく。

「ねえネプギア、その災厄の7日間ってなに？」

「そっか、ユニちゃんはラステイションだから知らないんだね。プラネテューヌはね、ある伝説があるの」

そう言っつてネプギアはその災厄の7日間の概要を語り始めた。

「ある日突然プラネテューヌの空に赤黒い竜が現れて、国民を7日間虐殺し続けたっつていう歴史上最大にして最悪の大災害の事だよ」

「なによそれ……本当にあったの？」

「歴史学者の人たちの間でも意見が分かれてるんだつて」

あまりに酷い内容のためこんな事件が本当に起きたのかどうかとかなり賛否両論をしているため実在したのか、はたまたただの伝説なのかはまだ明らかになっていない。

「でも災厄つて……そんなに酷かったの？」

「えつと、検査したら出てくるはず……ほらこれだよ」

災厄の7日間の名前の由来は、赤黒の竜が残したこの言葉が元らしい。

どこへ逃げようと、どこへ隠れようと、どれだけ足掻こうと、この災厄は貴様らを一人残らず殺すまで終わらない。絶望しながら死に絶えろ。

「詳しく教えてあげてもいいけど……夜トイレに行けなくなるかもしれないわよ？」

「遠慮します……」

二人は苦笑しながら完全に引いていた。

「で？トウカはまだ再起不能？」

「すまん、今日は帰ってもいいか？」

「大丈夫よ？ネプちゃんも今日は仕事してるし」

そう言いつつネプテューヌの執務室に銃を向けるアイリス、すると少しだけ開いていた扉が閉まった。

「全く……ネプテューヌ」

少し心配になったのかネプテューヌの執務室を覗いてみると

「とりやあああああああ!!」

「うわあ！ピー子上手っ！負けてたまるかああああ！」

「勝てない〜」

ピーシエとネプテユーナとプルルートがゲームをしていた。無理やり仕事をさせられて落ち込んでいると思っていたトウカは少しだけイラつとした。

「はあ……………俺は帰る……………アイエフ、コンパ」

テラスに居たアイエフ達を呼んだ。

「どうしたの？先生」

「すまん……………ネプテユーナに仕事をさせといてくれないか……………仕事に差し支えない範囲でいい」

「ねぶねぶは仕方ないですねえ……………分かりました」

頼む、と言つてトウカはフラフラとしながら協会から出て行った。



「はあ、はあ……………」

かなりフラフラと危なっかしく歩いていた。ゴキブリよりも恐ろしい危険種や超人（アイリスなど）に囲まれても動じなかったトウカがゴキブリ一匹にここまで追い詰められている、つくづく弱点が変わっている男である。

（それにしてもこの時間なのに人通りが少ないな……………）

いつもなら人で賑わっているプラネテユーナの街道は人つ子一人いなかった。

「いや、数人……………」

体力がだいぶ回復したため辺りを警戒する。そして

「後ろか！」

トウカは勢いよく後ろを振り向いた。そこで見たものは

カサカサカサカサカサカサカサカサカサカサ

150cmくらいの巨大なゴキブリが蠢いていた。

「……………」

その瞬間、トウカはボタンと倒れ意識を失った。そんなトウカに歩み寄る二人と一匹

「本当にうまくいくとはな……………」

「まさか化け物の弱点がゴキとはびつくりしたっチュ」

もちろんネプテューヌシリーズお馴染みのマジエコンヌ、そしてワレチュー、その間に金色の長い髪が翼のように広がっている胸の大きい女性は笑いながら言った。

「昔から虫が嫌いだからねえ、意外と弱点は多いんだよ？先輩は」

クスクスと笑いながら、その女性はトウカを担いでマジエコンヌ達と共に消えた。



## 敗北の女神

「ほらネプ子、仕事しなさい」

「もう充分やったってばあ〜〜」

ネプテューヌの執務室ではアイエフが着きネプテューヌに仕事をさせている。ちなみに今日は仕事を休んだのだとか

「こんな時にトウカはどこいったの？私が仕事してるのにトウカはしなくていいの!?!それは差別だよあいちゃん!」

「先生は今日の分の仕事終わらせて次の日の仕事の途中だったのよ」

トウカはその日の仕事は午前中に終わることが多いためだいたい午後は次の日の仕事をしている。

「でも意外ね、先生が虫嫌いだななんて」

「結構トウカは苦手なもの多いよ?」

ネプテューヌはトウカの意外な弱点をよく知っている。一番長く過ごしているのだから当然といえば当然なのだが

「それより私はアイリスお姉さんが真面目に仕事してることにびっくりしたよお〜」

「少なくともあんたよりは真面目ってことね」

アイリスはちららんぽらんに見えて意外と責任感があり、的確なアドバイスや指示を行うときがあるため、どれが本当のアイリスなのか二人もわからなかった。

「はあー、もう疲れたよ……あつ、メールだ」

ネプテューヌは自分の携帯にメールが来たことを確認する、しかしそれは覚えのない宛先からだった。間違いメールか、そう考えてそのメールを開いた瞬間、ネプテューヌは目を疑った。

「なにこれ……………」

そこにはトウカが鎖につながれている写真だった。



「ああ〜、真面目に仕事なんてするものじゃないわね」

アイリスは自分の執務室でくたびれていた。久しぶりに真面目に仕事をしたからだろう。彼女もまたネプテューヌと同じようにやれ

ば出来るのだが、やらないのだ。

「お疲れ様〜」

「ありがと……………っておわあああ!？」

いつの間にかプルルートが近くに来ていたため驚いて急いで距離を取る。

「なんで逃げるのお〜?」

「いいいい良いから向こう行つてなさい!」

「やだあ〜〜こつちのあたしと居る〜」

「私お仕事中だから!」

「じゃあ手伝う〜」

意地でも近づきたくないと思うアイリスと一緒に居たいプルルートの攻防が続く。

「ううう〜〜」

「睨んでもダメ!ほら、向こう行きなさい。なんで私と一緒に居たいのよ……………」

「ええ〜?えーとねえ〜?一緒に居たいから〜」

(答えになつてないから……………ああ……………ごめんなさいトウカ、今になって貴方の昔の気持ちがあつたわ。この子話通じない)

昔の自分そのままのプルルートを見てアイリスは泣きそうになっていた時、アイリスの執務室が勢い良く開かれた。

「アイリスさん!」

「あらアイちゃん、どうしたのそんなに血相変えて。お胸が成長しないことに今気づいたの?」

「まだ可能性はありますから!そんなことよりネプ子が飛び出して行きました!」

アイエフはそう言いながらネプテューヌの携帯に送られてきた写真を見せる。もちろんトウカが囚われている写真だ。

「これ……………場所は!」

「地図が添付されてたんですけど、ネプ子が持つて行つたんです!」

「不味いわね……………だとしたら狙いは!!」

アイリスも急いで教会から外に出た。それと同時に外には土砂降

りの雨が降り注ぎ、雲が空を白く染め上げていた。



「はあ、はあ、はあ！」

ネプテューヌは地図の場所へ向かいひたすら走る。頭の中にはトウカを助ける事しかなく、土砂降りの雨に濡れることも気にせず女神化するのも忘れてその場所へと向かっていった。

「トウカ……………トウカアアアアアアア!!」

一刻も早く彼の元へ、いつも助けてくれた彼を、今度は自分が助ける番だ。自分が熱を出した時も、攫われた時も、女神になった時も、守護女神戦争の時も、ネプギアが生まれた時も、いつもそばに居てくれた。自分を心から愛してくれた彼を、失いたくない。

「絶対助けるから、だからー！」

ずぶ濡れになりながら走り続け、地図が添付されているところまでたどり着いた。そこは一面のナス畑、ナス嫌いのネプテューヌなら悲鳴をあげてもおかしくない場所だが、それらは彼女の目に投影されない。なぜなら

「どう……………か……………？」

鎖につながれたトウカが剣のようなもので串刺しにされていたからだ。

「遅かったね」

彼女の近くに、金色の長い髪の女性がいた。

「女神さんの大切な人はあの通りだよ。まだ死んでないけどね」

その女性はずぶ濡れになりながら鎖につながれたトウカを見る。

「女神さんって先輩……………彼の教え子なんだっけ？ずっと彼に守られてきたんでしょ？でもそれももう終わりだよ。ここは先輩に免じて見逃してあげる、だから今度は他の女神さんも連れて来た……………」

そう言い終わる前に、彼女の頬へ木刀がめり込んだ。その躊躇のない一撃は彼女を吹き飛ばすのには十分過ぎる力だった。

「痛いな……………話聞いてた？先輩の犠牲を無駄に……………」

その女性は途中で言葉を紡ぐのをやめた。なぜなら、目の前に「うわあ……………凄いな」

殺意に満ちた形相で木刀を振りかざすネプテューヌがそこにいたからだ。その姿からは普段の彼女の面影はすでになく、ただ目の前の敵を殺す事だけを考えている少女。

その木刀を防ぐため金髪の女性はエネルギーで出来たクローを取り出して攻撃を防ぐ。それだけでも恐ろしい負荷がかかり衝撃波が周りに被害を出す。

「流石は女神さんだね……………この時代で私に武器を出させるだけあるよ」

木刀を弾かれたネプテューヌは怯むことなく、そして休むことなく彼女へと木刀で殴り続ける。殺意の塊であるネプテューヌの攻撃を彼女はひたすら躲すが、その顔はどこか余裕そうだ。

「やめた方がいいよ？女神さんじゃ勝てないって」

「はあああああああああー！」

「聞き分けないなあもう……………」

金髪の女はネプテューヌの攻撃を受け流した後彼女の腹部を蹴りつけて木へと叩きつける。しかし、そんな事では止まらずネプテューヌは起き上がると同時に女神化して金髪の女へと飛びかかった。

「これで終わりだよ」

振り上げられたネプテューヌの刀は金髪の女に打ち砕かれ破片が空中を漂う。しかし、ネプテューヌはその破片の一つを手に取り、それを金髪の女の肩へ突き刺した。

「……………やるねえ」

ネプテューヌは残った右腕で金髪の女を殴ろうとするが、その右腕は彼女の武器によって木へと突き刺さり動かない。

「凄いなあ、さすがは先輩の教え子だね……………手加減したとはいえ私に傷が付くなんて久しぶりだよ？でもね……………」

ネプテューヌは武器を引き抜こうとするがビクとも動かない。

「女神さんくらいの人は大戦潜り抜けてきた私や先輩たちの世代じゃ沢山いたよ……………」

「ぐつ、あああああああ!!!!」

ネプテューヌの腕からは血が吹き出す、それでも彼女は動くことを

やめない。負けられないのだ。大切なものを守るために、トウカは自分よりも何倍も痛い思いをして自分を守り続けてくれたのだから。ここでやめたら、自分は本当にトウカに護られているだけの弱虫になる。

「消えて、もうここには女神さんを守ってくれるものも、守るものも無いんだから」

そう言つて、金髪の女の拳がネプテューヌへと突き刺さった。とてつもない衝撃にネプテューヌの体は幾つもの木にぶつかつてようやく止まった。

「げほっ！、げほっ！」

ネプテューヌの体はすでに女神化が解けてボロボロになっている。それでも、彼女は這つてトウカの元へと行く。

「トウ……………カ……………」

土砂降りの雨で分からないが、彼女の目から涙があふれ出してくる。どうして、いつもトウカの助けになれないのか……………彼はいつも自分を助けてくれるのに。

「……………ごめん……………ね」

パタリと、彼女は意識を手放した。



「終わったみたいだねピースェ……………いやライトちゃん」

後ろから来た桃色の長い髪の女性は名前を呼ぶ。先ほどまでネプテューヌと戦っていたのはライトと呼ばれる女性のようなのだ。

「この子が……………この次元のプラネテューヌの女神？」

「そうみたいだね、先輩……………こっちの次元のカイナの教え子だよ」

「へえ……………こっちの次元のカイナくんには教え子なんか居たんだ」

傘をさす桃色の女性はネプテューヌを見る。

「そういえばマジエさんは？」

「ワレチューちゃんと買い物だよ」

呑気なことにね……………と言つて桃色の女性はネプテューヌを担ぎ上げた。

「教会に送り返してくる」

「わかったよ。気をつけてね……」  
そう言つて桃色の女性は歩き始めた。



「ちっ！何処まで行つたのよネプちゃんは!?!」  
アイリスは全速力でネプテューヌを探すが一向に見つからない。  
地図はネプテューヌが持つて行つてしまつたため足で探すしかないのだ。

「瞬間移動するにも場所がわからないんじゃ意味ないし……私はトウカみたいに生体エネルギーを辿つて探せないし……」

「あの、探し物はこの子ですか?」

アイリスが声をかけられ足を止めると、そこには傘をさした女性がネプテューヌを担ぎ上げていた。

「あなた、その子をどこで!!」

「この先のナス畑ですよ……女神直属エージェントのアイリスさん、いいえ、この次元のプルルートさんって呼んだ方がいいですか?」

この次元、その言葉が出てきた瞬間アイリスはトウカが修復した剣を呼び出して女性に構える。

「あなた誰?」

「ああ、申し遅れました……私」

女性は傘で顔を隠れていたことが気づいたのか、少しだけ傘をあげて顔が見えるようにした。しかし、その顔を見た瞬間アイリスは言葉を失つてしまう。

「ネプギアって言います、どうぞよろしく」

そこには黒い服を身につけたネプギアがそこに居た。

「ギア……ちゃん?」

「ちなみに私は別の次元から来たネプギアですので、この世界のネプギアとは異なりますよ。まあ私も女神化は出来ますけどね」

ふふふ、と笑う彼女はネプテューヌをアイリスに渡す。

「あなたの目的はネプちゃんじゃないの?」

「私の目的は違いますよ、それじゃあ」

しかしネプギアはあつ、と何かを思い出したかのようにアイリスに

言う。

「肝心な事忘れてた。プルルートさんに伝えて下さい、待ってますよって」

そう言っただけで、ネプギアは一瞬で何処かに消えた。

「……きな臭くなってきたわね……」

アイリスはボロボロのネプテューヌを抱き上げながら空を見上げた。

## 昔の記憶

ずっと昔、真つ暗な場所に閉じ込められたことがある。他の国の諜報部員に攫われちゃったんだよね。

「にしてもこんなガキが次の女神だとはな」

「女神候補生なんだと、上玉なら楽しもうと思ったが、ガキだから楽しめねえな」

好き勝手ガキガキと言われて腹が立ったけど、実際あの時は子供だったから何も言えなかった。捕まってたしね。

「そもそもこのガキ、一人で街の外に出てる時点でバカだよな？」

「ははは！違いねえ！」

あの時の私はトウカの訓練をサボって遊んでたんだよね。同じ事ばかりやらせるからつまんなくなつた。でも、それは必要な事なんだった後から分かったよ。トウカにもひどいこと言っちゃったし……

(トウカ……：助けになんて来てくれないよね)

だって私、トウカに反発して飛び出してきたんだもん。

(なんで同じ事ばかりやらせるの!?!いい加減別のこと教えてよ!)

(基礎もできてないのに応用ができるか、素振りと筋トレは全ての事に繋がるんだ。そもそも、こんな事に耐えられないようでは技など到底教えられん)

(もう充分だつてば!私どんなきつい技の練習でも耐えられるよ!)

(そう言う奴は決まって途中で投げ出すんだ)

売り言葉に買い言葉って奴で、私は練習用の剣を投げ出してトウカに悪態をつきながら街中に行っちゃったんだ。

(なにさ!ずっと地下に捕まっていたくせに!どうせ口でもないことして捕まっていたんでしょ!?!もう訓練なんてつまんないし辞める!トウカも本当は私が女神候補生だから構ってくれてたんでしょ!?!もう良いよ!二度と話しかけないで!)

トウカはずつと優しくしてくれたのに……ううん、トウカも私が女神候補生だから優しくしてくれたんだ。ネフテューヌ私に優しくったわけ



じゃない。だから、危ない事をして私を助けに来てくれるわけないよね。私が居なくなっても女神候補生はまた生まれるんだから。

「さて、そろそろ殺しちゃうか」

「そうだな」

……………結局誰も私のことなんて見てくれなかった。もう良いかな、誰にも本当の意味で愛されてないもん。誰も本当に優しくなんてしてくれないもん。みんな……………私を女神候補生としか見てない（でもトウカは……………厳しかったけど優しくかったな）

初めて私に拳骨を落とした人……………他の人とはちよつと違ったかな。

「さよならだ嬢ちゃん、恨むならてめえの迂闊さを恨みな」

そうして、誘拐犯は私に銃を突きつけた。けど、その誘拐犯が私を撃つことはなかった。突然倒れたから

「なんで……………」

「遅くなった」

私は、目の前の光景を信じることができなかった。

「怪我はないか？」

そこにはトウカが居た。全身傷だらけで、血まみれで、剣が何本も体に刺さって居たけど、そんな事御構い無しに私のところまでやってきた。

「怪我はないな。すまない、もう少し早く助けてやれば良かったんだが」

そう言つて、トウカは私を抱き上げて歩いて行く。

「トウカ…怪我…………」

「ああ、気にするな、これくらいすぐ治る」

トウカは私の頭を撫でながら安心させるように言う。

「なんで助けてくれたの？私トウカに酷いこと言ったのに…………」

「理由か……………そうだな…………」

しばらく考えた後、トウカはうーんと言いながら

「俺が助けたかったから、だな」

ふっ、とトウカは少し笑いながら言った。

「俺はまだお前と一緒に居たいんだ」

ギュツと、私を抱きしめるその手はとても暖かかった。そうだよ、トウカだけじゃん……ちゃんと私のことを怒ってくれるのも、褒めてくれるのも、抱きしめてくれるのも、手を握ってくれるのも、頭を撫でってくれるのも

「……………ごめん……………」

私は耐えられなくなつて泣いちゃった。

「ごめんなさい……………ごめんなさい……………」

「ああ……………もういいんだ」

泣きじやくる私をトウカはずつと抱きしめてくれた。私が泣き止むまで、ずっと……………

「これからは、ずっとお前を守るから」

このとき初めて、私は女神候補生じゃなくて、ネプテューヌ私として生きてるんだつて分かった。



「ネプ子!?ネプ子!」

「あいちゃん……………?」

ネプテューヌが目覚ますと、そこはいつもの教会だった。彼女の身体中に包帯が巻かれている。

「私……………負けたんだね」

金髪の女、ライトに負けたことを思い出して歯をくいしばるネプテューヌ、だがその目はまだ諦めてはいない。

「起きたのね」

ネプテューヌの部屋にアイリスとネプギア、そしてピーシエとプルルートが入ってきた。

「ねぶてぬ!!」

「ピー子……………つてぐはあ!?!」

ピーシエに思いつきり抱きつかれて一瞬だけ意識が飛びかける。

「お姉ちゃん……………お姉ちゃん!」

「ネプギア……………ごめんね心配かけて」

ネプテューヌはネプギア達の頭を撫でながら微笑んでいた。心配をかけたのかネプギアは少し涙目になっている。

「よかつたあく起きたね〜」

「ねぶねぶ、大丈夫ですか？」

プルルートの、そしてコンパも合流し現在の状況を確認した。どうやらネプテューヌが運ばれてから1日が経ち、向こうからの連絡はないそうだ。

「あの、とりあえず他の国に連絡を……」

「止めなさい、今回の目的はあくまでプラネテューヌ、他の国に知らせたらトウカがどうなるかわからないわ」

トウカやアイリスは普通の武器では殺せはしないが、ライトが居る、それゆえ命の保証はできない。

「ネプちゃん、とりあえずあなたは教会に居なさい」

「やだ」

アイリスの言葉をきっぱりと拒絶する。

「ネプ子、その体じゃ無理よ！」

「そうですねぶねぶ!!」

「ううん、絶対私が助ける」

ネプテューヌはいつになく頑なに言った。

「トウカは昔私を助けてくれた、だから今度は私が助ける……絶対」  
アイリスの目をただまっすぐに見て、ネプテューヌはそう言った。

その目には硬い意思が灯っているのを感じる。

「……………分かったわ」

「アイリスさん！」

「言ったって聞かないわ、全くあの師匠あつてこの弟子ありね」

はあ、とため息をついてアイリスはタバコに火をつけた。

「私も行くよお〜〜ちよつとお話ししないといけない子が居るか  
ら〜」

「私も行きます、トウカさんを助けたいです」

「分かったわ、今回は私とネプちゃんとギアちゃん、それからプルルートで行くわ。アイちゃんとコンパちゃんは諜報部と連携して辺りの封鎖よ！」

そうして全員が行動する。たった一人の男を救うために。

譲れないもののために

「そろそろね」

アイリスたち4人は空を飛んでナス畑に向かっていた。プルルートはネプテューヌとネプギアが腕を持って飛行している。

「うっ、ナスの匂いが……………」

「そして周りには巨大ゴキブリ、対トウカ&ネプちゃん対策はバツチリね」

「うえ〜なにあれ〜気持ち悪い〜」

アイリスは呆れるようにそう言った。そして、ナス畑には案の定、マジエコンヌたちが臨戦態勢でその場にいた。

「ハーハツハツハ！よく来たな貴様ら！」

「相変わらず古い笑い方ね」

「やかましいー！」

トウカの周りにはマジエコンヌとライト、そしてその近くにワレチューと

「私……………」

「初めましてこの世界の私」

黒い服を来たネプギアはぺこりとお辞儀をした。少しこちらのネプギアより身長が高い。

「こんにちはプルルートさん、こっちの次元では初めてですね」

「そうだね〜……………ここには何しに来たのお？」

「私の目的は変わりません、全ての女神を……………殺す事です」

やんわりとした笑顔から、殺気を含む凶悪な笑顔へと変貌を遂げたのを見て、全員たじろぐ。彼女の殺気は尋常ではない。

「ギアちゃん、個性負けてんじゃない？同じ人間でも次元が違うとこうも違うのねえ……………」

「あ、あれは流石に引くわ……………」

「わ、私はあんな個性いりません！」

「そんな事より〜早く下ろしてくれない〜？」

プルルートがいつもより不機嫌そうに殺気を含ませながら言った

ため、ネプギアとネプテューヌは少し怖気を感じ下に下ろした。そして、新次元のネプギア（黒ネプギア）は一步出る。

「カイナくんは来てないんですね」

「来ててもおろろあなたには会わせないわよおろろ」

（（わよ？））

「だつてえろろろろろ」

そして、プルルートの体が光に包まれる。そう、女神化したのだ。だが、その姿はアイリスとほぼ同じだが……感じは明らかに違っていた。

「あなたはここで死ぬんだからねえ!!」

予想はしていた、しかし……プルルートとは似ても似つかないその姿に言葉遣い、一同は言葉を失う。

「カーくんはあたしの、あなたは呼びじゃないのよ、あなたの残念な頭でも分かるかしらあ?」

「カイナくんの苦しみも知らずにのうのうと幸せに生きてたくせによく言えますね、信用されてないってこと分らないんですか?」

「あなたこそ、選ばれなかったってそろそろ自覚すれば?」

一瞬だけ黒ネプギアの表情が歪むが、すぐに先ほどの表情へと戻る。

「プルルートさんが彼を束縛してるだけでしょう?あなたはカイナくんに依存して、彼が居ないと生きていけないんですよね?彼もいい迷惑だと思えますよ?」

「カーくんは約束してくれたの、あたしとずっと一緒に居てくれるって……それはプロポーズと同じ、いわば夫婦よ」

「都合のいい勘違いですねえ、どこまで頭がお花畑なんですか?」

「っ……あたし、やっぱりあなたは嫌い」

「珍しく同意見ですね、私もあなたが嫌いです」

バチバチと、お互いの間に火花のようなものが散る。その様子を見ていた他の人間は全員もれなく冷汗をかいていた。あのアイリスでさえも退いている。

「あなた達女神なんか居るから……私たちはっ!」

「全部の不幸をあたし達の所為にしないでちょうだい！」

もはや一触即発、お互い一步も引く気はない。殺意むき出しで互いを睨みつけていた。

「ここには彼は居ません、決着をつけましょう」

そう言つて、ネプギアは鈍く光る暗い紫色のエネルギー刃で出来た剣を二本取り出した。

「ギアちゃん!?なんであなたがそれを!?!」

「そうですよアイリスさん、この次元の剣と、私の次元の剣です」

「お姉さん、あの剣はなんなの?」

アイリスはふう、と深いため息を着いた後、重い口を開いて話し始めた。

「魔剣ゲハバーン、最強にして最悪の対女神用兵器よ」

「最強にして……最悪?」

「あの剣はね、女神を殺せば殺すほど力を増すのよ」

女神を殺せば殺すほど力を増す、そう聞いてネプテューヌとネプギアは戦慄した。そんな物が本当に存在するのかと

「私とカイナくんが造った最高傑作です、もつとも…彼はこの剣を封印したんですけどね」

「当たり前でしょう?カーくんは私たち女神の味方だもの」

禍々しい剣を前にしても、プルルートは臆さず自分の剣を構える。

新次元のゲハバーンを新次元のカイナとネプギアが作った……という事はこの超次元のゲハバーンを作った人間は

「この次元のゲハバーンを創つたのは……トウカって事!?!」

「そうよ、あいつ一人で作り上げた最強の剣……それがゲハバーン……二つの次元のゲハバーンを同時に手に入れるなんて、一本でも厄介なのにな!」

アイリスは吐き捨てるように言った。それほどまでにこの剣は凶悪なのだ。女神を殺し、その命ごと力を奪い取る、それがゲハバーンという魔剣だ。

「つくづく卑怯な女ね……それが無いと怖くてあたしと戦えないの?」

「見せつけてるんですよ、二人で一生懸命創った最高の剣を………それにしてもこの次元のゲハバーンは恐ろしいですね、一体何人の女神を殺したんでしょう?」

確かに言われてみれば右手に持っている剣の方が黒いオーラが強く、禍々しい。

「ネプちゃんとギアちゃん、向こうの黒いギアちゃんと戦っちゃダメよ。特に右手に持ってるこの次元のゲハバーンには近づいちゃダメ、掠っただけで即死するわよ」

「そんなに強力な力?!」

「本来なら時間が経てば力はなくなって錆び付くはずだけど………トウカはなんらかの方法を使って当時の状態に止めていたのね」

思い出したくない何かを思い出してしまったのかアイリスの顔が悲痛に染まる。

「ぶるるん下がって!」

「あたしはこんな剣には負けないわ、要は当たらなきゃいいんでしよう?」

プルルートの考えは遠距離からの剣の斬撃と魔法、そうすれば彼女の間合いから外れれば安全、そう考えている。

「じゃあ、始めますか?」

「ええ………いい加減始めましょう?」

お互いに武器を構えた。

「死ね!!」

プルルートと黒いネプギアの戦いの火蓋が切って落とされた。



「始まったわね………うわ、すっごい」

アイリスは遠目からプルルートと黒いネプギアの戦いを眺めていた。普通に考えればプルルートに部があるだろう、しかし、黒いネプギアには一本でも女神の脅威となる剣が二本もある。さらに片方は掠っただけでも即死レベル、近付かれれば終わりだ。

「さてと、久しぶりねえピ………いやライト?」

「お久しぶりです………団長」

ライトは深く頭を下げる。

「アイリスさん、団長って?」

「その人は昔、プラネテューヌ聖騎士団の団長だったんだよ女神さん」  
「アイリスさんが聖騎士団の団長!?!」

聖騎士団と言われて想像するのは規律を重んじ、清楚で真面目なイメージを想像するだろう。しかし、アイリスはそんなところは一つとしてない。ネプテューヌとネプギアは聖騎士団を率いてるアイリスを想像するが、思わず笑ってしまった。

「どうしたのお?二人とも急に笑って……」

「何でもないですごめんなさい!」

当然そんなことをすればコルトパイソンの弾丸が飛んでくる。確かにこんな聖騎士団団長は世界広しといえどアイリスしかいない。

「トウカを返してくれるとありがたいんだけど?」

「それは出来ません、女神さんが死ぬまでは」

はあ、とアイリスは予想していた通りの答えが返ってきたため溜息をつく。

「お姉さん、ここは私にやらせて」

「ネプちゃん、あなた本気?」

アイリスはネプテューヌの目を見る、そしてまたまた深いため息をついた。ダメだと言っても絶対に聞かない、いつか見た男の目にそっくりだった。本当に、2人はよく似ている。

「分かったわ、その代わり絶対に勝つのよ?」

「もちろんよ、私はトウカの教え子で、最高の女神なんだから」

ネプテューヌは自信満々に剣を構えて前が出る。

「本気ですか団長、この子じゃ私には勝てませんよ」

「どうかしらねえ……あなた詰めが甘い時があるからどうかわからないわよ?」

「……分かりました」

そう言ってライトも武器を構えて前が出る。

「ギアちゃん、私たちは周りのモンスターとマジエコンを相手するわよ」



「はい！」  
こうして、各々譲れないものをかけた戦いの火蓋が切つて落とされた。

## ネプテューヌVSライト

「はああー！」

「遅いよ」

ネプテューヌの斬撃を軽々と避け、隙について蹴りや拳をライトは叩き込んでいく。今の所武器は使ってはいない、使わなくても勝てるかと踏んでいるのだろうか。

(やっぱり速い！)

恐らくライトは現在手加減をしてネプテューヌの斬撃をわざとすれすれで躲している。攻撃が当たらず気持ちが焦るが、攻撃がもつと当たらなくなるため平常心を保もつ

「やっぱり団長に任せた方が良かったんじゃないかな？女神さんは無理だよ」

「無理じゃないわ！あんまり調子に乗らないで！」

「ほら、また心を乱した」

真一文字の斬撃を伏せて躲し、ライトはネプテューヌの腹部へ回し蹴りを叩き込んだ。その蹴りによってネプテューヌの体は吹き飛び木へと激突した。

「一人じゃ無理だよ、おとなしく団長に手伝ってもらいなよ」

「嫌よ……私があなたを倒すんだから……」

「しつこいなあ……もういいよ、早く終わらせてあげる」

そう言つて、ライトは両手にエネルギー刃のクローを装備してネプテューヌへと歩み寄る。

「私ね、女神さんのことは嫌いじゃないけど……女神さんが居たら普拉ネテューヌを壊せないじゃん」

「そんなこと……させないわ」

「そういう事は、強くなつてから言つてよね！」

ネプテューヌへとクローが振り降ろされる。ネプテューヌは体がしびれて動かすことができない、それゆえ避けることはできないが……防ぐ事は出来る。

「なっ！」

剣を持っていない左手でクローを防いだ。その手からは血が噴き出し激痛を伴っているだろう。だが、それを我慢してネプテューヌは右手に持った剣でライトの腹部を刺す。しかし、ライトはそれをもう片方のクローで弾き直撃を防いだ。そしてネプテューヌはライトを蹴り飛ばして距離を取る。

「左手を犠牲にして急所をついてきたのはいい判断だね、でも……自分を不利にしちゃったんだよ」

ただでさえ強敵の相手、これからネプテューヌは片手でライトを倒さなければいけないのだ。

「片手だつてあなたを倒して見せるわ」

「そっか、その自信に免じて……ちよつとだけ本気を出してあげる」

ライトはクローを構え、姿勢を低くした後消えた。そして、いきなりネプテューヌの腹部に激痛が走る。見てみると腹部が斬り付けられていた。

「今の攻撃見えたかな？」

ネプテューヌの周りを移動し続けているが姿が見えず、ただ黄色い光が通っているようにしか見えない。それほどまでにライトの移動速度は速いのだ。

「見えないよね、だつて先輩と団長すら見えないんだもん、女神さんが見切れるはずないよ」

「くっ……」

トウカとアイリスにすら見切れないスピード、自分に見切れるはずがない。しかし同時にネプテューヌは考える、ならトウカ達はどうかやってライトを倒したのかと。ライトは確かに強い、しかしあのトウカより強いとはどうしても思えないのだ。

(なにか打開策があるはず……焦らず考えるのよ私、トウカに何回も教えられたじゃない、戦いは視界だけに頼らないで体の全部を使え……)

ネプテューヌはトウカに教えられたことを思い返していく、トウカの教えに何か必ずこの状況を打開する方法があるはずだ。

(目に見えない相手……そうだ……)

昔、トウカに教えられたことがあった。

(ねえトウカ、こんな訓練意味あるの？)

(戦う相手が全て見えるとは限らないんだぞ)

(そんな相手殆どいないってば)

(絶対には限らないだろう)

速くて見えない相手、姿が見えない相手、その対処法を昔少しだけ教えてもらったことがある。その時は要らないと思ってちやんと聞いていなかったことにネプテューヌは今になって後悔した。

(たしか……………そうよ、思い出したわ)

トウカから教えられたことを思い出し、目を閉じて神経を研ぎ澄ます。チャンスは一度きり、失敗はできない。いや、必ず成功する。なぜなら

「これでとどめだよ！」

トンツという音が聞こえた。そして、ネプテューヌは目を見開き全力の斬撃を叩き込んだ。ザシユツという鈍い感覚と暖かい何か飛び散る感覚、ネプテューヌの斬撃がライトを見事に捉えた瞬間だった。

「なっ……………」

「姿は速さで消せても、音だけは消せないわ」

ネプテューヌの斬撃は思ったよりも深く、ライトはその場で膝をついた。あり得ない、それがライトが初めに思ったことだった。これまで自分の攻撃を見切られたのはトウカとアイリスのみ、それを…………一度倒した相手に見切られるなど夢にも思わなかったからだ。

「あなたの慢心が仇になったわね、本気で来られたら勝てなかったかもしれないわ」

「……………私が本気で行っても、諦めない癖に」

「良く分かってるじゃない」

「当たり前だよ、だって目がそっくりだもん。先輩と」

「し、失礼ね。私はトウカみたいに濁ってないわ」

プイツとそっぽを向いて拗ねる。本心はトウカと似てると言われて嬉しいのだが、女神化すると何故か素直になれない。ほんの少しだ

けトウカに対してツンデレになるのが彼女だ。

「あーあ、負けちゃったなあ」

「案外あっさりしてるのね……」

「まあ私も先輩を攫うのは本意じゃないからねえ……これ以上団長敵に回すの怖いし……」

そう言うのとブルブルと震えるライト、一体アイリスに何をされたのか気になるが、怖くて聞けなかった。

「ちなみに先輩に剣を突き刺したのは私じゃないからね」

「そう見たいね、貴女はそういうキャラじゃなさそうだもの」

戦っている時もそう、ライトは残酷な人間でないことは分かっている。恐らくトウカに剣を突き刺したのは別の誰かだろう。

「先輩をよろしくね、ネプテューヌさん」

「もちろんよ」

そう言っ、ライトはその場を後にしようとしたが、突然彼女の首に鎖が巻き付いた。

「どこ行くのおっくうライトちゃん？」

「だ、だだだだだ団長!」

そこにはいい笑顔のアイリスが居た。ナスのモンスターと巨大ゴキブリの処理はネプギアに任せてきたようだ。

「酷いじゃない、私に一言も言わずに消えようとするなんてえっく」

「いやそれは違いますよ! 私なんかもう団長のお側に居たら団長の目が穢れちゃうと思ったから消えようとしただけで、何も団長が怖いからとかそんな理由じゃ……」

「墓穴掘ってるわよっく」

「はっ! しまったああああああああああああ!」

「極刑よおっく」

いやああああああああ! と叫びながらライトは草むらへと連れ去られ、アイリスは嬉々としてライトを引きずっていく。ネプテューヌは少しだけ覗くと

「待ってください団長! ムチはいやああああああああああ!」

「ムチだけじゃないわよおっく」

「えっ、なんですかそれ、ウインウイン動いてるんですけど!? やめてください! そんな大きいの入りません!」

「誰がお股に入れるって言ったのよお、後ろ向きなさい」

「え、もしかして後ろですか? いやいや待ってください! 私後ろは生涯バージンって決めてるんです!!」

「ええからとつと後ろ向かんかい!!」

「何故関西弁!? 団長実は怒ってるでしょ!!? 先輩の事傷つけられて本当は物凄く怒ってるんですよ!」

「怒ってねえし!? 全然怒ってねえし!? ほら、あれよあれ、あいつが居なくなったら給料無くなるから心配してるだけだし!」

「ほら心配してるじゃないですか!」

「ああもううっさい!! 一気に奥までがつつり入れてやる!」

「ちよ! まっ! いやあああああああああ!」

全てを見なかった事にしてネプテューヌはトウカの元へ飛んだ。

「今行くわねトウカ」

世の中、見なくてもいいことがあるということを、私たちは忘れてはいけない。

## プルルーツVS黒ネプギア

「近付かれなければ勝てると思いましたが!？」

プルルーツは現在、空を飛びながら魔法で遠距離攻撃を放っている。だがゲハバーンはその魔法を喰らい、そのエネルギーを放ってプルルーツへと攻撃する。

「ちっ、うざったい剣ね」

「臆病な人ですね、剣が怖くて地上に降りられないんですか？」

「バカみたいに突撃しないだけよ、貴女こそ女神化して飛べばいいじゃない」

「女神化なんてしなくても勝てますよ」

プルルーツは黒ネプギアが女神化しない理由を考える。この戦いが長時間続いているのも、黒ネプギアが女神化して接近戦を仕掛けて来ないからだ。プルルーツの得意技は魔法、接近戦も強いがさすがに特化している相手には劣る。さらに黒ネプギアは女神を殺すための武器を二本構えているのだから近接戦闘ですぐ片がつくはずなのに、それをしないのは理由があるのだろう。

（魔法を撃っても吸収されて返される、かといってあの子の間合いに入ったら流石に無理……どうするべきかしら）

「まあ降りて来ないなら来ないで良いですけどね！」

その瞬間、黒ネプギアは剣を振るい黒紫色の斬破を放ち、その斬破をなんとか避ける。

「遠距離攻撃が出来ないって私言いましたか？」

「つくづく性格悪いわね！」

「DSでヤンデレの貴女よりマシです」

絶え間なく飛んでくる斬破を避けながら蛇腹剣を伸ばしながら攻撃するが、こちらの攻撃頻度は向こうに比べて少な過ぎる。このままではジリ貧だ。

（仕方ないわね……ちょっと危ないけど……）

プルルーツは地上へと向かい黒ネプギアとの距離を縮めるが完全には近づかない。間合いが届くギリギリのラインで魔法攻撃と蛇腹

剣を放つ。

「中距離戦闘ですか、確かにそれなら魔法攻撃を吸収する暇もありませんね、ですが……斬破が届くのも速くなるということですよ!」

そう言って黒ネプギアは斬破を放つ、しかしプルルートは臆さず、この時を狙って居た。斬破を放った直後、数秒の間遠距離攻撃をして来ないのだ。

「サンダーブレード!!」

「ちっ!」

案の定、ゲハバーンで魔法を吸収はしたが放出はして来ない。やはり斬破をした数秒後は遠距離攻撃をできないのだろう。

「はあ!」

鈍い金属音が響き渡り火花が散る。二人の剣は打ち合うが、やはりプルルートが少し劣勢だ。近接攻撃では黒ネプギアには勝てない。手数もさることながら一撃一撃が重い。受け流すのがやっとだ

「近接では勝てないことを分かかってどうして近づいたんですか?」

「いい加減斬破がうざったくなつたのよ!」

「そう言いつつまた空に逃げるんですね!」

プルルートは空へと逃げる、それでもちろん黒ネプギアは跳んで追いかけて来てプルルートに斬撃を放つ、しかしそれはプルルートの狙い通りだ。

「掛かったわね」

蛇腹剣を伸ばして黒ネプギアの足へと絡ませ、そのまま何度も地上へと叩きつけていく。いくら黒ネプギアとは言え空中では動きが制限されてしまう、それゆえ空を飛んでいるプルルートが完全有利なのだ。

「あははははははははは! さっきまでの威勢はどうしたのかしら!」

ドンドンドンツと何度も黒ネプギアは地面に叩きつけられる。これではどちらが悪者か分からない。そう考えていた時だ、蛇腹剣が突然砕かれて破片があたりへと飛び散った。

「調子に乗らないでください」

瞬時にプルルートの元へと飛翔した黒ネプギアはかかと落としを



繰り出し、プルルートの事を地面へと叩きつけた。地面が砕けるほどの衝撃に襲われ体がきちんと動かない。

「終わりですね、プルルートさん」

少しずつ、紫色に鈍く光るゲハバーンを構えて黒ネプギアが近づいてくる。

「さようなら」

そうして、黒ネプギアは剣を振り下ろした。

だが、その剣はプルルートへ届くことはなかった。彼女を貫く寸前で止められたからだ。

「……………ここに来るんだね」

そこに居たのは、プルルートにとって、黒ネプギアにとって一番大切な人物だった。

「カイナくん」

そこにはゲハバーンを木刀で防ぐプルルートの幼馴染、カイナが居た。

「カーくん、なんでここに」

「イストワールの奴に送られたんだよ、お前だけじゃ不安だってなった！」

黒ネプギアを木刀で吹き飛ばしプルルートを抱きかかえて距離を取る。

「お前、この次元の女神にまで手を出そうとしてんのかよ」

「この次元の女神には興味はないよ、私はただゲハバーンを取りに来

ただけ」

「……その右手のゲハバーンのことか、俺たちのより禍々しすぎるだろ……何人の女神殺したんだ」

「それはあそこにいるこの次元のカイナくんに聞けばいいんじゃないかな?」

カイナが見る所にはこの次元の自分であるトウカが鎖で繋がれ剣により串刺しにされていた。自分と同じ存在が串刺しにされている光景はやはり気分の良いものではない。

「あれ生きてんのか?」

「生きてるよ」

人間じゃねえのか?と思いつつも一度黒ネプギアに向き合う。

「退いてくれないかな、カイナくん」

「何回も言うがそれはできねえよ」

そう言つてカイナは黒ネプギアへと木刀を向ける。

「やっぱり女神の味方をするんだね」

「俺がこいつを守るのは女神だからじゃねえし、お前を敵だと思つたこともねえよ」

「私をそっちに連れ戻すのは無理だよ」

「だから、やることは一つだろ」

カイナはプルルートを後ろに下がらせお互いに剣を構える。

「てめえの骨を砕いてでも、絶対に連れて帰る!」

そしてお互いの目的をかけた戦いが再び始まった。

## カイナVS黒ネプギア

黒ネプギアとカイナの攻防は熾烈を極めて行く、お互いに剣の剣戟を浴びせ合うが決定打が入らず体力を消耗させて行つた。

「カイナくん、ちよつと腕が落ちたかな?」

「最近怠けてたからそうかもな!」

お互いに同等と見えてもやはり、武器の差と手数、そして身体能力の差で徐々に差が開き始めている。戦いが長引けばそれだけカイナがどんどん不利になって行く。

「でも武器が木刀っていうのはちよつとびっくりしたな、ちゃんとした武器を持ってないとダメだよ?」

「そんな血生臭い武器よりマシだろ」

「作つたのは私達だよ」

「確かにそうだけだよ、俺は全部の女神を殺すなんて話聞いてねえぞ」  
昔、確かにカイナは黒ネプギアと共に女神を殺した。しかし……それは当初1人の予定だったのだ。

「この剣は最低な女神が出てきたときのためにつて作つた剣だろ」

「そうだよ、でも気付いたんだよ。女神が存在したらまた同じことが繰り返されるってね。女神に頼る世界を変えなきゃダメなんだよ」

「だからって、何もしてない女神を殺して良い理由にはならねえだろ」

「この話は何回もしたよ……お互いの意見は交わらないってことはもう分かつてるでしょ?」

「だから……こんな事態になつてんだろうが!」

振り下ろされた木刀を黒ネプギアはゲハバーンで防ぎ、再び斬撃を放ちながら連続でカイナへと斬撃を浴びせていく。

「確かにプルルートさん……ううん、ノワールさんもブランさんもベールさんも関係ないよ。でも、今の世界を私は許せない」

「もう終わっただろ、俺たちはあの女神を殺した。それで終わりだろ。あいつだって……そんなこと望んでねえ」

カイナは赤い布の様なものが巻かれた右腕で右目を抑える。彼の両目は違う色をしているオッドアイと呼ばれる物だ。しかし、それは

先天的なものではなく、移植によってそうなったのだ。

「綺麗なオレンジ色だね、懐かしいなあ……………」

「ああ……………そうだな」

二人は遠い記憶を思い出しながら、それがもう戻って来ないという切なさや悲しみを背負ってもう一度お互いに剣を向ける。

「プルルートさんと協力すれば倒せるかもしれないよ?」

「あいつは関係無い、これは俺たちとお前の問題だ」

「そう言っつてプルルートさんを私から遠ざけようとしてるんでしょ? 変わってないねカイナくんは。自分を犠牲にして大切なものを守ろうとするところ……………たとえば自分が護りたかったものに恨まれることになってもっ!」

ギチギチという音を鳴らしながらゲハバーンと木刀が打ち合う。そしてカイナは黒ネプギアの腹部へ蹴りを放って蹴り飛ばし間合いを取ってから木刀を低く構え突進した。矢のように速い突進を黒ネプギアは臆せず剣を縦に振り下ろす。

「なっ!」

「らああああああああああああ!」

カイナは振り下ろされた剣を避けることも防ぐこともせずその身に受け、黒ネプギアが呆気に取られている隙について右手のゲハバーンを遠くへ弾き飛ばし、回転して遠心力を利用した打撃を黒ネプギアの腹部へ叩き込み吹き飛ばした。しかし、ただでは吹き飛ばされず咄嗟にカイナを残った左手のゲハバーンで突き刺した。

「相変わらず……………無茶するね……………痛たたた……………」

黒ネプギアは立ち上がり強打された腹部を触る、おそらく肋骨が2、3本折れてしまったのだろう。ズキズキと痛みが止まらない。

「肋骨逝っただろ、もう辞めとけ」

「そつちも傷が深いよね、お互い様だよ」

かくいうカイナも斬りつけられた傷もかなり深かったが、刺されたのは急所のため出血が激しく血が止まらない。

「血が流れ過ぎて体がフラフラでしょ? 動けないよね」

「ああ……………俺は動けないかもな」

そう、カイナは動けないかもしれない。だが、彼は一人ではないのだ。

「今だウニー！」

カイナは力を振り絞り横に避けると、黒ネプギアが先ほどカイナから受けた傷の部分をビームが貫いた。

「ウニじゃない、ユニよ」

すると、草むらから黒い髪の女性が白い服を着てライフルを構えながら出て来た。

「ユニちゃんまで……ゲホツ！来てたんだね……」

「もちろん、カイナとプルルートだけじゃ不安だから」

「お前も人のこと言えねえだろ」

ジト目でカイナはユニを睨むが睨まれている本人はそんなことは気にしていない。

「ていうかおせえよ、どこ行ってたんだよ」

「さつき目が覚めたのよ」

「遅過ぎだろ」

「文句ならイストワールに言いなさい」

結局2人も空から落ちてきたのだろう、それでよく生きていたのだと言いたいところだ。

「さすがに部が悪いかな……元々ここで戦う理由もないし、今は退くことにするよ」

そう言って弾かれたゲハバーンを見るが、そこにゲハバーンは無かった。

「右手のゲハバーンは!?!」

「元々の持ち主に返したぜ、プルルートがな」

空を見上げると、ゲハバーンを持ったプルルートが振りかぶって投げつけていた。

「元々右手のゲハバーンを私から奪うのが目的だったんだね……だからあえてプルルートさんを下गरらせて、戦いの隙についてゲハバーンを回収させたんだ？」

お互い本気ではなく、黒ネプギアは挨拶程度のもりだったのだ

が、カイナはあまりに強力なこの次元のゲハバーンを奪い取ることが目的だったのだ。

「でも良くプルルートのさんがカイナくんの意図を汲んでくれたね」

「当たり前よ、私たち夫婦だもの」

「それは違うしこれから先も夫婦になるつもりはない」

「変わらないわねあんた達……」

プルルートとカイナの変わらないやり取りを見ながら呆れるユニをよそに黒ネプギアの顔は苦渋に染まった。

「観念しなさいネプギア」

「悪いけど、ここで捕まるわけには行かないんだよ！」

黒ネプギアは腰のポーチに持っていた煙幕を焚き姿を消してしまった。

「逃げられたわね、大丈夫なのカイナ」

「これぐらい大丈夫だ」

カイナは木にグツタリと寄りかかった。

「女神化されてたらキツかったな」

「なんでネプギアは女神化しなかったのよ」

「まずここで決着をつけるつもりがなかったっていうのもあるが………女神の力を使いたくないっていうプライドがあるんだろうな」

「じゃあ、どうしてあの子は女神メモリを取り込んだのかしら？」

「プルルート、ちよつと複雑なのよネプギアは」

ユニは何かを思い出すように遠くを見る。

「かーくん………いい加減教えてくれてもいいんじゃない？どうしてあの子が女神を恨むのか」

「とりあえずまた後でな、今は………ちよつと休むわ」

そう言っつて、カイナは目を閉じて眠りについた。

（かーくんは………またあたしに何も話してくれないのかな）

変身を解いたプルルートは何も話してくれないカイナを寂しそうに見つめていた。

## トウカ救出

「たどり着いた!」

巨大ゴキブリとナスを倒し、一番最初にトウカの元へとたどり着いたのはネプギアだった。ネプギアはすぐにトウカに刺さった剣を引き抜き鎖を斬って解放した後、脈を確かめる。

「良かった……ちゃんと動いてる」

弱々しくもなく、ちゃんとトクンツトクンツといつものリズムを奏でながら脈打つトウカに胸を撫で下ろしながら彼を担ぎその場を後にしようとする。

「そこまでだ!」

しかし、その場に今まで姿を消していたマジエコンヌが現れた。前は女神候補生全員で戦ってやっと倒した相手、も今回ネプギアは一人で更にゴキブリとナスの相手で疲弊している。勝てる見込みは少ない。

(でも、負けられない!)

ネプギアはトウカを下ろして剣を強く握りしめてマジエコンヌへと向ける。今度こそ負けられない、ネプテューヌはもっと強い相手に勝利したのだ、自分も頑張らなければならない。

「行きます!」

「ふん! 貴様如きでは私にはかなわん!」

だが、その瞬間黒い何かがマジエコンヌへと放たれ、意表を突かれた彼女は地面へと墜落した。

「バカな、ヴェアフル!! なぜ貴様……」

そこにはルウイーのテーパークに現れた黒い鎧、ヴェアフルがいた。

「なっ! 待て!」

マジエコンヌの制止を聞かず、ヴェアフルは彼女を攻撃し、ついにマジエコンヌは気を失った。その後、ヴェアフルはトウカへと近づいて行く。

「止まってください!」

ネプギアはトウカの前に立つ。

「退け……私の目的はその男だけだ」

「退きません!」

銃剣を握りしめてネプギアはヴェアフルへと向ける。甲冑で顔が見えないが、ヴェアフルからは背筋が凍るほどの殺気が向けられていた。怖い、それがネプギアの感想だった。ヴェアフルはマジエコンヌを瞬殺する相手、恐らく自分は勝てないだろう、しかし……ここで戦わなければ自分はずっと弱いままだ。だから、彼女は逃げない。

「やめておけ、貴様では私には勝てん」

「それでも退きません!」

「……………そうか、ならば死ね」

ヴェアフルは黒い大剣を持ち、ネプギアの元へと歩いて行く。

「やあ!」

ネプギアは剣を振り下ろすが、ヴェアフル軽く避けて真一文字の斬撃を彼女へと放つ。ネプギアは何とか防ぐが体制を崩し、そのままヴェアフルに腹部へと回し蹴りを喰らい

トウカが捕まっていた丸太の元へ叩きつけられた。

「ゲホッ、ゲホッ!」

「終わりだ」

そう言つてヴェアフルはネプギアに向かい剣を振り下ろした。だが、その剣はネプギアに届くことは無かった。

「トウカ……さん?」

トウカが先ほどプルルートから投げられたゲハバーンでヴェアフルの剣を防いでいたのだ。

「貴様、意識が戻っていたのか」

しかしトウカは答えずヴェアフルを弾き飛ばす。体はフラフラとしており、髪に隠れて顔は見えない。

「いや、無意識か」

顔を見てみると、トウカの目は少しだけ開いているが、その瞳は虚ろで何処を見ているかも、焦点が合っているかも分からない。

「無意識下にありながら女神を護ろうとするとは……ふん、興が冷め



た」

そう言つてヴェアフルはトウカに背を向けて歩き出した。

「哀れな男だ、女神の為に全てを犠牲にし、そして国に裏切られてもなお、今だにこの国の女神を護り続けているとは」

次の瞬間、ヴェアフルはどこかに消えて居た。

「ネプギア！」

そしてネプテューヌも息を切らせながらこちらへとやってきた。

「さっきの鎧は？」

「分からないけど……トウカさんの事知ってるみたいだった」

「そう……トウカは？」

「見かけよりは大丈夫みたいだよ、ちゃんと脈も正常だし」

「良かった……本当に良かった」

ネプテューヌは泣きそうになるのを抑えてトウカをギュツと抱きしめる。彼の体温がネプテューヌへと伝わり、彼女を温めていく。

「ネプテューヌ……なのか？」

「ええ、そうよ」

「……仕事は……終わったのか……？」

「当たり前じゃない……バカね」

しばらく、ネプテューヌはトウカを抱きしめていた。



「……………これはどういう状況だ？」

トウカが目を覚ますと、そこは自分の家だったが、ベッドにはネプテューヌとネプギアが一緒に眠っていた。状況を理解できていない彼にとつては疑問しか残らない。

「ああ、先生」

「アイエフか」

部屋にはアイエフが居て、トウカへ状況を説明してくれた。

「そうか……迷惑を掛けたな」

「それはネプ子たちに言つてあげて、あの子今回はすごく頑張ったから」

そう言われ、トウカは眠っているネプテューヌとネプギアの頭を撫

でる。

「まさかライトに勝つとは……思ったよりも強くなってるものだな」  
「いつまでも守られてるだけじゃ無いってことなのよ」

そのあとアイエフは事後処理を言いつてトウカの家から出て行き、そこにはトウカ達が残された。

「ねぷうー、ねぷうー」

「すう、すう」

「ふっ……」

二人の寝顔を見て、トウカはクスツと笑った。こんな微笑ましい寝顔を見たのはいつ振りだろうか。

「もう、誰かを守るだけの力を持つてるんだな、お前たちは」

いつまでも自分が守らなくても、もう自分たちで守りたい物を守れる強さを持った2人に対し、トウカは嬉しいような、すこし寂しいような感情を持った。

「もうすぐ、俺は必要なくなるかもしれないな」

その眩きは、誰にも聞かれることなくプラネテューヌの夜空へと消えて行った。

## 日常編

### 予告

時は15XX年、紫の女神が国を治める二代前の話。ゲームギョウ界中の猛者が1敗し屍をさらし、国が滅ぶことなど当たり前の中の世の中だ。そんな中で、ある一つの国が存在した。その国は巨大というわけではなかったが、他の国の追隨を許さないほどの科学文明を誇るとてもない国だった。もちろん、科学が発達しているため兵士が持っている武器も桁違いの性能だった。それ故、なんとも他の国から侵攻を受けている。

「はあ、はあ……………」

そんな中、プラネテューヌ国境線付近、プラネテューヌ軍2万が警備していたが敵軍5万の前に壊滅、たった2人の兵士を残して全滅してしまった。

「援軍は？」

「あと30分と言った所だな」

片や、バランスの取れた美しい身体と海のように青く艶のある長い髪を煤だらけにし、長い白と青のローブ身と籠手を身に纏い、膝をつきながら槍を構える女性。

片や、夜空の様な黒い髪に華奢な身体、炎の様な紅色の瞳の男性が黒いローブに鎧を身に纏い、敵軍へと剣を向けていた。

「きついわね……………」

「ああ…………この数はな」

敵の数は侵攻した時よりも減ったとは言え2万の兵が残っている。普通ならば、残り2人の時点で早々に決着はついているはずだ。だが、この二人だけは別格なのだ

「あー、なんだか相手にするのも面倒になってきたわ、こうなったら兵士らしく腹でも切る？」

青い髪の女性が黒い髪の男性へと戯けたように声をかける。

「なら勝手に死ね」

しかし、黒い髪の男性はそんな冗談を鼻で笑うように軽口を叩き返した。

「俺は科学者だ、そんな精神は持ち合わせてはいない、無様だろうと何だろうと生き延びてやるさ、まだまだやりたいことがたくさんあるんだ」

「あーあ、屁理屈言っちゃって、どうしてこんな風に育っちゃったのかしら」

そう言つて、青い髪の女性も立ち上がる。

「行くぞ………死ぬなよプルルート」

「そっちこそ、途中でくたばっても骨は拾ってあげないわよ………カイナ」

そうして、カイナとプルルートと呼ばれた二人は背中合わせに駆け出した。

「はああああああああ!!!」

そして、彼らはたった2人で3万の兵を全て倒しプラネテューヌへと帰還した。敵の返り血で身体の全てを真っ赤に染め上げていたという。

「もう我慢ならねえ!いつもスカした顔しやがって!」

「お前こそバカばかりしやがって、視界に入るだけでムカつくんだよ!」

「もくもくかーくんもうーちゃんもやめてよおく喧嘩しないでえ」

初めて、友達と本気で喧嘩をした

「かーくんくーアーン」

「自分で食べれる………」

「カイナも可愛いところあるんだな、ハハハ!」

初めて、食事が美味しいと感じた。

「ねえねえかーくん、これなんてどうかな?」

「良いと思うぞ」

「なあカイナ、この新しい黒のグローブどうかな!?うずめ的には白も良いかなあなんて思ったんだけどね!?でも黒の方が合ってるかなあつて思ったからあ、黒にしたんだあ!」

「ふっ……口調が崩れてるぞ」

初めて、人と一緒にいるのが楽しいと思った。

「俺はこの国を護りたい、子供も大人もみんな笑って暮らせるような国にしたい、それが俺の夢だ」

「なら、俺はその夢を手伝う。どうせお前だけじゃ無理だろうしな」

「はあ！で、できるに決まってるだろ！」

「無理だ、お前はバカだからな」

初めて、夢を持った。

「ねえ……私達のしてる事って……正しいのかしら」

「……正しいか正しくないかじゃない、俺はプラネテューヌを護りたいから、争いを無くしたいから……襲ってくる国は滅ぼさなければならぬ」

「プラネテューヌの国民よりも人を殺してでも？」

「ああ……全てを犠牲にしても、俺はこの国を……あいつをも守りたい」

「あの子は……こんな犠牲の上に建つ国を喜んでくれるのかしら」

「戦争が終われば、人を殺した罪は俺が全部背負う」

「なっ、何言ってるのよ!？」

「結局他の国の人間を殺して居るのは俺の兵器だ。だから、全て俺が悪いだ」

初めて、人が死ぬのを辛いと思った。

「させねえ！もうお前に、二度と人を殺す兵器は作らせねえ！もうお前だけに全部罪を背負わせねえって言ってんだ!!」

「いい加減にしろ！女神なら友人1人よりも国民を優先しないでどうする!?俺が国民から恐れられて、他の国民から恨まれる、それで良いだろうが！俺なんかのことを考える暇があるなら国を心配しろ！」

「友達1人守れねえ奴が国民を守るわけねえだろ！」

「俺は……もうお前に護られる資格なんかないんだよ！お前に名前を呼んでもらう資格も、お前に友達と呼んでもらう資格もないんだよ！」

初めて、自分の思いを叫んだ。いろんな初めてをお前達からもらっ

た。お前たちは……俺にできた最初の居場所だった。だから……護りたかったんだ。お前たちの笑顔を、温もりを……全てを。でも……

「ありがとう……カイナ……楽しかったよ」

俺は守れなかった。あいつの笑顔を、あいつは何も悪くないのに、国民を守っていただけなのに、誰よりもこの国のことを想って……誰よりも国民を愛していたのに……どうして、どうして……あいつが消えなければならぬ？

「良かった、これで別の女神様が誕生するな！」

「あれは女神じゃねえ、化け物だ」

違う……違う……違う……違う……違う……違う……化け物はお前たちの方だ。自分達が危なくなったらすぐ頼って祭り上げるくせに、少し安全になって恐ろしくなったら寄って集って吊るし上げる。化け物はお前たち国民だ!!お前達さえいなければ……あの子は……いや、違う。化物はもう何百万人の人間を犠牲にした……俺だ。

「グワアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

その日、プラネテューヌに突如赤黒い人型の竜が現れ、7日間建築物を壊し、燃やし、人を殺し続けたという。そして、血と硝煙の臭いが充満するプラネテューヌで何か泣き叫んでいたという。

これは……何も無かった少年カイナが希望と絶望を知り、国を滅ぼす災厄赤黒のの化け物になるまでの話

「俺は……生まれるべきではなかった」

ネプテューヌの保護者的な感じの男ZERO episode 1  
赤黒の竜降臨

時は流れ17XX年、シエアの奪い合いは続いているが昔のように国が殺しあうことがなくなったゲームギョウ界、今残っているのは大戦を生き残った4つの国だけ、その4つの中に、プラネテューヌは存在していた。

「ねえお兄さん、何してるの?」

そんな中、教会の封鎖されていた場所に1人の女神候補生がふらりと迷い込んだ。そこは普通の牢獄とは明らかに作りが古く、何百年も放置されているようだった。

「ねえー!その黒髪のお兄さん!おーい!」

彼女の目の前には牢屋のベッドに腰をかける一人の男の姿があった。顔つきは20代前半、肌は白く体は華奢で肉付きはあまり良くない。眼は少し淀んだ紅色だった。

「聞こえてないのかな?おーい!おーい!」

女神候補生の少女は声をかけても返事をしない男に何度も話しかけていた。無視されるのが嫌いなのだろうか

「ねえってば!」

しばらく話しかけ続けていると、男はようやく口を開いた。

「黙れクソガキ、舌を引きちぎってホルマリン漬けにされなくなかったらとつとと失せろ」

「ねぶう!?やつと喋ったと思ったらとんでもない毒舌だった!!!てか脅し文句が猟奇的でグロい!」

これが彼と彼女、ネプテューヌのファーストコンタクトだった。

「お兄さんの名前は?私ネプテューヌ、この国の女神候補生だよ!よろしくね!」

「聞いてない、失せろクソガキ」

「クソガキじゃないもん!ネプテューヌ!お兄さんの名前は?」

「下らん」

「あー!人に名前聞いというて自分が名乗らないなんていけないんだからねー!」

「聞いてない」

「私が言ったの聞こえてたから聞いたと一緒じゃん！」  
「何を言ってるんだお前は」

初めての印象は、うるさい奴だと思った。

「ねえ、名前は？」

「……………そんなものは無い」

「そうなの？なんで？」

「……………捨てた」

「ええー!?なんでなんで!？」

「お前には関係ない」

鬱陶しいことに、しつこく俺の名前を聞いてくる。

「むー、あつー!じゃあ私が付けてあげるよ!!」

「勝手にしろ」

「やった!えーとねえ、じゃあトウカ!」

「理由はなんだ」

「今日が10日だから」

それから、俺の名前はトウカになった。

「ねえトウカ、ゲームしよーよ!!」

「興味ない」

「いいじゃーん!しよーよ!」

「嫌だ」

「やーだー!暇なんだもん!やろうよやろうよ!!ねえつてばー!!」

「分かった!とにかく黙れ!……………一回だけだぞ」

「やったー!!」

その後、3回ほど練習し、ネプテューヌは完全に俺に勝てなくなっ  
て悔しかったのか延々と付き合わされた。

「トウカー、今日一緒に寝てもいいかな?」

「……………何かあったのか?」

「いやー、ちよつと人肌が恋しくなったといえますかーなんといいま  
すかー」

「正直に話せ」

ネプテューヌによると、お前は女神候補生なのだからもつとしつか



りしろ、自覚を付けろ。今のお前では何も役に立たない、と教会の間から遠回しにそう言われたらしい。

「みんなさ、やっぱり私のこと女神候補生としか見てないんだよ……だれも私なんて見てない」

その時のネプテューヌの顔は、何かを諦めたような悲しそうな顔だった。

「……俺のベッドは罪人用だから硬いし狭いぞ」

「うん!! あっ、でもどうやって牢屋の中に入ったら良いのこれ?」

俺は牢屋の格子を捻じ曲げてネプテューヌを入れた。

「トウカってさ、脱獄しないの?」

「脱獄しても……行くところなんてないからな」

ネプテューヌは俺のベッドの中に入り、俺も中に入る。

「ネプテューヌ」

「なに?」

「お前が女神候補生だろうと、俺にとってお前はお前だ。それだけは覚えておけ」

そして、次の朝が来た。

「ねえトウカ、行くところ無いって言ってたよね?」

「ああ、だからどうした?」

「じゃあさ、私のところに来てくれないかな?」

「……なぜだ?」

「なんていうかさ、トウカだけなんだよ。私のことちゃんと私として見てくれるの」

「……お前が良いなら、俺は構わない」

それから、俺はネプテューヌの元で暮らし始めた。もちろん、ただ住んでいるわけにもいかなかったため、クエストをしたり仕事を手伝ったりしながら暮らしていた。そんな生活が、数ヶ月続いた時だ

「トウカ……私のこと……強くして?」

「どうしてだ?」

「大切な物……全部護りたいんだよ」

ネプテューヌの目は、いつか見たあいつの目にそっくりだった。  
「…………やるからには手加減はしないぞ」

「うんー！」

それから何十年の月日が流れ、ネプテューヌは女神化を果たし……  
プラネテューヌの女神へと就任した。

「ふっふーん、これで私も女神だよ!!」

「ああ……………そうだな」

「お祝いにプレゼントとかくれちやっても良いんだよ!?!」

「なら、これをやろう」

俺は、着ていた白いパーカーをネプテューヌに着せ、紫色の懐中時計を首にかけた。

「これ、トウカのパーカーと懐中時計…………」

「やはり少し大きいな」

俺が着てたからか、パーカーはネプテューヌの腰あたりまでであった。

「嫌なら別のものにするが…………」

「ううん!?!これが良い!」

「そうか、なら改めて……………女神就任、おめでとう」

これは、災厄赤黒の化け物竜が希望を託しトウカネプテューヌの保護者になるまでの物語。

「お前は俺にとって、最高の女神だ」

ネプテューヌの保護者的な感じの男ZERO episode 2  
く紫の女神の誕生く

2016年夏、ハーメルンにて連載開始

「ちなみに全部嘘だ」

「「「「おおおおおおおい!!!」」」」

## 嫌な夢と恐怖？

目を開くと、そこは青い空が広がる綺麗な草原だった。

「うわあ〜綺麗〜でもここどこなんだろう？」

確か私はトウカの部屋で寝てたはずなんだけど、なんでこんなところにいるんだろ？もしかしてここは現実じゃなくて夢とか？なーんだ夢か。でも自分の夢を夢って分かることなんかそんなにないから、どうせなら楽しもつかない!!

「とりあえず一人じゃさみしいなあ、トウカを呼ばー！」

夢の中なんだし、自分の思い通りになるよね!!トウカを呼んでえ〜現実ではできないことを……………ふふふふ

「トウカー！トウカってばー！」

私がそう名前を呼んで辺りを見渡すと、いつもの黒いロングコートを着たトウカが居た。やっと出てきた…………もう、夢なのに出てくるの遅いなあ全く。

「トウカーー！」

私がトウカに駆け寄ろうとすると、トウカはいつもの優しい微笑みを私に向けた後、私に背を向けて歩き始めた。あれ？なんでこっち来てくれないの？私の想像だとネプテューヌ！って言いながら思いつきり抱きついて来る予定だったのに!!

「ちよつとトウカー！そつちじゃないよ!？」

私の声が聞こえているのか、聞こえないのか、トウカはどんどん遠ざかっていく。私が必死に追いかけても、全然追いつけない。嫌な予感がする、まるで私の前からトウカが消えそうな気がした。だから私はさらに足を早めた。

「待ってよトウカー！無視しないでよ、ねえ！トウカってば！なんで何も言ってくれないの!?!トウカ待ってよ！ねぷう！」

私はついに転んでしまった。痛くないから多分本当に夢なんだと思うけど…………それでも、トウカは私の前からどんどん遠ざかる。立ち上がろうとしても、立ちあがれない、私はトウカに手を伸ばすしかなかった。

「やだ……やだやだやだやだやだ!!!やだよトウカ!私を一人にしないでよ、ねえ!!ねえつてば!トウカ!トウカアアアアアアア!!」

そしてトウカは、私の前から消えてしまった。

「ねぷつ!」

気がつくところそこは見慣れたトウカの部屋だった。今のは夢……だよね?

「あーもうやな夢見た!こういう時はトウカに包まれながら二度寝だよね」

そう思つてトウカの胸の中にダイブしようと思つたら、トウカはもうベットにはいなくて、ネプギアしか居なかった。もう起きたのかな?

「なーんだ、居ないならしょうがないや、ネプギアと寝よ」

私はもう一回ベットに入った。ところでトウカは何してるんだろう?この時間ならもう私のこと起こしにくるはずなんだけども……いやいや、無いでしょ。どうせその辺で甘いコーヒーでも飲んでキリッチーズをトーストに塗って食べてるんだよ。

「……トウカ起こしに来ないなあ」

……まさか本当に居なくなつて……?いや、そんなことあるわけないよ!そんなわけ……

「トウカー?」

シーン、返事がない、ただの屍のようだ。じゃなーい!

「トウカー!!」

私はベッドから飛び降りて部屋中を探し回る、キッチン、リビング、それから浴室、全部見たけどいない!!やばいやばいどうしよう!?

「トウカー!」

私はついにトウカの部屋を開けた。そこには

「なんだ朝から騒々しい、近所迷惑だろう」

着替え最中のトウカが居た。上半身は服を着る途中で言わば半脱ぎの様な感じになつてる。相変わらず白くて綺麗な裸してるなあ………華奢だし。

「良かったあ！」

「うわっ！なんだいきなり!？」

トウカが居てくれたのが嬉しくて思わず抱きついた。今は服を着てるから両手塞がってるから抵抗できないもんねえ！

「えへへ……………」

「なんだいきなり……………気持ち悪いヤツめ」

「ねぶう!?!気持ち悪いは失礼だよ!？」

「人の素肌に笑顔で顔を擦り付けている奴を気持ち悪いと言って何が悪い」

そして私は頭に肘を落とされてトウカの体から引き離されてしまった。トウカの体に顔をすりすりしてた時、トウカの体が2回くらいビクツとしてたのは気のせいかな？



「全く……………」

「どうしたんですか先輩」

「ああ、ライ……………副団長」

「だから、副団長はやめてくださいってば」

トウカが執務室で仕事をしていると、そこにライトが何枚か書類を持ってやってきた。トウカがライトのことを副団長と呼ぶのは、彼女が昔アイリス率いるプラネテューヌ聖騎士団の副団長だったからだ。「それで、どうした？」

「はい、団長がこの書類はトウカさんの判が要るって言ってたので届けに来ました」

「わざわざ悪いな、ありがとう」

「それで、なんでため息ついてたんですか？」

「ああ……………実はな」

今日1日、ネプテューヌが一切トウカから離れようとしないのでどこに行くのも一緒に行きたがり、今はイストワールに叱られて仕方なく仕事をしているようだ。

「きつと先輩がまた攫われないか不安なんですよ」

「それにしても……………なんというか、異常だぞ?？」

「それだけ大切だつてことですよ」

大切と思われるのは嬉しいのだが、流石に四六時中居られると困惑してしまった。

「もうすぐ夜か……副団長、アイリスを呼んできてくれるか」

「分かりました」

そして数分後、仕事のし過ぎでイライラしてるのか不機嫌そうなアイリスがやってきた。

「なによ用事つて、疲れてるんだからしょうもない用事だったら転がすわよ」

「落ち着け」

訳のわからないことを言いながらアイリスは椅子に腰かけた。

「今日は忙しかったからな、晩飯でもどうかと思つたんだが」

「おごり？」

「もちろんだ」

「やったあ！流石トウカ、部下のこと良くわかつてるわね！」

子供のようににはしゃぐアイリスに苦笑しながらトウカは最後の仕事を終えた。

「副団長も行くだろ？」

「良いんですか!？」

「当たり前じゃない♪」

「なんでお前が自慢げなんだ」

アイリスに相変わらず呆れながら三人は教会から外に出る。もう

街は暗く、街灯が明るく灯っていた。

「今日はなんでもおごつてやろう、食べたいものはあるか」

「焼き鳥」

「好きですね団長……」

「お前はどこまでも食べ物がおつきんくさいな」

そういう訳で、三人は焼き鳥屋に向かって歩いて行った。



数十分後、三人は焼き鳥屋のカウンターに居た。店員が注文を聞きにやってくる、アイリスがまず頼んだのが

「まず生ビールジョッキで！」

10人中10人が美人と言うであろう女が初めに頼むのがジョッキビールとは、現実とは残酷である。

「俺はヌカコーラで」

「ペプスじゃないのね」

「あのコーラは苦い」

ヌカコーラは赤いラベルのみんな大好きな甘いコーラである。そしてペプスは少し苦い大人向けのコーラ、トウカは甘党なのでコーラはヌカコーラしか飲まない。

「副団長はどうするんだ？」

「じゃあ私は赤兎馬（芋焼酎）で」

まさか店員も20歳、もしくはそれ以下の女性がマイナーな芋焼酎を頼むとは思ってなかったのか少しフリーズして厨房へと帰っていった。

「貴方本当に渋いわよね……」

「そうですか？」

実年齢を考えればそんなに渋くもないのだが、外見が昔のままなので辺りから見ればシニールでしかない。

「まあ、とりあえず何を頼むか」

「私はくえつと、ねぎま2本とせせり2本と皮1本と身を3本」

「俺は手羽先3本と身を2本とつくねを卵付きで2本」

「じゃあ私は砂ずり（砂肝）を2本とねぎま2本で」

砂ずりとは鶏が食べ物をすり潰す筋肉のことで、くせがないコリつとした食感が楽しめる部位である。

「とうかトウカは本当に飲まないわね」

「そんなに強くないし、明日はネプギアと約束があるからな」

そうしたまま、三人は食事をしながら昔のことなどを話した。

「そういうばげハバーンはどうしたのよ？」

「まだ預かってる、どこに封印するか考えてる途中でな」

「そうなんですか……カイナさんたちは？」

「とりあえずカイナは負傷していたから病院だ」



プルルートとあちらのユニは病院にいるカイナにずっと付いていた。

「なーんか、色々と面倒なことになりそうね」

「そうだな………副団長、お前は何かしらないのか？」

「はい、先輩を攫えとしか言われなかったので」

敵の所にいたライトですら、敵の正体は分かっているらしい。

「うん？すまんメールだ」

トウカはメールを見た瞬間、珍しく他の人間が分かるくらい顔を青くしていた。一緒に育ってきたアイリスが、これは只事ではないと一瞬で察知する。

「どうしたのよ!？」

「ね、ネプテューヌからメールが来ただけだ」

「どんなメールなのよ!？」

明らかにトウカの様子がおかしい、足がガクガクと震えている。

「マスター！テキーラをジョッキで持ってきてくれ!？」

「ジョッキですか!？」

「ジョッキだ！いいからもってこい!」

「先輩テキーラジョッキとか聞いたことないです!!」

「落ち着きなさいって、貴方お酒弱いんだからテキーラをジョッキなんかで飲んだら倒れるわよ!？」

その後、トウカはアイリス達の制止を聞かず、テキーラジョッキを一気飲みしてぶっ倒れたという。

## ネプギアとの模擬戦闘

あの時、私はトウカを護れなかった。あの黒い鎧に、何も出来なかった。私は弱い、いつか……トウカのように強くなりたい。けど、それはいつになるのだろうか？

「私………女神化してから成長してないよね」

胸がチクチクと痛む、私はいつか……みんなに取り残されてしまうんじゃないだろうか？私は一生……護られ続けるのかな？

「やだよ、そんなの」

私も、誰かを守るくらい強くなりたい。だから………

「今日のクエスト終わり、トウカに頼んでみよう」

そう思い、私はトウカとの約束場所に向かった。



「大丈夫ですかトウカ」

「大丈夫だ」

昨日、ネプテユーンのメールによって恐怖を覚えたトウカは酒が飲めないにも関わらずアルコールが強いテキィラをジョッキで飲んでしまいぶっ倒れてしまったのだ。それゆえ、二日酔いのような頭痛に悩まされている。

「それより、今回のクエスト内容を教えてくれ」

「はい、今回のクエストは大量発生したモンスターの討伐です」

内容を見ると、あまり強い相手ではないのだが、いかんせん数が多いらしく少し面倒になりそうだ。

「まあ数が多くても所詮は雑魚だ、油断しなければ問題は無いだろう」

「そうですね、頑張りましょう！」

こうしてネプギアとトウカはクエストへ向かう。



「さてと、行くか」

「珍しいですね、トウカが実体剣持ってるなんて」

「たまにはな」

トウカは普段素手なのだが、今回は普通のブロードソードを装備し

てくるくると回していた。

「昔はこの剣一本で生きてたよ」

遙か昔のこと、誰にも頼ることができず、自分一人で生きていた幼少の頃をトウカは思い出していた。まるで終わりのない暗闇をたった一人で歩いているような、そんな感覚だった。誰も頼れない、あの時分かっていたことは、生きるためには何かを食べたり飲まなければいけない。そして、人を殺せばそれが出来るということだけだった。「さて、感傷に浸るのもそろそろやめるか」

「そうですね、頑張りましょう」

ネプギアはビームソードを取り出し、トウカの隣に並ぶ。目の前にはこの前見たスライヌの大群がまた発生していた。

「行くぞー！」

トウカは前に出てスライヌに向かい一閃、何体かのスライヌを倒した後、飛び掛かってくる個体に斬撃を浴びせながら囲まれないように立ち回る。

普段トウカの戦闘は一瞬で終わる、もしくは地形が変わるほどの激しいものになるためトウカが戦っている姿を見るのはネプギアにとってはこれが初めてだった。

訓練はいつでも見てるんじゃないか？と思うだろうが、トウカを相手にしているときに太刀筋が綺麗などということを考えている暇はないのだ。

トウカの剣術は一つ一つが洗練されてとても綺麗な動きで相手の攻撃を躲しながら確実に捉えている、それが一朝一夕でできる事ではないと、ネプギアにも分かった。

「やっぱり凄いな……………」

自分も負けていられないと、前の反省点も生かしてスライヌたちを退治していく。囲まれないように、一番近い相手をビームソードで切り裂き

「はああああー！」

瞬く間に5体のスライヌを倒した。しかし、あの時トウカは今の自分の4倍である20体を倒していた。しかも、あの時トウカの中では

モンスター退治、としてではなくネプギア達への指導として軽く行っていたのだ。全力で5体しか倒せない自分はまだまだだ。

(あの黒い鎧にも、一瞬で倒されちゃったもん……まだまだ私強くなりたい………トウカさんみたいに)

その一心で、ネプギアは引き続きスライヌを倒していく。

それから数分後、すべてのスライヌを倒し終えた二人は木の下で座り休憩していた。

「成長したなネプギア」

「いえ……まだまだです」

「そんなこと無いさ、今回一度もスライヌに攻撃されなかつただろ？ それだけ成長してるとって事だ」

ぽんぽんつ、とネプギアの頭を撫でた。しかし、ネプギアは何かを決意したのか立ち上がった。

「トウカさん、一つお願いしても良いですか？」

「ああ、構わないぞ」

「じゃあ私と………模擬戦してくれませんか」



場所は変わって比較的街から遠い荒野、ここならば誰にも迷惑はかからないし、壊しても問題はないということと移動してきた。

「本当にいいのか？」

「はい、私がどれくらいトウカさんに通用するのか……確かめたいんです。手加減なしで本気でお願いします」

ネプギアは女神化して銃剣を強く握る。勝てるなど思っていない、だが自分が今……トウカにどれほど追いついたのかを知りたいがために、ネプギアは彼に向かい銃剣を向ける。トウカからは殺気も何も飛んできてはいない、それはいつものことだ。

「お姉ちゃんはトウカさんにどれくらい近いんですか？」

「まだまだだ、漫画を読みながらも勝てる」

自分よりもはるかに強い姉であるネプテューヌが軽くあしらわれる、それほどまでに彼は強いのだ。それは当然だろう、ネプテューヌを育てたのはトウカなのだから。

「さて、俺は先ほどと一緒にブロードソードを使うが、それでいいか？」

「トウカさんを本気にさせられるように努力します」

「そうか、なら少しだけ……殺す気で行ってやる」

トウカの目に少し殺気が含まれた。いつも目つきは悪いが、今はそれだけで相手を射殺すのではないかというほど恐ろしい目つきになっている。

「行きますー！」

まずネプギアはトウカの出方を図るため空中へ飛翔しビームを乱れ打つ。彼女の予想だと、トウカはこれを躲して飛び上がり近接戦闘へと持ち込むだろう。ならば躲している隙に照準を合わせ、フルチャージのビームをトウカに当てる。これがネプギアの作戦だ。

しかし、彼女の作戦は早くも破綻することになる

「距離をとって射撃というのはいい判断だが……俺がいつ遠距離戦ができないと言った？」

ゾワツと、ネプギアに悪寒が走った。そうだ、いくらブロードソードだけを使うといっても、彼には数え切れないほどの特殊能力が備わっているのだ。

「炎上波！」

トウカはネプギアのビームを剣で弾いた後、ブロードソードに豪炎を纏わせネプギアへと振るう。すると、炎の刃となってネプギアへ放たれた。凄まじい速度の炎剣をなんとか躲すと、それは空中で爆発を起こした。

「ふむ、たつたいま即興で編み出した技だが……中々の威力だな」

即興で編み出したといっても、その威力はエンシェントドラゴンならば即死レベルの威力だった。それを即興で編み出せるというのは、やはり経験と実力だろう。

「さて、終わりか？」

（トウカさん相手にあれこれ考えてもダメ！私の全力を、とにかくぶつけなきゃ!!）

ネプギアはトウカの元へと全力で飛翔し、その速度を生かして斬撃

を放つ。もちろんトウカはそれを躲し、地面すれすれで飛行するネプギアを追いかけながら斬撃を浴びせ合う。二人の姿は何度も交差し、彼らが通る地面には亀裂が走った。

(アイリスさんが言った、トウカは数え切れないほどの能力を持って、普段はそれを使う必要がないから使っていないだけでだつて)

現在、ネプギアが確認しているトウカの特殊能力は3つ。

一つは炎、これがトウカの代名詞でもあり最大の攻撃力でもある。この炎は爆発もすれば相手を焼き殺すことも、武器に纏わせることも、背中に炎の翼を展開して空を飛ぶこともできる万能の炎、ネプギアが知らない使い方もあるかもしれない。

そして二つ目は瞬間移動、これはその名の通り遠くの場所に瞬時に移動するためのもの。だが、戦闘では使ったところは見たことがない、トウカの身体能力なら短距離であれば使う必要もない。そして、恐らく何かしらの理由があつて連発はできないのだろう。

それから3つ目は超回復

これはどんな傷でも瞬時に直すことができる優れた能力だ。しかし、傷によつてはすぐには治らないこともあるが、時間をかければ部位が欠損しようと絶対に治る。

これらの中で一番の脅威となるのは炎だけだろう、しかしそれ以上にトウカの経験と実力はそれだけではない。身体能力ですら女神を軽く超えている。恐らく身体能力を同じにしても剣術では手も足も出ないだろう。

「なら、全力で！」

ネプギアは飛翔し敢えてトウカの周りをビームで撃ち土煙を発生させ、MATLのチャージを開始、地面に降り立つ。そきて……………「当たれええええええええええええええええええ！」

彼女の最大火力がトウカを捉えた。避ける暇はない、確実に当たつたのだ。

「当たった……………当たった！」

「ああ、今のはいい当たりだつたぞ」

トウカはネプギアの隣でそう答えた。

「え？」

「俺の勝ちだな」

すつ、とネプギアの首元に剣が当てられた。これでトウカの勝ちが確定する。

「どう……………して？」

「どうしても何も、隙ができたからな」

ここで初めて、彼女は過ちを理解する。そう、ネプテューヌですら勝てない、いや……………四女神が束になっても数分で負けるような相手に、自分一人の最大火力が当たったからと言って、それが効いている訳ではないのだ。トウカにしてみれば、ネプギアの攻撃は避けるまでもない、ただボールが普通の人間がボールに当たったぐらいの衝撃しか伝わっていないのだろう。

「とりあえず模擬戦はこれで終わりだ」

そう言っつて、トウカはネプギアに背を向けて歩き出した。しかし、

ネプギアはまだ……………納得出来ない。

「まだ……………トウカの本気を見てません」

「まだ言ってるのか」

はあ、とトウカはため息をつく。どうしてネプギアはそんなに自分の本気を見たいのか分からないからだ。

「私は……………弱いんです……………」

ネプギアは、うつむいて銃剣を強く握りしめる。

「トウカが捕まっていた時も、私はお姉ちゃんやアイリスさんの手助けをただけで……………黒鎧が現れた時も無意識のトウカに助けられました。結局私……………護られてばかりで、何一つ守れてない!!」

いつの間にか、ネプギアは叫んでいた。女神化を果たしたと言っても、それはただのスタートラインでしかない。ネプギアはそのスタートから今だ成長出来てないのだ。

「トウカもアイリスさんもお姉ちゃんもライトさんも、カイナさんもプルルートさんも、みんな私より強くて……………でも、私は護られてるだけじゃもう嫌なんです！」

「ネプテューヌやみんなを護りたい気持ちは分かる、だが「それだけ

じゃない！」

トウカの言葉を、ネプギアは遮った。

「私はいつか……トウカみたいに強くなりたい！」

トウカは彼女がネプテューヌ達を護りたいから、力を求めているのだと思った。だが違う、ネプギアが見据えていたのは遙か先……トウカの様な全てを守れるような強さだった。

「だから、私は今よりもっと」

そういうネプギアの前に突如飛び込んできたのは、拳、それもバチバチと電気を纏う拳だった。その拳はネプギアのほんの少し前で停止した後、辺りにとてつもない衝撃が走った。まるで、世界すべてが持ち上げられ、落とされたような、そんな衝撃が。

「あまり、これは使いたくないんだ……痛いからな」

いつの間にかトウカの右腕は血まみれのボロボロになっており、もはや見るに堪えないものになっていた。そのままトウカは右腕をダラン、と垂らしている。

「お前の気持ちは分かった……焦る気持ちもわかる。だからと言ってすぐに強くなれるわけではないんだ。長い月日をかけて、ようやく人というのは成長する。俺だって初めは弱かった、誰だって始まりは一緒なんだよ」

彼は残った左腕で、ネプギアの頭をそっと撫でる。

「強くなりたいなら、尚更焦ってはダメだ。無理して強くなって体でも壊したら、ネプテューヌやみんなが悲しむぞ。もちろん、ネプギアが傷ついたら俺だって悲しいんだ」

彼の顔は、先程一瞬だけのぞかせた物とは全然違う、いつもの様な慈愛に満ちた表情だった。

「はい……ごめんなさい」

「さあ、帰ろう」

トウカは右腕を抑えながら再びネプギアに背を向けて歩き始めたのだが

「ネプギア、最後に少しだけ言っておく」

「はい？」



「……俺の様にはなるな」

「えっ?」

トウカは空を見上げながら悲しそうに言う。

「俺の力は何かを殺すことでしか何かを守ることができない。血にまみれた醜悪なものだ。お前やネプテューヌには、こんな力を持つて欲しくない」

「じゃあ……トウカはどうしてその力を手に入れたの?」

そして、ネプギアを見た。

「護りたかったんだ、護りたかったんだよ……例え悪魔や死神、化物、虐殺者と罵られようと、仲間が目の前で死んでも……体が血にまみれようと……俺はあいつを……彼奴のたったひとつの願いを……護りたかったんだよ」

彼が初めて涙を流す光景を。

「ほら、早く帰ろう」

「……………はい」

ネプギアが後ろを振り返ると、何故か50km先の海が……すぐ後ろに存在していた。そう、先程のトウカの一撃は荒野を消しとばし、その消し飛んだ所に海水が流れて海と繋がったのだった。

ネプギアは思う、トウカは本当に……人間なのかと。

『臨時ニュースです、プラネテューヌの西方に位置する荒野でとてつもない爆発が起き、50kmほど大陸がえぐられたとの情報が入りました。原因はわかっておらず、各国は原因究明を急いでいます』

それを見た各国の女神は思う

((トウカ何やってんの………?))

そして、ネプギアと呑気にアイスを食べながら帰ってきた元凶を見たネプテューヌは何とも言えない感情に苛まれた。

見えないところで頑張っている人間は敏感な所が多い

カイナが病院を退院して数日後、カイナたちはプラネテューヌ教会でお世話になってた。もちろん、ただ居るだけでは悪いということでもクエストなどをしていただけののだが

「かーくん？これ？誰かな？」

「いや、あのね？それよりもお前が俺の携帯のロックを解除しているのかを聞きたいんだけど？」

「今は？私が質問してるんだよ？」

現在、カイナの携帯に知らない名前が登録されていたためプルルトが詰め寄っているのだ。ちなみにユニもカイナにサブマシンガンを向けている。

「この鉄拳ってだれ？」

「それはお前……元の次元の男友達だよ」

「へえ？男の子なのにちゃんつけするんだ？」

「すつごく仲良くてさあ！あいつも俺のことカイちゃんって呼ぶんだよ！もうほんと仲良い、親友って言っても良いくらいなんだよ！」

「へえー、メールの内容は女の子みたいだよ？」

鉄拳と呼ばれる人物から送られてきたメールには

差出人：鉄拳ちゃん

宛先 カイナ

今日は楽しかったよ、わざわざお仕事の仕事の休み時間に来てくれてすごく嬉しかった。また遊びに誘ってくれたら嬉しいな、今度は私がカイナくんの行きたい所に付き合うからね。あと、これから……カイナくんの事呼び捨てでも……いいかな／／

「しかもカイちゃん、じゃなくてカイナくんって呼んでるし」

「有罪だよねえ？ユニちゃん」

「いやあ、その……」

せつかく病院から退院したばかりなのに命の危機に瀕しているカ

イナ、冷や汗が止まらない。

「それで？返信は？」

「これだねえ〜」

差出人カイナ

宛先 鉄拳ちゃん

おう、楽しかったなら良かった。これからは少し忙しくなるから一ヶ月後くらいにまた誘う事にする、あと、別に呼び捨てでもいいぞ。俺も呼び捨てにするから、

プルルートの奴には内緒だぞ、うるさいからな

「ふーん、私うるさいんだあ〜」

「いやいやいや！だって普通の友達だぞ!?なんで友達と遊びに行っただけで怒られなきやいけねえんだよ!?!」

「私も〜男の子の友達なら何も言わないけどね〜女の子はダメだよお〜」だつて〜浮気じゃない〜」

プルルートの口調が変わった。完全に怒っている、これはダメだ。そう悟った時は既に遅く、彼女は女神化してアイリスハートになっていた。

「お嫁さんを放つて浮気するような夫には…………お仕置が必要よねえユニちゃん？」

「こいつの嫁はあんたじゃなくてノワールだけど…………確かに浮気ね」

「色々間違ってるぞおおお!?俺はお前の夫でも無ければノワ子は友達だぞ!!」

「ユニちゃん、抑えて」

ガシツとカイナは白いユニにホールドされてしまう。そして、プルルートは後ろから抱きつき

「はむっ」

「あああああああ?」

カイナの耳たぶに甘噛みをした。そしてさらに、脇腹と鎖骨を撫でながらはむはむと甘噛みを続けていると、カイナはビクツと体を震わせながら抵抗する。

「あつ、やめ……ろ……んっ！」

「んふふ、ダメよお、お仕置きなんだから……」

「ああああああ……！！」

そしてついに、カイナはガクツと膝をつく。顔はトロンとしており、体はビクビクと体を震わせて居た。

「相変わらず敏感なのねえ、耳と鎖骨と脇腹」

「うる……せえ」

「あらあ、まだ私にそんな口きくの？悪い子ねえ」

「は？おいちよつと待て！！もうやめっ！あああ！」

そしてその様子を、ネプテューヌはこっそりと見ていた。

（うわあ、カイナ顔がとろけてるよ………待てよ？カイナとトウカは体自体はほとんど一緒なんだから敏感なところも一緒なんじゃない!?!）

そう考えたネプテューヌは早速トウカの執務室へと向かう。中を覗くと、

（うわあ………今は入れないよ……）

トウカは恐ろしいスピードで仕事をしていた。相変わらずの無表情のため普通の人間にはわからないだろうが、ネプテューヌには分かった。トウカは今物凄く疲れている。ここで余計なことをしたら命は無い

「しよーがない、ゲームでもしよー」

もちろん彼女の中には自分も仕事をしようなんていう考えは微塵もない。



「うん、ゲームしていると時間が経つってあつという間だよね」

ネプテューヌが気がつくとき、時間はすでに翌朝の5時、食事以外はずっとゲームをしていたので今回も仕事はしていない。

「オンラインも人いなくなってきたし、日朝までは時間あるし……まだ全員寝てるだろうし……どうしようかな」

うーん、と考えつつも彼女の足は無意識にトウカの執務室へと向かっていった。

「そうだ！トウカに遊んでもらおう！ってもうトウカの部屋の前だ……無意識に向かってたんだね、自然とトウカを求めちゃうように出来ちゃってるよ……これはもう責任取ってもらうしかないね」

そんな事を言いつつ、ネプテューヌはトウカの部屋へと入る。すると、彼は居なかった。どこにいるのかというと、執務室のすぐ隣にある仮眠室で眠っていたのだ。

「ええー、寝てるの？最後の砦まで無くなったよお、どうしようかな」ふと、ネプテューヌはトウカのデスクを見てみると、おびただしい数の書類があった。仕事嫌いのネプテューヌとしては見るだけでも嫌なのだが。

「トウカってこんなに仕事してるんだね、しかも私が遊んでつて言ったら遊んでくれるし……私がたまに無理やりさせられる仕事も、トウカが半分くらい肩代わりしてくれてるのが流れてきてるだけなんだよね……」

トウカのデスクには書類が多い、それは他の人間のデスクも同じなのだが、トウカの量は異常である。それもそうだろう、彼はネプテューヌを始めイストワールやネプギア、アイリスはもちろんのこと、一般の教会職員の負担が減るように自分が半分ほど肩代わりしているのだから。

今のプラネテューヌ教会の仕事はトウカが半分ほどやっていると言っても過言ではない。

「……………なんか急に罪悪感湧いてきた」

お調子者の彼女でも、流星に罪悪感を感じる時はある。自分が遊び呆けている間にも、トウカは自分の仕事まで引き受けてくれたのだから。

「うー、トウカに遊んで欲しいけど……………流星に起こすの悪いし……………でも日朝まで暇だなあ……………」

流星に寝てしまうと起きられないため、寝るという選択肢はない。ゲームも今は誰もいない、という事は答えはひとつなのだが、彼女はその選択肢を必死に回避しようとする。しかし、それは無理だろう。「仕事するしかないかなあ……………」

心底嫌そうな顔をするが、仕方なくトウカのデスクに座る。彼女が座ると、書類の山で周りが全く見えなくなった。

「よし、ちよつとだけやろう!」

そうして珍しく、ネプテューヌは仕事を始めた。



5分後、トウカは目を覚ました。時刻は午前5時30分、普通の間ならまだ眠っている時間帯だが

「30分か……寝過ぎたな」

30分で寝過ぎた、というこの異常な男は顔を洗って執務室へと向かう。すると、そこには珍しい先客がいた。

「ネプテューヌ?」

ネプテューヌがトウカのデスクに腰掛け、眠っていた。手元には一枚の書類、そう、ネプテューヌは仕事を始めた方がいいが5分で眠ってしまったのだ。彼女らしいといえば彼女らしいのだが。

「……………手伝おうとして眠ったのか、全く……………」

トウカは呆れながらもネプテューヌを抱き上げて仮眠室まで戻り、彼女をベッドに入れる。

「さて、やるか」

そう意気込み執務室へと向かうが、その手を取る人物がいた。

「トウカ……………」

「なんだ、起きたのか?」

ネプテューヌが少しだけ目を覚ましたのだ。

「そのまま寝てていいぞ」

「トウカも寝よ?」

「俺は仕事がある」

「いいから、寝ようよ」

ギョツとトウカの手を離さないネプテューヌはグイツと彼の手を引っ張る。

「トウカほとんど寝てないでしょ? 私もだから、一緒に寝ようよ。一人で寝るの寂しいよ」

半分ほど眠っているのか、甘ったるい声でトウカにせがむ。トウカ

は、ネプテューヌがわがままを言う振りをして自分を気遣ってくれているということが一瞬でわかった。

「……………分かった」

トウカはベッドに入る。

「おやすみ、ネプテューヌ」

「うん、おやすみ」

そう言っただけでトウカはもう一度眠りにつく、しかし……………それだけでは終わらない。

「はむ」

「っ!？」

ネプテューヌは彼の耳たぶをはむつと甘噛みした。

「ネプテューヌっ、おい」

「はむはむ」

しかも、彼の鎖骨と脇腹を撫でながらガツチリと離さない。

「ああっ、やめろ」

思わず声が漏れる、敏感なところをずっと触られると誰でもこうなるだろう。

「えへへ……………トウカあ……………」

「やめろっ、コラッ……………」

その状態が30分ほど続き、いつの間にか眠りについていたという。ちなみに起きたのは12時過ぎだったとか。



## 寝落ちして回想

今日は休みだ。なぜかと言うと、それは数時間前まで遡ることになる。いつものように仕事を始めようかと思うと、朝早くからネプテューヌがイストワールに怒られていた。

「どうした?」

「トウカ助けて! いーすんがブチ切れいーすんなんだよ!」

「また何かやったのか?」

「逆です! ネプテューヌさん、今日こそ仕事をきっちりしてもらいますからね! トウカさんがどれだけ大変か分かってるんですか!」

俺は別に構わないんだが……というかこの前少し手伝わってもらっただけで満足だ。5分持たずに眠っていたが、その気持ちだけで嬉しい。

「分かってるけどさあ、なんか気分が乗らないといいますが、ゲームの配信イベントが近いというか」

「ダメです! お仕事が終わらない限りイベントも参加しちやダメですからね!」

「やだよ! ずっと前から楽しみにしてたんだから!」

「ならそのイベント終わりから仕事を始めろ、それまではやっといてやる」

「ダメです!」

きつぱりと、イストワールに怒られてしまった。

「トウカさんはネプテューヌさんに厳しい振りして甘過ぎます!」

「いや、トウカも怒る時はすっごい厳しいよ?」

「昔に比べたら全然です! 昔のトウカさんならネプテューヌは死んでますよ!」

「そこまで厳しくはない」

幾ら何でも失礼だぞ。

「……はあ、もう分かりました。イベントは参加してもいいです」

「やったあ! さっすがいーすん!」

「ただし、今日一日トウカさんの仕事を全部肩代わりしてください」

ちよつと待て、それはおかしい。

「ねぶう!?あの仕事量を一人でやるの!?無理無理無理!完璧超人のトウカと一緒にしないでよ!!」

「だれが完璧超人だ、俺だつて限界はある」

「トウカさんの仕事での最高徹夜記録は2週間です」

「死んじやうううううう!そんなの死んじやうつて!」

二週間徹夜……ああ、そういえばそんな事もしたか。まあ科学者の頃は一ヶ月徹夜とかザラだったからそんなに辛くもない。

「じゃあ俺は今日1日何をすればいい?」

「トウカさんは今日は教会立ち入り禁止です、ゆっくり休んでください。仕事のし過ぎです」

「トウカだけ休み!?そんなのズルいよ!!」

「俺だけ休みだど!?他の教会職員に申し訳ないだろうが!!」

「なぜ休みと言われてトウカさんは怒るんでしょうか?」

ネプテューヌやネプギアたちが働いているのに俺だけ呑気に過ごすなど考えられん。他も休みの休日に休むのはいいが平日に休むのは流石に罪悪感が湧く。きっと他の教会職員からも苦情が来るだろう。

「とにかく、ネプテューヌさんは今日1日仕事!トウカさんはお休みです!良いですね!」

「嫌だ!」

「息ぴったり!?もう良いです!アイリスさん、ライトさん!」

そう呼ぶと、アイリスとライトが俺を掴んで教会の外へと連行して行く。

「はいはいトウカくん、いいからお外行きましようねえ〜」

「先輩、今日は休んでください、仕事漬けだったじゃないですか……」

「待て!ネプテューヌだけに任せたら滅茶苦茶になる!HANASE!」

「ねぶう!?私の心配じゃなくて仕事の心配してたの!」

「ほら、某カードゲームのフェアオミたいに言ってもダメなものだ

メ」

そういう訳で、俺は教会を追い出されたのだった。

◆◆  
「はあ……………」

現在、トウカはラスティション近郊を歩いている。特にやることがないのでぶらぶらと散歩をしているのだ。彼には仕事以外、あまりやることがないのである。

「あら？トウカじゃない」

ぶらぶらとしていると、ノワールに出会った。

「ノワールか」

「こんなところで何してるのよ」

トウカはノワールに今朝起きたことを話した。

「ネプテューヌも相変わらずね……………それで、1日休みをもらったけど一人ではやること無いからフラフラしてたわけ？」

「ああ」

そう言ってる間にも、トウカの目はうつらうつらしている。眠いのだろうか

「トウカ、あなた最近寝てるの？」

「ちゃんと寝てるぞ」

「昨日は何時に寝たの？」

「昨日というより今日の午前6時から6時30分までだな」

「30分しか寝てないじゃない!？」

「最近色々あって仕事が溜まっててな、一昨日は5分だった」

「じゃあフラフラしてないで寝なさいよ……………」

それを聞いてトウカは顎に手を当てて考え……………

「その発想は無かった」

「逆になんでその発想が出てこないのよ!？」

どうやら最近あまりにも睡眠を取ってないので彼の生理的欲求から睡眠というものが抜け落ちていたようだ。普通の人間は眠ければ寝るものだが、この男は寝るといふ行為を忘れていたのだ。

「だが、他の教会職員やネプテューヌが頑張っている間に眠るのは罪

悪感が……」

「まあ、その気持ちはわかるけど……」

「イストワールには首を傾げられたぞ」

「普通の人間からすればそうよね」

「やはり俺たちは似ているようだ」

確かにトウカとノワールには共通点が多い。

あまり似ていないように思えるが、同年代に対して素直じゃないところや、しつかり者で頑張り屋な所、常識人(他の面子に比べたら)など、挙げれば意外と多いのだ。

彼と彼女の最大の違いは、ノワールは寂しがり屋だがトウカは一人の方が楽、という所だろうか。

容姿に関しても、これはユニに対しても言えることだが、黒髪でルビーのような紅い目、実はこれはトウカとノワール、そしてユニ、この三人の特徴は全く同じなのだ。

「とりあえず、今日はゆつくり寝なさいよ」

「そうだな」

そう言ってトウカは上着を脱いで木の下へと座り込む。

「じゃあ少し寝る」

「いや、なんでここで寝るのよ？家で寝なさい」

「あてもなくここまで歩いてきたからな、帰るのがめんどくさい」

「瞬間移動を使うのも怠い、今使ったら間違えてルウィーあたりに飛びそうだな」

「全くもう……ここからなら私の教会が近いから、そこで寝れば？」

「いや、迷惑をかける訳にも行かないからここで良い」

「ああもう！良いから来なさい」

グイツとトウカはノワールに連れられてラステイションの教会内へと入っていく。客観的に見れば、ノワールが自宅に男を引き込んでいるようにも見える。

「ほら、来客用のベッドがあるから、そこで寝なさい」

「ああ……すまない」

「こういう時はありがとう、よ」

「ありがとう……………」

普段からは想像できないほど素直に言うことを聞くトウカに少しだけ微笑みながらノワールは椅子へ腰掛けた。

「速いわね……………」

ベッドに入って数秒後、トウカは寝落ちしていた。どこかのメガネ少年もびつくりの速さである。

「普段は恐ろしいくらい強いのに、寝顔はかわいいのね」

ノワールはトウカの寝顔を眺めながら初めて会った時のことを思い出した。

◆◆

数年前、守護女神戦争の途中だったノワールは心身ともに疲弊、国の内政にも手が回らない状態だったからか、シエアが徐々に下がり続けていたのだ。

「不味いわね……………」

このままでは守護女神戦争に負けてしまう、それだけは絶対に避けなければならぬ。そもそも、最近ではプラネテューヌ、リーンボックス、ルウィーが手を組むなどという情報まで流れて来る始末だ。

「とにかく何か打開策を見つけないと」

そう考えながら街中を歩いていた時だ。

「あれは確かネプテューヌの秘書……………」

黒いコートに黒いズボン、目つきの悪い紅い眼、ネプテューヌの秘書であるトウカがラストেশヨンの街中を歩いていた。

「なんでプラネテューヌの重役がこんなところに……………何か企んでるんじゃないでしょうね」

トウカはあまり表にでないため顔を知らない者も多いが、ノワールは他の国の勢力をきちんと調べているためそんなことはない。

「気になるわね、追いかけてましょ」

そして、ノワールはトウカの後を追跡する。

◆◆

「結局何がしたかったのかしら……………」

数時間尾行を続けた結果は、こいつは一体何をしに来たのかという

ことだった。教会に立ち寄ったり、普通のスイーツ屋に立ち寄ったり、ギルドに立ち寄ったり、全く行動に一貫性が持てない。そして、今はラステイション近郊を歩いている。

「さて、ここならいいだろう。出てくるといい」

ゾクリツと背筋に悪寒が走る。ノワールの尾行はずつと前から気付かれていたのだ。ここで逃げるのは無駄、それゆえ彼女は女神化してトウカの前へと出る。

「まさか女神に付けられているとはな、俺は幸運なのか、それとも不幸なのか、分からないな」

「プラネテューヌの女神秘書、トウカね？こんな所で何をしてるのかしら？」

「ああ、貴女に用事があつたんだ」

女神に用事、という所が怪しい。

「プラネテューヌはラステイションと友好条約を結びたいと思ってる」

「はあ!？」

宣戦布告かと思いきや、友好条約を結ぶと言われノワールは困惑する。

「このまま争っていてもお互い疲弊するだけだ。それなら友好条約を結んで武力でのシェアの奪い合いを禁止し、お互いの技術などで勝負してシェア競争をしたほうがいいと思う。切磋琢磨し合えばお互い良い刺激になって国も発展するだろう」

「ふざけないで！何百年も争ってるのに今更出来るわけないでしょ!？私より前の女神から争い続けてるのよ!？」

「そんなことは知ってる、だがいつまでも過去に囚われて憎しみ合って居ても仕方ないだろう」

確かに、何百年も争っているのにすぐに友好条約を結ぶといつても無理だろう。だが、争っても何も解決しないというのも事実だ。

「ネプテューヌは争いたくはないと言っている。これは紛れも無い本心だ。そもそもこの友好条約もネプテューヌが提案したものだ」

たしかに、武力での守護女神戦争が無くなれば国の内政に目を向け

られる。だが、それを許せるほど、彼女のプライドは低くないのだ。  
「残念だけど、答えはNOよ」

「はあ……お前にYESと言ってもらわなければ帰れないんだが」  
「なら、力づくで帰らせるわよ」

ノワールはトウカへと剣を向ける。普通の人間なら女神に武器を  
向けられれば怖気付くかすぐに逃げる、このどちらがなのだが

「出来れば手荒な真似はしたくないんだがな」

「そうなの？こっちは手荒な真似をしても構わないんだけど！」

そう言い終わると同時に、ノワールは地面を蹴りトウカへ剣を振る  
う。しかし、トウカは一步も動かず、剣を指でトンツと受け流し、拳  
をノワールの寸前で止めた。

「なっ！」

「もう一度だけ言うが、手荒な真似はしたくないんだ。剣を納めてく  
れ」

何をされたのかわからない、それ程までに洗練された動きを見せら  
れ、ノワールは距離を取る。強い、こいつは明らかに強い。

「はあ……仕方ない、じゃあこうしよう」

トウカはノワールに対し提案を出した。

「貴女が俺に今から2時間以内に一回でも攻撃出来れば、友好条約は  
結ばなくてもいい。ただし、一回も攻撃できなければ友好条約を結ん  
でもらう、どうだ？」

「なめられたものね……いいわ、やってやろうじゃない！」

そうして、ノワールとトウカの戦いが始まった。始まったのだが、  
それは戦いというよりノワールが一方的に攻撃しているだけのもの  
で、トウカは一切攻撃しない。

「なんで攻撃しないのよ!!」

「俺から攻撃する必要は無いからな」

そのまま時間は流れて行き、2時間後、一切攻撃ノワー  
ルはトウカに触れることができず撃沈していた。

「はあ、はあ……」

「きつちり2時間、終わりだな」

「もう2時間、もう2時間よ！」

「負けず嫌いだな……ならこうしよう」

トウカはもう一つ提案を出した。

「5分以上俺から一撃も入れられなければ、友好条約を結ばなくてもいい、どうだ？」

「上等よ！かかって来なさい！」

「よし、では……行くぞ」

ノワールが武器を構えた瞬間、彼は目の前にいた。

「えっ？」

「チェックメイトだ」

ゴスツと鈍い音が響く、トウカの拳がノワールの額を直撃したのだ。本人は最大限手加減したつもりなのだが、移動した勢いもあつてか威力が下がっておらず、ノワールは二回バウンドしながら吹っ飛んだ。

「あつ、すまん……手加減したつもりだったんだが」

しかし、ノワールから返事はない。それどころか女神化が解けて本来の姿になっている。

「お、おい？まずいな……失神したか……」

そうして、トウカはノワールを抱えてラステーションの教会へ向かった。これが、彼と彼女の初めての出会いである。



## 番外編 ネプテューヌのヤンデレ

朝、トウカが目を覚ますと、彼の隣には必ずネプテューヌが眠っている。そして、彼の服を掴み、ギョツと離さない。

「ネプテューヌ、朝だぞ」

「うーん、あと5分……」

「ダメだ、早く起きろ」

彼がそう諭すと、ネプテューヌは渋々起きた。だが、まだぼーっとしている。

「また潜り込んでいたのか」

「うん、ダメ？」

「ダメではないが……」

「ならいいでしょ？」

「言っても無駄か」

何度も自分の部屋で寝ないのかと言っているのだが、ネプテューヌは絶対にトウカと寝ると言っていて聞かないのだ。

「ほら、顔を洗ってこい」

「うーん」

そう言つてネプテューヌはトボトボと洗面台へと向かう、しかし「ねぷうー！」

勢い良く水を出し過ぎたため全身ずぶ濡れになってしまう。そんな彼女の姿を見て、トウカはやれやれとネプテューヌの体を拭き始める。

「全くお前というやつはしようがないな」

「こんなにかき出すと思わなかったんだもん！これは何かの陰謀だよ！」

「まあその陰謀とやらで目が覚めたならいいんじゃないか？」

「良くないよおー！」

トウカ達は濡れた服を拭いた後、一緒に執務室へと向かう。これだけ見れば、いつもの光景なのだが

「トウカ、さっきびっくりして足捻っちゃった。抱っこして」

「嘘をつくな、自分で歩け」

「やだ！抱っこしてよ！」

はあ、とため息をついてトウカはネプテューヌを抱き上げた。そう、ネプテューヌはトウカに甘え過ぎているのだ。

「ほら、着いたぞ」

「うん、ありがとう」

そしてトウカはネプテューヌを自分の執務室の椅子に座らせて仕事を始め、ネプテューヌはゲームを始める。しばらくすると、イストワールがやってきた。

「トウカさん、おはようございます。ネプテューヌも」

「うん！おはよーいーすん！」

「どうかしたのか？」

イストワールが尋ねた理由は、どうやら前に提出した書類に不備があったらしく、それを修正しに来たらしい。

「すまないな、すぐに取り掛かる」

「ありがとうございます、それにしてもネプテューヌさんは今日も仕事しないんですか？」

「だってめんどくさいもん、トウカとも離れなきゃいけないし」

「いいですかネプテューヌさん？貴方は女神なんですから、トウカさんに四六時中付いて回っててはいけませんよ！」

「やだよ、トウカと離れたくない」

「ダメです！いい加減にしないと」

しかし、イストワールの言葉は途中で遮られてしまうことになる。ネプテューヌの刀が彼女の小さい首元に突きつけられていたからだ。

「いい加減にしないと何？無理やり私とトウカを引き離すの？いくらいーすんでもそれは許さないから、いーすんこそいい加減ふざけた事言つてたら殺すよ？」

「やめろネプテューヌ」

「だって！」

「やめろと言ってるんだ、辞めないなら俺への接近を今日一日禁止するぞ」

「それはやだよ！辞めるからそれだけはやめて!!」

トウカが言った瞬間、ネプテューヌは血相を変えて太刀を納めてトウカに駆け寄り懇願する。その目には涙すら浮かんでいる。

「お願い、1日トウカと話せないなんて耐えられないよ……………なんでもするからそれだけはやめて……………」

「ごめんなさいは？」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
!!」

「いや、一回でいいんだが……………はあ、もう良い」

呪詛のように謝り続けていたネプテューヌの頭をぼんぼんとトウカが撫でた。するとネプテューヌは安心したように笑顔になる。

「ごめんねーすん、でも……………トウカと引き離すのだけはやめてほしいな？」

「そ、そうですね……………こちらこそすみません」

しかし、イストワールにネプテューヌが向けた笑顔には光が灯っていなかった。逆に言えば、こどもも聞こえる。

私をトウカと引き離そうとするな、殺すぞ……………と。そう、ネプテューヌはずっとトウカと居たいのだ。

それを邪魔するものがいれば一切容赦しない。

「お姉ちゃん、トウカ」

「あつネプギア、どうしたの？」

「うん、プリン買ってきたから食べないかなって」

「ほんと!?流石ネプギア、私の妹だね！トウカも食べに行こうよ！」

「この書類を片付けたら行く、先に行け」

「ええー！一緒に行きーよ！」

「いいから、先に行け」

少し強めに言われたからか、ネプテューヌは少しシヨボくれた様子でトウカの執務室から出て行った。それに続き、イストワールとネプギアも執務室から出て行った。

そして、リビングまでやってきた。

「プリンは冷蔵庫の中だよ」

「プリン♪プリン♪」

ネプテューヌはいつものようにハイテンションで冷蔵庫へと向かう。しかし、そこで明らかにプリンの音ではない、ザクツという鈍い音が聞こえてきた。それを不審に思ったネプギアはキッチンの中を見る、すると

「お姉ちゃん!？」

ネプテューヌは手から血を流し、近くには血の付いた包丁が落ちていた。

「どうしたの!？」

「包丁が落ちてきたよお、ううー痛い……」

「ちよ、ちよつと待つててー！トウカ呼んでくるよー!」

そう言つて急いでネプギアはトウカを呼びに行き、トウカもすぐにネプテューヌの怪我の治療をした。

「ごめんねトウカ」

「全く……お前は本当に怪我ばかりするな」

ネプテューヌはよく怪我をする、しかも必ず何らかの手当が必要なくらい。しかし、今回の怪我にはネプギアは不信を募らせていた。(なんで何時も決まった場所に置いてる包丁が落ちたんだろう?そもそも、なんで落ちて刺さったのにあんなに深く?それも掌に……)

しかし、それを言い出すことはできなかった。大好きな姉を疑いたくはない、それに……彼女が時折見せる殺意、それはトウカとの時間を邪魔すると現れる。そして何より

「ねえトウカ、手が痛いから食べさせてよ」

「片手が空いてるだろう?」

「良いじゃん!食べさせてよおー!」

「はあ……どこまで世話がやけるんだお前は」

ため息をつきながらもトウカはネプテューヌにプリンを食べさせていく。ネプテューヌの表情はとても笑顔だ。その笑顔を、ネプギアには崩すことはできなかった。



「あの、トウカ」

「ネプギアか、どうした？」

その日の夜、ネプギアはトウカの元へと訪れていた。ネプテューヌはリビングでゲーム中なので居ない。

「実は……………」

ネプギアは今日の出来事を話した。

「そうか、お前も気づいたか」

「トウカも気づいてたんですか？」

「さすがに気付く」

トウカも今日のネプテューヌの怪我は不信に思っていたという。ネプギアは自分だけじゃないというだけで少し心が軽くなった。

「…………おそらくだが、今までの怪我也も自傷行為だろう」

「そうなんですか!？」

「ああ…………きつと構って欲しいんだろう」

トウカは基本的に忙しいため、ネプテューヌに構ってやれないことが多い。しかし、時間を見つけて何時も一緒に居るのだが、それでも居られない時がある。そんな時に限って、ネプテューヌは怪我をするのだ。

「俺があいつを叱ったりした後にも良くするんだ。心配して欲しいんだ、俺に」

「だからって、そんなの危ないです!」

「ああ、でも……………これは俺の責任だ」

俯きながら、トウカは語る。

「あいつがああなったのは俺がちやんと構ってやれなかったから……………」

「と、トウカのせいじゃないです!」

ネプギアは強くトウカの言葉を否定した。

「私も、お姉ちゃんの変化に気づけませんでしたから…………」

「ネプギア……………」

自分を取り乱していることに気づいたのか、ネプギアは少し顔を赤くした。

「と、とにかく、これからはお姉ちゃんのこと私も見えます」

「ああ、ありがとう」

トウカの微笑みを見た後、ネプギアは彼の部屋を出て歩き出した。そして、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「ネプギア」

「お姉ちゃん？」

ネプテューヌが後ろにいたのだ。だがその顔は俯き髪で隠れ表情を伺えない。

「どうしたのっ!？」

その直後、ネプギアの腹部にネプテューヌの拳が叩き込まれた。あまりの痛みにネプギアは嘔吐く。

「ゲホッ！ゲホッ！」

「トウカと何話してたの？ねえ、包丁の話は事故だよね？」

ぐっ、とネプテューヌはネプギアの首を絞めながら体ごと持ち上げる。いつのまにか、彼女は女神化していた。

「はな……して、お姉……ちゃんっ！苦しい……」

「トウカに私は自分で怪我したって言ったわよね？聞いてたのよ」

「だって………お姉ちゃん………が……」

「お陰でトウカに今までの怪我がウソだってばれたじゃない!!」

ネプテューヌは怒りに任せてネプギアを投げ飛ばし、そのまま体を踏みつけた。

「どうしてくれるのよ………これでトウカに嫌われたらどうしてくれるのよ!!!私はトウカに嫌われたら生きていけないの!!!トウカ以外………私のことをちゃんと見てくれる人なんていないのよ!!!なのにトウカに見捨てられたら………私には誰も居ない!!!」

「やめて、お姉ちゃん、痛いよー!」

怒りで我を失っているのか、ネプテューヌはネプギアを力のまま踏みつける。

「トウカの所に人が集まってくるのは仕方ないわよ、でも、私の元からトウカが離れていくななんて耐えられない!!!誰も奪わせないわ、トウカは私のなんだから!私からトウカを奪うなら、ネプギア………あなた

だって容赦しない！」

「いやっ、やめて……お姉ちゃん……！」

「ネプギアから足をどけるネプテューヌ」

凜とした声が廊下に響いた。いつも聞く、優しい声ではなく、はつきりとした強い口調

「トウカ……！」

「足をどける」

先ほどまで怒りの形相だったネプテューヌはみるみるうちに青ざめていき、トウカへと必死に弁解する。

「違うのトウカ！これは違うのよ！これは……ちよつとふぎけ過ぎただけなの!!だからネプギアを傷つけようと思つてたわけじゃないのよ！」

「大丈夫かネプギア」

トウカはネプテューヌの言葉を無視し、ネプギアを助け起こす。無視されたネプテューヌは、この世の終わりのような顔をしてトウカへ縋り付く。

「ごめんなさいトウカ！私が悪いの!!私が悪かったから！謝るから見捨てないで！嫌わないで！お願い、なんでもするから!!私を一人にしないで!!」

「なんでもするのか」

「なんでもするわ!!だから許して……お願い……無視なんてしないで……お願いだから！」

「そうか……なら、きちんとネプギアに謝れ」

その言葉を聞いたネプテューヌはネプギアへと何度も頭を下げる。

「ネプギア、ごめんなさい！酷いことして、痛いことしてごめんなさい……ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

「い、良いよお姉ちゃん！頭上げて」

何度も謝るネプテューヌにネプギアは駆け寄った。

「俺からも謝る、すまないなネプギア」

「いえ、良いんです……」

いつの間にかネプテューヌは女神化を解除して泣き崩れていた。

その姿は先程の恐ろしい姿から想像できない、ただの泣きじやくる少女だった。

「後で部屋に手当をしに行く、今はネプテューヌを落ち着かせてもいいか？」

「はい、お姉ちゃんをお願いします」

そうして、ネプギアは二人を見送った。



「ごめんなさい……………ごめんなさい」

「もういい、ネプギアは許してくれただろう」

トウカの自室、ネプテューヌはトウカから一切離れずぎゅつと彼の服を掴んで離さなかった。きつとトウカが自分を置いてどこかに消えてしまうのではないかと思っているのだろう。

「私の事……………嫌いにならないで……………トウカが居なくなったら私……………もう生きてけないよ……………」

「嫌ったりしない、だから安心しろ」

トウカはネプテューヌの頭を優しく撫でる。

「どこにもいかない？」

「ああ、ネプギアの手当をしたらお前のそばにずっといる」

「約束だよ？」

「ああ、約束する」

その言葉を聞いて、ようやく彼女は眠りについた。そして、トウカは窓から星空を眺める。ネプテューヌは完全にトウカに依存してしまっている。この状況を作り出したのはトウカ自身だ。

「全く……………」



やはりお前は最高の教え子だよ、ネプテューヌ」  
誰も見たことがないほど狂気の笑みを浮かべてそう呟き、彼はネプ  
ギアを手当てするために部屋へと向かった。

## ノワールとの出会い回想の終わり

「うっ……………」

ノワールが目を覚ますと、そこはいつも見る教会の天井だった。自分分は確かトウカに負けたはずなのだが…………

「そうよ、あいつは!?」

そう思いノワールは急いでベッドから出て外に出ようとした時

「凄いな……………まさかここまで書類速度とは」

「このこと違って上がちやらんぽらんだからな」

トウカがラスティションの教祖、ケイとともに書類整理をしていたのだ。もちろん、ノワールからしてみればなぜ敵の国の秘書が自分の国の教祖と仕事をしてるのか分からなかった。

「ああ、ノワール、目が覚めたのかい」

「目が覚めたじゃないわよ!?何してるのよ!」

ケイの説明によると、トウカが勝負を挑まれたとはいえノワールを気絶させてしまったので、そのお詫びに仕事を手伝っているのだという。

「もちろん一般職員にもできる軽い仕事だよ、それでも処理する量がすごいんだ」

「まあ気絶させてしまったからな、そのお詫びも兼ねてだ」

気絶させてしまった、その言葉を聞いてノワールはムツとする。結局この男は何者なのだろうか?女神を一撃で倒すなどあり得ない。ノワールからしてみれば、普通の男に一撃で倒されたと同じなのだ。「あ、あれはシエアが落ちてたから力が出なかっただけよ!いつもの調子なら貴方なんかボコボコにしてやるんだから!」

「さて、次はクエストだな」

「聞きなさいよ!」

ノワールの言葉をスルーし、書類を終えてトウカはラスティション教会に寄せられたクエストの手伝いも申し出たのだ。

「だがどうしてシエアが落ちているんだ?」

「それは……………私が守護女神戦争で内政に目を向けられなかったから

よ」

ノワールは俯きながらそう呟く。

「私を信仰してる人間なんて、あとどれくらい残ってるのかしらね」

「そうか、まあいい」

トウカはコートを来て立ち上がり、扉へ向かう。

「終わった報告する、それじゃあな」

「ま、待ちなさいよー!」

ノワールの制止も聞かずトウカは歩いて行ってしまい、彼女は走って追いかけていった。



「全く……全然人の話聞かないんだから」

ノワールはこっそりトウカの後を付いて行く、今回のクエストは村の近くに現れた危険種の討伐らしい。

「結局あいつはなんなのかしら?」

女神を軽い一撃で倒すなど、先ほども言ったが人間とは思えない。だが、彼からは殺気の一つも出ていなければ、無表情な普通の男だ。若干目は腐っているが

「ここか」

クエストの目的地にやって来たトウカは話を聞くために村の人間を訪ねる。

「すまない、教会の人間なんだが」

「ああ……ようやくクエストが届いたのか……」

この村は三ヶ月前からクエストを届け出て居たのだが、全く教会から返答がなかったらしい。

「それはすまなかった……すぐに対処する」

「対処って、一人でかい!?無理に決まってるだろう!?!」

「そうだぜ兄ちゃん、やめときな!」

「大丈夫だ、そのために俺が派遣されたからな」

(?つきなさい………)

勝手に行つたくせに……そう思いながらノワールは今だに草陰から覗いていた。

「おいっ！来たぞ！」

「グワアアアアアアアア!!」

「なによあれ……………」

その村を襲っていたのは危険種ではない、人間が接触してはいけない接近禁止種だった。これはシエアが下がっているノワールですら勝てるか分からない。

「下がっている」

「おい兄ちゃん!!」

(あのバカ!!)

いくらなんでも接近禁止種に一人で挑むなど無謀にも程がある。だからこそ彼女は女神化して彼の元へと急ぐが、その必要はなかった。

「えっ……………」

襲ってきた接近禁止種を、トウカは顔色ひとつ変えることなく、拳一つで消し飛ばしたのだ。接近禁止種は何が起こったかもわからないまま絶命、それはそうだろう。ここにいる誰もがそうなのだから。「終わりだな」

ふう、と一仕事終えたトウカは村人の元へと戻る。

「これでクエスト内容は完了だな？」

「あ、ああ……………」

村人は当然、啞然とした表情を見せていた。

「あっ、ブラックハート様！」

ノワールはしまったという表情を見せる。自分がこんな所にいるのは説明のしようがないからだ。

「ほんとだ…………ブラックハート様がなんでここに？」

村人も突然の女神の来襲に戸惑っている。

「ああ、ブラックハート様」

ノワールが戸惑っていると、トウカが当然の様は当然のように彼女の元へと歩いてきた。

「指示通り、接近禁止種の討伐を只今終えました」

そう言うと、トウカはノワールに跪いた。当然、ノワールは目の前

の男が何をやっているか分からない。

「え、これはブラックハート様の命令だったのか？」

「ああ、言い忘れていたな。俺はプラネテューヌの教会の者なんだ」

トウカがそう言うと、村人はざわざわと騒ぎ始める。当然だ、ブラックハートと敵同士であるプラネテューヌの教会の人間がどうして敵の女神の命令を聞くのか。

「俺は、プラネテューヌの使者なんだが、今回はラスティションと友好条約を結ぶためにやって来たんだ。それをブラックハート様に伝えると、一つ条件を出された。友好条約を結ぶ代わりに、ラスティションの問題解決に協力して欲しいとな」  
「なっー！」

「本当なんですかブラックハート様!？」

確かに、現在ラスティションには色々な問題がある。だがこいつはそれを逆手に取り、まるでブラックハートが直々にその約束をしたかのように国民に言ったのだ。

「でも、ブラックハート様は守護女神戦争に勝つって意気込んでるって……………」

「ああ、だがな……………」

トウカは、言葉を休めることなく続ける。

「国民を助けるために、ブラックハート様は友好条約を結ぶ事に合意してくれたんだ。彼女は自分の夢よりも、お前達国民を選んだんだよ。今回の件も、本当は自分が直々に解決したかったのだが、他にもこの国には問題を抱えている場所が多い、だからこそ敵に頭を下げて……………ここに俺を送ってくれたんだ。自分のプライドなんて捨てて、国民を選んだんだ」

トウカの言葉を聞いていた村人は、全員俯いてしまった。誰もが、ブラックハートは自分たちよりも戦争の方が大事だと思っていたのだろう。

「本当に、あなた達は幸運だ。こんな素晴らしい女神の国に生まれ、信仰できるんだから」

それだけ言って、トウカは教会へと足を進めた。その様子を、ノ

ワールはただ呆然と眺めているしかなかった。



「あなたは、本当に何者？」

「女神秘書だが？」

ノワールが教会に帰ったのはあれから数時間後だった。村人から絶賛の嵐で帰ってこれなかったらしい。明らかに、トウカという人間は普通ではない。たった数分で困難だった友好条約の締結、さらにはノワールのシエアまで回復させてしまったのだから。

「ズルいわよ、あんな言い方されたら友好条約に合意してないなんて言えないじゃない」

「それが狙いだっただけだから」

「私のシエアを回復させたのも？」

「それもあるが友好条約を結ぶんだ、協力関係にある女神のシエアが低いとルウィーとリーンボックスの抑止力にならないだろう」

ラストイションはワールドシエアでずっと1位だった。そのシエアが復活すれば、プラネテューヌと協力してルウィーとリーンボックスのシエアを上回ることができる。

「それに、国民を第一に思ってる女神が評価されないのは、俺が個人的に嫌なんだ」

「なんでそんなことあなたにわかるのよ」

「お前が気絶している間にお前の執務室を見させてもらったからな」

「敵国の最重要機密が保管されてる場所に平然と出入りしないでくれる!？」

サラツととんでも無いことを言うトウカにノワールはすかさず突っ込むが、彼はそんなものどこ吹く風である。

「その資料を見てると、どうすれば国民がより豊かに暮らせるかという考えが纏められていた。あの計画の濃密さは本当に国民を思っていないと出来ない」

「……………」

隠していたことがばれてしまい顔を真っ赤にして不貞腐れてしまふノワール、その顔を見て、トウカはクスツと少し笑う。

「なんで笑うのよ!？」

「いや、失礼かもしれないが、俺とお前はよく似てるらしい」

「似てないわよ!髪と眼以外!」

「どちらも黒い髪と紅い目である。」

「まあとにかく、お前は素晴らしい女神だよ」

「つつつつつ!バカ!」

面と向かって微笑みながらトウカはそうノワールに言うと、彼女は顔を真っ赤にして顔を背ける。

「恐らくネプテューヌが迷惑をかけると思うが、あいつはまだ未熟なものでな、よろしく頼む」

「……………一つだけ、条件があるわ」

ノワールは一つだけ条件を出した。

「私ともう一回勝負しなさい」

「またか……………」

「い、今はシエアが戻ってるんだもの!昨日みたいなことにはならないわ!」

トウカは少しげんなり、としていたが、勝負しないと帰してくれなさそうだ。

「さあ、やるわよ」

教会の中庭に出て、ノワールは女神化して再びトウカに剣を向ける。

「私が5分間、貴方の攻撃を受けなければ私の勝ちよ」

「分かった」

そして、もう一度勝負は開始された。

「さあ、かかってきなさい!」

そう言った瞬間、ヒュンツと少しだけ風が通る。いつの間にか数メートル離れていたトウカがノワールの目の前に現れたのだ。

「今度は気絶しないようにする」

そして、今度は拳ではなくデコピンをノワールの額に当てた。その瞬間彼女はワンバウンドして壁に激突した。

「俺の勝ちでいいのか?」

そしてその数年後、プラネテューヌ、ラスティション、ルウイー、リーンボックスの4つの国は友好条約を結ぶことになった。



そして時は戻って現在、すっかり夜になってしまった。

「すまない、迷惑をかけたな」

「別にいいわよ、貴方には色々借りがあるし」

「そんなこと気にしなくていいんだぞ？」

「あ、あなたが気にしなくても私が気にするのよ！」

借りは返さないと気が済まない、それがノワールという女神である。

「全く、これからは適度に休みなさいよ」

「ああ、すまないな。それじゃ俺は帰る」

そしてトウカは歩き始めたが、立ち止まって振り向いた。

「たまに訪ねてもいいか？」

「えっ!? ああ、まあ……ひ、暇な時ならいいわよ」

「ありがとう、じゃあな」

今度こそ、トウカは瞬間移動でプラネテューヌへと帰り、ノワールは一人夜空を眺めていた。



## 女体化編

罰ゲームは性別が変わる時がある。

「はあ……………」

白いユニがため息をついた。しかし、カイナは気にすることなくジャンプを読んでいる。

「はあ……………」

もう一度白いユニがため息をついた。しかし、カイナは気にすることなくプルルートに前から抱きつかれながらジャンプを読み続ける。

「はあ……………」

「何お前ウザいんですけど、言いたいことがあるならはつきり言えよ」

耳元でため息をついた白いユニがあまりにもうざくなったのか遂に反応してしまった。プルルートは相変わらずカイナの胸に顔をすりすりして気持ちよさそうだ。

「帰りたい」

「帰れよ」

白いユニ、まさかのホームシックである。

「だってもう何日もノワールに会ってないのよ!? ノワールだって寂しくて泣いちゃってるかもしれないじゃない!?!」

「多分清々してると思うけどな、シスコンな姉貴が居なくなつて」

あちらの次元ではユニはノワールの姉である。だが、ユニはノワールと違い国は持っていない。

「ああ……………ノワールに会いたい……………」

「ノワ子なら居るだろそこにも」

「なんかコレジャナイ感があるのよね……………」

「どういふことよ!!」

現在、ノワールとブランとベールが遊びに来ている。

「にしても変わんねえな女神組は、ブランはチビだしベールはいい体してるし」

「誰がチビだコラ」

「チビはチビだろうが、全部チビだろうが。ボールと比べてみるよ、絶望的だろお前」

「ぶっ殺す！」

ブランのハンマーをカイナはプルルートを引っぺがし、木刀で弾いてから後ろ襟を掴む。

「俺と張り合いたきゃせめてCカップまで成長して出直してこい!!」  
「うわー！」

そのままポイとソファへ投げ飛ばした。

「ハーハッハッハ！貧乳が俺に勝てるわけねえだろ！」

「くっ、なんで別次元のトウカは性格悪りいんだ」

高らかに笑うカイナはまるで悪役の様だった。

「でもこっちの私がノワールの妹だとは思わなかったわ」

「私も、お姉ちゃんより年上なんて思わなかった」

そして白いユニとこちらのユニが対面を果たす。やはり白いユニの方が身長は大きい。

「ねえ、私がいるなら向こうにもネプギアたちもいるの？」

「ええ、居るわよ。ネプギアはちよつと諸事情で来れないけどね」

まさか別次元のネプギアが敵になっているとは言えるわけがない。

「ユニちゃんとトウカ？」

「ロムちゃん、似てるけど違うわよ」

ラムとロムが疑問に思うのも無理はない。

「ロムは分かるけどよ、まさかラムまでチビになってるとはな……………」

「あなたの世界でラムは小さく無いの？」

「全然小さく無い」

「ロムはあんまり変わらないけどね」

どうやらラムは別次元では全然小さく無いようだ。いったいどんな姿になっているのか気になるブランだが、知った時の絶望が怖いので詳しくは聞かない。

「ところでトウカとかどうした？」

「トウカはなんか勝負に負けて罰ゲーム受けてるらしいわよ」

罰ゲーム？と思うっていると、ガチャリと部屋からネプテューヌが出

て来た。

「ネプテューヌ、トウカの罰ゲーム終わったの？」

「いや、終わったっていうか………継続中っていうか」

「結局どうなったんですの？」

ベールは部屋を覗き込むと、顔が疑問の色に染まる。

「トウカさんはどこですか？」

「あ、あそこです………」

ネプギアが指を指した先には、長い黒髪のメイド服を着た女性がいた。

「まさか………あれ？」

「やり過ぎたわね………」

アイリスが少し申し訳なさそうにつぶやいた。

「どうしたんだよう？」

すると、部屋から黒く艶やかな長い髪をたなびかせながら、紅い目をしたメイド服を着た女性が出て来た。そのメイド服も、メイド喫茶にあるようなものではなく、きつちりとした品があるクラシックメイドだ。

「え………どちらさま？」

「………」

目の前の女性は何も言わない。そもそも、どうして部屋から出てきたのかわからない。先ほどまでこんな女性はいなかったはずだ。

「ば、罰ゲーム中なんですよ、先輩」

「とーかすつごくきれい！」

「とーか………こいつトウカかあああああ!？」

そう、この目の前にいる女性こそ、何を隠そうトウカである。

「嘘でしょ………」

他の面々も絶句している。

「でもなんでこんな詰め物してんだよ」

ガツとカイナは遠慮なくトウカの膨らんだ胸を掴んだ。すると、トウカはんっ、と体をピクツと震わせた。

「詰め物にしてはやけに感触しつかりしてるな」

「あー、それ……詰め物じゃないわよ」

「はあ？」

「本物のトウカの胸よ」

「……………いやいや、こいつ男だろ？」

「男女逆転させてるから今は女よ」

そういえば詰め物にしてはやけに形が良かったり、大きかったり、柔らかかった。それを聞いたカイナはしばらく考えた後

「もうちよつと揉んでいい？」

「言い訳あるか、とつとと離せ!!」

思いつきりトウカに拳骨を食らって撃沈していた。

「でもなんでトウカが女の子に？」

「私の変性魔法でちよつとね、ちなみに一回かけたら2日は戻らないわ」

なんでも、トウカが罰ゲームの際に抵抗したため、ペナルティとして体まで女にしたのだという。今のトウカは完全に女性である。

「でもなんでメイド服？」

「黒髪巨乳なクールメイドって良くない？ってネプちゃんと言ったから」

「トウカなら絶対似合うと思ったけど、まさかここまでハマっちゃうとは……………私も思わなかったよ」

「そうですよ先輩、すごく綺麗ですよ!!」

しかし、トウカは何も話さない。怒りを通り越してもう早く2日経って欲しいという思いでいっぱいだからだ。

「はあ、もういい……………俺は執務室にいる」

「何言ってるんのトウカ!これからクエストだよ!!」

「ふざけるな!こんな姿で外に出られるか!!」

トウカの声も、より女性のものへと変わっていた。体が女性になっているため仕方ないのだが。

「こつちのかーくん可愛い〜〜かーくんもやってみたら〜?」

「いやいや、俺はいいよ」

「そうね、カイナもやって貰えば？」

「ははははは、ユニ、お前まじ殺すぞ」

「良いわね、流石にトウカだけじゃかわいそうだから……カイナもやっちやいましょうか」

逃げようとしたカイナを白いユニは掴み、固定する。

「さて、待て待て待て待て！主人公女体化とか苦手な人いるから！この作品は万人受け目指してるからやめとこう!?!」

「行くわよお」

「ギャアアアアアアアアアあ!!」

カイナの悲鳴が響き渡った。

## イツカとカナちゃん

「トウカ紅茶入れてえ〜」

「か、かしこまりましたアイリスお嬢様」

あれから数時間、とりあえずトウカは今メイド服でみんなの世話をしていた、口調もメイドらしく敬語を使うことをアイリスに強制されていた。

「丁寧に入れてね?」

「もちろんでございます」

アイリスは普段紅茶など飲まないが、トウカを利用しない手は無いとあえて紅茶を注文した。もちろん、紅茶など淹れられるわけがないとタカを括っていたのだが

「どうぞ」

目の前に出てきたのは綺麗な赤色をした紅茶、茶葉のいい匂いが鼻をくすぐる。ティーポットを持っているトウカは本物のメイドさながらだった。

「おいしいわね……………」

「メイドですから」

ふふん、とドヤ顔してトウカはティーポットを片付ける。その顔を見たアイリスは少し悔しそうな顔をした、

失敗させて笑ってやろうという魂胆が失敗したのだから。

「見事なまでのメイドっぷりだね」

「もう吹っ切れたんじゃないかな」

トウカは半ばやけくそで二日後まで過ごす事にした。何を言っても無駄なら何かをして気を紛らわせたほうがマシだと考えたのだから。

「カイナも中々だけどね」

「殺すぞマジで」

カイナの姿はトウカと同じ長い黒髪、そして赤色とオレンジ色の瞳、透き通るような白い肌。服装は赤い着物だ。他から見れば見事な和服美人となっているだろう。なお、胸はトウカよりは小さく、ノ

ワールと同じくらいの大きさになっている。

「なんで俺まで巻き込まれなきゃいけないんだよ」

「まあ〜浮気した罰ゲームってことでえ〜」

「浮気した罰ゲームってなに、してないから」

そう言つてカイナはふて腐れながらジャンプを読み始めた。

「さて、そろそろクエストに行つてまいります」

「行つてらっしゃい」

「お前そのままクエスト行くのかよ」

「行くしかありません、他の服は全部差し押さえられてますので」

はあ、とため息をついてそういつたトウカには哀愁が漂っていた。

「かーくんも行きなよ〜」

「ふざけんなお前、いつもついてくるとか言うくせに」

「今はかーくん女の子だから変な女の子は来ないから大丈夫だよ〜」

プルルートの有無を言わさない笑顔に完全に何も言えなくなったカイナは体が元に戻つたら覚えとけよ、という言葉を読み込みトウカと共に外に出た。もちろん……気づかれないように女神たちは付いていくのだが



「完全に注目の的だな」

「こんな格好では仕方ないだろう」

あたりの視線を感じながら二人はチラリと上空を見る、するとやはり何人かの人影が見えた。女神たちがこつそりと後をついてきているのだ。ちなみにネプギア以外の妹達は待機、じゃんけんで負けたのが理由である。

「高みの見物決め込みやがって、ムカつくぜ……」

「まあ体が戻つたらあいっつらには仕返しするとして、やはり大通りは歩きたくないな」

周囲の注目もそうだが、トウカにとってこんな姿で街中を歩いているというのは事自体が恥ずかしいのだ。

「それにしても変わった格好をした奴らが多いな」

「コスプレフェスタなんだとよ、あいつらこれ知っててこんな服装にしゃがったな」

現在プラネテニューヌではコスプレフェスタが開催されており、色々なアニメやゲームのキャラのコスプレイヤーがひしめき合っている。

「ノワールが行きたがってたような気がするんだが…」

「みんなにバレてんのに今更隠す必要なくね？」

ノワールは一応コスプレイヤー、こんなお祭りに参加したくないわけがないのだが、トウカとカイナがこんなことになってるため参加はしていない。参加したかったなあ、という小さなつぶやきは誰にも聞こえてはいない。

「ていうか女神のコスプレも居るじゃねえか、うわあ……露出度高……あの女がホワイトハートのコスプレするの無理があるだろう、どっちかといったらグリーンハートのコスプレのほうが絶対似合うぞ」

「人の趣味はそれぞれだ」

そんな事を言いつつトウカたちは歩いていくのだが、突然目の前に人だかりができて進めなくなる。

「なんだこれは……」

「あー、これめんどくさいかもな」

辛くもカイナの予感当たってしまう。

「すみません！写真撮らせてください！」

「俺も俺も！」

「僕もお願いします！」

瞬く間にカメコ達が集まってきてしまったのだ。数十人の男たちにトウカとカイナは囲まれてしまう。

「いや、俺たちは……」

「ちよいとウカこつちこい」

グイツとトウカの顔を寄せてコソコソと話し始める。

(逆転の発想で行こう)

(逆転の発想どころか性別が逆転してるんだが、どういうことだ)

(あいつらよりも女らしくすれば良いんだよ！あいつらよりもチャヤホ



やされたらムカついて期限よりも早く解除してくれるかもしれないねえだろ!?)

(そんな事気にするのか?)

(そうじゃなくても、もしかしたら女に目覚めるかもしれないという不安を植え付けることができる!!)

(……………まあそれで仕返しになるならいい)

というわけで、二人は女らしくする事にした。



視点は変わって女神側、彼女たちはトウカとカイナの姿を他の人間にばれず、かつトウカ達が聞こえる上空から見ている。

「トウカ達、囲まれてるわね」

「カメコ達でしょ? まああの姿ならしようがないわね」

「でもトウカさん達写真撮影を許可しましたわよ?」

「おかしいわね……………トウカ写真嫌いなんだけど」

しばらく様子を見てみると、二人は嬉々として写真撮影に臨んでいるようだ。

「はいはい! 順番に並んでね! カナちゃんとの約束だよお!?!」

「…はーい!」

着物を着たカイナが生き生きとカメコ達にそう指示する。名前もカイナからカナと名乗っているようだ。その様子を見て、プルルートは微妙な顔をする

「どうしたのぷるるん」

「かーくん、あたしにもあんな顔してくれたことないのに……あんな猫なで声で話してくれたことないのに……ぷるーん……………」

そう言っつて落ち込んでいた。ちなみにプルルートはネプギアとネプテューヌに上から吊るされている。

「ま、まあ……………仕方ないですよ」

「そうよぷるるん」

「でも……ネプちゃんのかーくんもだよ?」

そしてネプギアとネプテューヌ、それからアイリス、おまけにノワールはトウカを見てみると

「ご主人の皆様、どうぞ焦らないように、イツカはどこにも行きませんので。お怪我をなさってはせつかくのコスプレフェスタも台無しですよ」

「！！！！！！！！！！」

ニコツとエンジェルスマイルを振りまくトウカが居た。その姿に四人は絶句する。それもそうだろう、自分たちが何をしても微笑むのが限界だったにも関わらずトウカはイツカという即興の名前を名乗って笑顔を振りまいているのだ。

「私にもあんな笑顔向けてくれたことないのに……」

「私も観たことないよ……」

「ちよっ！ネプちゃんギアちゃん！ぷるちゃん落とさないでよ!」

「うわあ〜落ちるう〜」

それでも2人は止まらない。

「イツカさん！スカートを翻してクルツと回ってくれませんか!」

「仰せのままに、ご主人様」

そして、トウカはニコニコとした笑顔を崩さずくりと回ってウィンクをした。ちなみに、トウカは今ノーブラである。それゆえ、激しい動きをするとどうなるか、男の目線は必ずそこへ行く。図らずもトウカの人気を引き立ててしまった。

「うわあ、なりきってるわね……」

雷の翼で空を飛びながらアイリスはげんなりしてしまっている。しかし、自分達に向けない笑顔を見ず知らずの人間に向けているトウカとカイナに、段々ネプテューヌとネプギア、プルルートはもちろんの事、わかる人にしかわからないが、アイリスまで少しイラついていた。

「もういいから早くクエスト行かないかしら……」

「ネプちゃん、あたし変身してもいいかしらあ〜」

「そうね、たまにはいいかもしれないわね」

「さすがにそれはやめなさい」

ちなみに、一番イラついて居たのはネプテューヌとプルルートである。



「ふう、一応なんとかなったな……………」

「そうですね」

カイナは営業スマイルが崩れたのか、コスプレフェスタの場所を超え、クエストの場所まで向かっている途中で疲れていたが、トウカは相変わらず営業スマイルをして居る。

「トウカ、もう営業スマイルしなくてもいいんだぞ」

「トウカ？私はいツカですよカナさん、コスプレフェスタで疲れてしまったんですね、ふふふ……………」

ニコニコと笑いながら先ほどの設定をまるで事実の様に言い出したトウカの目を見みると、瞳が濁って居たのが完全にハイライトが消えていた。軽い精神崩壊を起こしているようだ。

「イツカ」

「はい？」

「ちよつとごめんな？」

「??？」

そうして、カイナはトウカの頬を袖に隠していた木刀で思いっきり殴り飛ばした。あまりの勢いにトウカはボタンツ！と倒れてしまう。

「はっ、俺は何を……………」

「起きたか？」

「ああ……………カメコを並ばせてる所までは覚えてるんだが…そこから先は覚えてない」

「お並び下さいは覚えてんのか……………」

そうして、2人はもう一度クエストの場所まで向かった。

トウカさんご乱心？

「ふむ……………」

またプラネテューヌのシェアが落ちてるな……………どうしたものか。まあとりあえず出かけるか、と思ったんだが。

「トウカ外出禁止」

「なぜだ」

「外出禁止」

「というより今日は……………」

「外出禁止」

有無を言わさないネプテューヌの威圧に俺は何も言えなくなった。現在、俺はまだ女のまま、カイナはプルルートがアイリスに言っただけでもらったのだ。俺はあと1日このままである。もう1日女の子ができるよ、やったねトウカさん！……………自分でやって虚しくなる。不思議と体が女になったからか、感情がいつもより現れるようになった。

しかし外出禁止か……………今日は色々やらなきゃいけないんだが

「いやあ、大変ですなトウカさあん……………俺はもう男に戻ったから大丈夫ですけどお〜？」

ムカつく。今のドヤ顔はすごくムカつく。ふむ、いつもより感情が出ているためか制裁を加えてやろう、という想いが出てきた。どうしてやろうか……………そうだ。こいつは普段の言動からは分からないが意外と女性経験がないんだ。ならこうしてやろう

「そんなこと言うと……………悪戯するわよ、ふー」

「うひゃい!? てめえ!! バカ!! バカ野郎!」

耳元で囁いた後、ふー、と息を吹きかけてやった。なかなか面白いな。もう少し遊んでみるか？

「照れてるの? ふふふ、可愛い」

「やめろってば!!! お、お前男なのに恥ずかしくねえの!? ホモ? ホモなんですか!?!」

「そう言いながら顔が真っ赤だけど……………そう、私の体には興味ない

のね、少しショックだわ……」

「いや興味がないわけじゃなくて、お前が本来男で別次元の俺じゃなければアプローチするけどさ!」

「冗談だ、なにを本気にしてる?」

「お前まじむかつくウウウウウウウウウウ!!!ちきしょー!ウニいいいいいい!!トウカが虐めてくるうう!」

ウニじゃない、ユニよ、と白いユニにおきまりのセリフを言われながらカイナは白ユニに抱きついて泣き始めた。少しやり過ぎただろうか……しかし、やはりこの体は面白いな。

「ふん、ふんふふふん♪」

この体はすごい、まさか鼻歌まで歌えるようになるとは。男の体では楽しいと思っけていても顔に出ないから悔しい。かといって男に戻りたくないという訳ではないが、どうせあと1日だ、やれる事をしないと損だろう。

「うーむ、まず何をするか……そうだな、話し方を変えてみるか……どんな話し方にしよう」

男らしい話し方は普段してるから面白みがない、そうだな……普段からは想像もできない姿でもしてみるか。参考はネプテューヌ、あんなにハイテンションにできるかどうかわからないが、練習してみるか。という訳で俺は自宅へと帰り、鏡の前に立つ。

「さて……やつほー!イツカちゃんだよおー!私の美貌でイツツイツツにしてやんよー!」

シーン、当然だ。俺以外に誰も家にいないんだから。なんだろうな……急に恥ずかしくなってきた。もう500歳以上になのにこんなハイテンションに……バカか俺は。そもそも女の見本としてネプテューヌを参考にするのがおかしい。このままでは読者にトウカさんキャラ崩壊してますよと言われそうだ(メタい)

「うーん、どうしようかな……私お仕事しなきゃいけないんだけど……あつそうだ!」

俺一つ閃いた。

「この方法なら私がネプテューヌに怒られるだけだからいいよね!!」

外出禁止と言われて素直に従うほど弱くはない。



やつほー！主人公オブ主人公のネプテューヌだよー！って、今はそんなに騒々しくするテンションでもないんだよねー。トウカはほんとに悪ふざけするときは凄いやね、そういうところ私も受け継いじやっただらうけど。トウカを女の子にしたのも調子に乗り過ぎたし。まさかあんな仕返しが来るとは思わなかったよお。

「まあトウカの事だから外出禁止をちゃんと守ってるよね」

流石に怒ったからもう問題は起こさないよ、うん。トウカはそういう所はしっかりしてるから。

「また外に出て笑顔振りまかれたら困るしねえ、なんか見てたら無性にムカムカする」

普段私にもあんな綺麗な笑顔向けてくれたことないのになんで他の人には向けるのさ……訳わかんない。

「お姉ちゃん！」

「んー？なににネプギア、今ゲームのイベント中で忙しいんだよ」

期間限定の配信イベントで上位に入ったら限定レアキャラがもらえるんだよ。これはもうやらなきゃダメだよね！！

「トウカが！また街に出てるよー！」

「ねぶふううううう！嘘でしょ!？」

トウカが私との約束を破った!?ってこうしちゃいられない、みんなに連絡しなきゃ！トウカを捕まえないと!!



「ふう」

俺はとりあえず仕事が一段落したので激甘コーヒーを飲んでいた。しかしメイド服で来たのは失敗だっただろうか、目立って仕方ない。

「さて次は……」

「見つけたわよこの似非メイド」

振り向くと、そこにはアイリスとネプギアが居た。もう見つかったか……まだ全て終えてないんだがな。

「アイリスとネプギア、どうしたの？お仕事は？」

「私のお仕事はあんたを捕まえる事だから、ていうか何その喋り方、心まで乙女になったの？」

「さあてどうかなあー？」

「（イラッ）まあどうでもいいわ、今のあなたはテンションハイになってるだけだから、さっさと帰るわよ」

「トウカ、怒ってるなら謝りますから……戻ってください」

「やーだよお〜ていうかアイリスは怒りすぎだよ、自分が女にしたいくせに、歳食って怒りっぽくなったんじゃない？更年期障害？」

「コロス！」

ブチツという音が聞こえた。当然だ、あえてアイリスが一番嫌いな女のタイプで話したんだからな。

両手に稲妻を発生させたアイリス、しかし戦うのは目的ではないので逃げるか。

「それじゃあねえ〜えいつ」

俺は瞬間移動で飛んだ。



「あーもう！何処にいるのトウカ!？」

「次々に出現場所が変わるからわからないよ！」

ネプテューヌとネプギアは引き続きトウカの目撃情報を元に捕まえに走るが、全く手掛がない。まあ相手は瞬間移動するのだから捕まえようとしても捕まらないだろう。

「うう、イベントがあ……………」

「そんなこと言ってる場合じゃないよ！プラネテューヌのシエアも下がってるのに……………あれ？」

ワールドシエアを調べてみると、プラネテューヌのシエアがかなり上がっていた。自分たちは何もしていないのにどういことか、そうネプギアは考えたのだが、今はそれどころではないので先を急いだ。

「見つけたー！トウカアアアアアアアアアア！」

ネプテューヌとネプギアの前にはメイド服を着たイツカ、もといトウカが何処かのお店から出ていた。

「ネプテューヌ？どうして、確か今はゲームイベントのはずじゃないの？」

「それどころじゃないよ全く！なんで外出禁止って言ったのに外出てるのさー！」

「普段仕事してないネプテューヌに言われてもなあ、従う気になれない」

ムカツ、とネプテューヌはコメカミをピクピクと動かす。当然のことを言われたので言い返せない。

「とりあえず、もう帰るよ！」

「……………まだやる事が残ってる」

「トウカ、一体何をしてるんですか？」

ネプギアが不安そうに聞くが、トウカは何も答えない。

「何か、困り事ですか」

「そんな大したことじゃない、だから早く帰れ」

「ちよつとトウカ!？」

そうしてトウカは歩き始める

「トウカってば！」

「お前は早く帰ってゲームでもしてろ」

「つ……………トウカのバアカ！勝手にすればいいじゃん！もう知らないから!!」

そうネプテューヌが言ったのを聞いて、トウカは瞬間移動で消えた。

「もうっ！なにあれ意味分かんない！」

「あつ、良かった」

しばらくするとアイリスがネプギアとネプテューヌの元へとやってきた。

「帰るわよ二人とも」

アイリスはネプテューヌの首を掴んで教会へと歩き始めた。

「アイリスさん、いいんですか？」

「もういいわよ……………あんのバカ…………」





「あら、戻ったのね似非メイド」

「戻らないほうがよかったのか、それと一応ここは俺の家だ。入るなら玄関から入れ」

数時間後、ようやく男に戻ったトウカは自宅で過ごしていると窓からアイリスが入ってきた。

「何か用か」

「幼なじみの家に用がなければ来ちゃいけないの？」

「構わんが、用もないのに来るやつじゃないだろう」

とはいえ一応客人のためコーヒーを出した。

「で？何の用だ？」

「またネプちゃん甘やかしたでしよう？」

「なんのことだ」

「教会のお助けメイド、忙しい女神の代わりに人助け、ネットニュースのトップなんだけど？」

アイリスはため息をつきながら携帯の画面を見せた。そこには謎のメイドについてのコメントや情報提供を求む声で溢れかえっていた。

「新しいプラネテューヌのシェア獲得戦略に各国も注目高まるって書いてあるわよ。リーンボックスは新ハード、ルウィーはブラン饅頭、ラストেশションはモンスター退治、それからプラネテューヌはメイド、いい名物ができたわね」

「そんなつもりでやったわけじゃ……………」

「そうよね、ただ貴方はネプちゃんがゲームイベントに集中できて、シェアが低いつてイストワールに怒られないようにしたかったのよね」

全て凶星なのか、トウカは無言のまま何も言わなくなった。

「ネプちゃんはともかく、せめて私にくらい言っただけでよかったわね」

「……………」一人で充分だったからだ。お前がいたらプラネテューヌのイメージが下がる」

「そんな事言っただけで、迷惑かけたくなかっただけでしょ？何年幼馴染やっていると誤解してるのよ。嘘だっただけでことぐらい分かってるわよ」

トウカが嘘をつく時の癖、腕を組みながら右上を見ていたためアイリスは一瞬で分かった。

「ネプちゃん、怒ってるわよ」

「あいつのことだ、どうせ二日もすれば忘れるだろう」

「あの子のことだからそうだろうけど、貴方はそれでいいの？」

結局ネプテューヌには、トウカが女体化して暴走していたという事しか分かっておらず、まさか自分のために動いていたとは思っていないだろう。トウカは感謝はされない、結局のところ彼自身はくたびれ儲けである。

「貴方はあの子が思ってる以上にあの子を守ってる、成長させようとしている。それなのにあの子はそれを理解しない、いいえ、あの子に貴方が理解させようとしなのかしらね」

「……………下らん」

「そしていざ理解しようとする、貴方は厳しい言葉を浴びせて近づかせないようにする。昔から変わってないわ」

そう、彼は昔からずっと一人で何でもやった。弱点も自分一人で補った。誰にも助けを求めなくせに、人が助けを求めたらどれだけ危険でも助けに行く、自分の罪も、人の罪も全て背負い込んで、二人の幼馴染にすら何も言わない。それが、アイリスにとっては悲しくて、切なくて、寂しくて、腹が立って仕方がなかった。

「ねえ、どうしてあの子にそこまでするの？」

「……………あの子に、俺は夢を託したからだ」

「夢……………」

「口にするのも恥ずかしい、子供の頃の夢だ」

その時のトウカの顔は、アイリスが久しぶりに見た何処か照れ臭そうな、嬉しそうな微笑みだった。この微笑みを最後に見たのはいつだったか、幼馴染の自分ですら彼を微笑ませることは難しい、だがネプテューヌはこんなにも簡単に彼を微笑ませることが出来たのか。そう思った時

「ムカつく……………」

彼女はポツリ、と呟いた。

「どうした?」

トウカがそう言った瞬間、彼の腕は雷の輪によつて拘束され、ベッドへと押し倒される。

「なにをつ!」

「なんかムカつくわ、今の貴方見ると」

そうして、抗えない彼の上にアイリスは乗る。額が引っ付きそうなくらい顔を近づけた後、アイリスは優しく彼に口づけをした。

「つつつ!」

「暴れないで」

トウカは抵抗するが、拘束されている両手をさらにアイリスが手で押さえつけたため力が入らずうまく抵抗が出来ない。そのため珍しく彼はアイリスの成すがままになっている。

「なんだか、ネプちゃんの事を話してる貴方を見るとムカつくから、ほんの少しだけネプちゃんを忘れさせてあげる」

「ま、まさか……………」

「さて、久しぶりにやりましょ?」

それを聞いた瞬間トウカは一瞬で顔を真っ赤にし激しく抵抗するが、こうなってしまうてはアイリスの独壇場だ。普段と立場が逆転する。

「さあ、観念して気持ちよくなりなさい、トウカ」

「まてつ、やめつ!」

そんな彼の抗議など虚しく、再び唇は強引に重ねられた。アイリスは一応、トウカの事は好きだ。だが、こんなにムカムカしたことは無かったのでこの感情がなんなのか彼女にはわからない。彼女はただ……………

トウカの失った全ての感情を、少しずつ復活させているネプテュー  
ヌに嫉妬しているだけなのだ。自分がどれほど頑張っても、成し得な  
かった事を成し遂げた彼女に。

## ネプギアの訓練編 サバイバル演習開始

「おいトウカ、お前コート破けてんぞ」

「んっ？ああ……………本当だな」

カイナがジャンプを読んで不意にトウカを見ると、彼がいつも着ている黒いコートの肩の部分が破けていた。

「黒だからあんまりわかんねえけど、そのコートボロボロだな。何年着てるんだよ」

「ほっとけ」

そう言いながらトウカは裁縫道具を取り出して破れた場所を修復し始める。

「気に入ってんのな」

「貰い物だからな」

「ネプテューヌか？」

「ああ」

ふっ、とトウカは笑いながらコートを縫い始める。彼がいつも着ている黒いコートはネプテューヌからプレゼントされたものだった。プレゼントされて以来、彼はこのコートを大切に着ている。

「へえー、そっぴやあネプテューヌも白いパーカー大切に着てたな、捨てねえのかって言ったら怒られた」

「ああ、俺がプレゼントしたからだろう」

ネプテューヌの白いパーカーも、懐中時計と同じく彼がプレゼントしていたものだ。

「何度か勝手に着ていたからな、プレゼントしたんだよ」

「へえ……………」

「お前の右腕に巻いている布も特別なものなのか？」

「これは……………まあな」

「見た所普通の布ではないようだが」

「見ただけで分かるのかよ？」

「元々解析は得意なんだ、あまり詮索はしないが……お前は半分ほど人間ではないな」

「それはお前にも言えることだけだな」

二人の視線が交差する。カイナの体は片目がオレンジ、そして右腕には赤い布が巻き付けられ、その腕は白く透き通っていた。

「お前の右腕、自分のものではないな」

「やっぱわかるか……」

彼は右腕を見つめる。彼の右腕は肩から色が違っていた。

「そういえばこっちのネプギアはどうした？」

「かいな！あそんで！」

笑顔で駆け寄ってくるピーシエの衝撃を後ろに逃がしながらカイナは自分の腹部の上に乗せた。

「ライトもいねえし、アイリスもいねえじゃねえか」

「ああ……アイリスは……」



「イヤアアアあああ!!」

「ホラホラホラホラ！死んじやうわよ二人とも！」

同時刻、ルウイー近くの雪山にライトとネプギア、そしてアイリスの姿があった。なぜ三人がこんな場所にいるかというと、事は数時間前に遡る。

「ギアちゃん、あなたに足りないのは持久力、度胸、魔法への対応、状況適用能力、気配察知能力よ」

「足りないものだらけですね……」

たまにはアイリスに訓練を見てもらおうと思ったネプギアは彼女とともに訓練をした。その結果、アイリスから出たのはダメ出しの嵐だった。

「かなり手加減して魔法を撃つたのに全然対処できて無いんだもの」  
「すみません……トウカさんにはあまり魔法のことを教わらなかったもので……」

「まあ当然よね、トウカは一切魔法が使えないから」

「えっ!?!そうなんですか!?!」

「知らなかったの?」

アイリスは意外そうに言うが、ネプギアは驚きを隠せない。彼女はトウカがなんでも出来る天才だと思っていたからだ。

「さて、手っ取り早く足りないものを鍛えるには……やっぱりサバイバル演習かしら?」

「サバイバル演習?」

ナルトかな?とネプギアは一瞬思った。アイリスはよくジャンプ漫画を読んでいるからまたふざけて言っているのかと思ったのだが……それは間違いだったとすぐに察する。

「ライト」

「はい団長」

アイリスが名前を呼ぶと、どこからともなく黄色い光を帯びてライトが現れた。相変わらず早い。

「あれするわよ」

「あれ……ギアさんにですか!」

「ギアちゃんだけじゃないわ、貴女もよ?」

「わたしも!」

まさか自分まで巻き込まれると思っていなかったのかライトは驚きを隠せていない。

「あなたネプちゃんに負けたでしょ?だから一回初心に戻って頑張るなさい」

「そ、そんなあ……」

「あの、一体何を……」

「行ったらわかるわよ」

そんなこんなで三人はルウィー近くの雪山に移動した。

「それで、どうするんですか?」

「ギアちゃんとライトにはこれから一週間、私から逃げ回ってもらわ。もちろん食料も現地調達、夜以外は休めないと思いなさい」

「い、今すぐ始めるんですか!」

「そうだよ……はあ……」

これから始めるサバイバル演習はナルトのものとは似ても似つか

ない本気のサバイバル、食料、水はもちろん眠る場所も自分たちで確保しなければならぬ。さらにはここは過酷な雪山、普通にサバイバルよりも厳しい環境下で、さらに陽が落ちるまでアイリスの攻撃を躲し続けなければならぬのだ。

「まあやるもやらないもギアちゃんの自由よ、どうする?」

「……………やります!」

「やるの!? 考え直した方がいいよギアさん!!!」

「いいえ、少しでもトウカとアイリスさんに近づくためにも……………私やります!」

ネプギアは自分の胸に手を当てる。彼女の目には強い意志が灯っていた。その目を、アイリスはいつか見た幼馴染に重ねクスツと笑う。

「さあ、始めましょうか!」

ネプギアとライトの訓練が今始まった。この訓練を経て、ネプギアの何が変わるのかは、今はまだわからない。



## 訓練の夜

「ホラホラホラホラ！どうしたのよ!?早く逃げないと消し炭になるわよ!?!」

訓練4日目、突然の落雷によって目を覚ましたネプギアとライトは朝食も食わずに走り回っていた。敵は突然奇襲してくる可能性もある、そう言ったアイリスは容赦なく彼女たちを攻撃していく。

「ライトさん、闇雲に動いてもダメです!どこかに身を隠さないと!」  
「隠られるならもう隠れてるよ!」

空中から絶え間なく放たれる雷撃を躲しながら二人はなんとかアイリスの視界外に逃れようとするが、彼女は全く二人を見失わない。「そんなに逃げられたら…苛めなくなるじゃない?いいわよ、もつともつと逃げなさい!」

「ライトさん、先に行ってください!」  
「ダメだよ!ほら速く!」

ライトが全力で逃げれば逃げられないということはないが、彼女がネプギアを見捨てて逃げるわけもなく二人は一緒に逃げていく。

「ライトさんあそこ!」

ネプギアが指をさした場所は薄暗い洞窟、確かにそこに逃げ込めば空からアイリスが電撃を放つことはなくなるだろう。そこに、逃げ込めればの話だが

「そこに行くの?でも、それ私にバレちゃダメじゃない」

アイリスは当然のごとく洞窟へ逃げ込もうとする二人の前に雷を落として妨害する。

「くっ、なんとか一瞬の間隙をつければ!」

ライトは光の攻撃魔法、ネプギアは女神化して銃剣で攻撃を開始するが、魔法はアイリスの拒絶魔法によって打ち消され、銃撃は素手で弾かれ大した隙どころかダメージすら通らない。

「やれやれ、これじゃあ一週間耐えられないわよ?」

呆れてしまったのか、はあ、とため息をつきながらアイリスは地上へと足を下ろした。手には蛇腹剣を持ちくると回している。

「ほら、私を退けないと洞窟には入れないわよ？それとも別の場所に向かう？」

訓練開始から数時間、朝から飲まず食わずの体はもうすでに満身創痍、厳しい寒さで体温を奪われる中、これ以上外を歩き回るのは二人にとってリスクしかない。だからこそ、何が何でもアイリスの後ろにある洞窟へたどり着かなければならないのだ。

「いえ、通ります！」

「そう……なら頑張りなさい」

アイリスは空いている左手に一瞬だけ魔法陣を展開し、そこから大量の水を出現させ二人へと放つ。

「スプラッシュベール！」

ネプギアとライトは水の大波を避けるため空へ飛び上がるが、すかさず空にいるネプギアの足に蛇腹剣を巻きつけて地面へと突き落とす。

「くっ！」

地面に落とされたことによりネプギアに魔法の大波が直撃し、全身びしょ濡れになったネプギアだが、すぐに受身を取り剣を構える。しかし、そんなネプギアを見てアイリスはにやりと笑う。

「ギアちゃん、こんなところでびしょ濡れになって……体が凍らないように気をつけなさい？」

「あつ、ギアさん早く空に！」

時すでに遅し、ライトが叫んだ時にはもうすでにネプギアの足は凍りつき地面の雪と接合していた。これにより、ネプギアは身動きを取ることができない。

「ギアさん！」

「行かせないわよ！」

放たれた雷をライトは躲し苦し紛れにナイフを投げる。当然そんなものをアイリスに軽く避けられて後ろの洞窟の奥深くまで突き刺さってしまう。

「捕まって！」

「はいっ！」

ライトはアイリスの攻撃を攻撃を抜けネプギアの体へと触れる。そして、アイリスの魔法が二人を捉えようとした瞬間、黄色い光が二人を照らし、彼女たちは消えた。人の足のような形をした氷だけを残して。

「ちっ、そういう事……飛んだのね」

先ほど苦し紛れに投げたと思われたナイフにはライトが刻み込んだ魔法印が刻まれており、それを目的地とすることでライトはその場所へ瞬時に移動することができる。この瞬間移動は普段アイリスとトウカが使う瞬間移動とは違い、回数制限がなく連続で何度も使える。これが彼女が速い理由の一つだ。

「もう夜………今日はここまで見たいね」

そう言つてアイリスはネプギアたちの追跡をやめた。



「はつくしゅー!」

「ほら、ちゃんと火のそばに居て」

近くにある木を切つてまきを作り火にくべる。こんな雪山でびしょ濡れになったネプギアの体はもう限界だ。

「すみません………」

「良いよ、この二日間はギアさんが色々やつてくれたしね」

ライトは先ほど取つた魚を串にさして焼きながらそう笑顔で言う。そんな何気ない笑顔にも、満身創痍のネプギアにはとても嬉しかった。それと同時に、全くそんな様子を見せないライトを尊敬もしていた。やはり、トウカたちと同じ戦場を生きただから、普段アイリスやトウカにヘコヘコしていても、自分より何倍も強いのだ。

「ライトさんはすごいですね、私よりも動いてるはずなのに全然疲れた様子なんて見えないです」

「そうかな、結構疲れてる方だよ?」

そう言いつつも、彼女は一切笑顔を崩さない。

「私、ライトさんみたいになつたと笑顔で居られる人になりたいです」

「止めときなよ私なんて、それより団長や先輩みたいな大人になった方がいいよ」

ネプギアはそう言われてトウカやアイリスのようになった自分を想像してみるが、どちらとも似合わない。

「でも、本当にすごいですよ。皆さん」

「そりや頑張ったからね、私たちは当たり前だよ。でも、先輩は可哀想かな」

「トウカが、可哀想？」

「うん、先輩は強くなるしかなかったんだ」

強くなるしかなかった、その言葉を聞いてネプギアは前にトウカに聞いたことを思い出す。

親も、兄弟も、友達も、何も頼るものがなかったトウカは生きるために人を殺し、物を盗み、自分の力のみで生きていた。それがどんなに辛く、苦しく、悲しいものか、ネプギアには分からない。そんな幼少期を過ごせば、嫌でも強くなってしまう。強くなければ、死んでしまふのだから。

「きつと、先輩は強くなんてなりたくなかったと思う。人なんて殺したくなかったと思う。でも、それを世の中や先輩の周りの人は許さなかった」

戦争中、強い力を持った人間を国が放って置くわけがない。だからこそできる彼は戦場へと行かなければならなかった。作りたくないものを作り、殺したくないものを殺し、それだけやっても彼に残るのは敵国からの恨みと仲間からの恐怖だけ。

「人の役に立ちたかったのに、その才能を戦争でしか活かせなかった悲しい人、先輩はもつと別の形でプラネテューヌの、親友の役に立ちたかったんだと思う。その辺はよく知らないけどね」

「ずっと一人で……戦ってきたんでしょうか？」

「うん、先輩は冷たい様で本当は誰よりも優しいから。守るって決めた人のためなら平気で世界を相手にするし、どこまでだって汚れる。そんな人だよ」

ネプギアはトウカの事を、彼の過去を知らない。でも、これだけは言える。

「間違ってます、誰にも頼らないで一人で全部背負いこむなんて」

トウカは弱音を吐かない、泣き言を言わない、何も頼まない、何も求めない。ネプギア達には一人で抱え込むなど言うくせに、自分も誰にも何も話さず、一人でなんとかしようとする。それがネプギアはとでも不満だった。

だが、トウカの抱えている問題を今の自分が解決できるのかと聞かれれば、それは恐らく無理だろう。今の自分はトウカに護られているのだから。

「そうだよ、団長もそう言い続けてるけど、先輩は聞かないんだ」「そうですよね……………」

ネプギアは一つ、トウカの悪いところを見つけた。全く人を頼らないところ、それがトウカの一番悪いところだ。

「ねえ、ギアさんは何を指摘すの？」

「私は……………トウカに心から笑ってもらえるようにします」

表面上ではなく、心の底からトウカを笑顔にしたい。それがネプギアの、当面の目標だ。

「そういえば、昔のプラネテューヌ聖騎士団ってどんな感じだったんですか？」

「団長の言うことには絶対、はいかイエスカそうですか、しか言っちゃダメ。ちなみに、禁止ワードは、嫌ですダメです分かりません」

ネプギアはきつとアイリスのような女には絶対になれないだろう。そう確信した夜だった。

その頃のトウカとネプテューヌ

「ああもう!!トウカ速すぎ!」

「俺のGTRがお前に負けるはずがないだろう」

レースゲームをしてネプテューヌが連敗していた。

## 訓練終了

訓練7日目、ついに最終日となった雪山での演習、さすがに一週間も過ぎすとネプギアはサバイバル術にも目覚めて雪山でも問題なく過ごしていた。バイタリテイの高さは姉譲りだろう。しかし、現在ネプギアの姿は無く、アイリスの前にはライトしかいない。

「あら？ギアちゃんはどこかしら!?」

「ちよつと、用事です！シャイニングアロー！」

高速移動しながら目の前に黄色い魔法陣を展開、そこから無数の光の矢がアイリスに向かい放たれる。しかし、アイリスは全く動じず

「イントウルージュョン」

魔法でライトの魔法をキャンセルした。これは相手の魔法術式に侵入して無理やりキャンセルするという高等魔法だ。本来ならば詠唱を必要とするのだが、アイリスは詠唱無しで発動することができ

る。この魔法は魔導師にとってかなり厄介なもの、イントウルージュョンが早く発動出来るほど魔導師同士の戦いは有利になる。

(やっぱり団長に魔法は効かない、なら私のスピードで攪乱するしかない！)

そうしてライトは目を閉じながら意識を集中させ、体に魔力を循環させていく。身体を強化する単純な魔法、重力を和らげる反重力魔法、自分を加速させる加速魔法、それらを全て合わせ、最後に自分の能力を最大限に引き出す。

「ドラグーンインストールクォーター！」

そして、ライトの手足が黄色の人型の龍の様な異形の物へと変化した。その瞬間、ライトの姿が黄色い光になり、消える。

いや、消えているわけではない、光と同等、それ以上の速さにライトは至っているのだ。もはやその光も時々見えるだけで、あまり見えない。

「そうだったわね、貴女は私たちほど侵食されてないからクォーターまでしか出来ないのね」

顔では余裕なアイリスも、内心は少しだけホッとしている。

ドラグーンインストールとは、トウカやアイリスの中に眠っているものを無理やり呼び起こす物、それは侵食が進んでいる人間ほど強力な力を引き出すことができる。しかしその反面、これを使うと眠っている物が体に侵食していき、段々自我が崩壊していく。

ちなみに一番侵食が進んでいるのは言わずもがなトウカである。アイリスはその次だが、トウカはアイリスに比べ物にならないほど侵食が進んでいるため、人間らしい部分が殆ど残っていない。だからこそ、彼は表に感情を出すことができないのだ。

侵食され、失われてしまったから。

「けど、速いだけよ」

アイリスが後ろに肘打ちをすると、それはライトの腹部へと直撃した。

「いくら見えなくても、感知されれば意味ないわ。私の半径10mに円形状の感知魔法を展開してある。貴方は接近攻撃しか出来ないから嫌でも感知内に入らなきゃいけない、つまり私に絶対どの方向から攻撃するのかを察知されるから貴方の攻撃は私には当たらないわ」

雷撃魔法でライトを攻撃し、彼女が魔法を使えばキャンセル魔法を放つ。それらを行いながらアイリスはずっと感知魔法を展開していたのだ。普通の魔導師では真似できない。

「そろそろ体力もキツイんじゃないの?」

ライトは決して体力がないという訳ではない、常人を遥かに上回るスピードで動き続けているのだ。体力の消耗も相当なものだろう。

「キツイです、だからそろそろ……終わりにします!」

「へえ、一体どうする気かしら?」

アイリスは少し離れた草むらに意識を向ける。そこから何かの気配、恐らくはネプギア、そこからビームで狙撃する気なのだろう。だからそこに、ライトに気づかれない様に防御魔法を展開する。

「さあ、どうするのかしら?」

「行きますよ団長!」

ライトはナイフを複数アイリスに投げつけ、そこを座標として何度

も彼女の周りを瞬間移動を繰り返す。アイリスは至近距離で動き続けるライトを目では追わず、最後に感知した場所へ魔法を準備する。

「貰いましたー！」

「そこよー！」

ライトを捉えたアイリスは魔法を打ち込む、だが、ライトはそこから瞬間移動し消え、代わりに黄色い魔力で出来た鎖がアイリスを捉える。今の攻撃はフェイクで、元々ライトは自分の行動を封じ込めることが目的だった。そう気付いたアイリスは舌打ちする。

(でもあそこには防御魔法を展開させてある、破るのは不可能よ)

しかしアイリスの予想は外れてしまう。ゾワツと悪寒がしたのもつかの間、真下から殺気を感じてみると、そこには

「当たれええええええええええ!!!」

雪の中に隠れていたネプギアがM・P・B・Lの最大火力を放つ瞬間だった。

(なるほど、これが……あいつの言ってたギアちゃんの可能性)

放たれた桃色の光は、アイリスを飲み込んで行った。

そして、飲み込まれたアイリスの表情はなぜか、凄く晴れやかだった。



「やられたわね、これは」

はあ、とため息をつきながらアイリスは起き上がる。M・P・B・Lの最大火力を受けたにも関わらず、案外平気そうだった。それをみてやはりネプギアは力不足を痛感する。

「でも、あんまり痛そうじゃないですね」

「そうね、でも………これが私を殺せる威力だったら私は死んでたわ。それは紛れも無い事実よ」

そう言つて、アイリスは首をコキコキと鳴らしながらネプギアの頭をポンポンツと撫でた。

「強くなったわねギアちゃん、貴女ならいつかトウカを倒せるかもしれないわ」

「本当ですか!?!」



「あと400年もすれば勝てるんじゃない?」

400年、という数字を聞いてネプギアはげんなりしてしまった。だが、アイリスはネプギアに対し感じたことがあった。

一つ、ネプギアは殺気を隠し、瞬時にそれを爆発させることができる。これは奇襲に向いている能力だ。

2つ、知り合いにも躊躇なく攻撃できる事、これは普通は躊躇してしまうものだが、この子は何のためらいもなく出来る。そして、これが生まれながらにできる人間は、何かの拍子に道を違えてしまう。

ちなみにこの2つは、トウカも持っている能力だ。だからこそアイリスは思う、この子はトウカと似ていると。下手をすれば、トウカと同じ道を歩んでしまう危険性を孕んでいることを。

この子は女神の中で一番優しく、1番危険で、一度狂ってしまったら、人を殺す事に慣れてしまったら、1番厄介な存在になる。

その厄介な存在となってしまうのが、恐らく神次元のネプギアなのだろう。

(それを、トウカは感じ取ったのかしらね)

ネプギアとトウカは似ている、表面上ではなく、根本的な部分で。かつてアイリスは、外道を通り越し、悪魔になったトウカの姿を見た事がある。あの姿は今だに忘れられず、思い出すたび震えが止まらなくなる。その道をこの子が歩むかもしれないと思うと、怖気が止まらないのだ。

しかしアイリスは、そんな様子を微塵も見せず話を続ける。

「ライトも頑張ったわね、勘はだいぶ取り戻せたんじゃないの?」

「はい、おかげさまで」

「にしても私から死角の真下の、さらに雪の中に隠れてたなんてね。思わなかったわ」

今回の作戦はまずネプギアが雪の中に潜みM・P・B・Lのチャージに集中し、その隙にライトがアイリスを引きつけながらネプギアが潜むポイントまで誘導し、拘束するというものだ。ちなみにネプギアが感知魔法に感知されなかったのはアイリスが空中にいたため、雪の中まで感知魔法が届かなかったからだ。

「でも完全に騙されたわ、あそこに何置いたの？完全にギアちゃんの気配なんだけど」

「えっ？知りませんよ？」

アイリスは一瞬、二人が何を言っているのか理解できなかった。

「私たちの作戦はこれだけで、何も設置なんてしてません」

「でも確実にあれはギアちゃんの気配だったはず……………」

「もしかして、別次元のギアさんなんじゃ……………」

確かに、それならばアイリスがネプギアの気配を感じ取ったのも頷ける。しかし疑問は残る、なぜ何もない雪山に別次元のネプギアが居たのか。

「とりあえずこの件も含めてトウカに報告しましよ、帰るわよ」

「はい！」

こうして、ネプギアは確かな手応えを感じて訓練を終えたのだった。

## トウカとの亀裂編 亀裂

最近ギアちゃんの可能性を感じたからか、私はある夢を見ていた。忘れもしない、あの最悪の日を。

当時私とトウカの部隊には大きな亀裂があった。片方は科学、片方は魔法、だからこの2つは仲が物凄く悪く、ほとんど一緒の任務になど当たらなかった。でもその時はたまたま、私達のプラネテューヌ聖騎士団とトウカの戦術部隊が一緒の任務に就いた。

任務内容は敵国の兵士の討伐、でもその兵士はプラネテューヌの隣の村を無差別に焼き払って村人を拷問して殺すなど残酷極まりない兵士たちだった。

「全員気を引き締めなさい」

その当時私とトウカの間にも少し亀裂が生じていた。

私自身あまり褒められた人間では無いけれど、プラネテューヌ戦術部隊からは全くいい噂を聞かないから。

プラネテューヌ戦術部隊、又の名をプラネテューヌ研究開発部隊

蔑称は虐殺部隊、まさかトウカがそんな部隊を率いているわけが無いと思っていた。けれどますます噂は広がって行って、私はトウカに聞いたけれど、トウカは「お前には関係無い」という一言だけ、だから私はこの任務で真実を見ようとした。

心の奥底では、きつとそんな噂でしか無い、それが本当だったとしても、何か理由があるのだろうと考えてた。

でも……現実是非情で、残酷なものだった。

「殺せ」

トウカが出した指示はその一言だけ、それを聞いたトウカの部隊は一齐に兵士たちを殺していく。それはもはや戦闘ではなく、虐殺。

しかも、見たことの無い武器がまるで生き物のように形を変えて人を喰らい力を蓄えていく光景が目の前に広がった。

嘘だ、と思いたかった。何かの間違いだと思いたかった。目を背け

たかった。でも目の前で起きていることは現実です、目を背けることなんてできなかった。

「辞めなさい！」

私は魔法を放とうとしたけれど、発動しなかった。

その理由は後々わかったけどその時は分からなくて、事態が飲み込めずにいた。ちなみに魔法を使えなかったのは私だけじゃなくて聖騎士団メンバー全員が使えなくなってしまっていた。

「お前たちはお呼びじゃ無い、そこで雑談でもしておけ。すぐに終わる、なんならお茶でも入れてやろうか？」

「ふざけてるの………こんなの任務でもなんでも無い！一方的な虐殺じゃない!!」

「人聞きの悪いことを言うな、これはやり返してるだけだ」

「それって、プラネテューヌの村のこと？確かにこいつらがやったことはゴミ屑以下だけどこれはいくら何でもやりすぎよ！」

「くだらん、引き続き作業を続けろ」

人を殺すことを、その時のトウカは作業と言った。

そこから、私は気が付けばトウカに槍を突き付けていた。

「やめなさい、ここまでする必要はないはずよ」

「ほう、そうか……ならお前はその言葉を、この子の前でもいえるのか？」

そういつてトウカは一人の女の子を近くに招いた。14歳ほどの、黒い髪の女の子、その女の子の目はひどく暗く、光がなかった。

「この子はあいつらに目の前で親を殺された子だ。俺はこの子に頼まれて仕返しをしているに過ぎない」

「仕返し……?」

「人を笑いながら殺したんだ、なら自分たちも殺されても仕方ないだろう?」

私は、何も言えなくなった。

トウカの言っていることは間違えていないから、でも……だからといってこれはひど過ぎる。

「あなたは、あんな人食い兵器使って何がしたいの……こんなことで

国を守ってもあの子が喜ばない！」

「別に喜んでもらおうなんて考えてない、軽蔑してくれても構わない、俺はただ……あいつの居場所を守りたいだけだ」

そういって、トウカは私に背を向けて敵に向かって歩き出した。

私はその背中に手を延ばすけれど、その手が彼に届くことはなかった……

◇◇◇

「それで、あいつが雪山に居たわけか」

「そうなのよ、あなた何か心当り無い？」

現在、教会ではとっぜん現れた黒ネプギアについて情報交換が行われていた。

「いや、さすがにわからねえな……かき氷食べてたってわけでもなさそうだ」

カイナはいつものように軽口を言うが、どこか哀愁が漂っていた。

「あの、カイナさん。向こうの私と何があったんですか？」

「そうだな、そろそろ話してもいいんじゃないか？少なくともプルルートには知る権利があるだろう、命を狙われているんだからな」

「そーだよーくん、いい加減教えてよー」

カイナはそう言われるも何も話そうとしない、それを見かねた白ユニが重い口を開き話し始めた。

「カイナと私、それとプルルートは同じ国の人間だったのは知ってるわね？」

「たしかそつちの次元では長い間ルウィーしかなかったんだらう？」

「はあ、実はもう一つあったんだよ、プラネテューヌの前に存在した国、エフィコンっていう国がな」

カイナはもう仕方ないか、と行った感じで仕方なく話し始めた。

「エフィコンは100年続く大国で、資源もあつてテクノロジーも進んで繁栄してた、表向きはな」

「表向きは？」

「エフィコンはね、独裁国家だったんだよー」

独裁国家エフィコン



二人はとても暗い顔をしていた。

「一つ事件があったのよ……それがね」

「ねぶてぬのバカアアアアアア!!!」

突然部屋の中に泣きじやくったピーシエが入って来て話が中断された。

無視するわけにもいかないのでトウカとライトが頭を撫でながら話を聞いてみる。

「どうした?」

「泣いてたらわからないよ?」

「うっぐ、ねぶてぬが……ぴいのこと、嫌いって」

はあ、とトウカはため息をついた。

「ちよつと叱ってくる」

「少しはお姉さんになったかと思っただらこれね……」

トウカはネプテューヌのもとへと向かった。

◇◇◇

「ネプテューヌ」

「ギクツ、な、なにかなく?」

トウカの目が鋭いことに気が付いたのか、ネプテューヌは冷や汗をダラダラと滝のように流れ始める。

「ピーシエが泣きながら部屋に入ってきたんだが、何か心当りはないか?」

「な、ないよ?どうしたのかなあ……」

「……本当に知らないんだな?」

「うう……だってピー子が……」

ネプテューヌによると、ねぶのプリンを食べていたらピーシエがやって来て自分のだと口論になってしまい、いつものように腹部に突撃されてねぶのプリンを落としてしまったらしい。それを聞いたトウカは顔色変えずに即答した。

「お前が悪い」

「わたし!?!」

「ねぶのプリンはほかのプリンと味は変わるのか?」

「いや、変わらないけど・・・」

「ならそれを譲ってやるべきだろう？別にまだプリンはあるんだからねぶのプリンにこだわらなくてもいいだろう？」

「でも、私のだからねぶのプリンなんだよ!？」

「そのお前の下らんこだわりで、お前は友達を泣かせたんだぞ」

トウカがそういうと、うつ・・・と何も言えなくなってしまう。自分にも思い当たる節があるからなのだろうか

「とにかく、今すぐピーシエに謝れ、いいな？」

「・・・やだ」

「なに？」

ネプテューヌは俯きながら言ったあと、大声で言った。

「ヤダよ！だって私のプリンなんだよ!？なんでピー子にあげないといけないの!？ピー子こそ他のプリンでいいじゃん！なんでねぶのプリン食べたがるの!？意味わかんないよ!？」

子どものように駄々をこね始めてしまった。いつもなら、トウカはため息をつけてなだめるのだろう、しかし、今回のトウカは少し違った。

「本当に意味が分からないのか？」

「そんなのあたりま・・・」

「本当に言ってるんだな？」

ネプテューヌは、言おうとしたことを途中で止めてしまった。いつも一緒に過ごしてきたからこそ、今のトウカは自分に対しても怒っている。それが分かってしまったのだ。

「えつと・・・その」

「もう一度聞く、本当に意味が分からないんだな？」

「う・・・うん」

彼女は心底後悔する、トウカならいつものように駄々を捏ねれば許してくれると思っていたのだろう。

しかし、今回のトウカはとても怒っていた。彼女の言葉に

「わかった・・・ネプテューヌ、お前に一つ課題を出す」

「課題？」



その課題は、ネプテューヌにとっても……耐え難いものだった。

「その意味が分かるまで、俺に話しかけてくるな」

## 大切な友だち

「ネプちゃんく大丈夫？」

「ダイジョウブヨモンダイナイワ」

「確実にアウトね」

現在、ネプテューヌたちはR-18アイランドと言われる島に謎の砲台が設置されたという情報を受けて向かっている。ちなみに、トウカは教会に残って仕事をしている。トウカについて来て欲しいとネプテューヌは頼んだのだが

「知るか」

ふんつ、と冷たく言い放たれてしまい、女神化しているにも関わらず今の彼女は放心状態である。おかげで二、三回プルルートを落としそうになっている。ちなみにトウカの代わりにアイリスが付き添いで来ていた。

「まああれはネプテューヌが悪いからしょうがねえな」

「……………私は悪く無いわよ……………そもそもピー子がいけないんじゃない……………私のプリンなのに」

「アア、コレハカンゼンニダメナヤツデスワ」

「昔から好きね、その顔で人おちよくるの」

カイナはネプテューヌに、〇、顔をしながら言い、白ユニは呆れていた。ちなみに白ユニは女神化しているが、こちらのユニのように胸は軽量化しておらず、髪は白いポニーテールになっている。ネプテューヌはその顔にイラつときたが、怒る気力も今彼女には残っていない。

「ちなみにネプちゃん、トウカが怒った時はめんどくさいわよ。具体的に言えばモンハンとゴッドイーターとps2の1番強いエネミーが狭いフィールドで同時に襲いかかってくるくらいめんどくさいわよ」

「女神さんだからあれで済んでるけど、多分団長とか私ならもつと酷いんじゃないかな」

「ソウネー、ワタシタチナラムゴンデナグラレルモノネー」

カイナがやっていたのをやりたくなつたのか、アイリスも、〇、顔で片言を話し始めた

「おい、俺の持ちネタパクってんじやねえよ」

「良いじゃない、一晩付き合っただけだから」

「よし、一回使うごとに使用料一晩な」

「ユニちゃん、かーくんこの海に捨ててく〜?」

「了解」

「落ち着け! 話せばわかる!」

ブオンブオンとユニが海の中にカイナを落とそうとするが必死にしがみついて落とされまいとしていた。



舞台は変わってプラネテューヌ教会、トウカはいつになく神妙な顔つきで仕事をしていた。

「先輩、大丈夫ですか?」

「……………なにがだ」

「ネプさんのこと、怒りすぎたと思ってるんですけどよね?」

「……………話しかけるなは言い過ぎたかもしれん」

それが理由でトウカは少々、いやかなり落ち込んでいた。

やりすぎたと思っているのはネプテューヌだけではないのだ。

「でも、あれは怒らないとダメですよ?」

「わかってる。でももう少しちゃんとした怒り方が出来たんじやないかと思つてな」

トウカがそう言うと、ライトはため息をついた。

「それは先輩の悪い癖ですよ」

「知ってる、だがこればかりは治らん」

トウカの悪い癖、それは自分が下した決断や行った事をもつと上手く出来たんじやないかという思いに苛まれてしまう事だ。とくに、人の命に関わる事、自分の身の回りの友人の事に関する時によくこうなるのだ。

「過ぎてしまった事を後悔しても仕方ないですよ」

「そうだな……………あの子ならきつと気づいてくれるだろう、一人で無理

でも、仲間と一緒になら」

あの子はもう一人じゃない、だから迷ってもきつと歩いていける。そう思うトウカは仕事を再開した、のだが、意外な来客が来た。

「どうしたピーシエ、何か探し物か？」

「……なんでもない」

「ネプテューヌを探してるんだろう？」

トウカがそう言うと、ピーシエは体をピクリツと動かした。どうやら凶星のようだ。

「じゃあ私はこの辺で、またねピーシエちゃん」

ライトはポンポンツとピーシエの頭を撫でて外に出て行き、トウカはゆっくりとピーシエの前で目線が同じになるようにしゃがみ込んだ。

「本当は、ねぶのプリンをネプテューヌと食べたかったんだよな」

「うん……」

「でも、それは言わなきゃ通じないぞ？ピーシエだって、自分のおやつを取られるのは嫌だろう？」

「うん」

「それはネプテューヌも同じなんだ、それは分かるな？」

「うん……」

泣きながら頷くピーシエを、トウカは優しく抱き寄せて頭を撫でる。

「ネプテューヌが帰ってきたら、ちゃんと謝ろうな」

「でも、ねぶてぬびいのこと嫌いって……」

「本当に嫌ったりしてないさ」

「本当に？」

「ああ、俺だって昔はよく思っていないことを口に出して人を傷つけてしまった」

「とーかも？」

「もちろんだ、友達に酷いことを言って、結局仲直り出来なかった」

トウカはピーシエを撫でながら、遠い昔を思い出して苦笑する。

「仲直り出来なかったの？」

「俺が謝る前に、遠いところへ行ってしまった」

彼はかつて科学者で兵士だった。その時、かけがえのない大切な少女がいた、でも……その少女はトウカのやり方に反発し、トウカと口論の末に飛び出してしまふ。そして、その少女はトウカと再開する前に死んでしまった。永遠に仲直り出来ないまま、最悪の喧嘩別れになってしまったのだ。

「だから、ピーシエとネプテューヌにはそんなことになってほしくないんだ。だって、二人は友達だろう?」

「うん、ぴいとねぶてぬ友達!」

ニコツとピーシエはいつもの太陽のような笑顔に戻る。その笑顔は、どこかあの時の少女に似ていた。あの時、自分もつとあの子の言うことを聞いてやれていれば、彼女は若くして死ぬことはなかったかもしれない。でも、きつと彼女ならこう言うだろう。

あなたの決断で何人死んだかではなく、何人助かったかを考えて下さい。過ぎたことを悔やんでも、もうどうする事も出来ないのですから。

何度も何度も彼女に言われた言葉、この言葉に、自分はどれほど助けられ、強くしてもらっただろう。すごく、この言葉をかけられた時は嬉しかった、救われた。それなのに、あの時は素直になれず……結局彼女にお礼のひとつも言えず、自分に残ったのは後悔と自責の念だけ。

そんな思いを、ネプテューヌにさせてなるものか、厳しくても、こんな思いをさせるより遥かにマシだ。例え、自分がネプテューヌから嫌われることになったとしても。

「さあ、アイエフたちと遊んで来い」

「うんーありがとーかー!」

そう言つてピーシエは外に出ようとするが、何かを思いついたかのように戻つてくると、トウカにしゃがんでと言つた。なぜかは分からなかったが、トウカがしゃがむと、ピーシエは彼の頬にチュツと口付けをした。

「とーかすつごく優しくかったから、ぴい大っきくなつたらとーかを

「びいのお嫁さんにしてあげる！」

「いや、その場合お前の方が嫁なんだが……いや、言っても無駄か」

トウカは苦笑しながら、ピーシエを頭を撫でる。

「お前が大きくなって、俺のことを好きならな」

「うんっ！だからびい早く大きくなる！」

そう言っただけで今度こそピーシエは外に出て行き、部屋にはトウカただ一人だけが残された。そんな中、トウカは思うのだ。

(ピーシエが大人になる時、既に俺はきつと……)

ズキツと痛む右腕を抑えながら何気なく外を見る。今頃ネプテューヌたちは何をしているのだろうか、危ない目に遭ってはいないだろうか、そんなことを考えていた。

侵食が腕輪では抑えきれず、右腕が黒く変色して行っているにもかかわらず、彼は自分の心配など微塵もしていない。

当たり前だ、彼の中で一番大切なのはネプテューヌなのだから

## 我が生涯、一片の悔いはある

「さあ、これから入国審査ですわよ」

「それは良いけど……どうして女神化して水着を着てるの？」

「このR-18アイランドのドレスコードは水着、もしくは全裸ですよ」

それを聞いてカイナは考えた。

あれ？これ俺にとつてパラダイスじゃね？きつと水着着るのめんどくさくい♪とかいうお姉さまもいるから女子の裸が見放題とか俺得しかねえじゃん、とよだれを垂らして目をキラキラとさせていた。ちなみにグリーンハートたちの水着姿を見たカイナはバレないように胸をガン見して脳内保存を完了させた。

「やつほーお待たせ〜」

グリーンハートとパープルハート、そしてパープルシスターとカイナがいる所に、プルルートと白ユニとホワイトハートが合流した。

「どーかなー、似合ってる？」

「おー、似合ってるぞ」

貧乳には興味がないのか全く反応しないカイナであった。ユニはそれなりにあるのだが、幼馴染だからかせんぜん反応してない。

「あとはアイリスさんだけですわ」

「あー、ごめんなさい、待たせたわね」

そうしてアイリスが合流したのだが、アイリスはその贅沢ボディを惜しみなく露出させたビキニにパレオを巻いたなんとも目のやり場に困る格好だった。その瞬間、カイナの視界はプルルートと白ユニによって潰されてしまったが

「アアアアアアアアアアア!!その裸体を見たいけどどうせ今日の夜裸見れるから良いやあの一瞬で脳内保存したしアアアアアアアアアアア!」

目の痛さで床をゴロゴロと転がっていたカイナに白ユニとプルルートが追い打ちをかけるごとく蹴り続けていた。



それから数分後、ネプテューヌたちは無事に入国審査を終えてR—18アイランドに入国する。

「はいはいはいはいつと、観光ならR—18アイランド公認ガイドのリンダにお任せあれ！」

「うん？貴女どこかで……………」

「ああ!!あの時の誘拐犯！」

途中、いつの間にか事件現場にからいなくなっていた下っ端に再開した。ブランは妹たちの件もあってボコボコにしようとしたが、改心して真つ当に働いているというので思いとどまった。

「はあ……………」

「まだ落ち込んでんのかお前」

「ねぷう!?!そんなことないよ、やだなあカイナ、心配してくれてるの？」

声をかけられてとつきにいつものようにおどけて見せるがやなりボケにキレがない。トウカに話しかけるなど言われたのが相当ショックで堪えたらしい。

「…………トウカ、ピー子に謝ったら許してくれるのかな」

「…………ネプテューヌよお、お前ピーシエのなんだ？」

「えっ?」

カイナの質問の意味がわからなかったのか、ネプテューヌは頭に？マークを浮かべた。

「お前とピーシエの関係はなんだって聞いてんだよ」

「そんなの友達だよ」

「お前、友達と仲良くするのはトウカに怒られないためなのか？」

「そんなわけないじゃん！さつきから何言ってるのさ」

「だからさあ……………」

はあ、とカイナは心底めんどくさそうにため息をつきながら言う。

「お前はトウカに許してもらいたいからピーシエと仲直りしたいのか？」

「違うよ！」



「でもお前の発言はそう聞こえたぜ、ピー子に謝ればトウカ許してくれるのかなってな」

カイナにそう言われて、ネプテューヌははっとする。

確かにこのニューアンスではピーシエと友達に戻るために仲直りするのではなく、トウカに許してもらいたいから彼女と仲直りする、という意味に聞こえてしまう。

「まあ仲直りしたくないなら良いけどよ、一つだけ言っとくぞ」

カイナは頭を掻きながら気だるそうに言った。

「大切なもんってのは、自分が思ってもない時に突然なくなっちゃうもんだ」

「どういうこと?」

「いつでも会えるから大丈夫、なんて思ってたら或る日突然いなくなっちゃうかもしれないぞってことだ。ピー子は迷子だしな、今この瞬間にも母親が迎えに来てさよなら、っていうのもあるかもしれないぞ」

カイナに言われ、ネプテューヌは考える。

確かにピーシエは迷子、いつ居なくなるかはわからない。でも、ピーシエが居なくなるなどネプテューヌは思いたくはなかった。だから、彼女は考えるのをやめた。

「ま、まあピー子は単純だからすぐ許してくれるよ!」

「トウカはそういうこと言ってるんじゃないやねえと思うんだが……まあ良いか」

はあ、とため息をついてカイナは歩く。その後ろ姿を見たネプテューヌは、やはり同一人物だからかどうしてもトウカの面影を見ってしまう。まるで、トウカに自分だけ置いていかれそうな、そんな感覚に襲われてしまった。

(トウカは、私のこと嫌いになったのかな……ううん、そんなはずないよ。トウカは……きつと私のことを思ってたってくれてるんだよ)

ネプテューヌとて、トウカが自分をいじめるためにこんなことを言っているわけではないということにはわかっている。しかし、彼女にはまだわからないのだ。どうしてピーシエがあそこまでねぶのプリ

ンを食べたがるのか、その理由が。

第三者の大人なら、ピーシエがなぜネプテューヌはプリンを食べたがるかは一目でわかるだろう、しかしネプテューヌは当事者で、さらに大人とは言い難い。

「ここがR―18アイランドの穴場、ヒワイキキビーチです！」  
「……………」

全員口をぽかんと開けてヒワイキキビーチを見ていた（アイリスとカイナは目を輝かせていたが）

「ななななんでみんな裸なのよ!!」

「かーくんは見ちゃダメ〜!」

「いや落ち着け! 幸いギリギリのラインは謎の光草で見えない!」

「なんですかその謎の光草って」

「ああ、R―18アイランドだけに生えてる際どいところが大好きな草なんでさあ、お客さん前にも来たことあるんですかい?」

「おう、元の次元で鉄拳ちゃんと遊びに行つたところがここだったんだよ。いやあ鉄拳ちゃんのナイスバディが謎の光草で際立って…」

お分り頂けただろうか、今カイナが盛大に地雷を踏みまくっていることに。そしてカイナは気づくのが遅かった、自分の後頭部に銃が突きつけられていることに。

「カイナ、覚悟は出来てるわよね」

「ま、まあまあ、話せば「死になさい」あはんっ!」

言い訳をしようとしたカイナに容赦無く発砲した。

「かーくん、良い加減にしないと〜私怒っちゃうよ〜?」

「もう怒ってんじゃねえか…………」

ガクツと力尽きたカイナをよそに、ネプテューヌは先ほどまでの暗い自分を払拭するかのようには謎の光草を纏うため水着を一番に脱いだ。

「お姉ちゃん…………大胆…………」

「ネプギアもやってみなよー! 楽しいよー!」

「わ、私もやりますわ!」

「じゃあ私も〜」

そう言つてネプテューヌの他にベール、プルルートが脱ぎ始めた。  
「あなたたち……あ、そういえばアイリスはどこにいるの？」

入国審査を終えたあたりからめつきり見なくなったアイリスはどこかと、ブランは辺りをキョロキョロと搜索した。すると、木の近くにいるアイリスを発見した。

「何してるのよ」

返答は帰つてこない、本当に何をしているのかを見に行くと

「うみゅ〜」

暑さにやられたのか目を回していた。

「アイリス……あなた暑い嫌いな？」

「わたしは〜寒いところで脱ぐのが好きなのよ〜」

「それ絶対おかしいわよ」

暑いのは嫌いだが脱ぐのは好き、という謎の好みを知ったブランはアイリスを連れてみんなのところへと戻った。のだが、ノワール以外完全にお遊びモードだったためブランがハンマーで謎の光草を吹きとばした。

「ほら、さっさと行くわよ」

「つて貴女達水着脱いでたじゃない!?なんで着てるのよ!？」

「ノワール、人は見かけによらないものよ」

「そのことわざそういう意味じゃないわよ!」

白ユニは向こうの次元では妹であるノワールを諭すように言うが、こちらのノワールにとってユニは妹なので妹に諭されたような感じがして怒りが倍増するだけであった。

「えっ、そんな皆さん……」

しかし、純粋なネプギアだけはきちんと服を脱いでいた。その艶姿をカイナは網膜と綺麗なちゃんねーお姉さんを撮ろうと持ってきた一眼レフカメラ（5万G）で瞬時に12枚ほど撮影した。

「なっ、何撮ってるんですか!!」

「カイナ」

「かーくん?さすがに怒るよ〜?」

白ユニとプルルートがにじり寄ってくる。自分一人の力では逃げ

るどころかネプギアのお宝写真を守ることができないだろう。だから、彼は託すのだ

「ベエエエエエエエエル！受け取れええええええええええ！」

そしてカイナは同じ野望を持つ同士であるベールに幻のシックスマンも何も言えねえと言わんばかりに一眼レフを加速するイグナイトパス廻で渡す。それを、ベールは見事にキャッチした。

「頼むぞ、その写真を！」

「ですが、それではカイナさんが！」

「気にすんな………分かりきつてたことだ、さあいけ！」

「カイナさん………流石はトウカさんと同一人物、惚れてしまいそうですわ………分かりました後日必ず………A4サイズに印刷して伺いますわ！」

「ちよつ！ベール！何人の妹の裸写真ポスターにしようとしてるのさ！？」

そんなことは聞かずベールはカイナから託された一眼レフを持って泣きながら走って行った。

「かーくん、言い訳する？」

「我が生涯に、一片の悔いなあああし！あつ、やっぱり鉄拳ちゃんもヤツてから死にたかア”ア”ア”ア”イ！」

カイナは塵となった。

## トウカの弱点？その2

「とーか！あそぼー！」

しばらく仕事をしていると、ライトと遊ぶのに飽きたのかピーシエがトウカの執務室にやってきた。

「ライトはどうした？」

「あそこで寝てる！」

ピーシエが指を差したところを見ると、ライトがぐったりと倒れていた。恐らくは無限の体力を誇るピーシエに翻弄されて疲れてしまったのだろう。

「おい、大丈夫か」

「お疲れモードですう……」

「話し方がコンパと被ってるぞ」

ライトがぐったりと疲れてしまったからか、ピーシエは暇になりトウカのところへ来たのだろう。

「しかし俺は仕事だ、アイエフ達がいるだろう？」

「やだ！とーかが良い！」

はあ、とトウカはため息をついてしまった。なぜ自分はこうやって駄々っ子に好かれてしまうのだろうか。

「分かった、少しだけなら遊んでやる」

「やった！はやくいこー！」

よほど嬉しいのかピーシエはトウカの手を取って走り出し、トウカはそれを微笑みながらついていった。もちろん、ライトはその場に放置されてしまう。



結局、ピーシエだけでなくラムとロムも遊ぶことになり、どうせなら暇な連中を集めて遊ぶことになった。

ネプテューヌ達が海にいるためプールでも良いが、どうせなら少し外で遊んでからにしようと言うことで教会の中庭で遊ぶことになった。

「それで、どうするんだ？」

「軽くドツヂボールでいいんじゃない?」

ユニの提案によりドツヂボールになったのは良いのだが、問題はチーム分けた。

取り合えず大人のコンパとアイエフは別れるとして、トウカをどちらのチームに入れるかで議論になる。

理由は簡単、強すぎるからだ。

「大丈夫だよ、先輩が居ても変わらないから」

「どういう意味?」

いつのまにか復活していたライトが笑顔でそう言うため、取り合えずアイエフとユニとピースェとトウカ、コンパとロムとラムとライトのチームで別れて試合をすることになった。

「まずは此方からね、行くわよ!」

ユニが勢いよくボールを投げ、ライトがそれをなんなくキャッチしてラムへと渡す。

「ユニさん乗り気じゃなかったのに楽しそうだね」

「べ、別にそんなことないわよ!」

やはり大人ぶってもみんなと遊ぶのが楽しいユニはライトに言われて照れながらも投げられたボールを避ける。

「さあ、今度は私の番ですよ、覚悟先輩!」

「当たるか」

ちなみにこの試合、トウカとライトはかなり手加減して投げる事になっているが、お互いを狙うときだけ手加減なしで投げて良いというルールになっている。それ故ライトは自分特有のすさまじいスピードの球をトウカに向かい放つが、彼はそれを避けてボールは外野であるコンパに渡った。もつとも、運動音痴のコンパがライトの球を取れるわけがないので追いかけて取りに行くことになったのだが。

「それなりに楽しめてるみたいだな」

「そうね、普段あの子達は集まれないから、良い機会なんじゃない?」

ユニ、そしてラムとロムは女神候補生、実質的に国のナンバー2だが、そうは言っても彼女達はまだほんの子供、まだまだ友達と遊んでいたい年頃だろう。それでもユニには国の仕事があるし、ラムとロム

は幼すぎるためブランが居なければ国の外に出ることは難しい。だからこそ、皆で集まっているときに名一杯遊んでもらいたいのだ。

「とーか！次投げて！」

「俺がか？」

ピーシエはニコニコしながらトウカへとボールを渡す。トウカはあまり乗り気ではないが、雰囲気壊すのも悪いと思つてラムに照準を合わせ、ボールを投げた。

「きゃー逃げろー！」

しかし、そのボールはラムへと向かわず、なぜか後ろにいたアイエフの顔面へとクリーンヒットした。

「あぶっ!？」

トウカはかなり手加減したつもりだが、やはりそれなりの速度は出てしまつていたようだ。

「あいちゃん大丈夫ですか!？」

「いったあゝゝなんでこつちに飛んでくるのよ!？」

「すまん」

確かにトウカは前に投げたはずなのだ。しかし、ボールは彼の後ろへと飛んで行つてしまった。

「先輩、ノーコンだからね」

「いや、ノーコンつてレベルじゃ無いわよこれ……」

「あははは！トウカ下手くそくそ！」

「へたくそへたくそ！」

「へたくそ……クスクス♪」

ずーん、とトウカは落ち込んでしまった。



球技を終えて体が温まったトウカ達はいよいよプールに入ることになった。プールと言つても、少々大きめのビニールプールだが。

「楽しそうですね」

「そうだな、お前も向こうに行つてきたらどうだ」

トウカは少し離れたところからプールで遊ぶみんなを見ていた。ちなみにライトはレオタードのような水着だが、トウカはプールに入

る気が無いのかいつもの格好だ。

「先輩は？ああ……………水嫌いでしたね」

「言つとくが泳げないわけじゃないぞ」

「へえー、泳げたんですね、知りませんでし痛たたたたたたたたたたたたたた！！！」

ライトの言葉に少しイラツとしたのか、トウカはライトの頭を掴んでアイアンクローを食らわせた。

「ちよ、先輩ギブツ！ギブアップです！」

「泳げないんじゃない、泳がないんだ」

ぽいつとライトを投げ捨ててトウカは再び読書を再開する。

「っ!!」

しかし、突然トウカは持つていた本を落として右手を抑える。幸いにも他の人間には気づかれてはいない、それゆえ急いで本を持ち上げた読み始めるが、内心ではかなり焦っていた。

(見られてはいない……………な)

ホツとしたトウカはもう一度右手を一瞬見て、また読書を始めた。

しかしトウカは気づいてなかった、ただ一人に本を落とした事を気付かれたことに。



それから数時間後、遊び疲れてピーシエやラムとロムは眠つてしまいい、アイエフ達は各々の仕事へと戻った。

「ふう、ひと段落ついたな」

そう気を抜いた瞬間、右手に激痛が走りペンを落としてしまう。

あまりの痛みに顔をしかめて右腕を抑える。

「ぐっ……………」

黒いコートの袖を捲り右腕を見た。

そこには腕が何かに侵食されて黒く変色してしまっている。すでに侵食を抑えていた腕輪は意味をなさなくなってきた様だ。

「何よ、その腕」

ビクツとして扉を見ると、そこには驚いた顔をしたユニが居た。

「どうしてここにいる」



「さつき本落としてたのが気になったから来てみたのよ、そしたら何よその腕！」

「なんでもない……………」

そう言っつてトウカは再び袖を直して腕を隠した。

「何でもない訳無いじゃない！」

「本当に何も無い」

「……………いいわ、じゃあみんなに言っつてもいいのね」

ユニがそう答えると、トウカはため息をついた。

「脅してるのか」

「何でも無いなら話してもいいじゃない」

どうやら話すまでここを離れるつもりはないらしい。そう思っつたトウカは今まで誰にも、もちろんネプテューヌにも話さなかつた事を話し始めた。

自分がなぜ、人の身で何百年も生きることになつたのかを。

## トウカの秘密

トウカは重い口を開けて話し始めるが、やはりあまり乗り気ではないようだ。

そもそもこの話は誰にも言わないつもりだったし、聞いて気分のいい話ではない。

だからこそ彼はこの話を誰にもしなかった、この事実を知っているのは一部の人間だけでいいと、そう思っていたから。

「まずは……俺の体について話そうか」

ユニはゴクリ、と唾を飲み込んだ。ずっと気になっていた事が、今まさにトウカの口から語られようとしているのだ。

「俺の体は……もう人間の部分がほとんど無いかもしれない」

その言葉を聞いた時、ユニの背中にゾワツとした悪寒が走った。

人間の部分がほとんど無い、という事はつまり人間では無い何かがトウカの体の大部分を占めているということだ。

「表面上は人間にしか見えない、でも……中身は色んなものでぐちゃぐちゃになってるだろうな」

「何よそれ……」

トウカは自傷気味に笑ってみせるが、ユニからすれば笑い話では無い。

「なんで、そんなことを？」

「……守りたかったんだ、大切な人たちを」

トウカは黒く染まった右腕を見ながら、呆れるようにそう言った。

「国を守るため、人を守るために俺は強くならなければならなかった。だから一心不乱に強くなろうと頑張って強くなった、でも……それだけじゃ足らなかつたんだ」

「足らなかつた？」

「人の身では限界があつたんだよ」

いくら強い人間でも、普通の人間では守れる場所も人数も限られてくる。だからトウカはより多くを守るように、自分自身を人で無くして行った。

「俺はもともと人間の他に混ざってたからな、やり易かったんだ」

「他のもの？」

「ああ、元々俺はハーフだったんだ。それから、俺は自分を壊して行った」

「機械とか？」

「いや、体の機械化は当時は非効率的だったからやってない」

自分で研究して、色んなものを創り上げてきた。武器、装置、乗り物、それらは自分が望まない物もあつたいや、望まない物の方が多かった。本当は人の役に立つものを作りたいのに、人の命を奪うものを作り続けて来たトウカは、精神をすり減らして行った。

それなのに彼は更に、精神だけでなく体すらも人を捨てようとしていた

「俺が笑えなくなったのも、その辺りからだ」

精神と身体が磨耗した彼は、どんどん表情が固まり、怒ることも泣くことも簡単に出来なくなってしまうた。笑う事などもつてのほかだ。

「おっと、つい関係の無い話をしてしまったな。そろそろ本題に入ろうか」

話が逸れていたのを感じたのか、トウカは軌道を修正し始めた。いよいよ、ここからが本題なのだ。

「人を殺すものばかり作ってたが、本当は人の役に立つものを作りたいかった……人を殺すじゃなく、生かすものだ」

「生かす……もの？」

「たとえば、欠損した部位が回復して……病気になる、怪我をしてもほんの数秒で治る身体になったら……それは凄い事だと思わないか？」

「それって……」

今のトウカやアイリスは部位が欠損したとしてもすぐに再生し、彼らが風邪を引いたという事は聞いた事が無い。ということは、その何かをトウカは完成させたのだろう。

「でも、そんなの一体どうやって？」

「簡単に言えば、細胞だ」

人間の体は常に細胞分裂を繰り返している、だが失った細胞はよみがえることはない。だからこそ彼は細胞レベルで人間の体を変えようと考えたのだ。

「細胞同士を掛け合わせて、共喰いをさせてより強い細胞を作っている。それを何度も繰り返し……ひとつの細胞を作ったんだ。まるで蠱毒の様にな」

蠱毒、というのは古代中国で行われていたと言われる呪術、小さい瓶の中にたくさん生き物を入れて共喰いをさせるといっておぞましいもの。トウカは呪術ではないが細胞でそれに近いことを行ったのだ。

「それって、何の細胞を掛け合わせたの」

「多すぎて覚えてないな、覚えているので言えば……竜と鬼と狼と……後は女神だ」

「女神!？」

女神、と聞いてユニは啞然とした。

「ああ、敵国の女神の細胞を摂取して、それも掛け合わせて作った。それが……ニーム細胞だ」

「ニーム細胞……」

「この細胞は常に活発に動いている、つまりいつでも活性化している状態だから劣化しないしすぐに再生する、さらに強力になっていく。そんな細胞だ」

「でも、なんでそんな細胞が今あんたを苦しめてるのよ」

確かに話だけ聞いていれば、素晴らしい細胞で害を及ぼすところなど何一つない。

「ああ、この細胞は今まで他の細胞を喰らって成長を続けてきたから……常に別の細胞を捕食するという特性が……」

「つまり、ニーム細胞を取り込んだら逆にその細胞に食べられるって事?」

「そう、人間の細胞をニーム細胞が喰らい続けるんだ。だから俺の血液などに近づくなよ、体内に入ったらそこからニーム細胞が侵入して

しまうからな」

何度も捕食を繰り返した細胞はいつしかそれが本能となり、抑えがきかなくなつた。このニーム細胞は摂取した者に莫大な力を与えるが、体はどんどん細胞に捕食されてしまう。

「どんどん異形の姿になつて、筋力などが強くなつたのは元になつた細胞が竜や鬼だつたからだ」

「じゃあ、アイリスさんとライトさんも？」

「二人はかなり少ないがな、あの二人は改良されたニーム細胞を摂取してゐるんだろう。アイリスは1世代目を、ライトは3世代目だな」

「じゃあ、あんたは？」

「……………1世代より前、実用化される前のプロトタイプだ。改良も何もされていないから際限なくニーム細胞が侵食してくる。だから俺だけこの抑制装置を付けてるだろう？」

そう言つてトウカは自分の右腕をかざす、確かにそこには銀色の腕輪が付けられている。しかしそれは同時にニーム細胞の力が抑制されていない、つまり細胞が一番強い状態だ。

「今まではこれで何とか凌いでたんだが…………どうやらそろそろ限界らしい」

「限界つて…………どういふこと？」

「もうすぐ俺は人間では無くなる」

ユニは、心の中ではわかつていた。だけどそれを認めたくなくて、トウカの口から否定して欲しかった。でも、彼はそれを認めてしまつた。

彼はもう長くない、だからトウカはネプテューヌを少しでも強く、自分が居なくてもまっすぐ歩いていけるようにと、同時に悔いのないように一緒に居ようと今まで過ごしてきた。

「その前に、自分で終わらせる」

「…………にもならないの？」

「ならない」

「その細胞を取り除けばいいのよ!!作つたんだから、出来るでしょう!?!」

トウカは静かに首を横に振る、でもユニは諦められない。  
必死にトウカに食らいついていく。

「それこそ、みんなに言っただけ治療法を見つければ！」

「ユニ、これは病気じゃない。どうにもならないんだ」

「なんで…なんでそんなに他人事なのよ!!」

まるで他人事のように平然というトウカに、ユニはついに怒ってしまっただけ。

「ネプテューヌさんネプギアの事とか、他の人のことには一生懸命になるくせに、どうしてあんたは自分のことになったらそんなに興味なさげに平然してるの?!」

「……………俺はいない方が良さそうだ」

「つつつつつつ! あんたねえ！」

ユニはトウカの胸ぐらを掴んで引き寄せた。彼女の中は自分のことを大切にしない彼へと怒りと悲しみ、何もできない自分自身への悔しきでごちゃ混ぜになっている。

「良い加減にしなさいよ! あんたが居なくなったらネプテューヌさんはどうなるのよ!! ネプギアはどうなるのよ!! あたしだって……………まだあんたに教えて欲しいことがたくさんあるのよ!」

「……………ニーム細胞に完全に取り込まれると、体は化け物になって理性が無くなる。そこにあるのはただ辺りを破壊し尽くすだけの災厄だ。見ただろう? ネプテューヌたちが誘拐された時の俺の姿を」  
確かに、アイリスと戦った時トウカは赤黒い竜のような姿になった。侵食が進めばあの姿から戻れなくなってしまうのだ。

「言っておくがあれで50%だ、完全に取り込まれれば100%の力で暴れまわるだろう。そうなったら……………きつと誰にも止められない」  
「そんな事……………」

「なら、お前は近い人間を殺すことができるか?」

トウカはユニの目をまっすぐ見て問いかける。平和な時代に生まれた彼女たちにとって、親しい人間を殺すことなどできるのかと。

その答えはおそらくNOだ。

いきなり知り合いを殺せと言われても、普通の人間ならできる訳が

ない。ましてやユニは子ども、そんな重責に耐えられる訳がない。

「ユニ……人は何かを決断しなければならぬ時が必ずやってくる」

「でも、あんたを殺すなんて……そんなのネプテューヌさん達ができる訳ないじゃない」

「そうだな……でも、俺一人の命よりゲームギョウ界全員の命の方がはるかに大きくて重いんだ」

確かに一般論はそうだろう。しかし、だからと言ってすぐに割り切れる人間など少ない。

「ネプテューヌさんは、納得しないわよ……」

「納得させるさ……女神というのは、一より多を常に優先しなければならぬ。それが国を治めるということだ」

上に立つものはそれ相応の権力を持つことができるが、それと同時に重大な責任を負う事になる。それを蔑ろにすることなどできない。ネプテューヌとて、いつまでもトウカに甘えている訳にはいかないのだ。

「少なくとも、あたしは納得できない！だってそんなの………トウカが………損してばかりじゃない……」

人のために、友達のために自分を犠牲にしてきた結果が自分で作ったものに殺される。それは確かに報われず、損してばかりの人生だろう。だが、トウカはそれでも何一つ文句を言わない、誰も責めない。

でも後悔が無い、といえば嘘になる。自分自身に対しては、逆に不満しか残らない。

「ああ、今考えれば間違いだらけの人生だよ。もし過去に戻れるなら、昔の自分を殺してなかった事にしてやりたいよ」

「できる訳無いけどな」と言っただけトウカはまた薄く笑う。

「これが俺の体の顛末だ。満足したか？」

「満足なんてしないわよ……」

「だから聞いても気分のいい話じゃ無いと言っただろう？」

はあ、とトウカはため息をついた。

そして彼はユニの頭をポンつと撫でながら微笑む。

「この話は誰にも言うなよ？」

ユニは黙って、うつむきながらコクリと頷く。

それを見たトウカは部屋から出て行き、部屋にはユニだけが残された。

「……………はあ」

誰もいない部屋で、壁に寄りかかっていたため息をつく。

トウカを助けるにはどうすればいいか、それは自分にはわからなかった。



## カイナの決意とトウカの考え

「酷い目にあつたぜ」

「自業自得よ」

白ユニとプルルートに袋叩きにされたカイナはぼやきながら歩いていた。結局のところ、まだ問題の砲台には辿り着いてはいない。

「あつー。そうでさあお兄さん、良いところがあるんすよ」

「良いところ？」

突然リンダがそんなことを言い出した。良いところ、と聞けば袋叩きにされて気分が落ちているカイナは嫌でも興味がわく。

「実は、極上の水着美女が居て……その草むらの奥に知る人ぞ知る秘境、白濁の滝の前で夜のお供を探してるそうですぜ？」

「マジかよ」

「へい、皆様にはごまかしておくんで、どうぞ行って来てくださいな。早くしないと先越されちますよ？」

それを聞いたカイナは騙されたと思いつつもながらも気分をウキウキさせてみんなにバレないように草むらへと入って白濁の滝に向かう。どんな美女なのか、果たして巨乳なのか、そんなことを妄想しながら遂に白濁の滝へとたどり着いた。

この白濁の滝は水に炭酸水素ナトリウムやその他の成分が含まれているため白く濁っているだけであつて卑猥な意味ではない。

「さーて、極上の水着美女はどこにいるんだ？」

カイナが辺りを見渡していると、不意に後ろからギュツと抱きしめられた。

「だーれだ」

不意に見えた桃色の髪、そしていつも聞いていた懐かしい声で、自分がまんまと罠に嵌められたことにカイナは気がついた。それゆえ、ため息をつきながらその問いに答える。

「真面目な地味キャラからトチ狂った厨二病キャラになったネプギアちゃん」

「ハズレ、正解は可愛いネプギアちゃんでした」

「胸がDになってから出直してこい」

「本当に好きだね、女の子の胸」

あはは、とネプギアは笑いながらカイナから離れた。彼女は水着ではなくいつもの黒いセーラーワンピースで、カイナはやっぱり騙されたのかとため息をついた。

「って事はあのリンダって奴はお前の仲間か」

「ううん、ガイドっていうからちよつと頼んだだけ」

そもそも水着がドレスコードのR―18アイランドにどうやって普通の服でやってきたのか不思議だったが、そんな考えはすぐに放棄した。今問題なのはどうして黒ネプギアがここにいるのかだ

「お前、なんで最近ゲームギョウ界中に出没してやがるんだ？」

「まだ内緒かな」

クスツといたずらっ子のような笑みを浮かべる黒ネプギア、だがカイナは笑う気分ではない。半ば騙されていることはわかっていたが、よりによって知り合いに、現在敵対している友人に引き合わされるのは気分の良いものではない。

「なあ……お前本当にあいつらを殺すのか」

「……………うん、そうだよ」

もう何度も聞いた問いかけに、彼女は顔色一つ変えずに答える。

「人は女神じゃなく、同じ人に統治されるべきだと私は思う。だから、この世界に女神はいらない」

「……………そうかよ、なら……俺とユニも殺さなきゃダメだな」

カイナは持っていた木刀の剣先を黒ネプギアへと向けた。

「……………そうだね、もうカイナくんも人間じゃないんだよね」

オレンジ色の瞳と紅い布が巻き付けられた右腕を見ながら、黒ネプギアは心苦しそうに呟いた。もうすでに、カイナは半分人間では無いのだ。

「殺すよ、ユニちゃんも……カイナくんもね」

彼女目には敵意とは違う、もっと何か複雑なものが見て取れた。好意と殺意が入り混じっているような、そんな感じの目だ。

「カイナくんも、今度は殺す気で来ないと……死ぬよ」

「……………そうかよ」

「私が言いたかったのはそれだけ」

そう言って黒ネプギアは歩いて行こうとするが何かを思い出したかのように振り返る。

「あとひとつ、ここに設置されたのは砲台じゃないよ」

「砲台じゃない？」

「これはヒントだよ、あんまりあっさり勝っても面白くないからね」

そして黒ネプギアは今度こそどこかへ消えていった。確かノワールたちはここに砲台が設置されたと言っていたが、だとすればここに設置されたものはなんなのだろうか？

「……………考えても仕方ねえか、帰ろつと」

カイナは頭を掻きながら歩き出す、今度黒ネプギアと相見える時は戦場、次は手加減などせず全力でくるだろう。だからこそ、自分も全力で応えなければならぬ。そう思いながら右手を握りしめていた。

「イヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

「ほらほらほら!もつと良い声で鳴きなさいよ!」

だから、真横で幼馴染により行われているえげつない行為は見なかったことに、何もなかったかのように通り過ぎる。

「何してんだごらアアアアアアアアアアアアアアアア!」

ことが出来ずにカイナはアイリスハートの後頭部に飛び蹴りを食らわした。

「痛い!ちょっとお?何するのよかーくん」

「やかましいわこのド天然ドS女神が!人がシリアスに決意を固めている横で何してんの!?!ヴァカなの!?!ヴァカなんですか!?!ああん!?!マジでいい加減にしろよ流星のカイナさんも怒っちゃうよ!?!泣かすぞゴラア!」

「へえ?泣かす?かーくんが私を?良いわよ、やってみなきやん!?!」

いつもの嘲笑するように髪をかき上げて笑う姿に、ついにカイナはキレてしまったのか、無言で彼女の顔面に木刀を叩きつけた。

「や、やってくれるじゃ痛い!?!」

そしてそのまま木刀の柄でアイリスハートの前頭部をゴスツゴ

スツと殴り続ける。

「やつ、ちよ、やめつ、良い加減につ、おこ、んつ！」

目尻に涙をため上目遣いで睨みつけるがカイナは全く気にする事なく作業の様に前頭部を殴り続け、しまいにアイリスハートが泣き出してしまうという事態が発生した。

「ねえ、ユニ……もしかしてカイナって怒らすとプルルートより怖いのか？」

「普通に怖いわよ」

ちなみにネプテューヌは謎の薬を飲まされて変な事になり、変なものに触る様にアイリスに木の棒で突っつかれていたという。



数時間後、砲台の正体を確かめた一行はプラネテューヌへと向かっていた。結局のところ、あれはただのシャボン玉を射出するだけのものだったのだが、カイナは引っかかっていた。

そんな下らないものをあの黒ネプギアが用意するとは思わなかったからだ。何かあるとは思ったが、調べようもないためおとなしく帰ってきた。

「ただいまー！」

ネプテューヌは元気よくみんなに挨拶をするが、教会に残った一行はとてもそんな雰囲気ではなかった。

「どうした？誰かの預金通帳が紛失でもしたのか」

「あんたの考えが一番怖いわよ」

カイナは試しにおどけてみるがイマイチ反応が悪い、ということ結構重大な事が起きているのだろう。

「実は……ピーシエちゃんが……」

話を聞くと、ピーシエが母親と名乗る女性に連れられて帰ってしまったという事だった。それを聞いたネプテューヌは居ても立ってもいられず、ピーシエが残したぬいぐるみを持って走って行った。

「でも、ピーシエちゃん帰るとき様子がちよつとおかしかったって……」

「ふーん、ライト」

「はい団長」

アイリスが名前を呼ぶと、どこからともなく黄色い閃光とともにライトが現れた。時間にしておよそ2秒である。

「トウカは？」

「今は旧国立研究所跡地にいるみたいです」

「なんでそんなところに……」

「詳しい事はわかりません」

「そう、とにかく話を聞きに行くわよ。ギアちゃん、あとはよろしく」

「は、はい」

そう言つて、アイリスとライトはトウカの後を追つてその場を後にした。

「ネプちゃん、大丈夫かなく？」

「さすがに今回の件はネプテューヌも堪えると思うわ」

プルルートとブランが、いやおそろくここにいる全員がネプテューヌの事を心配している中カイナは平気そうな顔をしてあくびをしていた。

「寝るわ、おやすみ」

「っ！あんたねっ!」

「俺にどうしろつてんだ？俺がトウカの代わりに慰めてやれつてか？冗談じゃねえ、俺は俺であいつはあいつだろ。それに、あいつが今ネプテューヌのそばにいないって事は何か考えがあるつて事だ」

確かに、様子がおかしいピーシエをトウカがなんの考えもなく返すわけがない。だからこそ、彼には何か考えがあるのだろう。でも、それはネプテューヌにとつてとても酷な事だ。

「それに、あいつが泣きそうな時に励ましてやるのがお前ら友達のやる事だろが。俺が行ったところで、なんの意味もないだろうしな」

そう言つてカイナは教会の中に入って行った。

「とりあえず今考えても仕方ないわ、もう遅いし今日はお開きにしましょう」

白ユニの言葉とともに、その場にいた全員は不安を抱きながら解散する事になった。

## 番外編 女神の学力テスト

「ああああああああああああああああああ!!!」

ある日の事、突然教会内にアイリスの悲鳴が響き渡った。

どうせまたゲームの事だろうとトウカは呆れながらアイリスの執務室へと向かった。

「なんだ」

「うぐつ、トウカあ……………持ち物全ロストじだああああ」

半泣きになりながらアイリスはトウカに抱きつき胸に顔を埋めて泣いた。

「持ち物? ああ……………なるほどな」

アイリスのテレビ画面にはマインクラフトが表示されていて、どうやらランチマイニングの最中にマグマに落ちてしまった様だ。

「2時間、2時間かけてやっとダイヤ見つけたのに、6個も見つけたのに……………」

「泣く事ないだろう、また集め直せばいいんだから」

「もう何個残ってるか分かんないわよ! また鉄のツルハシ作らなきゃいけないし!」

ちなみに全ての道具にエンチャントをしていたらしい、これはなかなか堪える。

「そもそも、ちゃんと仕事は終わらせたのか」

「終わらせたわよ」

意外と真面目に仕事をしているアイリスだった。

「あーもう! マイクラなんてやめやめ! BFやろつと。トウカもやるわよ」

「俺は仕事が残ってる」

「良いじゃないそんなのほつといて」

「アホか」

「分かったわよ、じゃあ仕事手伝ってあげる。終わったら良いでしょ?」

「ま、まあな……………」

それを聞いてアイリスはトウカの執務室へ行って仕事を手伝う事になった。やはりトウカ並みのスペックを持っているからか本気を出せばトウカと同じくらい仕事ができる。しかし

「あれ、トウカこの字なんて読んだっけ？」

「お前まだ読み書きが出来ないのか………」

「で、出来るわよ！ちよつと難しい字が出てきただけよ！」

「報告の報が難しい字なのか？」

基本的にアイリスは頭が悪い。魔法構築式や魔法理論、魔法に関する知識はトウカ以上なのだが、その他が壊滅的に悪い。特に漢字を読む事と書く事が壊滅的に苦手なのだ。

「まあろくに勉強しなかったお前が悪いな」

「べ、勉強が全てじゃないし！」

「勉強を蔑ろにしている奴の典型だな」

はあ、とため息をつくトウカにムカついたのか、アイリスは静かに立ち上がった。

「絶対、ぜつつたいたい私よりバカな子ぐらいいるわよ！」

「さあな、ひよつとしたらいいかもしれないぞ」

「それを確かめるために………やるわよ」

「なにを」

「学力テスト」



そんな訳で急遽、ネプテューヌ達女神と女神候補生、そして人間達が一つの教室に集められた。

「なによこれ……」

有無を言わさず連れて来られたためかノワールは少し機嫌が悪そうだ。その他の面々も不満が見て取れる。ちなみにラムとロムとピーシエは子供すぎるためライトと遊んでいる。

「はーい、全員集まってるわね」

ガラガラガラツと引き戸を開けてメガネをかけスーツを着たアイリスが入って教卓に立つ。

「お姉さん、なにをするの？」

「はい質問は後で受け付けます。ちなみに私の名前は」

カツ、カカツカ！と黒板に自分の名前を書くが、適当に書きすぎて読めない。

「アイリスです」

「いや読めないから!!!」

何人かからツッコミが飛んできたがアイリスは気にせず話を続ける。

「ていうかなんでこんなところに集めたのよ、わざわざ制服まで用意して」

「つーかなんで俺だけ学ラン？」

「男は学ランって相場決まってるでしょ？」

そんな事もないだろう、というツッコミはカイナは口に出さず自分の心の中に止めた。結局彼も学ランの方が好きなのである。

「そういえばトウカは？」

ネプギアの言う通り先ほどからトウカの姿が見当たらない。

「あー、もう直ぐ来るんじゃない？」

そう聞いてネプテューヌは少しうずうずとしていた。アイリスが教師のような服装で来ているのだ、それならばトウカも教師のような服装でカツコよく決めているのではなかと思っているからだ。

「すまん、遅れた」

しかし彼が服装にこだわるわけもなく、いつものように黒いコートだった。それを見た途端ネプテューヌは残念なような、でも少し嬉しそうな、そんな顔をしていた。

「副担任のトウカ先生です、よろしく」

「なりきってるな……………」

ノリノリで進行するアイリスに呆れながらも付き合うトウカは、きつと心の中ではそれなりに楽しんでいるのだろう。

「それより、どうして私たちはここに集められたんですの？」

「いい質問ね」

ビシツと指し棒でボールを刺した後、アイリスは淡々と話し始めた。



「国を統べる女神、それらは人を正しい方向へ導いていかなければならないわ。そのためには……多くの知識がいる。果たして……それは貴女たちにあるのかしら？」

急に真剣になったアイリスに一同も気を引き締める。

アイリスは仮にも過去の戦争を生き抜いてきた人間、今の自分たちに物申したい事があっても不思議ではない。

「もちろん女神だって間違える時がある、その時は人間がその間違いを正さなければならぬわ、でも果たしてそれが出来るほどあなたは賢いの？」

「さつきと本題に入って、まどろっこしいのは好きじゃないの」

いい加減しびれを切らしたのかブランが不機嫌そうに言った。

「だから、今から学力テストやります」

この時全員が思っただろう、こいつは何を言ってるんだと。

「なんでそんなことしなきゃいけないのよ、こっちは仕事で忙しいの」「あらノワールちゃん、ひよつとして頭の悪さが露見するのが怖い？」

「そんなわけないでしょ！」

「怖いんじゃないわね……ねえみんな？」

アイリスがそういうと、周りから「怖いならしやうがないですわね」「やなんだあゝノワール怖いんだあ、じゃあしやうがないねえゝ」など女神仲間からクスクスと嘲笑が聞こえてピクピクとこめかみを動かす。そしてさらに

「ノワールは昔からヘタレだからね、シヨウガナイネ」

「ノワール、やりたくないなら良いのよ？その分私が頑張るわ！」

「うがああああああああああ！上等じゃない、やってやるわよ！クラスでトップの成績取ってやるわよ！」

カイナお得意の、〇、顔でおちよくられ、白ユニに心配されてついにキレてしまったノワールは挑発に乗せられてしまう。

そして、それを見たアイリスは計画通りと言わんばかりの笑みを浮かべていた。全員、ノワールを弄るときは団結するのである。それを見たトウカはため息をつきながらイチゴ牛乳を飲んでいた。



「なんだ」

「貴方は受験生の父親か!? 勉強に疲れて寝落ちした娘に優しく毛布を掛ける父親か!? そんな心暖まる光景なんて今求めてないから!」

「こんな所で眠ったら風邪引くだろう」

「起こしなさいよ勉強時間なんだから!」

そんなわけでネプテューヌを起こして再び勉強時間へと戻した。

「ていうか真面目に勉強してないの私だけ!」

「いや、プルルートも寝てるな」

「ほっとけ」

カイナからすればプルルートが眠っているに越したことはないのだ。

「ていうかトップになっても何もなかったらモチベーション上がらないよ〜」

「それは俺に言わずアイリスに言え」

確かに、一番になっても何もぐ褒美がないのであればやる気にならないというのも仕方がないだろう。

そう考えたアイリスは何かを思い付いたかの様に顔を輝かせた。

「そうね・・・一番になった人は、この中の誰か一人を選んで何でもひとつ言うことを聞かせても良いわ」

それを聞いた瞬間、一同に稲妻が走る。何でも好きなことを出来る・・・と言うことは

「お姉さん、それってもちろんトウカも入ってるよね?」

「勿論よ」

「なに!? 聞いてないぞ!」

「だって言って無いもの」

口笛を吹きながらおどけて言うアイリスにとてつもなく殴りたいという衝動に駆られた、ここはグツと我慢した。

「そっか・・・なら、負けられないわね」

いつの間にか女神化したネプテューヌは先程とは比べ物にならないくらい勉強をしていた。

その他にも、あまり真面目ではなかったベール、先程から真面目

だったノワールとユニ、そしてネプギアは更に気合いを入れて勉強し始めた。

しかし、ここで頭を抱えている少年が一人

「ふふふ、楽しみねえかーくん？」

眠っていたプルルートは女神化してアイリスハートに変身した彼女は先程の不真面目さはどこへやら、真面目に勉強を始めた。これはかなりレアな光景だろう、しかしカイナはそれどころではない。

（間違いねえ、こう言うときプルルートは恐ろしいくらい実力を出す……さらにユニは素で頭が良いからトップの可能性は十分ある。ヤバイ、あいつらがトップになったら……確実に結婚させられて人生束縛エンドだ！）

カイナとの結婚をしている？つもりのプルルートはこれを機に本当に結婚してしまおうと、ユニはカイナを自分とノワールのものにしてしまおうとこのテストで必ずトップを狙ってくる。そうなれば、彼の自由はなくなってしまう。だからこそ、彼は適当に受けるつもりだったこのテストに人生を賭けなければいけなくなってしまうのだ。

「くつくつく、人の欲望を見るのは楽しいわね……」

「ブラッくな笑い…面白いならぬ面黒いだな」

「やかましいわ」

というより、話の趣旨からもう逸れすぎて訳がわからないことになってるんじゃないか？というトウカの考えは何処かへ消えていった。

## ノーウエルピース

プラテューヌ旧国立研究所跡地、ここは昔の国立研究所の廃墟が丸々残されている。取り潰されない理由は幾つかあるが、代表的な理由として過去のテクノロジーとここを破壊した際に昔使われた兵器が暴走などすればとんでもない被害が発生してしまうからだ。

触らぬ神に祟りなし、と言ったところだろう。

そんな中、トウカは辺りを見渡しながら研究所内を歩いていく。

「……………ついたな」

かつての姿とは変わり果てたその場所のプレートには総合技術研究課と書かれていた。ガラス張りの自動ドアは割れており、その機能を満足に活かせていない。

「何年振りだろうな……………」

はるか昔に使っていた自分のデスクを見つけると、埃が被つていても自分の名前が彫られていることを確認して苦笑する。

そう、ここからいろんなものを誕生させてきたのだ。乗り物も、武器も、兵器も、そして今自分を苦しめているニーム細胞も、全て……………」

「さて、動いてくれよ……………」

そうして彼は自分のデスクにあるパソコンの電源を入れた。

ハード自体は昔のものだが、ソフトウェアは今のパソコンにも負けないOSを積んでいるはずだ。そう思っていると、鈍い光がディスプレイに投影され、トウカはほっと安堵のため息をつく。

(あれは確か精神汚染系の兵器…だとすればこの欄…あった)

カチカチとマウスをクリックして探し当てたのはかつて自分が作った兵器のリストと設計図。その種類は多岐にわたり、危険度が下からソルテム<sup>安</sup>、ペリクロム<sup>全</sup>、ペリクロム<sup>危</sup>、モロス<sup>死</sup>、ペレデイシヨ<sup>壊</sup>、デスペラテイオ<sup>絶</sup>とランク付けされている。

ソルテムは人に害のない安全な物。

ペリクロムは人に害のある危険な物。

モロスは人が命を落とす可能性がある物。

ペレデイシヨは一つの国が滅ぶほど力を持つ物。

デスペラティオは世界が消滅するほど力を持つ物だ。

ちなみにアイリスたちが使っている改良型のニーム細胞はペレデイシヨだが、トウカが使っているプロトタイプはデスペラティオにランク付けされる。

「これをどこから……」

なぜトウカが今になってそんなことを調べているのかというと、ピーシエが母親と名乗る女性に連れて帰られる時、明らかに様子がおかしかったため彼なりに分析してみると、一つ心当たりのある兵器を思い出したからだ。

「ブラインウオーム……全く面倒なものを……」

そこに書かれていたのは壺の中に入っている大きいミミズのような物体だった。名前はブラインウオーム、危険度ランクはペリクロム。

これは簡単に言えば相手に取り付いてその宿主の記憶などを操作する生物のような物、そしてこれは専用の機材で細かく指令を出すことができる

「さて、どうやってお前は どうやってピーシエを助け出す？」

ピーシエへの罪悪感で胸がチクチクと痛むのを感じながら、誰にも聞こえない呟きは夜空へと消えていった。

それで終われば良かったのだが、ことは簡単には終わらない。

トウカのパソコンに研究所への不法侵入を検知したことを知らせるアラートが鳴り響いた。区画は実験区画レベル3、モロスランクの兵器などが保存されている区画だった。

こんな場所に侵入してくるのはこの時代においては二人ほどしかない。

「何の用だあいつら……」

はあ、とため息をついた。彼女たち魔法使いがこんな科学の総本山に一体何の様なのか、何となく見当はつくが面倒だ。しかもわざわざ実験区画を通ってくる辺り面倒くさい。恐らく入り口から入るのが面倒だったから壁でも破った結果なのだろう。

「やれやれ」

もう一度深いため息を吐いた後、コンソールを操作して実験区画レベル3内のすべての封鎖を解除、中に保存してある物を全て開放しておいた。まあ、そんなことで怪我をする彼女たちではない、ということが分かっているからこそ出来ることなのだが。

「こんな所で説明するのは面倒だ、その目で直に見てもらおうとするか。たどり着ければの話だが」

ふっ、と苦笑しながら彼は研究所跡地を後にした。

彼がたどり着ければ、といったのはここは純粋な戦闘力だけで突破できるほど甘くはないという事だからだ。

まあ、たどり着いたとしてもトウカの目的は達成されるのだから



「ああもうめんどくさいわね！」

アイリスとライトはトウカを追って旧プラネテューヌ研究所跡地に来ているが、入り口が見つからなかったため壁を破って侵入したのだがそれがいけなかったのか研究所の防衛システムを作動させてしまったのか、戦時中の兵器などが作動してアイリスたちを攻撃し始めたのだ。

「これ全部先輩が!？」

「ええ、ずっと放置されてたのに動くなんて、いい仕事してくれるわよね！」

トウカへの皮肉を口にしながら兵器を破壊していくアイリスとライト、しかし数が一向に減る事がない。どんどん出てくる。

「ああもう、このままじゃジリ貧よ！ライト、トウカの研究室まで行って防衛システムを止めて来なさい！ここの4階にあるはずよ！」

「でもこんな数！」

「いいから行きなさい！研究室が潰れてたら戻って来なさいよ!？」

うつ、と一瞬顔を顰めたが、ライトは全力速度でトウカの研究室へと向かった。

「さてと、こっちはこっちの仕事をしますか」

恐らく研究室を探すのと防衛システムを止めるのに時間がかかってしまうため、いくら速くても5分はかかるだろう。

ほとんどは機械の兵器だが、所々に人間の様な化け物が居る。恐らく、これらもトウカたちの手によって作られたのだろう。

「ボルトスパイク」

アイリスは電撃を帯びた拳を床に叩きつけ雷の衝撃波を周りに放つ魔法を繰り出し、機械兵器の基礎部分を破壊して無力化させ、生物兵器を雷の剣で薙ぎ払った。その際、飛び散った血液が彼女の体を赤く染め上げる。

「ノーウエルピースか……………」

ノーウエルピースとは、死刑囚や敵国の捕虜などを兵器として改造する非人道的な手術で作られた兵士の事だ。彼らには意志もなく、欲求もない。ただ体の内部の機関へエネルギーを供給させ続ければ何時間でも働く意志のない駒、消耗品だ。

「まだ残ってたのね」

そう呟くと、アイリスは雷でノーウエルピースたちを薙ぎ払った。

ノーウエルピースに改造されれば最後、あとは体だけ動いているだけの人形に過ぎない。もつとも、ほとんどの場合手術の段階で気が狂うのだが。たとえ気が狂わなくとも人間の部分をほとんど削られるため何も出来ないのだ。

他の国ではこのノーウエルピースにされることは死よりも恐ろしい事と考え、プラネテューヌの捕虜になるなら死を選べ、という考え方をしていた国もあったらしい。

彼らを救う事ができるのは、死のみだ。

「ごめんなさいね、私の幼馴染が…」

ノーウエルピースのチェインソードを躲して蛇腹剣で腹部を切り裂いていく。救いは死しかない。だから彼女はノーウエルピースを全員殺していくのだ。彼を止める事ができなかった…………贖罪として。

「はあ、あらかた片付いたわね」

数分後、すべての機械兵器とノーウエルピースを撃破したアイリスは血でぐっしりと汚れた顔を拭いながらため息をついてタバコに火をつけた。その時だ、他と違う足音が聞こえてきたのは

「明らかにでかい足音ね…………」



ドンドンドンツと足音がやみ、その姿を現した。

それは他のノーウエルピースとは明らかに大きさが違う、他のノーウエルピースは人間の大きさだったにもかかわらず、アイリスの目の前のノーウエルピースは体調が2 m以上あり、右腕は丸ごと巨大な爪になっている。

「……………この子まで……………」

その姿を見たアイリスは唇から血が出るほどかみしめた。

アイリスは目の前の化け物、いや、化け物になる前を知っていたのだ。

「エルフェア……………」

エルフェア、アイリスが率いていたプラネテューヌ聖騎士団の副団長、つまりライトが副団長に就任する前に副団長を務めていた男性だ。

「あなたも、まだそのままだったのね……………」

「グワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

雄叫びをあげながら、エルフェアと呼ばれたノーウエルピースはアイリスへと向かい突進し爪を突き出した。アイリスはそれを、紙一重で躲し、手刀に集中させたエネルギーで腹部を貫いた。

「長い間……………苦労様」

アイリスが拳を引き抜くと、エルフェアはぐらりと床へ倒れて血を噴き出した。

「もうゆっくり寝なさい」

そう言つて、アイリスは蛇腹剣で彼の首を跳ね飛ばした。

エルフェアはアイリスにとって友人であり、有能な部下だったが、彼は国を裏切り、トウカの怒りを買ってしまったため捕らえられた時に殺されず、改造されてしまったのだ。

「ごめんね……………何もしてあげられなくて……………」

誰もいないその場所で、アイリスは一人涙を流した。



「団長！止めました！」

「遅いのよ、全く……………」

数分後、ライトが防衛システムを止めて戻ってきた。

やはり防衛システムを止めるため時間がかかったのだろう。

「すみません……………」

「別にいいわ、行くわよ。どうせいないんでしょ、トウカの奴」

そう言つて頭を掻きながら出口へと向かうアイリス、しかしなんとなく…………自分がいない間に何かあったのということがライトにはわかった。

「でも、先輩は一体何がしたかったんでしよう？」

「自分が作ったものを見せたかったのよ」

「なんのためにですか？」

トウカは自分のことを自慢する人間ではない、しかもこんな悲惨なものをわざわざ見せる人間でもないのだ。だからこそ、どうしてこんなことをしたのかライトにはわからなかった。

「俺はこんなに悪い奴だ、だからもう俺に構うなつてことよ」

自分はこんな醜悪で、悲惨で、残酷で、冷血な人間だ。

だからもう俺に構うな、俺のそばに近づくな、お前たちもこんな事になるかもしれないぞ、そういうメッセージが込められている。

「こんなので離れると思つてるのかしら、本当に馬鹿ね」

蛇腹剣を納めて歩いていくアイリスは吐き捨てるように言った。

「上等よ、あなたが私に離れて欲しいっていうなら、私は絶対に離れてやらない、絶対に誰にも渡さない、絶対に貴方に私の手が届く所に居てやる」

その言葉とともに、アイリスはまた一步を踏み出した。

いじけんな

あれから数日間、ネプテユーンはずっと国の見回りをネプギアとブルルートとともに空から行っているのだが、特に問題も変わったところもない。しかしネプテユーンは他の人間の静止も聞かずと見回りを続けている。

「トウカさん、ネプテユーンさんは大丈夫でしょうか？」

「大丈夫ではないだろう」

彼女は今まで友達と別れたことも、ましてや喧嘩別れなどしたこともしたことがないためどうしていいかわからないのだ。本当は会いたいののに、謝りたいのに、その気持ちに嘘をついて、誤魔化すように普段やらない国の見回りをしているのだ。

「言っておくが、慰めたりするんじゃないぞ」

「それは分かっていますが……こんなの……」

「確かにかわいそうだ、でも……あの子にはいつまでも子供のままでは困る。大切な者を自分で守れるように、取り戻せるようになってもらわなければならない」

自分はもう、守ってあげられない、そばにいてやれない。だからこそ、憎まれたとしても、強引だとしても、こんな方法でしかこの子を強くすることができないのだ。

「でももし……ピーシエさんにもしものことがあれば……」

「そうなったとしても、あの子には守れなかったという後悔が生まれる。それはもう二度と大切なものを無くさないという決意が変わる」

だからと言ってピーシエを利用することに罪悪感がない訳ではない。だが、彼は信じている。

「あの子なら大丈夫だよイストワール、あの子にはくじけた時に奮い立たせてくれる仲間がいる、あの子はもう俺が居なくても一人じゃない、寂しくないんだ」

あの子ならばきつと、ピーシエを救うことが出来るだろうと。

「それはっー」

イストワールが何かを言いかけた瞬間、トウカは手を前に突き出し

てその言葉を遮る。

「じゃあな……………」

そう言つて、トウカは歩き出した。



「だりいな……………」

現在、カイナはネプテューヌ達とプラネテューヌの見回りに無理やり連れてこられていた。

「にしても頑張るなあおい、空から探したって見つからねえつてのに」「そうだよねえ〜何だか〜今のネプちゃんのこと〜すつごくいじめたくなる〜」

「頼むから女神化すんなよ、話がさらにややこしくなるから」

「ちよつと二人とも何してるの！手伝つて！」

ウルフを討伐しているパープルハートから檄が飛ぶが、二人はどこ吹く風で聞き流していた。

「だってかわいいそうだよ〜」

「モンスターはモンスターよ！」

ピクリツ、とカイナの眉間が動いた。

「早くしなさい！これは二人のためでもあるのよ！」

ブチツとカイナの中で何か切れた音がした。

そしてモンスターの群れの中を歩いて行き、地上で戦っていたパープルハートの顔を木刀で叩きつけた。

「グワアアアアアアアアアアアアアアアア！」

その隙をついてか、ウルフがカイナに飛びかかろうとしたが、彼がウルフを見た瞬間、ウルフは蜘蛛の子を散らすかのように退散していった。

「何するのよ!!」

「俺さあ、嫌いなもんが多いんだけどよ、その中でも嫌いなのは、迷惑なことをお前のためだつて押し付けられることと、何もしてねえ生物に八つ当たりしてるやつが一番嫌いなんだよ」

そう言つて、再びカイナはネプテューヌに木刀を振り下ろし、ネプテューヌはそれを防ぐ。カイナの斬撃は片手にも関わらず重く、両手

で防がなければ防御ごと叩き潰されてしまいそうだった。

「やめてカイナ！私あなたと戦いたくない！」

「じゃあおとなしく殴られてな！」

ネプテューヌの制止を聞かずにいるカイナは木刀で攻撃し続ける。

「いやっ！やめてー！」

「やめねえよ」

「っ！やめてっばー！」

ガギンツ、と鈍い音がしてカイナの手から木刀が弾かれた。しかし、それでも彼は右腕でネプテューヌの顔を殴りつける。

「どうした、もう終わりか？あ？」

「やめて……やめてよ……」

いつの間にか、ネプテューヌは女神化を解いていつもの姿に戻っていた。

「カイナとぶるるんは……友達でいてよ……お願いだから……もう誰も私の目の前から消えないでよ……何でもするから……」

「……………これでわかったらネプテューヌ」

ネプテューヌが顔を上げると、そこにはカイナの姿があった。

「友達なんてもんはいつ目の前から消えるか分からねえ、不安定なものなんだよ」

ネプテューヌの周りから人が消えたことなどトウカと出会ってから一度もなかった。だから、いつまでもそこに居るのが当たり前だと思っていた。でも、それは違うのだと、今気付かされた。

「だから、消えない様にその手をしっかりと掴んでろ、そしてもし……万が一にもその手を離して相手がどこかに行ったなら、何としても探し出して手を引っ張って連れ戻せ」

くしゃくしゃと、ネプテューヌの頭をカイナは撫でた。

「それに、何でもしてやりたい相手は別にいるだろうが」

「……………ピー子……………」

ボロボロと、ネプテューヌの目から涙がこぼれ落ちた。

分かっていたのだ、自分の気持ちを誤魔化しているだけだということ。でも、くだらない意地でそれを認めることができなかった。

「分かったなら、さつきと探しに行けよ、それでちゃんと謝ってトウカに会いに行きな」

「うん……ありがとねカイナ」

「いじけてるお前がウザかったただけだっの」

少し照れた様に、カイナは頭を掻きながらプルルートのところへと歩いて行った。

「優しいねえ〜〜かーくんは〜」

「そんなんじやねえっの」

プルルートに冷やかされながらもその顔はどこか穏やかだった。

「ネプテユヌー！」

そうしていると、血相を変えてノワールたち女神が全員現れた。

話を聞くと、r-18アイランドに新国家が建国されたというのだ。

「ユニ、状況は？」

「芳しくはないわ、おそろく……」

「分かった、行くぞプルルート」

カイナたちはr-18アイランドに大急ぎで向かうことになった。



「もう直ぐだね」

「そうだな」

r-18アイランドにおいて、ヴェアフルと黒ネプギアが空を見上げていた。

「でも私たち両方とも同じ人を待ってるなんてね」

「あいつとお前のカイナは違う」

「まあそうなんだけどね」

悪魔の様な黒い外装と赤い筋が入った鎧はまるで人を捨てた様に不気味だった。

「私はあの男を殺す、それだけだ」

「そっかねえ………ひとつだけ聞いていい？」

「なんだ？」

「この世界のカイナくんが好き？それとも憎い？貴方の中で、まだ師

匠としてのカイナくんが残ってるんじゃないの？」

「……………下らん」

ヴェアフルは後ろを向いて歩き始めた。

「全ては過ぎ去りし記憶だ」

その言葉は鎧にこもって声質は分からなかったが、どこか切なそうに感じた。全ては過ぎ去りし記憶、それは黒ネプギアの胸にも大きく刻まれていた。

自分も負けられないのだ、すべての女神を殺すまで。

それが自分の、今まで彼を傷つけ、大切なものを奪った贖罪なのだから。

## ヴェエアフル

「いよいよ敵が動き始めたな」

「新しい国……しかも別次元のあなたが女神だとわね」

「それ団長も人のこと言えませんから」

教会の一室でモニターを覗き込む三人、その表情はどこか訝しげだ。

「諜報部からの連絡だと、殆どの人間は操られてるらしい」

「全部ブレインウォームで操ってるのよね？よくもまあそれだけ数を集めたものね」

「広範囲に指定しているから一人一人の洗脳力はさほど強いものではないだろうだが、ピーシエは限定して使われているからこそ、意識を奪わずに、それが本来の自分であるかのように錯覚させられてるんだ」  
いわは記憶の改ざん、つまり従わせるのではなく、自分の意思で従っているように錯覚させているのだ。

「助けてあげないの？」

「それは俺の役目ではない」

そう言いながらトウカはコンソールを操作する。

「よし………さてと、ここからどうするつもりだ？ネプテューヌ」

その言葉は二人にも聞こえず呟かれた。



「たどり着いていきなり戦闘かよ！」

r-118アイランドにたどり着いたカイナたちはいきなり操られた兵士に襲われて交戦していた。相手は普通の人間だからこそ手加減しなければいけないため、普通に戦うよりも消耗させられる。

「ちっ、敵の大将はどこだ!!」

「とにかくここから進まない事には始まらないわ」

白ユニと共に敵をなぎ倒していくが一向に減らない、よくもまあこんなにも人数を集めたものだと苦笑しながら二人は進んでいく。

「ノワ子！お前は砲台を破壊しろ！」

「分かってるわよ！」



ノワールが砲台へ斬りかかろうとしたその時、上から何かが降ってきた。

「いたたたた……もう上手く飛べないよ……」

上からライトが落っこちてきた。しかしいつもの姿とは違う。

「ライト?」

「ライト? 私はえーと、イエローハートだよ!」

確かにライトとは違うようだ、しかし姿が瓜ふたつのため何らかの関連性はあるのだろうか。

「お姉ちゃんお姉ちゃん! いっぱい遊んでいいんだよね!」

「うん、あの青い髪のお姉さん達といっぱい遊んでいいよ」

イエローハートがニコニコしながら姉と呼んだ人物は黒ネプギアだった。そしてもちろん、青い髪のお姉さんというのはアイリスハートのことだ。

「あれが……別次元のネプギア……」

「なんだが、凄く怖いですわ……」

「ああ、全身からヤバイ雰囲気漂ってやがる」

「ふふふ、よく言われるんです」

くすくすと笑いながら黒ネプギアはゲハバーンを取り出して剣先をカイナへ向ける。

「あれ? お姉ちゃんがもう一人いるよ?」

「あれはお姉ちゃんの偽物だから倒していいよイエローハート」

「そっか! 私頑張る!」

シャキンツと爪を取り出して構えるイエローハートを見て全員臨戦態勢に入る。

「その代わり、あのお兄さんには攻撃しちゃダメだよ? あの人はお姉ちゃんが倒すから」

「分かった!」

「させると思うの!」

白ユニがビームを黒ネプギアに向けて放つ、しかしそれはヴェアフルによって防がれた。

「私の攻撃を片腕で!」

「マジかよ……………こっちのユニのビームは対戦車ライフルより重たいぞ」

「そんなもの私にとっては豆鉄砲にすぎん」

明らかにヤバイ、この中での鎧が一番強いということを誰もがその一瞬で痛感した。

「……………プラネテューヌの女神」

「わ、私？」

「あの男を殺す前に……………まず貴様から殺す！」

黒い大剣を翻し、ヴェアフルはネプテューヌを殺そうと地面を蹴った。その衝撃でクレーターができ、一瞬にして上空にいたネプテューヌとの距離を詰めた。

「早いっ!？」

「お姉ちゃん！」

真一文字に振られた大剣をなんとか刀で防御する事に成功したが、あまりにも衝撃によって島の木に吹き飛ばされた。何本もの木にぶつかりなんとか立ち上がるも、まともに斬撃を防いだ右手がビリビリと痺れていた。

「防いだけでこの威力……………」

防御したとしても防御ごと斬り伏せられるという感覚にネプテューヌは戦慄した。しかし、その状況を黙って見ている女神達ではない。

「私たちのことも忘れないでよね！」

ノワール、ベール、ブランが一斉にヴェアフルに向けて攻撃を開始する。

「ブラン！」

「任せろ！」

ブランが後ろから斧を振るい、避けたところをノワールが真上から強襲する作戦で二人はヴェアフルへ向かう。

「貴様らに用はない」

ブランの攻撃を片腕で防ぎ、彼女ごと持ち上げて上から来たノワールへ叩きつけて二人一斉に岩へと投げ捨てた。

「私を忘れないでください！」

ボールの音速を超える突きを剣の腹で防ぎ、彼女の得物を弾き飛ばした後、ネプテューヌにとつて馴染み深いものがあるところには見えた。

「クリティカルエッジ」

クリティカルエッジ、ネプテューヌの代表技であるクロスコンビネーションが生み出される前にトウカから教えられた三回の斬撃を放つ技、それをヴェアフルはネプテューヌをはるかに上回る精度でボールを切り裂いた。

(どうして……どうしてその技を?)

その技を使うことができるのは自分のトウカだけのはずなのに……そう思うネプテューヌの心は痛んだ。

「女神が三人がかりなのに一瞬で……」

何百年も国を治め守ってきた女神達が一瞬のうちにやられてしまった光景を見て、ネプギアは震えが止まらなくなった。

「早く逃げろギア！」

「君の相手は私だよ！」

ネプギアを助けようとするも黒ネプギアに妨害される。アイリスハートはイエローハートと交戦中、白ユニは操られている人間の対処に追われて動けない。

「逃げなさいネプギア!!速く！」

「っ!!!」

ドンツドンツ!とビームを放つが、もはや防ぐ必要もないとも言わぬようにノーガードでネプギアの元へと駆け出す。

「消えろ」

「ぐっ!!!」

大剣の腹で殴られ、ネプギアは森の中へと吹き飛ばされた。

「まちな……さいー!」

ネプギアを追いかけて行くヴェアフルを追って、ネプテューヌは立ち上がった。



「痛い……」

攻撃が直撃したネプギアは女神化が解けてしまい、その場から動けずにいた。速く立たないとヴェアフルが来てしまう…それは分かっているが、体が言うことを聞いてくれない。

「ネプギア」

「お姉………ちゃん？」

ネプギアが目を開けると、そこにはネプテューヌが居て手を差し伸べていた。

「立てる？」

「うん、ありがとう」

ネプギアはネプテューヌの手を借りてフラフラしながらも立ち上がった。

「お姉ちゃん、あの黒い鎧はなんなんだろう……」

とてつもない強さを目の当たりにして、ネプギアは不安そうにネプテューヌに問いかける。

「そうね………自分の過ちを正すためにやって来たのよ」

「え？それってどういう………」

「ネプギアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

ネプギアが振り向くと、そこには息を切らしながらこちらに向かうネプテューヌの姿があった。では、今日の前にいるネプテューヌは何者なのだろうか？

そう考えていると、腹部に何か刺さる感覚に襲われた。

「えっ？」

自分の腹部を見てみると、そこにはヴェアフルが持っていた黒い大剣が突き刺さっていた。

「ネプギアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

大剣が引き抜かれると、ネプギアはぐったりと倒れてしまう。

「あなたは………誰なの？どうして私と同じ姿をしているの!?どうしてクリティカルエッジが使えるの!!答えて………答えてよ!」

もう一人のネプテューヌは何も言わない、彼女はそのままネプテューヌに背を向けて歩き出し、黒い鎧を纏ってカイナ達が戦っている場所へと戻った。

「一体………何者なの？」  
ネプテューヌはネプギアを抱きしめたままその場から動けなかった。

## ヴェアフルとの戦闘

「ちくしょー！邪魔だつてんだよ！」

「そういう言い草はないんじゃないかな!？」

上空で闘うアイリスハートとイエローハートの下、地上では黒ネプギアとカイナが激闘を繰り広げていた。しかし、完全にヴェアフルが一番の脅威と認識したカイナにとって黒ネプギアと戦っている場合ではなかった。

「今頃、ネプテューヌちゃんはやられてるんじゃないかな！」

「へ、こっちの俺の教え子だぞ。あんな鎧でガチガチに固めた玉無し野郎に負けるかよ」

「まあ元々玉ないんだけどね」

「ああ？どういふこった？」

「そのままの意味だよ！」

ガギンツと鈍い音が響く。ゲハバーンと木刀では完全に性能の差があるにも関わらず均衡しているのはカイナの技量もあるだろう。

「相変わらず強いねえ、木刀なのに同等に渡り合うなんて！」

「そんなゴツイ剣は好きじゃねえんでな！」

「昔からカイナくんは刀だけだったもんね！」

真一文字に振られたゲハバーンを仰向けに躲し、そのままバク転に移行して黒ネプギアの顎を蹴り上げ

「そのまま岩盤に埋まってるゴラア！」

そのままクルツと回転し黒ネプギアを蹴り飛ばした。

「ぐっ、頭が……………」

「三半規管に直接届く打撃だ、てめえでもしばらく動けないだろうよ」

一人戦闘不能にしたとはいえ、一番強敵がまだ残っている。だからこそ気が抜けない。

「ちっ、くそ…………どこ行きやがった」

「私を探しているのか」

「おおー、探す手間が省けてよかったぜっ！」

振り向きざまに木刀をヴェアフルへ振るう。しかし、ヴェアフルが

手で防いただけでカイナの木刀は砕け散った。

「んな……!?!」

「こちらも、探す手間が省けた」

ゴリツ、という鈍い音がする。

視界が一瞬で眩み、一気に肺から空気が排出され全身に鈍い痛みが駆け巡った。

「がはあー!」

頭から流れた血が入って視界が赤くなる、そんな中でカイナは自分の体を分析していく。

(血管切断、肋骨骨折、内臓損傷、あーあ、ざっと調べただけでこんなに負傷かよ……こりやあやべえな)

かなりの血を吐血し、だんだん意識が遠くなるが、ここで倒れるわけにはいかないのだ。

「カイナ………か、彼も最初はそんな名だったな」

「ああ? 何言ってるやがる」

「トウカ、などという日付から付けた安直な、子供が付けた名前をいつまでも名乗って……」

そう吐き捨てるように言うと、ヴェアフルはカイナに背を向けて歩き出した。

「殺さねえのか?」

「お前を殺さないと約束したんでな、別次元の妹と」

「別次元の妹………お前何言ってるやがる?」

カイナを殺さないと約束させたのは恐らく黒ネプギアの事だろう。それを別次元の妹とは一体どういうことか、それがカイナには分からなかった。

「てめえもしかして………」

「さらばだ」

そのまま、カイナの意識は暗転した。



「イエローハート、いつまで遊んでいる」

「この人強いんだよ!」

「さつさと終わらせろ」

「あら、生意気な子がいるのねえ！」

「早く退場願おうか別次元の女神よ、この次元に貴様の居場所はない」  
ヴェアフルは黒いエネルギー波を上空に向けて放った。アイリスハートはそれを寸でのところで回避した。

「ちよつとヴェアフル！私が遊んでるんだから邪魔しないでよ！」

「黙れ、いつまで遊び気分にいるつもりだ」

鎧を着ているから表情はわからないが、怒っている。ということはイエローハートにもわかった。

「私に対して遊び？大きく出たわねえ！」

「遊びと言わずなんという？私ならば」

ザシユ、と肉を切る音がした。アイリスハートの目掛けて放たれたその斬撃は彼女ではなく、彼女をかばった白ユニの体を切り裂いたのだ。

「一瞬で終わる」

「ユニちゃん!?!」

地面に吹き飛ばされた白ユニの元へ向かうと、とつさに武器で防いだのか傷自体はそこまで深くはないが、武器はもう粉々だ。武器で防いでいなければ両断されていただろう。

「どうする？貴様らの戦力はプラネテューヌの女神と貴様だけだ」

「あなた、かーくんはどうしたの？」

「蹴り飛ばしただけで瀕死だ」

そう聞いた瞬間アイリスハートは瞳孔が開きすぐさま斬りかかろうとしたが、それは白ユニに止められてしまう。ここで向かっていても返り討ちにあうだけなのだ。

「ぶるるん、ユニちゃん！」

そこにネプギアを抱えたネプテューヌも合流して人数から見れば2対3、だが向こうの布陣は片やダメージが通らない女神、片やとてつもない力を持つ鎧、これでは形勢逆転、というわけにはいかない。

「諦めろ」

「あなたは誰？なんでトウカを狙うの!?!どうして私と…私と同じ姿を



しているの!？」

自分と同じ姿をしたヴェアフルを見たネプテューヌからしてみれば、あの時から疑問が尽きないのだ。別次元の自分、というのもおかしい。あれ以来大きな反応はなかったし、それにヴェアフルが居たのはこの騒動が始まる前からだった。

「死に行く貴様に何を語ろうが無駄だ、なんの苦しみも知らずのうとうと生きてる貴様などに、知る権利などない」

「あなたは何か知ってるっていうの？」

「……………黙れ、貴様は何も知らず……………何も考えず、そのまま死んで行け!!」

地面を蹴り、ネプテューヌたちに迫るヴェアフル、その危機に対して瞬間的に反応したネプテューヌとアイリスハートもヴェアフルへと向かっていく。勝てない確率の方が大きい、だが……………自分達が行かなければネプギアも白ユニもやられてしまう。

「ぐっ、ぬううううううう!」

「小賢しい真似を」

「ねえ、女神はねぷちゃんとおたしだけじゃないわよ?」

そう、ヴェアフルの後ろから3人の人影が高速で向かってきていた。あれしきのことでは、永年に渡って国を治めることなどできるわけではない。

「私たちのこと、忘れてんじゃないわよ!」

ノワール、ブラン、ベールの同時攻撃を飛び上がって回避したヴェアフルは剣を構えて辺りを確認する。

女神が5人、否、武器を交換して構えている白ユニを合わせれば6人の女神がここにいます。

「これで形勢逆転ね」

「ふん、そう思っているなら貴様の頭は花畑だな、ラステイションの女神よ」

「いちいち感に触るやつね……………」

ブラックハートの苛立ちも返さず、ヴェアフルは剣に黒いオーラをまとい深く構える。

「貴様らの相手をしている暇などない」

「ねえヴェアフル、あなたカイナを瀕死だつて言つてたわよね？」

不意に、白ユニがそんなことをつぶやいた。その顔はどこかにやりと意地の悪いもので、何かを企んでいる顔だった。

「何が言いたい？」

「いいえ、ただ……あいつは瀕死にさせたくらいじゃ倒せないわよ」「なに？」

そして、森の中からとてつもない轟音が聞こえて全員が音の方向を向く中、白ユニだけは笑っていた。

「あいつは、腕が落ちようが脚がなくなろうが、死なない限り戦い続けるわよ」

赤い閃光とともに、赤い刀を持ったカイナが飛び出してきた。

「らあああああああああ！」

しかしカイナはヴェアフルを見ていない、そうだ。強敵にいつまでも時間をかけるよりも、倒せる相手から倒した方が負担は減る。つまり、彼の狙いは

「まずい！イエローハート！」

「こいつで、終わりだアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

狙い澄ました一撃が、イエローハートを捉え、海へと叩き落とした。

「はあ、はあ」

彼の傷は大方回復していたが、髪が赤く変色しており、片目から淡いオレンジ色の炎が灯っていた。そして一番は、右腕の布が解かれているということだった。

「たく、手間取らせやがって」

赤い布を右腕に巻き直すと、髪はいつものように黒く戻り目に灯っていた炎も消え去った。しかし、右腕を抑えたままその場から動けずにいた。

「貴様……なぜ人間の身でありながら女神の力が使える？」

「自分で考えな鎧で着飾ったヘタレ野郎」

カイナはそう吐き捨てるように言った。ヴェアフルはしばらく思考を巡らせた後、一つの結論に至る。

「なるほど、その右腕と右眼、貴様のものではなく女神のものだな」  
「まあ見ればわかるよな」

右腕と右眼だけ色が違う、見る人間が見ればすぐに分かることだ。  
「それより良いのか？てめえの仲間ぶっ飛ばしちまったけど」

「問題ない、いつまで寝ているつもりだイエローハート……いや」  
「いたーい……」

海の中から顔を出したのは、ネプテューヌ達がよく知っている人物  
だった。

「ピーシエ」

居なくなっただけのピーシエが、そこにいた。

## エディン創立

「ピー子?」

海から出てきたピーシエに、その場にいる全員が呆然と立ち尽くした。どうしてピーシエがこんなところにいるのか、なぜ彼女が女神化していたのか。そして一番は、どうして自分たちのことを忘れているのか、それが分からなかった。

「ピーシエちゃん、良い子ねえ、こつちにいらっしやーい」

「パパ!ママ!」

ピーシエは呼ばれてパワードアーマーを着たオカマ、アノネデスと青髪の女性の元へと駆けて行った。

「ピー子!私よ、分からないの!?!」

「…………知らない」

「そんな……………」

ピーシエの言葉に愕然のするネプテューヌをよそに、カイナは刀をアノネデスへ突きつける。

「てめえ、こいつに何しやがった?」

「あら、人聞きの悪いこと言わないでちょうだい」

「こいつらのことを忘れるなんておかしいだろうが!!」

「まあ、ちよつとだけ記憶を改竄させてもらったけど?」

「正気かコラ?」

幼い子の記憶を改竄するなど人間のすることではない、それが分かるからこそカイナの顔は顔を顰める。

「レイちゃん?あれを読み上げてちょうだい」

「わ、わかりました!」

レイが宣言した内容は、各国で規制されている成人向けコンテンツの規制を緩和してオープンにしなければ我々エディンは各国に宣戦布告、一番最初はプラネテューヌに攻め入る、という内容だった。

「くだらねえ…………そんな事のためにこいつの思い出も全部消したってか?」

「そうねえ」

「それで、こいつらとの思い出も……全部消し去ったってことかよ」  
「もちろんよ」

アノネデスが言い終わる前に、カイナはアノネデスへと飛びかかって刀を振り下ろしていた。しかし、その剣がアノネデスに届くことはなく、黒ギアに防がれてしまう。

「どきやがれええええええええええ！」

ガギンツツツツツツ!!と鋭い音がなんども響く。

「てめえはああああああああ!!どこまで腐ってやがる!!!」

カイナの絶叫にも取れる叫びに、黒ギアは何も答えない。!!!

どこまで暗い道に進もうと、人の心だけは失わないと信じていた彼にとつて、まるで裏切られたようだった。それは自分が勝手に思っていただけ、そう分かっていても………叫ばずにはいられなかった。

「そこまでだ」

斬り合いを続ける二人の間に、ヴェアフルが割って入り二人の手を掴む。

「今争っても意味はない、返答は2日後聞かせてもらう、それまで殺意は抑えておけ。そうだろう?トウカ」

ヴェアフルの言葉とともに、トウカが突然現れる。

「少し前に気配は察していたが、どこにいいのか特定するのは時間が掛かった。流石は科学の神と呼ばれた男、それも貴様が作った機械か」

「こんなもの気配が消せない失敗作だ」

吐き捨てるようにそう言ってトウカは皆の前に立つ。その表情はいつもとは違い、冷たく、無機質な、まるで命の宿っていない様だった。

「再びお目にかかれて光栄だわあ、まさか貴方が今各国で使われているテクノロジーの原典を作ったカイナ博士だとはねえ。本当に実在してるなんて思わなかったわあ」

「プラネテューヌのカイナ博士……それがトウカさんと言うんですの?」

「ベール、何か知っているの？」

遠い昔、まだ携帯電話なども普及していないおよそ500年前に今よりもはるかに高いテクノロジーが使われていた形跡が発見されている、それらは主知の事実だろう。しかし、それがたった一人の男の手によって作られたと密かに都市伝説になっているのだ。その男の名前が

「それが、カイナという男性らしいですわ……………」

「じゃあもしかしてトウカが……………」

「Exactly、流石はノワールちゃんね。そう、貴方たちの目の前にいる彼こそが、太古の昔今のすべてのテクノロジーを超えた科学力を持ち、さらに自分自身プラネテューヌ最悪最凶、その戦う姿と非人道的な実験から正真正銘の化け物と呼ばれた男、カイナなのよ」

ちなみに余談だがネプテューヌとプルルートは話についていけない。そもそもネプテューヌはそれどころではないのだ、イエローハートがピースェということがよほどショックだったのだろう。

「今はトウカ博士と呼んだほうがいいのかしらあ？」

「黙ってる」

トウカの声はいつもと変わらない、その筈なのにどこか違った。

「貴方が作った最後の兵器にして最高傑作、ニーム細胞……………素晴らしいわねえ、でも……………使う人を選ぶのが難点だわあ。だって……………適合しなかったらこんな化け物になっちゃうんですもの」

アノネデスが指を鳴らすと、そこに緑色の二足歩行をした人型のトカゲの様な化け物が現れた。

「さらに姿だけじゃなくて……………」

アノネデスは化け物に合図を送り、トウカへ襲いかからせたが、数秒後に肉片となり周りに飛び散ることになった。赤い血が身体中に飛び散っても、トウカは微動だにしない。

「戦闘力も貴方の足元にも及ばないしねえ」

化け物はトウカへと襲いかかったが、トウカが他の人間には見えないう速さの手刀で化け物を切り刻んでいた。だから突然肉片になった様に見えたのだ。

「いいわあ、死よりも恐ろしいと言われてただけあるわねえ……ゾクゾクしちゃう」

「あの、そろそろ………」

「そうねえ、それじゃあそういう事だから考えておいてねえ」

そうしてアノネデスたちはその場から消え、そこにはトウカたちだけが残されていた。

## 命の重さは同じじゃない

「ネプさん……完全に塞ぎこんじやってますね」

あれから翌日、各国はエティンの要求を拒否しイエローハート達が発生しているらしい。ノワール、ブラン、ベールの3人は各々の国の沈静化を行っているが、ネプテューヌは塞ぎこんで何も出来ていない。ピーシエと敵対している、それが彼女にとってとてもシヨツクな事なのだ。

自分がくだらない事で喧嘩をしたからこうなった。

その事実が、彼女に重く寄りかかっている。

「どうするんですか……………」

「みんなには手を出すなって言ってるわよ、問題は……あんたよっ！」

アイリスは後ろからトウカの後頭部を蹴り飛ばした。

「何をするんだお前は」

「たく、あんたとネプちゃんのテンションはシンクロでもしてる訳？」

二人とも梅雨時のジメジメした金○袋みたいな顔して

「誰の顔が金○袋だ、年中ダルンダルの乾涸びた金○袋みたいな顔をしたお前に言われたくない」

「ジメジメした金○袋より乾涸びた金○袋の方が衛生的にいいわよ金○袋」

「金○の時点で衛生的も何もない事に気づけ金○袋」

「やめて下さい二人とも恥ずかしいから、原作に無い下ネタ入れすぎですから、しかもそれ結局金○の話しかしてないじゃ無いですか」

突然の下ネタ言い合い合戦を無理やり止めたライトをよそに、二人は話を進めていく。

「で?どうするのよ結局、あの子をあのままにしておくつもり?私は構わないわよ、あの子が腑抜けたままでも私は困らないし」

「団長……………」

「でもそれがダメで、あなたも出来ないっていうなら私がやる、けど命



の保証はできないわよ？いい加減あのウジウジした態度に限界が来てたところだから、いい憂き晴らしになりそうね」

そう言ったアイリスの胸ぐらをトウカは掴んで壁に叩きつけた。彼は何も言わない、何も言わずに腕に力を込めるだけだ。

「なによ、あなたが望んだんでしょ？この結末を、貴方がもう少しでいなくなるから、貴方がいなくても強く生きていけるようになってネプちゃんの大事なお友達をダシに使ったんでしょ？いつもなら貴方がちやっちょと助けてあのテロリストを消し炭にすれば済む話じゃない、それをここまでややこしくしてあの子を傷つけたのは貴方なのに、私に八つ当たりしてんじやないわよ。それが分かってるからなにも言わない、なにも言い返せないんでしょ？」

「団長！火に油を注ぐようなこと言わないでください！先輩も手を離して、今私たちが喧嘩してる場合じゃ無いですよ！」

トウカの手をアイリスから無理矢理離させて、ライトは二人の間に立つがアイリスは毒を吐くことをやめない。

「本当は助けたくてウズウズしてるんでしょ？あの子に手を差し伸べたいでしょうが、もう泣くな、もう苦しむな、全部俺に任せろって言ってやりたいんでしょ？つくづく甘い男ね……昔からそうよ」

胸糞が悪いように、アイリスは吐き捨てた。

今までの不満をすべてぶちまけるように、そしてこの後もその言葉が続くだろう、そうライトが思っていた時だ。

「うるさい女だ」

ポツリと、トウカが呟いた。その言葉に、アイリスも呆気を取られて絶句する。

「人も信じることができなくなった臆病者が一丁前に説教か、笑わせしてくれるな。俺と同じでなにも守れなかった……いや、自分の部隊すら守れなかった無能な団長がよくほざく、弱い犬ほど良く吠えるとはよく言ったものだな」

「……………それ、喧嘩売ってるってことでいいのよね？」

「喧嘩だと、俺とお前では喧嘩にすらならん、この前は加減してやったということが分からなかったのか？相変わらず頭が弱いな、そんな事

だから側近に騙されるんだゴミが」

その言葉とともに、アイリスの腕がトウカへと伸びていた。

ライトが止めようとするも、その腕はすでにトウカの首元へと伸ばされていた。あと1秒もすれば彼の喉を引き裂くだろう、しかし、その腕は首元へ到達する事はなく、トウカによって壁に叩きつけられていた。

「もう全てが面倒だ」

ガツ！とトウカはアイリスの首を掴んで体を持ち上げ、外へと投げつけた。

「お前にも愛想が尽きた、そんなに気に入らないなら消え失せるがいい、もう俺は知らん」

「ぐっ、貴方ねっ！」

アイリスが起き上がろうとした瞬間、空から機械的な大剣が何本も降り注いだ。それらすべてがアイリスの体を貫き、地面を赤く染めて行く。

「数時間後には立ち上がれるだろう、目を覚ました時にはすべてが終わっている。お前と会うのもこれっきりだろう」

「先輩!!」

「早く行って介抱でもしてやれ、もう2度と会う事は無いのだからな」

そう言つて、トウカはどこかへと消えていった。

「がはっ！くっ……あの野郎……」

「団長！」

「ライト、すぐに治癒魔法で治して……ニーム細胞が機能不全起こしてる……」

トウカが使用した剣は対ニーム細胞保持者用兵器の一種、その機能はニーム細胞の機能不全を誘発させる兵器だ。機能不全に陥ったニーム細胞は本来の活動が出来なくなり回復力が低下するどころかすべての機能が一時的に使えなくなるというものだ。

ちなみにこの兵器の製造方法を知っているのはトウカだけである。

その他の人物にはあらゆる方法を持ったとしても複製する事は不可能だ。

「たく……………つくづく甘いわねあいつ……………本気で殺すつもりなら対二ーム細胞保持者用の殺傷兵器使うだろうに……………」

そう呟きながらアイリスは傷が治るまでの間微睡みに身をまかせることにした。早く傷を治してトウカを追う、そうしなければ今度こそ本当に……………消えてしまうだろうから。



「ねぶねぶ……………」

「なんにもしちやダメ……………って、こっちのあたしが言うから……………しばらくこのままだね……………」

「そうですね、今のネプテューヌさんを元に戻せるのはトウカさんだけだと思います」

ネプテューヌの部屋の前で、コンパ達が様子を見守っていた。

ピーシエの一件で完全に気力をなくしてしまったネプテューヌは打ちのめされて真つ暗な部屋の中で一人膝を抱え込んでいた。

「あつ、トウカさん」

「ネプテューヌの様子は？」

「相変わらずですね……………」

「どうするの……………？私が行こうか……………？」

「いや、大丈夫だ」

そう言つてトウカはネプテューヌの元へと踏み出す。

いつもならなんの変哲も無い光景だろう、しかし、トウカの目は今まで見たことが無いほどに……………無機質だった。だから、コンパ達は不安に駆られてしまった。

「……………どうした」

「どうしたって……………聞くんだ？」

ははは、と乾いた笑みを浮かべるネプテューヌに、トウカはいつもと同じようで違う、とても冷たい表情でネプテューヌを見下ろしていた。

「助けに行かないのか」

「だって、私のことだけじゃなくってみんなのことも忘れてたんだよ？どうすればいいの？」

ネプテューヌは俯いたまま淡々と話す。その表情は普段のネプテューヌからは考えられない、とても苦しそうな様子だった。

「トウカが助けてよ……トウカなら助けられるでしょ？」

「……………そうだな、お前はそれを望むのか？」

「うん……………」

「なら……………俺の好きにさせてもらうぞ」

そう言っただけでトウカは少し歩くと、また立ち止まってこう言った。

「ピーシエには消えてもらう」

一瞬、その場にいる全員トウカが何を言っているか理解できなかった。

「何言ってるのトウカ……………」

「その通りの意味だ、ピーシエは今やこの国の敵だ」

「トウカさん！」

コンパが割って入ろうとするも、イストワールに止められてしまう。

「ここは見守りましょう……………」

イストワールに諭されたコンパは納得いかない様子でその場にとどまる。その間にもネプテューヌとトウカの会話は続いていく。

「つまり、トウカはピー子を殺すってこと？」

「攻撃してきたのは向こうだ。投降する意思が無いのなら仕方ないだろう」

「でもピー子は……………ピー子は友達なんだよ!!!そんなのダメだよ！」

「何もしないお前にとやかく言われる筋合いは無い」

ピーシヤリと、ネプテューヌの言葉を遮断した。

「トウカは……………トウカはピー子を助けたく無いの!？」

「助けたいさ……………でもな、それでお前やネプギア……………この国の国民が危険な目に遭っては意味が無いんだ」

「でも……………私たちのためにピー子を犠牲にするなんて!？」

「お前はそう思っただけで、国民はそうは思わない」

いくらネプテューヌが大切な友達だと言っても、国民から見ればピーシエは敵国の女神でプラネテューヌに攻撃を仕掛けてきた侵略

者、それを助けたいと言っても納得などしないだろう。

「そしてお前は今と同じ言葉をエディンが侵略してきた街に住んでいた住人達にも言えるのか？」

すでに幾つかの村や町がエディンに侵略され破壊されてしまっている。そこには確かに人が住んでいた。住処を失い、財産を失い、最悪の場合には家族や友人を失った者も居るかもしれない。

そんな国民が今の言葉を聞いたら口を揃えてこう言うだろう。

ならばエディンの目的のために犠牲になった私たちはどうすればいい？

「いいかネプテユーン、誰かが命は平等だと答えたが、それは間違いだ。命の重さは平等なんかじゃない」

一人の兵士がいたとしよう、その兵士の前に赤の他人の一般人と自分の家族が危険な目に遭っている。どちらか一人しか助けられないとしたらどちらを選ぶだろうか？もちろん、自分の家族を助けるだろう。

つまり命の重さというのは人によって優先順位が異なるのだ。

だからこそ、人の命は平等だという教えは間違っている。

「そしてお前は女神だ。世界的に見ればプラネテユーンで一番重い命はお前だ。お前や国を守るために今も死ぬかもしれない戦いに兵士たちは居るんだ。ひよつとすれば、お前がウジウジしている間にも兵士が死んでいるかもしれない」

国を護るために命を賭して戦う。それが兵士の役目なのだ。戦争で兵士が死んでも、それは当たり前なのだから仕方がない。世界はそう思うだろう。

「俺はあいつをどうやって助けられるかなんぞ知らん、俺では助けられないだろう。だが……………お前ならば出来るかもしれない」

「……………私に……………出来るのかな」

「少なくとも俺より可能性は高いだろうな、ピーシエを生かすも殺すもお前次第、それが嫌ならずっと部屋にこもってゲームでもしているといい。だが、助けに行くというなら、お前がピーシエを助けている間、俺は国と国民を守ってやる。お前の選択だ、お前が選べ」

トウカはその言葉を残して、その場を後にした。

「……………」

ネプテューヌはその場から動けなかった。

どうすればいいのか分からなくなってしまうたからだ。

「ネプちゃん、ゲームしないの〜?」

「えっ?」

当然、プルルートがそんなことを言い出した。

「そんなことしてる場合じゃないよ……」

「でもネプちゃん行かないんでしょ〜?ならゲームしても一緒だよ〜?」

ゲームをしていれば辛いことは忘れられるだろう。だが、それは違う

「違う……ゲームは逃げるためのものじゃないよ……」

「なら〜どうするの〜?」

そうだ。何をするか分からなくてもいい、どうするか分からなくていい。そんなことを考えている暇があったら行動しろ。それが、この国の女神であるネプテューヌ<sup>自分</sup>なのだから。

助ける方法がないなら、自分で作り出せばいいだけだ!

「ぶるるん、ついて来てくれる?」

「うん〜ももちろんだよ〜」

「じゃあ行こう!」

ネプテューヌは走り出す、大切な友達を取り戻すために。

◆◆

「よお」

トウカが戦場近くまで来ると、そこにはすでにカイナの姿があった。

「あいつは?」

「知らん、来るも来ないもあいつ次第だ」

「へえ、アイリスは?」

「あいつは来なくていい、いや……来て欲しくないんだ。自分の死ぬ姿など、幼馴染に見せたくはない」

なんども友人が死ぬところを見ているからこそ、彼は分かるのだ。  
あれは見せるものじゃない。

「これが俺にとって最後の戦いだ」

「そうかい」

カイナはそう言つて笑うと右腕に巻かれた布を解き、この前見せた  
赤い髪になった。

「お前は自分の命をどんなものよりも下に思つてるだろ？」

「さあな、自分の命など考えたことなどない」

「そうか……じゃあ、行くとするか」

「ああ、全て終わらせてくる」

いよいよ、エディンとの最終決戦が始まる。

だから殺す、私も……あなたも

「で？どうすんのこれ？圧倒的物量さだよ？」

「お前こそ得物も無しで行くつもりか」

「あ、そういえば木刀粉々だったわ」

どうしようかなあ〜とカイナが言うと、トウカが懐から木刀を取り出して投げつけた。

「お、準備良いなお前」

「ちなみに普通の木刀じゃないぞ、特殊な木材で作ってあるからそう簡単に折れることはない」

「そいつは頼もしいねえ」

ブオン、と木刀をふるうと鈍い音がする。手にしつくりと来る感じに満足したのか、カイナは木刀を腰に差す。

「それにしてもワラワラと面倒だな」

「いや、なに呑気にジャンプ読んでんの、バカなの？大切な奴らとの関係断ち切ってもすべて決着付けに行くとか言ってたのになんで開戦前にジャンプ読んでんの!？」

「ほう、ヒーロアカデミアというのはなかなか面白いな、単行本買いに行けばよかった」

「知らねえよなにが面白いとか!!俺はずっとトラブる派だよこのやろー!」

「まあ居そう言うな、最後だから少し読んでみたかっただけだ。願わくば1話から読みたかったがな」

「そろそろ読むのやめろ、そんなにアカデミア読みたけりゃあ……必ず帰って単行本買いに行け馬鹿野郎が」

カイナは頭をかきながらそう言った。

彼なりに、必ず生きて帰れ、という意味合いを込めた言葉なのだろう。それを分かっているからか、トウカはふっ、と微笑む

「さて、どうすんだこの数」

「そんなもの決まってるだろう」

トウカは歩いていく、相手は急ごしらえで出来たとはいえ相手は一



つの国、たった二人で相手にするのは自殺行為だ。だが、そんなことはこの二人には関係ない。

国を相手にするなど……彼らにとっていつもの事なのだから。

「正面突破だ」

その瞬間、とてつもない爆発と衝撃が戦場を駆け巡った。

◆◆

「来たか……」

黒い鎧を着たヴェアフルは先ほど起きた爆発を高めから見ている。

「いよいよ始まるのか……最後の時が」

「そうだね、私も行くよ」

黒ギアは少し笑うと、少しずつ歩き始める。

「おい、なぜあの男にこだわる？ 貴様の次元の話は知らんが、女神を殺すだけならば奴の隙をいつでも殺せるだろう？」

確かに、カイナやプルルートに至っては隙だらけの日常を送っているため付け入る隙はいくらでもあるだろう。しかし、黒ギアはそれをしなかった。

「ダメなんだよ、それじゃあ」

「そうだ、それだけではダメなのだ。」

いくらそれで全ての女神を殺すことができたとしても、それでは意味がない。

「あの刀を折らない限りは、女神を殺して世界を崩壊させることなんてできない」

女神を殺すよりも、世界を壊すよりも、まずやる事がある。カイナを殺す、彼を殺さなければ何も始まりもしなければ終わりもしない。何より……彼は自分の心を乱してくる。それが一番厄介なのだ。

「それより貴方は大丈夫なの？」

「……問題ない、全て終わらせるだけだ」

己の人生の意味を、彼の人生を悲劇で終わらせないために。ヴェアフルは行くのだ。世界で一番大切な彼の最後の願いを叶えるために。彼に何もしてあげられなかった自分の咎を償うために

◆◆

「退けゴラアアアアアアアアアアアアアア！」

戦場の真ん中を切り開いていく男が二人、一人は黒い服に黒いロングコートを着て紅い機械的な大剣を持つ男、そしてもう一人は黒いパーカーに黒いストラップス姿で木刀を振るうオッドアイの男。

お互いに全てに決着をつけるために戦場を駆けて行く。

「ていうかなんだこのトカゲは!?!お前が作ったのか!?!」

「ああ、殺して構わん」

トウカの斬撃とカイナの斬撃はトカゲ、バジリスクを両断し血飛沫を撒き散らす。二人の体はすでにバジリスクの血液で血まみれになっている。

「はるか昔に全滅させたと思っていたがな、何処かのバカが発見してまた人間に細胞を投与したらしい」

「めんどくせえ奴がいるもんだな!」

飛びかかってくるバジリスクをカイナは飛び台にして飛び上がり、周りをなぎ払う。

「にしてもキリがねえな、どうすんだこれ」

「どうした、もう弱音か」

「はっ、んな訳ねえだろうがよ!」

軽口を叩きながらバジリスクを切り続けていく二人、その他には味方はいない。プラネテューヌの援軍は国境線に待機させている。

「そういえばプルルートは教会に居たが、ユニはどうしたんだ?」

「あいつは朝から居なかったよ、向こうの妹が寂しくて帰ったんじゃないの? まあ居ないならいいけどよ!」

「ふん、巻き込みたくなかっただけだろう?」

「そんな事ねえよ、お前みたいに恨まれても全てを守りたいなんて思っちゃんないんだよ」

爪を木刀で防ぎ、柄で後頭部を叩きつけて後ろから襲いかかってきたバジリスクの攻撃を躲して蹴り飛ばし、屈んでから斬り上げる。

「へっ、こんなもんで俺たちが止まると思っておわあ!?!」

突如カイナとトウカのところ爆発が起こる。

「今のはなんだ!?!」

「上だ！」

カイナにそう言われて上を見上げると、空に巨大な戦艦のようなものが地上に砲撃を開始していた。

「なんだあれは!!」

「こつちのネプギアはな、なにも一人で世界を滅ぼそうなんて考えちやいねえ」

「なるほど、組織を作っているという事か」

「ああ、戦闘狂に犯罪者に碌な奴がいけないけどな」

はあ、とため息をつきながら呆れているカイナに、彼の苦勞をなんとなくトウカは分かった。

そんな時、遠くの方で戦闘音が聞こえてきた。そこは確かアイエフ達を守っているプラネテューヌの境界線だった。

「振り返らねえのか？」

「振り返っている場合ではないだろう」

トウカは後ろを見ない、ただ眼前の敵を切り裂いていく。

「俺には俺の役割が、奴らには奴らの役割がある。本当は戦闘になどなって欲しくはなかったが、仕方ない。俺が彼らが傷つくよりも早く大将の首を切れば良いだけだ」

「へっ、さすがは歴戦の兵士様ってか！」

数十分戦い続けても数は減らない、このままではこちらが消耗するばかりだ。

「カイナ、お前は先に行け」

「ああ!?なに言ってるやがる！」

「俺の場合は大丈夫だ」

トウカがそう言うと、辺りの空気が変わる。

敵の間から見えるのは、黒い覇気のようなものを纏う黒い鎧だ。

「向こうからやってくる、お前の場合は迎えに行つてやらなければ来ないだろう。ネプギアは内気な子だからな」

「内気な子は世界壊すとか言いません、まああいつのことだから無理してキャラ作ってるんだろうけどな！」

バジリスクの集団を切り開き、一本の道が出来る。

「行け！」

「オラアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

その道を、カイナが進めるようにトウカは剣から弓に持ち替え空に向かつて無数の矢を放ち、それは大雨のようにバジリスクの大群に降り注いだ。

「お前剣以外も使えたのかよ！」

「世の中多芸でなければ生きていけんぞ」

「へっ、そうかよ！」

そう笑った後に、カイナは道を突き進んでいった。

残されたのはトウカと、バジリスクの死体の山、赤く染まった大地、そして、闇のように黒い鎧を着たヴェアフルだけだった。

「……………兜を取ったらどうだ？ネプテューヌ」

「やはり、気づいていたか」

兜を触ると、闇が晴れるように鎧が取り払われる。そこには目からハイライトが消え、赤いパーカーの上に赤いロングコートを着たネプテューヌがそこにいた。

「久しぶり、と言ってもあなたにとっては初めましてだな」

「ほう、大きくなったな」

「ある時からパープルハートの体から戻れなくなったんだ」

ヴェアフルが体を見る、確かにいつものネプテューヌではなくパープルハートの姿をしていた。

「お前の目的はなんだ？なぜこの国を攻撃する？」

「……………私は愚かだった」

トウカに与えられるだけ与えられて、自分はなにもしようとはしなかった。苦しみを、悲しみを、知ろうとしなかった。きつと心の中で、トウカに任せていれば何とかなると考えていたのだろう。

だからこそ、余計にトウカに負担を与えてしまった。

「あなたの最後の願いも叶えることができなかった」

「俺がいなくても生きて行く、という願いか」

理性を失った化け物になり、大切なものを傷つけてしまうくらいなら殺してほしい。それが彼にとっての最初で最後の願いだった。何

百年も人の身でありながら生き永らえ、大切な物を守る事ができなかった罪に苛まれてなお、小さな希望を育て女神にした彼の、最後の願い。

「だから貴方を殺して、全ての元凶であるプラネテューヌを壊す。あんな国がなければ、貴方は苦しまずに済んだ。私がいなければ、もつと別の生き方があったはずだ。私がいなければ……もつと生きられたはずなんだ」

「もともこの体はもう直ぐ限界を迎える、お前は関係「違うんだよ……」」

ヴェアフルはトウカの言葉を否定した。

「これから先、私……私たち女神は敵に捕まって洗脳されてしまう。その時、貴方と対峙して……私は貴方を殺したんだ」

「……………そういう事か」

ヴェアフルは昔ノワール達と洗脳されてトウカ達の前に立ちほだかった。普段のトウカなら負けなかつただろう。しかし、攻撃すればネプテューヌを殺してしまう、だから彼は攻撃出来なかつたのだ。

彼はプラネテューヌの国民より、ネプギア達よりも、ネプテューヌを選んでしまったのだ。

「気が付いた時、私は女神化を解いて……私の腕の中には血まみれの貴方がいた……その時、私が殺したんだって、分かつた」腕の中で冷たくなっていくトウカの姿が今でも眼に焼き付いて離れない。

彼を助けたかつたのに、結局救うことができなかつた自分を、彼女は許すことができない。

「アイリスお姉さんから全部聞いたとき、私は自分が思ってる以上にあなたに助けられていたんだってわかつた。いつ死ぬか分からない体を押して……」

いつ自分の人間的部分がなくなつて破壊をまき散らすかもわからない状態で、早く自分自身を消し去りたい。そんな思いを押し殺して、ネプテューヌが心配だつたから死ぬに死ねなかつた。

「だから、あなたが化け物になる前に、トウカである間に……私が全部終わらせる」

「国もすべて壊して……か?」

「ははは、歴史は繰り返すとはよく言ったものだ」

そう軽く笑いながら、闇から黒い大剣を取り出した。

「私はすべてを終わらせる……国も、私自身も、あなたの苦しかった人生も」

それを、彼の血で真っ赤に染まったパーカーとコートに誓ったのだ。

「といっても、あなたは納得しないだろうな」

「ああ、悪いが……お前がプラネテューヌとネプテューヌを攻撃するというなら俺はお前を……止めなければならぬ」

向けられた黒い大剣に、同じく自分の赤い大剣を向ける。

「あと、ひとつ言っておくぞ」

「なんだ?」

「その話し方、俺を真似ているつもりなら……似合っていないぞ」

「……マジで?」

「ああ」

どこまで行っても、どんなことがあると、どんな場所でも、結局二人のマイペースなところは変わらないのかもしれない。



「第2班は防衛に回って!ネプギア!そっちは大丈夫!」

「はい!私のことは気にしないでください!」

国境線ではアイエフとネプギアがエディンの進行を抑えていた。

しかし、兵士だけでなくバジリスクも相手にしなければならぬこの状況において戦況はかなり不利だった。

なにせバジリスクは普通の人間では太刀打ちすることができない、せめて進行を遅らせるのが精一杯だろう。

「砲撃用意!発射!」

ドンっ!と砲撃がバジリスクに直撃するが、失った部位から瞬時に再生を始めてしまう。

「キリがない……」

「アイちゃん！ネプギア！」

そこにネプテューヌとアイリスハートが合流した。

「トカゲっぽいのがわらわらと……気持ち悪いわねえ」

空からアイリスハートが汚物をみるようにバジリスクを見ていた。

一応バジリスクは元々人間のだが、アイリスハートは知る由もないので仕方がないだろう。

「さて、ねぷちゃん？あの子はあなたが遊んであげるのよね？」

「ええ、ふるるんはカイナのところへ行くんでしょう？」

「もちろんよお」

ふふふ、と笑うアイリスハートに他3人は少し顔を青くする。

「それにしてもキリが無いわね……」

こうしている間にもバジリスクの大群は国境に迫ってして勢いが止まらない。

「どうやってこれだけの数を揃えたのかしら」

「そんなことよりここをどうするかよ」

「どうしましょうか……」

「ねえねえ！もう終わりなの!？」

イエローハートがつまらなさそうに言う。

「ネプギア、ここからは私がやるわ」

「お姉ちゃん……」

ネプギアの前にネプテューヌは出る。

「ピー子、ここからは私が遊んであげる」

「そーなの？分かった！」

イエローハートは新しい遊び相手が出来たことに嬉しそうに笑った。

「ネプギア、アイちゃん達と国境線を守って……お願い」

「うん………気をつけてね」

ネプギアはアイエフ達のところへと向かって行った。

「さあ、来なさい！」

ネプテューヌの大切な友達を取り戻すための戦いが始まった。

◆◆◆  
「はあああああああああ！」

甲高い音が戦場に鳴り響き、とてつもない衝撃と共に地面が割れる。

ヴェアフルの横薙ぎの斬撃をトウカは飛び上がったで躲し、上から剣を振り下ろす。それをヴェアフルは転がって回避して斬り上げ、トウカはギリギリで斬撃を剣で防いだ。

「剣の腕を上げたな」

「ああ……………あれから何年も経ったからな！」

ヴェアフルの大剣を飛び台にして飛び上がり、トウカは豪炎の球を無数に放った。

「その炎を、昔はどれほど頼もしいと思っただろうか」

ヴェアフルは自分の大剣に黒い炎を纏い、豪炎の球をすべて薙ぎ払った。

「その炎は私にとって暖かな陽だまりだった。だが、今は身を焦がす業火だ！」

トウカが斬り上げると、そこから火山が噴火したかのごとく火柱が吹き上がる。

「デュアルアーツ!!」

巨大な火柱を紙一重で回避してデュアルアーツを繰り出す。それをトウカは体を捻って躲し

「フレイムニール!!」

隙が出来たところを炎を纏った拳でヴェアフルの腹部を殴り付け、岩盤へと殴り飛ばした。だが、すぐに復帰し剣を構える。それを見たトウカは、ヴェアフルと同じように構えた。

「クリティカルエッジ！」

プラネテューヌに伝わる剣術、剣の振り下ろしから斬り上げ、そして上空で地面へと叩きつけるという三段階の剣術。それがクリティカルエッジだ。

「正面から挑むか、だがな」

ヴェアフルの振り下ろされた剣とほぼ同時に剣を振り下ろしたト



ウカの剣がヴェアフルの剣を地面に落とさせる。

「お前のクリティカルエッジと俺のクリティカルエッジが同等とでも思ったか」

「なっ！」

ゴッ！という衝撃をヴェアフルが襲い、その体は上空へと放り出される。そして、次の瞬間巨大な何かに殴りつけられたような衝撃と共に彼女は地面へと叩きつけられた。

「立て、まだ終わりじゃないだろう」

その瞬間、上空にいた戦艦から砲撃がトウカを襲う。

「ちっ、鬱陶しい」

「そこだ」

砲撃に気を取られている隙を付き、ヴェアフルはトウカの懐へと迫る。

「フレイムエッジ！」

黒い炎を纏った斬撃をトウカに浴びせた。

まともに食らったのか顔を顰めるトウカをよそに攻撃を続行しようともう一度剣を振るうヴェアフル、しかしトウカは彼女の手首の部分を大型ナイフで突き刺し、無理やり方向を変えて躲した。

「やはり一筋縄ではないわね」

「まだお前に負けるわけにはいかんからな」

それよりも問題なのは戦艦からの砲撃だ。

直撃死ぬことはなくても、一瞬動きが封じられてしまう。しかし、その一瞬でもヴェアフルはトウカの命を刈り取ることができるだろう。

「戦艦からの砲撃に気を取られたか」

砲撃を止めなければ、そう思っていた時、とんでもない青い雷が戦艦を襲った。その雷をトウカとヴェアフルは知っている。

「コリアトウカ……………」

その声も、彼らは知っている。気だるそうな声で、心には確かな芯がある女性

いつものタートルネックではなく、昔見た白と青のローブを着て、

トウカが作った蛇腹剣を持ち、身体中に電撃をバチバチと纏いながら  
女は

「私のジャンプ返せコラアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」  
プラネテューヌ聖騎士団だった頃の服を着た、アイリスがそこに現  
れた。

## お互いの思いを賭ける戦いを

トウカの目の前に現れたアイリスはジャンプをパクられたからか、阻害用兵器で串刺しにされたからか、かなり機嫌が悪そうだった。それ以前に、どうやって細胞の機能不全を直したのかトウカは疑問を拭えない。

「お前、どうやってこの短時間で細胞を再起動させた？」

「あんなの10分あれば事足りるわよ、回復魔法を全開で掛ければ余裕……」

そういつつも体がふらついていた。

おそらく完全に回復していない体を押して無理やりここに立っているのだろう。

「失せろ、そんな体でいられたら邪魔だ」

「あっそ、なら帰らない。今回私はあなたに嫌がらせしに来ただけだから」

トウカが帰れというのなら、絶対に帰らない。

彼が何もするなというのなら、自分は何かを成し遂げてやる。

アイリスの言葉にはそんな意味が含まれていた。

「また串刺しにされたいのか……早く失せろ！」

「私は金輪際あなたのいうことなんて聞かない」

ピシヤリ！とトウカの言葉を拒否した。

「いつもそう、何か起きたら私たちを遠ざけるためにわざとキツく当たって危険な事、汚れ仕事は全部自分が背負い込んで、勝手にケガして死にかけて、もうウンザリなのよ、あなたのそんな姿見るのは」  
今までずっと後悔して来た。

自分たちの知らない所でトウカは自分たちを守るために、傷ついて、苦しんで、泣きそうで、すべてを投げ出したくなっても、だれにも相談せずいろんなことを成し遂げてきた。

もし知られたとしても、あえて守りたいものを傷つけて、危険から遠ざけようとする。

その背中に、どれほど手を伸ばしても届かなかった。

「だから私はあなたについて行く、絶対に離れてなんてやらない。だってそれが今私のやりたいことだし、それに……………約束したしね」

だから、今度こそ掴んで離さない。

もう2度と1人で重荷を背負わせるわけにはいかないから。

「そういう訳で、あの戦艦は私がなんとかするから、あなたはその真っ赤なネプちゃんをどうにかしなさい」

「……………勝手にしろ」

「ええ、勝手にするわよ」

とうとう折れたのか、トウカはため息をつきながらアイリスに背を向けた。その姿をアイリスは満足そうに見た後、雷でできた翼を広げて戦艦へと向かっていった。

「さて、続きを始めよう」

「ああ……………」

そして、トウカとヴェアフルの剣が交差した。



「やっと来たね、遅いなあもう」

「すみません、次元航行に手間取ったので」

「まあ戦艦丸ごとだもんね、ごめんごめん。それは時間かかるよね」

ネプギアは後ろに跪いている金髪の少女、ベーンという名の少女と話している。彼女の表情は他には見せない優しい顔だ。

「ご苦労様、ベーン」

「いえ、お役に立てて何よりです」

深く頭を下げ、首を垂れる。

「あの男は？」

「もう直ぐ来るよ、ちなみに手を出しちゃダメだからね」

「しかしネプギア様！」

黒ギアの言葉に納得できないのか、ベーンは言葉を続けようとする。がその前に彼女の首元へとゲハバーンが突き付けられる。

「もう話は終わり、この件に関しては何も聞かないよ。勝手に何かしたら……………殺すから」

先ほどとは打って変わり、鋭く冷たい眼に変わる。

完全なる殺意を向けられたベーネはゾクリ、と冷たいものが背筋を走った。

「すみません、出過ぎた真似を……」

「分かればいいよ、他のところへ援護に行つて」

「はい」

そうしてベーネは何処かへと消え、その場には黒ギアだけが残された。

「この世界での事が終わつたら、次は元の世界……ようやく女神を根絶やしにすることが出来る」

長年の悲願、あの時から女神を恨み続けて幾星霜、どれほど苦しんだだろうか。女神を恨んでいるのに、自分自身も女神だという自己矛盾に食い尽くされてきた日々を思い出す。

生まれた時から傀儡の様に操られ、自分のことを愛してなどいなかった母……あの女の血が流れているだけで、吐き気がする。

「だから……私を殺さなきゃ、また大切なものを失うことになるよ」

「うおおおらあああああああああああああ!!!」

黒ギアはそう呟いた瞬間、真上に剣を構えて上からの奇襲を防ぐ。

後ろは90度にそびえ建った巨大な岩の壁、そんな所を降つて来られる男は黒ギアの知っている限り1人しかいない。

「カインくん」

防がれた状態から後ろへと飛び、黒ギアの腹部へと蹴りを叩き込んで距離を取る。

「ちっ、脳天叩いて終わりだったのによお」

「カインくんがやる事なんて手に取るようにわかるよ」

「なんでもお見通しつてか」

「親友だからね」

「親友なら女神殺すのやめてくれねえか」

ヘラヘラとカインは笑ってみせるが、それは乾いた笑みで目は笑っていない。それを知っているからか、黒ギアもクスクスと渴いた笑みをこぼす。

「無理だよ、だって復讐だもん」

「俺とうずめの復讐か」

「うん」

もちろん彼女とて、カイナとうずめがそんなことを望んでいないことなどわかつている。でも、そうだとしてもこれだけはやめられないのだ。カイナが良くても、黒ギアは自分の罪を許せない

「カイナくん、カイナくんを殺さないと私の復讐は成し得ない。だから死んで、今ここで」

「悪いがためえを殺す気も、ここで死ぬ気もねえ。必ずためえを袋叩きにして連れて帰る！」

カイナの木刀と黒ギアのゲハバーンが交差し火花を散らす。

彼女の斬撃を木刀の腹で滑らせ受け流しながら隙をついて打ち込んでいく。しかし黒ギアもそれに対応して身を翻して避ける。

達人でも見切れない速度での斬り合いを続けられているのは、お互い幼少の頃から幾度も剣を交えているからだろう。

「やっぱり膠着状態になるんだな！」

「そうだね、それから……相変わらず振り下ろしたあとに隙ができる！」

振り下ろされた斬撃を必要最低限の動きで回避した黒ギアはカイナの頭を貫くために攻撃を放つ。

「くっ！」

カイナは身体をひねって躲し刃を頬に掠める。

突きで放たれた黒ギアの腕と肩をガツチリと掴み、腹部へと強烈な蹴りを放ちながら後転して巴投げの要領で後ろへと投げつけた。

しかし、上空で剣を掴んだ黒ギアは逆さになった状態から剣を振り、それをカイナは木刀で同じくその斬撃を払った。

地面へと倒れた黒ギアはすぐさま起き上がろうとするが

「らあああああああ！」

上空からカイナの渾身の木刀が振り下ろされてきたためすぐさま回避行動を取り、腹部を狙って放たれた突きを木刀の腹を殴って軌道を変え、隙ができた彼の腹部へと膝蹴りを食らわせる。

(獲った！)

蹲っている彼の頭上へと黒ギアのゲハバーンが振り下ろされる。

勝った。確実に彼は剣の軌道が見えていない、さらに木刀は自分が無理やり弾いたおかげで刀身はあらゆる方向へ向いている。今から防いだのでは間に合わない。数秒後には彼の首を落とすだろう。

しかし、ガギンツという人体からは決して聞こえない音が聞こえた。

「なっ……………」

「なめてんじや……………ねええええええ!!」

彼は一瞬のうちに木刀を逆手に持ち替えて、彼女のゲハバーンの刃を刀の柄頭で防いでいたのだ。直径5cmにも満たないそんな小さな所で剣を防ぐなど並大抵の人間ができる事ではない。

さらに、剣を見ていない状態で黒ギアが振り下ろしてくるであろう場所を予想して防いだのだ。

「てめえが相手の首を攻撃する時は必ず首元から4cm上を狙ってくるのは分かっただよっ!」

カイナは木刀を地面に突き刺し、それを軸にして全体重を乗せた蹴りを黒ギアの側頭部へと叩き込んだ。

何年も、何回も打ち合ったからこそわかるお互いの小さい癖、それを知っているからこそ今のような人間離れた技が使えるのだ。

逆に言えば、親しい人間と戦うほどその戦いは苛烈を極め、酷く辛いものへとなっていく事になるのだが。

「はあ……………立てよおい……………終わりじやねえだろ」

岩の壁に黒ギアが叩きつけられたため土煙が充満して彼女の様子は見えない。しかし、ここで小細工をする事はないだろう。

「カアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

「ネプギアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

お互いに血を流し、自分の大切なものを守るため、自分の復讐を成し遂げるため、かつて背中を預けた友との戦いが……………今始まった。

## 番外編 七夕

「七夕だど?」

はるか昔、トウカがまだカイナの時代、つまり彼らがまだ子供だった時の話だ。カイナとその時はまだ女神ではなかったうずめ、そしてロクデナシ（グシャァ!）……お酒を飲む前のアイリスさん、つまりプルルートだった時代、3人は七夕について話していた。

「うん〜短冊にお願いを書いたらお願いが叶うんだって〜」  
「へえー!面白そうだな!」

うずめとプルルートは女の子らしくファンタジックなことに胸を躍らせているが、カイナはさほど興味は無かった。

「カーくんもお願い事描こうよー」

「俺はいい、興味無いから」

プルルートの提案をはねのけ、カイナは自分の剣の手入れをしていた。しかし、そんなカイナを気に入らないのがうずめである。

「お前って付き合い悪いよな、そんなんだから友達いないんだよ」

「頭が悪いお前よりマシだ単細胞」

びくっとうずめのこめかみが動く。

うずめの挑発を受け流しさらにそこから2倍増しにして返したカイナはさほど気にする様子もなく剣の手入れを続ける。

「ふんっ、夢もねえ悲しい奴」

「悲しくて結構、俺は夢だなんだといって現実を見ない奴になりたいくないだけだ」

「でも〜ひよっとしたら叶うかもしれないよ〜?」

「そんなものなんになる?そんなことをしてる暇があったら俺は鍛錬してたほうがマシだ。何が伝統だ下らない。そんなもので願いや夢が叶うならこの世界に泣く奴なんていない。そもそも自分の望みは自分で努力して、その先にあるものだ」

カイナはこういう願掛けのようなものが大嫌いだった。

今まで自分1人で生きてきた彼にとつて、誰かに、何かに自分の望みを託すなど考えたくもないことだったからだ。



世の中は汚いし、結局自分1人で生きていくしかない、それが彼が  
齢9歳にして知ったこの世界の現実だ。

「なんだよ！そんなのやってみないとわかんないだろ！」

「いいや分かる、そもそも誰に願うんだ？」

「えつと〜元々七夕は〜彦星さんと織姫さんが一年に一度会える  
日なんだつて〜」

「そもそもどうしてその2人が会える日を記念しなきゃいけない  
だ。そんなもの激流なんて橋を作つて渡ればいいだろう」

「昔話にガチレスすんな！」

ちなみにカイナは他の大人から見たら全く可愛げのないクソガキ  
である。

「とにかく、七夕に願いを書いただけで叶うなんてありえない。それ  
が現実だからだ」

「いやー！そんなことない！」

平行線を辿るカイナとうずめの論争をオロオロしながら見守るプ  
ルルート、しかしそんな中1人の女性が部屋に入ってくる。

「確かに、自分の望みは自分で叶えるもの、それはカイナの言うとお  
り」

黒く長い髪を簪で止め、何枚もの着物を着込んだ美しい女性はカイ  
ナの後ろへと立つ。

「でもね、9歳そこらしか生きてない貴方が現実を語るなんて……あ  
と20年早い」

その女性がカイナの頭をコツンつと小突く、そうするとカイナの体  
は一瞬で床へと叩きつけられてしまった。

「何するんだセイ」

「コラッ、先生って呼びなさいって言ってるでしょう？」

腰に手を当ててむすつと怒るその女性は、ある種の神々しさを感じ  
させる、それがカイナ、現在のトウカの師匠だったセイだ。

「いいカイナ？確かに貴方の言ってることは正しいけど、それだけ  
じゃ世界は回らないのよ？」

「なんだよそれ」

「人ってというのは何かを信じて生きてるの、それが確かなものだとか不確かなものだとか、関係ないの。そもそも七夕に願い事しても本当に願いが叶うなんて思っただけだよ」

「じゃあ〜〜なんてお願い事するんですか〜？」

カイナを論じていたセイにプルルートが疑問をぶつける。

「人間はね？自分の足跡を残したいの」

人間には歩いて来た道が必ずある。

それが幸せだろうと不幸だろうと、必ず自分が歩いて来た足跡が必ずあるはずだ。

「例えばそうね、旅行に行ったとしましょう？思い出に写真を撮ったりしない？」

「する！」

「写真は嫌いだ」

「撮るってことにしなさい」

もう一度カイナにチョップを食らわして地面へと運送するセイはそのまま話を続ける。

「それで何年後かに部屋の整理をしてたら、その時の写真を見つけた、どう思う？」

「えっと、こんなこともあったなあって思う」

「そう、つまりそういうことよ」

うずめとプルルートは分からないのか疑問を浮かべていたが、カイナは頭をさすりながらセイに言う。

「思い出ってことか？」

「ええ、つまり願いを何かに書くってことはね？自分の思い出を作ることにもなるし、自分のお願いを文字に表して何年後かに再確認するってことなの」

数年後の自分が道に迷った時、その願いを見てまた自分の道を見つけられるようにすること、自分がその時何を思い、何を考えてその願いを書いたのかを残すための足跡、それが願掛けという行事なのだ。

つまりは数年後の自分に向けたメッセージのようなものだ。

「だから、願掛けをすることは無駄なことじゃないのよっ」



「うるせえ！こんなのお前が練乳欲しいだけじゃねえか！っていうか普段浴びるほど食べ物に掛けてるだろうが！」

「お馬鹿！練乳は何にでも合うように作られてるのよ！」

セイの画用紙をうずめはビリビリに破き去ってしまう。

「すごいね〜セイさん〜」

「あんなダメ人間にはなりたくない」

ゴミを見るような目でセイを見ているカイナ

「カーくんはどんなお願い事するの〜？」

「……………おれは……………」



「トウカー！起きろー！」

「うるさい」

バシツ、と頭にへばりついていたネプテユーンをはたき落とした。

トウカが目を覚ますとすっかり外は夜で空には綺麗な星々が輝いていた。

「何か用か」

「用かじゃないよ！七夕の飾り付けするって言ったのにトウカサボってたでしょ!!お陰で私が手伝わされたんだからね！」

「はしゃいでた奴が準備するのは当然だ。俺は七夕は嫌いなんだ」

「衝撃の新事実なんだけど!?もう、とにかく行くよ」

ネプテユーンはトウカの手を引っ張ってグイグイとみんなの元へ連れて行く。そこにはもうすでに全員集まっているようだ。

「遅いわよトウカ」

「すまん、寝てた」

もうすでにカイナ以外の人間は自分のお願い事を書き終わっていた。

「ほら、早く書いて」

「分かった」

トウカは何をお願いしようかと思ったが、今思いついたものを適当に短冊に書いて飾り付け係のノワールに渡した

(どんなお願い事してるのかしら?)

ノワールは少し気になったためトウカの短冊を見る、そこに書かれていたのは

あんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱん  
あんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱん  
あんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱん  
あんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱんあんぱん  
んあんぱん

「あんぱんしか書いてないじゃないのよ!!」

「おい、人の願い事を勝手に見るな」

「やかましいわ!こんな願い事でもなんでもないじゃない!?あなた  
が今あんぱん食べたいただけでしょ!」

「はあ、仕方ないな。おいライト、説明してやれ」

「いやいや、私も何が何だかわからないんですけど…」

「おい、殺すぞ」

「よく聞け馬鹿野郎ども!先輩といえばあんぱん!あんぱんといえ  
先輩でしょうが!先輩は寝ても覚めてもあんぱん食べてるんだよ  
いば本当のアンパンマンなんだよ!そもそも……」

トウカの無茶振りになんとか食らいつきながら思い付く限りの説  
明をするライト、その後ろでネプギアが苦笑しながらトウカの短冊を  
拾い上げ、飾ろうとした。しかし、あんぱんが羅列されている反対の  
面を見ると、そこにはこんなことが書かれていた。

みんながいつまでも笑っていられますように

一つの戦いが終わるとき

「寒い寒いと思ってたけど、いつの間にかクソ暑い夏がやって来てたわねえ。もう嫌んなっちゃうわ、歳を食うと一年過ぎるのが早く感じると思わない？ライトが通り過ぎるくらいのスピードで一年が過ぎ去っちゃうわ」

「私が通り過ぎるくらいのスピードって、そこはF1カーで良いじゃないですか」

「だって貴方F1カーより早いじゃない」

クーラーの効いた部屋でダラダラと話しているのはアイリス、ライト、そしてトウカの3人だ。この3人は今、歳を取ると一年通り過ぎるのって速いよね、的な事を話している。

「みんなも若いからって気を付けないと、あつという間にライトが音速で通り過ぎて行くわよ?」

「ライトは通り過ぎないが、まあ暑いからといって毎日ゴロゴロと過ごすのはあまりよろしくないな。そうじゃないとアイリスや煉獄姫の様になるぞ」

さりげなく自分の幼馴染と作者を貶すトウカはチョコミント味の棒アイスを食べながらダラダラと部屋の中でゲームをしていた。

ちなみに部屋の中なのでいつものロングコートは着ていない。

「いや、今の貴方も似た様なものだから」

「昼間から酒飲んでる奴にだけは言われたくない」

トウカがアイスを食べている横でアイリスは冷たい生ビールを飲んでる。ちなみにライトは普通の冷たい麦茶（まだお昼なので）

「ていうかこんな暑い日にバトルとか面倒くさいわよね」

「確かに、こんな暑い日は熱中症対策も兼ねてクーラーの効いた部屋にるのが一番だ」

「この小説の主人公とヒロインがなんてこと言ってるんですか!!今この小説大事な時期なんですよ!?すっごい大事な局面なんです!」

「主人公か……もうこつちも本家みたいにネプテューヌに丸投げしても良いんじゃないか、暑いし」

「どんだけ夏やる気無いんですか!？」

「大丈夫だ、あの子は俺がいなくてもやっていける」

「自分がサボるためにネプさんのこと強くしてたんですか!？」

外が暑くなると一気にやる気なくなるトウカとアイリスをなんとかやる気にさせようと努力するライトだが、その努力はすべて無駄である。

「もうね、今回これで良いんじゃない?」

「そうだな、じゃあ今回の話はここまでだ。カイナ対黒ギア戦は涼しくなった9月から再開だ」

「え?まさか本当に休止するつもりですか!？」

「それではみなさま、また9月にお会い」「終わらせんなあああああああ!」「げぼるぐう!？」

暑いのでさっさと締めようとしたトウカとアイリスの頭上に紫色の剣と真つ黒な大剣が叩き落される。激痛に苛まれながらもトウカとアイリスが後ろを向くと、そこには黒ギアとヴェアフルが居た。

「何するのよ2人とも」

「なに終わらせようとしてるんだ!!戦え馬鹿野郎!!」

「そうですよ何が9月ですか!?!9月まで失踪してたらみなさん設定とか忘れちゃいますよ!」

どうやら大事な戦闘場面の途中にもかかわらずダラける2人を説教しに来た様だ。

「あのねえ2人とも、戦闘描写を書くのがどれだけ大変で難しいかわかってる?長くなる上に場面を想像しながら文章に起こさないといけないからとても時間掛かるし辛い作業なの、それを煉獄姫なんか5・6話続けてやったらどうなると思うの?死ぬわよ確実に」

「そもそもこの小説は煉獄姫が手掛けてきた他の小説と違って本来こうやって適当に喋ってるのが前提に作られた小説だ。それを他の作者さんの様と同じくらいバトルをしろという方が間違ってるんだ」

はあ、と呆れる様のため息をつくトウカ

「そもそも今回も煉獄姫が『これ以上バトルしたら精神的に無理だから!ちよつと文字数稼いどいて!』って言われたからダラダラしてる



わけだし」

「そうだったんですか!？」

「そういうことよ、まあ結構文字は稼いだし?そろそろ本編行きましようか」

「いや、そんな適当な感じで今から私カイナくんと戦うんですか?」

「大丈夫よ、本編行ったらこの話なかったことになるから」

「メタ発言はやめてください!」



「オラア!」

バチバチと火花を散らすカイナと黒ギアの剣、すでに双方とも傷だらけの一進一退の攻防が続いている。

「終われないんだ、こんな所でっ!」

つば迫り合いから先に動いたのは黒ギア、カイナの木刀を上には弾き、そのまま腹部へと蹴りを叩き込んだ後左足を軸に体を回転させミラーージュダンスを放ちカイナの体を真一文字に切り裂く。

「まだ終われないんだ!私はこんな所で負けられない!」

ふらつくカイナの顎に膝蹴りを放ち、倒れた彼の顔に何度も拳を打ち込む。血でぐしゃぐしゃになっていくカイナの顔を彼女は容赦なく殴り続けていく。しかし、黒ギアの目にも、涙が流れていた。

「どうしてっ!カイナくんは!女神とヘラヘラ笑って暮らせるの!?!私たちが全部奪ったのは女神なのにつ!どうして!」

その姿は女神をすべて殺すとのたまう凶悪な人間ではなく、駄々をこねる1人の少女の様だった。

しかしそんな彼女の頬にカイナの横殴りの拳が叩き込まれ、馬乗りの状態から横に倒され、さらにそこから腹部を蹴り飛ばされて数メートル飛ばされる。

「俺たちから全部奪ったのはお前の母親だ」

かつてカイナたちが住んでいた国、エフィコンを治めていたレイジスハートの一人娘だった黒ギア、当然女神1人では子は生まれない、それ故父親もいたのだ。

しかし、黒ギアの父はレイジスハートの謀略の限りを尽くす政治に

反発して反乱を起こすつもりだった。その部下がカイナだったのだ  
が、それを知ったレイジスハートは黒ギアの父を殺し、その罪をカイ  
ナに擦りつけて反逆者に仕立て上げたのだ。

「私は何も知らないまま、カイナくんを襲った……ほんと何考えてた  
んだらうね、少し考えればわかるはずなのに」

カイナが上の命令で駆けつけたときには既に黒ギアの父は生き絶  
えており、その現場を黒ギアが見てしまった。そして彼女は我を忘れ  
てカイナへと切り掛かり、カイナは衝撃的なことが幾つも重なった動  
揺のせいで敗北、投獄されてしまったのだ。

「そこから私はカイナくんに酷いことばかりした……謝っても許さ  
れないくらいのをを」

投獄されたカイナに待っていたのは黒ギアによる拷問、当時の彼女は  
彼に対する愛情と憎しみが入り混じって不安定な状態にあつたた  
め、そこにレイジスハートの暗示が加わり、彼を支配することによつ  
て満たされる様にされてしまった。

こうしておけば黒ギアが意志を持つて自分に逆らうことはない、さ  
らに最大の反乱分子であるカイナも閉じ込めておける、レイジスハー  
トにとって一石二鳥だったのだ。

「私はもう、女神っていう存在を信じることができない。女神なんて、  
結局みんな一緒なんだから！」

「じゃあてめえは！女神を殺した後どうするつもりだ!!」  
「そんなの当然っ……………」

その時、ピタリと黒ギアの動きが止まった。

頭を抱えて明らかに様子がおかしい、頭に激痛が走っているのかそ  
の場にうずくまってしまった。

「ア、ア〃ア〃ア〃ア〃ア〃ア〃ア〃ア〃ア〃ア〃ア〃ア〃ア〃ア〃ア〃ア〃ア〃  
「ネプギア!?!」

カイナは異変に気付きすぐさま黒ギアに駆け寄るが、彼女がカイナ  
に手をかざすと、彼の体は謎の光と共に数メートル吹き飛ばされてし  
まう。

「ガハツ……………」

あまりの衝撃に全身が麻痺して動かない、まるで糸が切れた人形のようにグツタリと横たわるカイナに頭を抱えた黒ギアが迫る。

(なんだ今の力は……あれはどう考えてもネプギアの力じゃ……)

「カイナ………やっぱりお前は……私にとつて邪魔な存在だ！」  
ゲハバーンが非情にもカイナの元へと振り下ろされる。

今度は回避は不可能、彼女の剣がカイナの首を落とすだろう。

彼自身がそう思った時、彼の頭上で金属音が聞こえてきた。本来ならば聞こえないはずの音………彼が目を開けるとそこにいたのは「私のカーくんを随分可愛がってくれたみたいねえ？」

カイナが一番大切に守り抜いてきた幼馴染、プルルートが居た。

「プルルート、お前なんで………」

「ギリギリ間に合ってよかったわあ、大丈夫……じゃないわよねえ」

「早く……逃げろバカ……」

「いやよ、カーくんはあたしがこんな女に負けると思ってるの？」

「うん」

即答したカイナの体をプルルートはヒールで何度も踏みつけ始める。

「大丈夫よお、あたしこの女より強いから」

「それより痛いんですけど!? イラつとしたの? 即答されたことにイラつとしたの!? 悪かったよ、カイナさんが悪かったよ!」

ニコニコとしているがおそらくキレてるのだろう、カイナが謝るも踏みつける足は止まらない。

「それにここに来たのはあたしだけじゃないのよ? ねえ、ウニちゃん?」

「だから、ウニじゃなくてユニよ」

そして頭上からおびただしい数のビームが放たれ、白ユニが女神化した状態で降下してくる。

「お前、今の今までどこ行ってたんだ!」

「ちよつと元の世界に帰ってたのよ、援軍呼びにね」

さらに、そこから空に巨大な青いゲートの様なものが開き、その中から巨大なビームが幾つもの地上にいるバジリスクたちに放たれてい

く。

「相手が戦艦なら、こつちも戦艦よ」

その青いゲートの中から白い戦艦が姿を現した。

「あれは……………任天丸……………」

「そうよ、もう誰が来たのか分かるわよね？」

任天丸とは、カイナの昔の仲間が乗っている商船の事で、商船だが世の中は危ないので武装もしているという船だ。

「小賢しい……………くっ！」

「ネプギア様！」

近くで戦闘を行っていたベーネが異変に気がついたのか黒ギアの元へと駆け寄って肩を支えた。

「ネプギア様、此処は退きましよう…多勢に無勢です。イエローハートが奪還された模様です」

「そうか、ネプテューヌの奴やりやがったか」

ピーシエが助けられたという情報を聞いて安堵する一同、カイナのダメージが深いためか、全員追いかける気はない様だ。

「これで俺の3連勝ち越しだな」

「全部引き分けだよ……………次こそ決着つけるからね」

そう言つて、黒ギアとベーネは姿を消した。

おそらく元の次元へ帰つたのだろう。

「とりあえずこつちの件は一件落着だな、たく……………ようやく動く様になつた」

「カイナ、それよりプルルートに言うことがあるんじゃない？」

うっ、と言いなながらカイナはプルルートを見る。

するとプルルートは女神化を解くことはなくジト目でカイナをずっと見ていた。構つてくれオーラ全開である。

すると彼ははあ、とため息をついて彼女の頭に手をぽんと乗せる。

「ありがとな、助かった」

照れくさそうに視線を外しながら頭を撫でた。

普段見ない彼の姿に笑いそうになるが、今はこの幸せを味わおうと普段のDSは胸の内にしまい込み、素直に頭を撫でられていた。

このとき彼女は、女神化しているときには見せない幸せそうな、屈託ない笑顔だったという。

## コメント返しのコナー

アイリス「はい、今回はコメントが溜まってきたのでコメント返しをやるわよー」

トウカ「まあ前回休んでしまったからな、それを埋め合わせも兼ねて今日は番外編だ」

ライト「それでは一番最初のコメントから返していきましょう！」

久しぶりにこっちに來れたぜ！あ、トウカさん、アイリスさん、ライトちゃん、煉獄姫さん：お久しぶりです！進くんはちよつとまた風邪を引いたので今回は私が來ることになりました！ここに来る前に進くんから：「下手な質問しやがったらぶつ殺すからな」という脅迫を受けましたが、そんなこと知るか！じゃあ、質問！

### 質問内容

「イツカちゃんと、ライトちゃんのスリーサイズを教えてください！」  
いやー、やっぱり久々に來たならこれは聞いておかないとね♪あ、アイリスさん、誤解しないでくださいね？私のイチオシはアイリスさん一択なので！それでは皆さん、さよーならー♪

アイリス「久しぶりに s s g s s さんからコメントきたと思ったらこれか：：：どこまでもブレないわねあの人：：：」

トウカ「まあそれがあの人の良いところでもあるからな、ちなみに確かイツカ状態はバスト92、ウエスト60、ヒップ85だ」

アイリス「あなたもあなたであつさり言うのね」

トウカ「隠しても仕方ないだろ、ちなみにこの前アイリスがバストが89とか言ってたがあれは嘘だからな、本当は95だ」

アイリス「あ、あれはテンパって別の人の奴言っちゃっただけよ！  
ていうかライトは」

トウカ「さっきまで近くにいたぞ？多分逃げたな：：：」

## 質問2

やつはロンドン!! ヴラドさんだよ!! へ (≡▽≡へ) ♪

アル「やつはロンドン: 挨拶の意味がわからないアルカディアだ」

ネプ「やつはロンドン!! 皆の主人公ネプテューヌだよ!! へ (≡▽≡へ) ♪」

今回はアルカディアのスリーサイズについてお話かな?

アル「どうしてそうなったorz」

いや〜こつちで質問されたからね〜w w

ちゃんとあのスリーサイズには意味があるんだ〜♪

解説は〜: ネプ様お願いいたします!! へ (≡▽≡へ) ♪

ネプ「OK作者!! じゃあ、簡単に話すと: あれは私とネプギアの女神化した姿のスリーサイズの間をとったやつだったのだから!! (ドヤツ)」

アル「あ、ちなみに元にしたのはめがみつうしんだから現在のサイズは知らん」

さて、次は恒例の質問コーナー!! (ドンドンパフパフ!!)

今回はまたまたネプ様お願いいたします!! へ (≡▽≡へ) ♪

ネプ「まあまた了解!! それじゃあ〜: もしも異性になれるとしたら何になりたい? あ、煉獄さんも入ってるからね〜♪」

アル「ちなみにネプテューヌは何がしたいんだ?」

性別かわつても見た目はそのままな気がするが:」

ネプ「フツフーン、私はね: アルと結婚するんだ〜♪」

アル「……………その場合、俺が性別変えるからお前はやめろ」

ネプ「え? なん「いいから: わかったか?」ア、ハイ (?▽?;)」  
(ネプ様が性別かわつたら確実に他の人達が遅いに来るよね? : いわないでおこつと (?▽?;) )

トウカ「性別が変わつたらなにがしたい、と言つても俺は一度性別

が変わってるからな……………: なんとも言えん」

アイリス「まあ確かにあなたはそうでしょうねえ」

トウカ「そういうお前はなにをしたいんだ?」

アイリス「ホスト」

ライト「あ、言うと思ってました」

アイリス「だってアホな女誑かしてタダ酒飲めるのよ？こんな良い職業他にないわよ最高！」

トウカ「多分ホストもホストで大変だと思うぞ」

ライト「ちなみに私はスポーツの祭典に出てみたいです！」

ちなみに私煉獄姫は性別が変わったら化粧を試してみたいですね、どんな風に自分の顔が変わるのか見てみたいです。

リクエスト

まつてるので、アナザーに隠れてコッソリとやって来ました。

リクエストなんですけど、トウカさんだけを無印の世界に送り込んだ話が見てみたいです。具体的には、守護女神戦争の真つ只中で三人が結託（ベール発案）してネプ子をフルボッコにしようとした辺り（無印のプロローグ）からトウカさんが次元を越えて出現し、身体が次元を超えた反動で動作不良を起こしてエンシエントドラゴンと同程度にまで弱体化&ネプ子が落とされるまで行動不能で落ちていった後はトウカさんも後追いした的な始まりから

アナザー「……………そんな事を提案する暇があるなら自分で書くか本編を進めたらどうだ？」

何時の間に?!仕方ないじゃん！キャラの口調が1人分かんないんだから

アナザー「……………まあ、いい。ただでさえ駄文なのだ。精々駄文を酷くしないように気を付けるんだな」

…………orz（ズーン）↑落ち込んでる

トウカ「うーん、この件に関しては申し訳ないが出来ないとしたか言えないな」

アイリス「実は煉獄姫無印はやってないのよ、リバーはやってたらしいけどね。だから無印編のお話は書けないの、ごめんさいね」

ライト「あと、先輩がそこまで弱体化しちゃうとこの作品のコンセプトがブレてきちゃいますので無理かもしれないですね」



トウカ「でもリバーの番外編ならすでに書き始めてるところだから、それで手を打ってもらえないだろうか？」

### 質問3

どうも阿呆のヴラドです（；▽；）

アル「現在作者は他作品を製作しながら王様ゲーム編とオリジナルストーリーを製作してるもよう：どうもアルカディアだ」

ネプ「オリジナルストーリーのコンセプトは”始まり”と”悲愴”

と”女神”だよ！！どうも皆のアイドルのネプテューヌだよ！！」

アル「しかも第一章から問題大有り状態な俺が出るらしい：ドウイウコトダヨ：（？▽？；）」

ネプ「あとあと更に言うと：舞台が私の次元でも無いんだよー！！ナ、ナンダツテエー！！（裏声）」

さて、ネタ伏せのためにこれくらいにして：質問コーナー行くぜお

！！

ネプ「あ、その前に一つ言つとかないと！！」

え？なにになに？

ネプ「私と向こうの私なら：私のが戦術面や技術面では上を行つてると思うよ！！（ドヤツ）」

おっと、かなり自信満々だね？

それ以外は向こうのが上かな？

ネプ「うーん、上つて言うか：多分僅差くらいだと思うよ？あ、けどぶるるんの剣技を完全に捌くか回避が出来ないと私に白旗を上げさせれないよ〜♪」

やはりこのネプ様、強気だ

：：：ってそれより質問！！

アル「二人が慌てふためいてたらか俺が質問しよう：

まあ、簡単な内容だからあまり考えなくてもいいぞ？

とりあえず簡単に言うと、コラボ時の俺の姿を現在の姿で行くか、それともオリジナルストーリーの方の姿にするか：：：って質問だ」

まだオリジナルストーリーを書いてすらいらないのに何て質問だ！

Σ（？□？；）

アル「いや、お前イラスト描いてるだろ…それを見せてある程度の設定をメッセージとかで送信しあえばいいだろ？」

あ…うん…そうするね…(?▽?;)」

あ、次回も楽しみに待ってます!!」へ(≧▽≧へ)♪

ネプ子「失礼なあー！私だって強かったんだからね！昔は!!」

トウカ「昔は、という時点で情けない、はあ…」

ネプ子「昔は並大抵の人には負けなかったんだからね!?多分ぶるるんにだって負けないよ!」

トウカ「まあ今はだらけ切って昔の3%程しか出せないがな」

ネプ子「あはははは…」

トウカ「あ、ちなみにアルの姿はどちらでも良いぞ、どっちも可愛いだろうからな」

#### 質問4

ラウル「お腹減った」

クロムウエル「閣下、アイスクリームを買ってきました！」

アカーシャ「待つてました！さあ、ストロベリーを寄越しなさい！」

ツグミ「やあ、ラル。ラルの分を取っておいたよ？」

ラウル「ありがとうツグ！ツグ凄く好き！」

ツグミ「あはは、ありがとう。でも僕は兵器で、無性別だから…」

ラウル「こくら！ツグは男か女か見分けがつかないけど、ツグは禍箱ツグミという個人なんだ。だからそんなこと言っではいけません」

ツグミ「ありがとう、ラル（涙目）…」とところで、ラムレーズンで良かったかな？」

ラウル「キャラメルかブランデー味が良かった」

アイスクリームにトッピングをするなら、何を載せる？

ラウル「因みに僕はフルーツタルトの上にキャラメル味のアイスを載せます」

ツグミ「僕はコーヒー豆かな。あの二人、止めなくていいのかい？」

トウカ「キャラメルよこせゴ  
ラアアアアアアアアアアアアアアアア！」



質問6

夕死狼「かとおんぼですよ、あんなやつら」

憐夜「つかおめえ誰だよ！」

夕死狼「どうも皆様、新作ないし次回作の主人公その1優樹夕死狼です」

憐夜「うわ、また変なやつが出てきたよ」

夕死狼「ほう？自分はどうなんだ？」

憐夜「うるさい」

夕死狼「これは失礼」

憐夜「くだらない茶番やってないで質問いくぞ」

夕死狼「mk. 5 にやれと言われた、後悔も、反省も、していない」

憐夜「転生するならどんな世界に転生したい？」

夕死狼「僕はラウルのいる世界かな（人体実験で超能力者になった学生兼殺し屋）」

憐夜「俺は俺が天下取れる世界だな（姉への復讐の為に薬厨超能力者になった学生兼政府機関職員）」

アイリス「テイルズオブな世界」

ライト「最初から乗っかりますね!？」

アイリス「それよりみんな知ってた？最新作はゼステイリアの何千年も前の話らしいわよ」

ライト「ファンタジアとシンフォニアみたいな感じですかね？」

アイリス「ゼステイリアか……あれ面白くなかったのよね（ボソツ）」

ライト「失礼ですよ!!!」

アイリス「私の中のテイルズはエクシリア2だから」

ライト「全く……私はスポーツゲームの世界に行きたいですね！」

トウカ「俺はテイルズのレディアントマイソロジーの世界に行きたい」

ライト「結局先輩もテイルズオブるんですか!？」

質問7

アナザー「前回、アホ（作者）がこつそりと出て来た際に思ったのだが……」

アナザー「トウカ達は俺の事をどんな感じに観てるんだ？」

アナザー「因みに、俺からのトウカ達への認識はこんな感じだ」

トウカⅡ人間だった時に遭遇出来なかったのが残念至極極まりない消費期限切れの毒リンゴ。偶に身の危険を感じる。

アイリスⅡユニコーンが裸足で逃げ出す変質者で、トウカ同様に消費期限切れの毒リンゴ。血どころか細胞単位でニコチンとアルコールに汚染されてて臭そう。

ライトⅡ食料としては上2人と同じだが、お笑い芸人としては一歩抜きん出てる。大抵アイリスに下僕として遇されているのでちよつと憐れではある。

アナザー「……こんな感じの印象を持っているとだけ認識していれば間違いではないな。うん」

トウカ「アイリスはともかく、なんで賞味期限切れの毒リンゴだ？せめてリンゴにしてくれ」

アイリス「いや、その前に変質者は認めるけど臭くないわよ！人をおっさんみたいに言わないで!」

ライト「認めちゃダメですから!」

トウカ「そういえばお前最近尿酸値高いんじゃないか？禁酒しろ」  
アイリス「禁酒するくらいなら大人しく死ぬわ」

ライト「あはははは……ちなみにアナザーさんの印象は凶悪なところがあつて、不器用な人だと思つてます。なんだか少し先輩に似てますね」

トウカ「質問返し終えたな」

アイリス「いやあ、まさかここまで来るとは思わなかったわ……」

ライト「次回こそは本編進めましょうね」

## 戦艦を落とす者、壊す者

「カイナさん!!」

「おお、ネプギアが去ってまたネプギアか」

上空から女神化したこちらの世界のネプギアが降りてきた。

「大丈夫ですか?」

「まあな、それよりトウカはどうした?」

「さつきから探してるんですけど、居ないんです」

「それならもう少し向こうかもしれないわね」

トウカを探しに来たネプギアは未だにトウカを見つけられないようだ。

「それにしても仲間って、なんで出て来やがらねえんだ?」

「何かあったのかしらね……」

白ユニがそう言った時、上空から何かがとてつもない衝撃で落下してきた。土煙が晴れるとそこには見覚えのある短かい茶髪の少女が長い茶髪の女性を下敷きにしていた。ちなみに下敷きになった女性は軽く吐血していた。

「着地に失敗したね」

「いや、ラムちゃんは成功したでしょ……痛たたた」

いきなり空から落ちてきた2人の女性にネプギアは目を丸くして驚く。

しかし、どこか見覚えのあるその姿をどうにかして思い出そうとする

「あつ、カイナくんユニちゃん……」

「えっ? ああ! カイナにユニ! それにネプギア? あとは……誰だっけ」

(クイナじゃねえよ……)

「あの、どちらさまですか?」

「やだネプギア、忘れたの? 私よ、ラムよ」

「ラム……ラムちゃん!? あなたラムちゃん!」

「そうよ、どこからどう見ても私でしょ? ネプギアはちよつと縮んだ

？」

「ラムちゃん、このネプギアちゃんは私たちが知ってるネプギアちゃんじゃなくてこっちの世界のネプギアちゃんだよ」

「うーん？ ややこしいわねえ」

ラム、と名乗るその女性を見る。身長は明らかにネプギアよりも高く、ひよつとすればカイナと同じくらいの女性ではとても高い部類に入り、体は引き締まっているが胸はボンツというか存在感を出している。この世界のラムとは、似ても似つかない体である。

「でも間に合って良かった！ なんとか鋼鉄城のカバネリが完結する前に来られたわ 「間に合ってねえよ!!」 あぶし!？」

アホなことを言うラムの後頭部に蹴りを叩き込んだカイナ、そのままラムを羽交い締めにして体を無理やり立たせる。

「あつちはもう春に完結してんだよ、戦いにもアニメにも間に合ってねえんだよー！」

「あなたもツラヌキ筒で貫いて完結させてあげるわ」

「だめええええええええええ！ その今落ちてきたばかりだから！ それ以上やったら死んじゃいますからアアアアアアアアアアアア！」

どこから持ってきたのか、白ユニは大きいラムに向かってツラヌキ筒を放とうとする。それをネプギアは必死に止めるのだった。



「殺せ！ たかが女一人に何をしている!!」

そう言った男の体が稲妻に飲まれて消し炭になる。

たった一人の女が、数百人はいるであろう戦艦の乗組員を圧倒している。圧倒的劣勢と思われた中、女は気だるそうにあくびをしながら蛇腹剣あたりを薙ぎ払った。

「たく、ゾロゾロと数だけはいるわねえ面倒くさい」

藍色の髪を揺らしながら敵を倒す女、アイリスは砲手を破壊した後この戦艦を破壊するためにエンジンルームを目標していた。しかし、あまりにも敵の数が多かったのでウンザリしているところだ。

「進むのはそこまでにしてもらおう」

アイリスがエンジンルームへ向かう途中、一人の僧侶のような男が

立ちふさがった。

「なによ?」

「アイリスハート殿、それ以上は進ませることはできない」

「アイリスハートじゃないんだけど」

「なにを世迷言を」

うーん、と説明するにもいろいろな事情がこんがらがっているためアイリスの説明力では説明することができない、っていうかするのが面倒くさいため彼女は説明を割愛することにした。

「ここであなたには止まってもらおう!」

「残念だけど、止まらないのよ」

自分に向い振るわれた薙刀を片手で掴んでからへし折り、相手の顔を蹴り飛ばして壁へと激突させた。

「あなたって僧侶なの? なら寺にいなさいよ」

薙刀の刃を捨て、そのままエンジンルームへと再び歩き出す。

しかし、またもや剣を持った女性が立ちふさがる。

「プラネテューヌの女神様、悪いけれどここから先は通せないわ」

「だから違うんですけど? ああもう面倒くさいわね!」

「なにを訳の分からないことを!」

女性は長剣を構え、常人を超えるスピードでアイリスの胴体を捉える。しかし、捉えたただけであってダメージが通るわけではないのだ。

「あなたの剣確かに早いけど、私もっと早い子知ってるのよね」

その剣はアイリスに当たった瞬間木っ端微塵に吹き飛んだ。

理由は簡単、剣の硬さよりもアイリスの体の方が硬かっただけの話だ。しかし、女性は目を見開いて仰天する。

「馬鹿なっ!」

「はい撃墜」

女性の頬にアイリスの容赦ない裏拳がめり込み、彼女は数十メートルほど吹き飛ばされて気絶していた。いや、下手をすれば死んでいるかもしれない。

「早い剣術が売りのくせになんで長剣使ってるのよ、細剣使いなさいバアカ」



まあ普通の細剣を使ったところでアイリスに傷一つ負わせることなどできるはしないのだが、一応戦場に立つ者としてアドバイスを吐き捨てた。

「なんか嫌な予感するんだけど……いやいや、そんなわけないって」

頭を抱え心底嫌そうに先へと進んでいくアイリス、しかし非常にも彼女の考えは当たってしまうことになる。もう1人彼女の前に立ちふさがったのだ。

「ひゅー、話には聞いてたが良い女だなあプラネテューヌの女神様よお」

「うわあ、なんかだんだん予想通りな展開になってきたんだけど」

「あんたの武器は蛇腹剣、剣か……やめときな、今の時代は銃の時代だぜ？ 見ろよこのフォルムといい色といい」

ドオン！という鈍い発砲音がした後、アイリスの頬を掠めて弾丸が飛んだ。明らかに普通のハンドガンではない、対乗り物様に改造された反動の大きい銃だろう。

「なあ、こんなことやめねえか？ あんたのその綺麗な顔をぐしやぐしやにしたくねえんだ。こんなことするより俺ともっと良いことしようぜ？ ベットでな」

「あんたとするくらいならその辺の犬として犬の子孕んだほうがマシよ腐れ早漏野郎、20年後出直してきなさい」

「ふう、こいつは手厳しい……なら動けなくしてたつぷりと!？」

バリツという雷が鳴った瞬間、男の手からハンドガンが落とされた。

なにが起こったのか、男は分からなかったがそうしている間にアイリスの足の裏が視界に見えた。

「あなたに良いこと教えてあげる、あなたは武器がどうのこうの言う前に……そのウザったい口を閉じて戦闘に集中しなさい半端者」

グシャア!!という何かが潰れたい音を立てながら、アイリスは男の顔を蹴りで壁へとめり込ませて終わらせた。男の顔はもはや原型がなく見るに堪えない姿となっている。

「それで少しは静かになるでしょ、じゃあね」

アイリスは再び歩き出す、しかし彼女はだんだん自分の予想通りの展開になっているのではないかと心底嫌そうにしていた。そして

「あはは！女神様だ！本当に人間と変わらない姿してるんだね！」

「ちよつと待ってー、これもしかして刀語の最終話みたいに12人くらいの雑魚を鑢七花の如く倒していかなきゃいけない感じなの？だとしたらめんどくさいんですけど」

はああ……………とその場で座り込んでしまうアイリス、自分の嫌な予想が当たってしまった。

「雑魚かあ、心外だなあ。これでも私自身あるんだよ？」

「うっさい黙れ死ね小娘」

これから面倒な目に合うことがわかっているのだから心底嫌になつてしまいその場に座り込んでしまった。

「あーもうマジ勘弁……………待てよ？ねえ、この後の部屋もこうやって直線に続いてるわけ？」

「そうだよお、それがどうしたの？」

「なら……………これなら一々相手にする必要もないわね！」

自分の手の中に巨大な稲妻の槍を出現させる。

いつもの様な青い稲妻ではなくオレンジ色の稲妻、見るだけでも明らかに危険な予感が見て取れる。

「まとめてくたばりなさい！」

音速を超える稲妻の投擲を避けることができず、少女は腹部を稲妻に貫かれて絶命する。そしてその稲妻は壁を溶解させて貫いて行った。

「流石にこれで殆ど逝つたでしょ」

やれやれ、といった感じでエンジンルームへと歩いていく。

彼女の予想通り、全員が一直線上に固まっていたのか全員が腹部を綺麗に貫かれている。

音速を超える稲妻の温度はおよそ2万度から3万度、こんな熱に人間が貫かれれば跡形もなく溶けて無くなってしまふのは明らかだ。

「さて？刀語なら最後に強い子が出てくるけど……………今回は出てくるのかしら？」

そう呟きながらひらいた最後の扉、そこには金色の長い髪をした可愛い少女がいた。

「ネプギア様を治療した後、こちらに戻ってきてきて正解でした」

その少女は、どこかで見た様な姿をしていた。

アイリスはその姿をどこで見たのか、としばらく考えていると……ある一人の女性が彼女の頭の中に思い浮かんだ。

金髪といえば彼女の他にいない

「あなたベールちゃん？」

そう、その少女はベールに似ていたのだ。

体型は姉よりも少し小さいが、その黄色い髪は彼女と大差ないほどのツヤを放っている。間違いはない。

「……不愉快です、あの人と間違われるなんて」

「不愉快？なに言ってるのよ？」

「ちなみに私はこちら側では存在しない様です、まあ構いませんが」

「もしかして……向こうの世界のベールちゃんの妹？」

「誠に遺憾ですが、そうです。リーンボックスの女神の妹だったベールネと言います。こちらの世界のアイリスハートさん」

言われてみれば確かにベールの様な気品があるが、どこか抜けた様子がある彼女とは違いベールネはどこまでもしつかりしていそうだ。

「先ほどの雷はあなたですか？」

「そうよ、威力重視の雷の槍、避けられる人なら避けられるわ」

「なら彼らは避けられなかったということですね」

「そういうことになるわね」

先ほどの雷の槍は威力を高めた対陣地用の魔法、本来人間に放つものではない。しかし敵を一掃するならちょうど良いのだ。

「さてと、私この船を墜落させたいんだけど、このエンジン潰して良いかしら？」

「良いと思ってるんですか？」

「無理よねえ………ならやる事はひとつね？」

「そうですね」

そう言ってベールネは槍を構える。

「貴方にはここでお引き取り願います」

「悪いけど、それは無理って話よね！」

ベーネの槍とアイリスの蛇腹剣がぶつかつた。

## ベーネの憎しみ

ベーネとアイリスの打ち合いが続く。

しかしやはりと言うべきか、アイリスは余裕の表情でベーネの攻撃を全て防いで行き、ベーネは必死に彼女を貫くために槍を放つ。

「あなた女神化しないの？」

「私はあるな力に頼らない！女神の力なんてなくても私は！」

女神化しないのは彼女の意地なのだろう。どんな理由があるかはわからないが、アイリスは少し彼女を見る視線が鋭くなった。

「じゃあ次に貴女は何のために戦うわけ？」

「私は……ネプギア様のために戦っています！あの人は私に道を示してくれた！だからその恩返しをしたいんです！」

「恩返し？」

「私には友達が居ました、でもその子はもういない……私は何も出来なかった！」

ベーネは友達に言われた最後の言葉を思い出す。

その言葉は彼女の胸から傷として消えることは一生ない。

『何の苦勞もしたことがない女神の貴女に私の気持ち分かるわけない』その言葉が、彼女を苦しめる。

「私は産まれながらに女神になることを宿命づけられていました。そのことに何の疑問も持ちませんでしたし、反抗しようと思いませんでした。だから私は……友達の気持ちを分かかってあげられなかった……女神になんてならなければ良かった……女神なんて……存在しなければ良かったんです！」

ガギイン！と鈍い金属音が鳴り響いた。

ベーネの槍がアイリスの蛇腹剣を弾き飛ばしたのだ。

今アイリスは何も持っていない無防備な状態、その隙をベーネは逃すことなく槍に力を込めて彼女へと放った。数秒後にベーネの槍がアイリスの腹部を貫くだろう。

「何それ、意味わかんないわ」

だが、その槍は彼女を貫くことはなかった。

「バカなんじゃないの？あなた」

ベーネの槍の刃を、アイリスは自分の手で掴んで止めていた。

アイリスの手からは血が流れて滴り落ちていく、普通ならこんなことでは防ぐことはできない、出来たとしても痛みで刃を握ってはいられないだろう。

「それは結局あなたが悪いんじゃない」

「私が……悪い……」

「そうよ、友達の気持ちに気づいてあげられなかったのも、友達を助けられなかったのも全てあなたのせいでしょう？それは女神のせいなんかじゃないわ」

「違う……違います！」

「違わない、貴女はその友達を助けられなかった罪悪感を女神を恨むことで、自分のお姉ちゃんを恨むことで誤魔化して逃げてるだけよ。貴女の世界のギアちゃんの野望に便乗して自分の罪を受け入れられないようにしてるだけ」

ぐぐぐつと槍をベーネへと押し戻していく。

その際に力を入れるためか、手からは血が噴き出していた。

「辛いわよね、友達を失うのは。私も何人も友達が死んだからわかるわ」

「確かに私のせいでもありません……でもそれは女神が存在したから！」

「何でも女神の所為にしてんじゃないわよ」

ついにアイリスはベーネの槍の刃を握りつぶし、彼女の首を掴んで壁へと叩きつける。

その目は殺気を帯びていて、いつもの雰囲気など微塵もない。

「だったら聞くけどね、ギアちゃんに恩返ししたいなら、何で女神化して戦わないのよ？どうして全力出して戦わないの？本当に恩返ししたいならね、どんな手を使っても目的に立ち塞がる奴らを倒しなさいよ」

たとえ自分が嫌いな力を使ったとしても、自分がやりたくないことであっても、それが自分を救ってくれた人のためになるならば、それ

を全力でやるのが恩返しというものだ。それが人のために戦うということだ。

「あなたは結局自分がやったことを認めたくないただクソガキよ、ギアちゃんに甘えてるだけのクソガキ」

ガキ、と言われて反抗心が出たのかバーネはアイリスを睨むが圧倒的な彼女の力に逃れることができずただもがくことしかできない。

「…………昔ね、1人の男がいたの」

アイリスは殺気を消し、ゆつくりとバーネに語り始めた。

その男は表には出さないが誰よりもお人好しで、誰よりも優しく、甘いものが好きな普通の男だった。

そして男には2人の大切な友達が居た。世の中は戦争中で、その男も、2人の大切な友達も戦いに行かなければいけなかった。

男は2人の友達を守るために、優しさを捨て、弱さを捨てて強くなろうとした。そして男は思いついた。自分の国がどの国よりも一番強くなれば、大切な友達が戦場に出なくても済むのではないかと。

だから男は自分の国を強くするために兵器などを開発することにした。その最中で非人道的な事も、悪い事も、最低な事もたくさんした。いつしかその男は、人の皮を被った化け物と呼ばれるようになり、国の人間から恐れられ、最終的には守ろうとした2人の友達からも怖がられるようになってしまった。

それでもその男は止まることはなかった、2人の友達さえ笑顔で笑っていてくれればそれで良いと。

例えその2人から、憎まれることになったとしても。

「まあこれは私の友達の話なんだけど」

「どうして、そんな話を私に……………」

「…………ムカついたのよね、貴女に」

そう言うとアイリスは掴んでいた首を離してバーネを解放した後、戦艦のエンジンの前に立った。

「誰かのために何かを成し遂げるっていうことはね、簡単なことじゃないのよ。その人さえ笑ってくれば他はどうでも良いって思えるくらいじゃないと無理なの。そしてね、その相手のためなら自分はど

うなっても構わない、そんなことも分からない貴女が誰かのために、何でほぎくんじゃないわよクソガキが」

そしてアイリスは青い稲妻をエンジンへと叩き込んだ。

とんでもない爆発がエンジンルームに広がり、動力を失った戦艦が急速に落ちていく。

「ちなみに話に出てきた男ね、最後までうなつたと思う？」

ベーネは俯いたまま何も答えない。

「笑えなくなったの」

昔はぎこちなくとも、きちんと笑えていた。

しかし男はいつからか、自分の顔が無機質になっていることに気づいた。笑おうとしても、きちんと笑えない。それ以前に、どうやって笑うのかを体が忘れてしまっていた。

それだけではない、怒りも悲しみも、それどころか食事も味がしなくなっていた。睡眠もほとんど出来なくなり、男はどんどん人間からかけ離れていった。男は、何も感じなくなった。

最初はある人を実験に使う罪悪感も、それを行う自分への嫌悪感も、いつしか無くなって人を人だとは思えなくなっていた。

人を殺す事が、当たり前になっていった。

「貴女にある？ギアちゃんのために自分がそこまでズタボロになる覚悟が」

そう言って、アイリスは戦艦を後にした。



ヴェアフルとトウカ、勝負の行方は

「終わりだ」

ヴェアフルとトウカの戦闘は均衡するかと思われたが、その結果は予想外となり、トウカの優勢で戦いは進んでいる。ヴェアフルは既にボロボロで、トウカは息一つ切らしている様子はない。

「はあはあ……」

「確かにお前は強くなった。その黒い炎をどこで手に入れたかは知らんが、剣術も鋭くなったし、力も今とは比べものにならない。だが、俺を殺す事はできない」

「……なぜだ、少し前までは力は均衡していたはず……」

ヴェアフルは剣を突き立て俯向く。

そんな彼女に、トウカはかける言葉が見つからない。

「………お前はどうかやってこの時代に来たんだ？確かに俺も時間の遡り方は知っているが、せいぜい7秒が限界だぞ」

「………あなたが死んでしばらくした後、着物を着た綺麗な女に会った」

着物を着た綺麗な女性、というところでトウカは驚きを隠せない。

その女性はおそらく、彼の知っている人物だったからだ。

「その女は言ったんだ、過去の自分を許せるかって」

「そしてお前はここに帰ってきたのか」

「ええ………貴方との約束を守るために、そして………弱い自分を殺すために」

昔交わした約束を、彼女はまだ覚えている。自分が死んでもなお、その約束を守ろうと時を遡ってまでやって来たヴェアフルは、トウカに負担をかけているネプテューヌ<sup>自分</sup>が許せなかったのだ。

「貴方の未来を悲劇で終わらせないために、ここで貴方の人生を終わらせる………こんな結末………貴方には味わってほしくないから！」

いつしかヴェアフルの口調が男口調から昔の女性の話し方へと変わっていき、黒く恐ろしい炎は紫色の炎へと変わった。そして何より、彼女も目が変わったのだ。絶対的殺意を込めた目へと

「そして何も知らなかったバカな私を殺して、全て無かったことにしてやる!!」

紫色の炎が大きく燃え上がる、その炎はいつしかヴェアフル自身も覆うほどの巨大な炎へと変貌した。

「そうか……………お前が自分自身を殺すというなら……………俺はお前を止めなければならぬ」

彼は自分の細胞を封じている腕輪を破壊した。

その瞬間、黒い何かにトウカは体を侵食されていく。

「何を!!」

「お前が全てをかけるというならば、俺も命を賭けてやろう……………どのみちもうすぐ死ぬんだ……………それにここで俺が消えれば……………ネプテューヌはお前にはならない」

ここで自分が死ねばネプテューヌは自分を殺すことは無い、だから苦しむことは無いのだ。

「まあ、結局あいつに悲しい思いをさせることになるだろうがな」

ふっ、と自傷気味にトウカは笑う。

何も知らないネプテューヌは悲しむだろう、自分は足りないことが多すぎる頼りない保護者だっただろう。だか……………それでも自分はその子の親代わりだったのだ。

親代わりの人間が死んで、悲しく無い人はいないだろう。

「俺にとっては、悲しんでくれる人間がいてくれるというだけで幸せだ」

彼はそう呟いていつも使っている剣ではなく、黒く禍々しい剣を取り出した。

「ゲハバーン……………」

「そうか、この剣にも名前がついたのか……………元々この剣はなんの変哲も無いただの剣だったのにな」

はるか昔、彼がたった1人だった時、唯一信じられたものは剣だった。その剣は彼が大人になっても錆び付くことはなく、ずっと彼と共にあった。その剣は長年人を斬った怨念などを取り込んで、彼の手によって魔剣に改造された。

つまりゲハバーンは、元々トウカが幼少期から使っていたなんの変哲も無い剣なのだ。

「お前には結局、この剣を使っているところを見せることはなかったな。冥土の土産に見せてやろう……俺の本気をな」

トウカは目を閉じ、意識を集中させる。

身体中から黒い何かが侵食していき彼をみるみる内に異形の姿へと変えていく。その姿はまるで赤い炎を纏う人型の黒い竜の様だった。

そしてさらに、そこからゲハバーンから紫色のオーラがトウカの体へと流れていった。

その姿を見た時、ヴェアフルは身体中に怖気が走るのを感じた。

「コンナ姿は、見せたくナカったんだがな」

半分ほど人間の声ではなくなったトウカは、ヴェアフルにゲハバーンを向ける。

「行くわよ」

ヴェアフルは意識を集中させて、すべての力を大剣に込める。

彼女の意思に呼応する様に紫色の炎は大剣へと流れていきあつという間に大剣を包み込む。

「この一刀に全てを込める！」

彼女は剣を構え、そして地面を蹴って走り出した。

今まで一緒に過ごした思い出、思い、約束、それらすべてを剣に込めて。たった一つの約束を守るために

「これで！」

音速を超える剣戟が、トウカの首を確実に捉えた。

「なっ……………」

バギイン、とヴェアフルの大剣が跡形もなく完全に砕けた。

そしてその瞬間ヴェアフルは地面から出てきた巨大な棘によって串刺しにされてしまう。

「ガハッ！」

「終ワリだ」

そのままトウカが手をかざすと、ヴェアフルは炎と共に吹き飛ん

だ。

「くっ、これぐらいで……………」

ヴェアフルは炎を出そうと右手に力を込めるが、一向に炎が出る様子はない。

「なんで…」

なぜ炎が出ないのか、理由はわからない。しかしそんな事を考えている暇もない、動かなければやられてしまう。だから必死に体を動かそうとするが、体が全然動かない。

「終わダ」

その言葉を聞いてヴェアフルはトウカを見る。

そこには、恐ろしい光景が広がっていた。

一言で言えば、闇

ゲハバーンを中心に竜巻の様に闇が広がっていく。

「トウカ……………」

その一言を呟いたあと、ヴェアフルはトウカが振り下ろしたゲハバーンの闇によって飲み込まれた。

そばにいてくれる？

「ギアちゃん」

「アイリスさん！」

アイリスは戦艦を撃ち墜とした後、ネプギアとカイナ達のところに合流していた。

「みんな無事みたいね、なんか増えたり血まみれになってるけど」  
「うるせえよ」

いつのまにか手当てされたのか包帯ぐるぐる巻きにされているカイナを見てニヤニヤと笑うアイリス、ちなみにプルルートは手際よく彼の手当てを完了させていたらしい。

「アイリスさん！トウカさんが居ないんです!!」

「トウカはこの先にいるはずだけど、さつきから爆発音が半端ないのよ。あいつのことだから負けることはないと思うけど………」

そのときだった、とてつもない爆発と閃光が鳴り響いたのは。

「なんですか今のは!？」

「まさか………」

その真っ赤な炎と黒い闇が高く高く立ち昇った時、アイリスは戦慄と共に記憶の底に眠っていたあの日のことを思い出した。

硝煙が立ち上り、辺りは一面の火の海と肉が焼け焦げるに酔いが立ち込めて、建物は崩れ人は血まみれになって倒れていた7日間のことを。

自分の幼馴染が引き起こした災厄の記憶、そして……彼女の中に最悪の可能性が浮かび上がった。

「ギアちゃん！プラネテューヌの兵士とネプちゃんを回収してここから逃げなさい！」

「でもー」

「早くー!あいつのことは任せなさい!ライト!」

「……にー!」

「ギアちゃん達を連れて早く逃げなさい!良いわね!？」

「わかりました!」

有無を言わさぬ形相でネプギアにそう言っただけで自分は爆発があった場所へと向かう。今はなりふり構っている暇はない、一刻も早く彼の元へ向かわなければならぬ。

もう二度と、自分の守るものが消えていくのは嫌だから



「手加減………したんだ」

その場所は、とてつもない炎と闇によって大きく抉られていた。

抉られていたというよりは、その部分が丸ごと消滅したと言ったほうが正しいだろうか。

「だって、本気の一撃を受けても私生きてるもん」

そんな中、本来薄紫色の髪をしている少女の髪は力尽きたように白くなっていた。

「やっぱり凄いなあ、トウカは」

その少女は、先程まで紫色の髪を揺らして黒い大剣を振りかざし、トウカと戦っていたヴェアフルだった。そして今の姿は、トウカ自身が一番知っている姿

「やっと戻れたよ………ありがとね」

「……………」

今のトウカの姿は右腕が完全に黒い化け物のようなものに変化してしまっている。右目の部分も、少し黒く変色していた。

「結局私は………また何もできないんだね」

「………そんな事はない」

トウカは静かに彼女の元へと歩いて行き、ギュツと優しく、そして強く抱きしめた。

「お前のおかげで、先のことがかかったよ。俺がやるべきことも分かった。ありがとう……………」

「そっか……………なら嬉しいや……………えへへ」

その笑顔は………少し切なそうな、自称気味の笑顔だった。

「ねえ、トウカ……………トウカは……………自分の人生を生きて欲しいんだよ……………私の世話なんてしなくてさ……………」

「……………バカだなお前は」

ふっ、と少し笑うとトウカはヴェアフルネプテューヌの頭を撫でながら話す。

「俺の人生は、お前と一緒に過すごすことだよ」

長い間、ずっと2人で過すごしてきた。

言葉に出来ないほどの、気の遠くなるような時間を。

彼女はトウカに、愛情をもらった。自分の存在意義をもらった、人を思う優しさをもらった。そして、誰かを守る強さをもらった。

そして彼はネプテューヌに、新しい人生をもらった。感情をもらった。新しい名前をもらった。

2人はお互いに、とても大事なものを与えあっていた。

だから彼は決めたのだ、自分はこの子を強くするのだと。

そして自分1人で大切なものを守るようになるまで、必ず自分が守るのだと。

「……………お前の人生は、とても尊いものだ。いろんな人を救ってきた……………この俺もな」

トウカは、彼女に向かいゲハバーンを向ける。

「だからもうゆっくり眠って良いんだよ、ネプテューヌ」

「そうだね……………でも1人はちよつと寂しいかな……………そばにいてくれる？」

「ああ、ずっと一緒にいてやる」

俺はお前の保護者なんだから」  
そして、グサリという鈍い音がその場に鳴り響いた。



## 悲痛な叫び

「トウカー！おはよー！」

今日も高く大きな声が牢獄内に響いてくる。

この数ヶ月毎日欠かさずに超えてくるその声は、最初の頃は鬱陶しかったが、慣れて来るものだ。

「寝てるのー？おはよー！」

「うるさい、もう2時間36分前に起きてる」

「細かいね!」

いつも鉄格子の向こう側にいる薄紫色の髪をした子供は俺に他愛ない話をする。俺が適当に相槌を打っているだけでもとても嬉しうだ。そんな話し相手が欲しいのか？あれだけ明るいなら同年代の友達くらいいるだろうに

「一つ聞いていいか」

「なに？」

「なぜ俺のところで話をする？同年代の友達と話せば良いだろ」

「うーん、そうなんだけどさ………」

あはは、と気まずそうに笑う。

聞いてはいけないことを聞いてしまったのだろうか

「私、友達いないんだよね。教会の外に出してもらえないから」

「教会の外に？お前は教会の人間か」

「人間っていうか、この国の女神候補生なんだ」

………驚いたな、まさかこんな子供が女神候補生とは

「だからいつつも部屋で一人ぼっちでゲームしてるんだ。でも最近はどうかと話してる時間の方が多いかな？」

「俺なんかと話して楽しいのか」

「楽しいよー！」

そしてその少女は今の俺にとって太陽の様な少し眩しすぎる笑顔で俺に言った。

「だって、トウカは私の話聞いてくれるもん！」

この少女が、俺の人生を変えるなんて思ってもいなかった。



ビチャ、ビチャ、と水の跳ねる音が聞こえてくる。

地面に広がった一面の血の池、血と肉が焼けるような匂い、赤い炎と黒い炎が燃えて、周り一面には肉片になった何かの死体が散乱していた。

人が見たなら、地獄の様だというだろう。

そんな中を、アイリスは進んでいた。

「……昔みたいね……本当に」

こんな光景を、彼女は昔見たことがある。

いや、何度も見てきた。こんな地獄のような景色を。

彼が戦場を、敵国をこんな風に地獄にしていく様を、何もできない自分の弱さも、何度も味わってきた。

「見つけた！」

一箇所だけ大幅に地面が削られている箇所を見ると、その中央に彼がいた。アイリスは急いでその地面を滑り降りてトウカの元へと向かう。まだ暴走は始まっていないのならばいくら手間も打ちようがある。そうしてアイリスは彼の所へたどり着く。

「見つけたわよ、トウカ」

「……………」

トウカは何も答えず、ただその場に膝をついて俯いていた。

「あの黒い鎧は？」

「……………殺したよ」

目の前には何かに突き刺していたのであろうゲハバーンが突き刺さっていた。

トウカは静かに、ヴェアフルの正体を話し終える。

「そう……………あの子がネプちゃんの未来ってこと？」

「そういうことだ……………あはは、一番守りたかったものを……………俺は殺したんだ」

絶対に守りたかった、何に変えても、自分の命を引き換えにしても守りたかった。その存在を、彼は今自分の手で殺してしまった。

いつぶりだろうか、こんな感情を抱くのは。

罪の意識も、悲しみも、そんな感情はない。

ただ、消えてしまったという空虚な感情が、彼の中に残されていた。「でも、この世界のネプちゃんを守れたじゃない。それでも貴方がいた意味はあったのよ」

「いずれヴェアフルの様になってしまふのなら、なんの意味もない。俺は目の前の少女すら救えない！いつもそうだ！たった2人の幼馴染を守ろうとしても、結局2人とも救えない！お前も、うずめも！誰か1人救えなかった！悲しい思いをさせてしまった、俺の手でこの世から消してしまった!!何が科学の神だ、何が女神の保護者だ、何が最強だ！俺はただ何も救えない愚か者だ……何ひとつ救えない」

ずつとそばにいたアイリスでさえ、彼の心の声を初めて聞いた。

もうほとんど失われている感情を吐露し、叫ぶ。

「しかも、ああなったのは全部俺のせいだ……俺があの子にしてきたことは……全て無駄だった……俺が居る事であの子が不幸になるのなら……俺なんていなければ良かった……生まれてこなければ良かった!!!」

「っ!!カйна!!!」

思わず彼の名前の本当の名を呼び近くアイリス、しかし、手を伸ばしたその手は何かによって弾かれた。

手を見てみると、熱い鉄板に手を押し付けた様な大きな火傷を負っていた。そしてトウカの周りに炎と黒いオーラが溢れ出てくる。

「カйна!!!ぐうっ!!」

とてつもない高温の空間がアイリスの体を焼く、細胞レベルで人間ではないアイリスでさえ近づくとできない。

おそらく力を制御していないプロトタイプだからこそ、改良されて力を制御している第一世代では対抗できないのだろう。

今、彼の力は制御されていないのだから。

「……カйна!」

だが、そんなことは関係ないのだ。

今彼を助けられるのは自分だけなのだから、今度こそ助けるのだ。今度こそ、自分の元から、自分の手に届かないところへ行かない様に。

「貴方の悪い癖はね！なんでも1人で抱え込んで失敗することよ！！1人で出来ないなら頼りなさいよ！！それにね、何も救えなかったっていうけど」

体が焦げる様な暑い空間の中を、一步一步確実に進んでいき、懸命に手を伸ばす。

「少なくとも私は救われた！！貴方がネプちゃんから新しい名前を貰ったように、私も貴方から名前を、新しい自分を貰ったから！！」

誰も救えてないなど言わせない、自分は彼に救われたのだから。

だから今度は自分が彼を救う番だ。

「貴方が生まれてこなければこなかったなんて言わせない！他の誰にも、貴方自身にも！！だから……………」

一步一步進むたびに体に帯びる熱が高まる。

そして伸ばした指先が焦げ始めた。

これから先に進めば全身が焦げてしまうかもしれない。そんな時だ、その指先に感触が現れたのは

「カйна……………」

そして、アイリスの視界が暗い布のようなもので覆われ、足元には剣が突き刺さる。

「アイリス…………いや、プルルート」

黒い物を取り除き視界が開ける、するとそこには

「ネプテユースを頼む」

昔、一度だけ見た…………彼の笑顔だった。

「カйнаっ！」

その瞬間、とてつもない閃光と衝撃がアイリスを襲い彼女を数メートル先の湖へと叩きつけた。



「ガバッ！ゴホォー！」

湖へと吹き飛ばされたアイリスは水中で目を覚まして水面へと泳ぎ、陸へと上がった。

「はあ、はあ、カイ…………トウカは!?!」

辺りを見渡すが、一面の焼け野原しか見当たらない。

彼の姿はどこにも無かった。

「トウカ、ねえトウカ？何処なの？返事しなさいよ！ねえ！ふざけないで！どうせまたタチの悪いドツキリでしょ？ねえ？」

彼女の声に反応するものはいない、それでも彼女は言葉を発する。叫び続ける。

「トウカ、トウ………カイナ、ねえ！冗談でしょ？カイナ、カーくん！返事してよ！お願いだから!!私……貴方まで居なくなったらどうすればいいのよ!!ねえてば！カイナアアアアアアアアアアアアああああああ！」

彼女の叫びが、雨の降り始めた空へと木霊していた。



「大丈夫？お姉ちゃん」

「平気平気、ありがとネプギア」

ネプテューヌ達は戦いを終えて休んでいた。

エディンは勢力を失い消滅したそうだ。洗脳されていた人間達も無事に解け、今は大丈夫だという。

「あとはトウカが戻ってくるだけだね！」

「うん、そうだね」

「心配しなくても大丈夫だよネプギア、トウカは強いもん。必ず帰ってくるよ」

笑顔で言うネプテューヌとは対照的に、空から雨が降り出した。

「ねぷう!?雨だ！」

「わわわ!どうしようお姉ちゃん!？」

「とりあえず教会に帰ろっか」

「うん、そうしょっか」

そう言っただけで姉妹は走り出した。

(これでいつも通りに戻るよね？トウカ……でも、なんか……嫌な雨だなあ)

彼女の望みは、もう叶えられることはない。

## コメント返し2

アイリス「はいーい！それじゃあコメント返し2回目やっていくわよー！」

ライト「先輩も団長も忙しそうですね、最近は動画にも出てますし」  
アイリス「そうなのよね、いやあ中々人気で困っちゃうわー！」  
トウカ「下ネタ言っつ俺にぶん殴られてるだけだろ」

アイリス「はいそこ！本編で安否不明のくせにうるさい！」  
質問返していきませんかね3人とも

アイリス「そうね、じゃあまず一つ目」

ラウル「お化け屋敷行こう」

ツグミ「クロムウエルと行くんじゃないの？」

ラウル「最近ツグが冷たくて寂しい」

ラウル「てかクロムはダメ。あいつはホラー入ると腕に爪めり込ませながら胸押し付けて来て凄いやり声上げてくるからな」

ツグミ「わかった。僕と行こう」

ラウル「ありがとうツグ！……そうだ、メルティも誘おう  
！彼奴墮神なのに幽霊怖がるんだぜ？」

お化け屋敷……ホラー耐性はありますか？

ライト「私はちよつと苦手ですね……」

トウカ「俺はお化け屋敷などに行ったらどういう仕掛けなのかが気になつてしまふな。メイクなのか、それとも作り物なのか」

アイリス「わわわわわ私は魔導師だし？お化けとか全然余裕よ  
？」

トウカ「そういえばお前の後ろに白い服を着た青白い女が居るぞ」  
アイリス「だあああああああああ!!」

ライト「団長はゾンビとかは平気ですけどお化けとか怨霊系は全く  
ダメです」

続いでのコメント

ウタ「………シネ」

まさかの速攻で暴言?!

リス「そうですね。マスター！良いじゃないですかコラボ！暇潰しには最適ですよ?!」

ウタ「喧しい！何故オレまで引き摺り出されにやならんのだ!!最近やつと魔王のアホ共を血祭りに挙げて黙らせたのだぞ!!」

リス「だからってニートはダメです!!女神様から「喧しい！テメエの羽根なんぞ筆ってやる!!」あ、ちよ……あふん?!」ブチブチ

……えー、この先は大変見苦しい状況が発生していますので、一旦カットで

ウタ「ゼエ、ハア……ほんつとうに！何でオレは天使型なんぞ創ったんだ!!」

いや、本当にレアなんだよ？天型って

リス「そうですね！わたしですつごくレアなんですよ?!最近作者の人が始めてる少女とドラゴン風に言えば★5のゴッドレアぐらい！」  
ボロ

ウタ「知らん！オレは人型が欲しかったのに、なぜ、こんな戦闘特化のゴミ使い魔が発生した!!?!」

リス「ひどい……でも、イイ」???(?)???

……いい加減に質問に逝こう?。

ウタ「あゝあゝ?」

リス「そうですね。こうもグダグダでは仕方ないですし」

ウタ「……終わったなら寝る」

取り敢えず、質問行きます！

リス「アイリス様達って本気になればどのぐらいの戦闘力ですか？ネプ換算でお願いします！因みにわたしは女神付きラスティションと言いましたが、そこで寝てるマスターはその気があれば数分でトウカさんやトウカさんを瞬殺する師匠さんをプラネテューヌごとこの世から消却出来るみたいです！」

まあ、時間系統の力と洗脳系統の力を持つてるし、しょうがない

……のかな？

リス「はい。なんでも、女神を洗脳して襲わせながらトウカさんの時間を巻き戻して適当に数分程時間を潰してれば勝てるとか言ってますし」

……最悪だね？

リス「因みにわたしは、マスター程地力も時間操作能力も強くないので、ものすごい勢いで周囲の時間を加速させてラステイションを廃墟のようにするのが精一杯です。女神様は寿命が無いから加速だけじゃあ勝てませんし……プラネテューヌはなんでか加速中に意味不明な発展をして振り返ちにしてきそうですし」

と言うか、ダメージカット（9割）があるから、四女神と戦えそうだけどね？

リス「でも、トウカさんには地力が違うので勝てません。死んじやいます！」

っと、尺もヤバイし、ここ等で終わるところか？

リス「はい！では皆さん！」

A P O リス『good bye！ see you again  
!!』

アイリス「へえー」

ライト「団長、ゲームやめてください」

トウカ「お前はコメント返信もできんのか」

アイリス「だって瞬殺されると言われたらさすがに気分悪いしいいトウカ「事実ならしようがないだろう」

ライト「そうですねよ団長、子供みたいに不貞腐れなさい」  
アイリス「ペエー、まあ良いか。戦うことないんだし」

トウカ「この世界の換算でいうなら、ライトはネプテューヌより少し強い位、アイリスと俺は本気なら数分でゲームギョウ界を壊せるレベルだ」

アイリス「ちなみにトウカの師匠のセイだけど……貴方でも勝てないわよ、これは絶対言い切れるわ」



トウカ「おいアイリス」

アイリス「というよりあの人多分生物ってカテゴリーじゃないのよ、貴方ウタだっけ？あなたじゃなくても勝てない、絶対に」

トウカ「そ、そこまで強くないだろ」

アイリス「あなたは見たことないから知らないのよ、あの人は……もう強いとかそういう次元じゃないの」

続いでのコメント

天が呼ぶ!! 地が呼ぶ!! コラボをしろと呼び掛ける!!

更新停止気味なヴラド見参!! (バアーン!!

アル「久々にまとも…無いよな(ハア…あ、どうもアルカディアだ」  
ネプ「今週課題が溜まりまくってパンクしそうな作者を応援しているネプテューヌだよ〜!! へ (≡▽≡≡へ) ♪」

ああ…水曜日にフィギュア制作と3Dデザイン完成させなきゃ…

( ; ; ▽ ; )

しかもその日テストもある…おわた＼( ^ o ^ ) /

アル「諦めんなよ…」

ネプ「とりあえずリアルな話は置いて質問いっくよー!!!」

OK!! では質問!!

好きなポケモンと相棒にしたいポケモンは何?

アル「…これっていいの?」

ネプ「多分問題無いんじゃないかな?むしろ答えやすくなってると思っし♪」

あ、ちなみに二人は何かな?

アル「俺はリザードンとアブソルだな」

ネプ「私はピカチュウとエルレイドだよ♪」

あゝ…何となく二人に合ってるね♪ (\*・▽・)

あ、ちなみに自分はジュカインとゴウカザルです♪

ホウエンとシンオウでの最初のパートナーでしたので!!!! へ (≡▽

≡へ) ♪

アイリス「レックウザ！」

ライト「派手ですね!？」

アイリス「だって正直空飛んで破壊光線とか撃てるから最強じゃない? 空飛んでいろんなどこ行けるし」

ライト「そ、そうなんですか……:ちなみに私は」

アイリス「どうせピカチュウでしょ」

ライト「な、なんでわかったんですか!？」

アイリス「髪の色とか性格とかあなたリアルピカチュウじゃない」

ライト「属性的には団長なんですが……:先輩は?」

アイリス「大体予想つくけどね」

トウカ「俺はポツチャマだな」

アイリス「ほら、ギラティナで……:はい?」

トウカ「俺はポツチャマが一番好きだ」

続いでのコメント

進「よし、じゃあ今日も元気にやっていくぞ、あと、今回から俺の他にもう一人司会者が増えます。この人です」

s「いえーい、今回から正式にこちらで司会者に抜擢された作者さんとsssssです!これからよろしくお願いします」

進「えー、何で俺がこのクズを司会者にしたかと言うと、こいつ一人に場を任せたらまたトウカさんたちにどんなセクハラ発言するのかわからないので、俺の監視の元で管理することにしました。そしてこちらが今回のゲストの」

進の世界のネプテューヌ「やつほー!主人公オブ主人公こと、ネプテューヌだよ!」

進「はい。それじゃあさつきと質問に行けよ」

進の世界のネプテューヌ「ひどい!前置きくらいさせてくれてもいいじゃーん!?!……まあいいけどさ、それじゃあ質問!」

質問内容

「ライトちゃんに質問、ライトちゃんは普段着はどんな感じなのか知

りたいです!」

「何なんだ、この質問はあ?」

「そりゃあ、進が好きって言う人の普段の姿を見ておきたいじゃん! (ライトちゃんの普段着を参考にすれば、進のハートを射抜けるかもしれないし...)」

「そうか...まあ、ネプテューヌにしてはまともな質問で驚...おいそこ  
のくそ作者、何をしてやがる?」

s 「いやー、何でもないよ。ただちよこつとまたライトちゃんのス  
リーサイズを聞けないかと思っ...」質問は一つだけだとルールに書い  
てあったしトウカさんたちに迷惑ばっかかけてんじやねえ!!!」  
ぎやあああああー!!!」

進の世界のネプテューヌ「あくあー、やつちやった...それじゃあら  
イトちゃん、わたしの質問に答えてね! バイバーイ!」

アイリス「あなた基本的にジャージでしょ?」

ライト「はい! やっぱリジャージが一番ですよ!!」

アイリス「色気も何もないわね...せめてワンピースにしなさい  
よ」

ライト「ワンピースってスースーして嫌なんですよ...」

トウカ「まあこれで色気のないネプテューヌでも可能性があるとい  
うことでよかったな」

アイリス「それ全次元のネプちゃんに失礼だと思おうわよ?」

次のコメント

五号袋「作ってみました、鯖風ステータスシート」

ラウル「なにそれ。いや、大体は分かる」

憐夜「サーヴァントみたいにステータスが表示されるんだろ?」

五号袋「まあね、mk. 5 は遊び心の塊なのだ」

ラウル「とりあえずやってみろ」

五号袋「おうさ! 驚くなよ?」

ベクセルmk. 5 クラス：キヤスター

筋力：E X 耐久：E X 敏捷：C | 魔力：A 幸運：E |

スキル 陣地作成 D 天性の肉体 E X 被虐の誉れ E X 魔力

放出(筋) A +

憐夜「脳筋じゃねえか！」

五号袋「そうか？」

憐夜「そうだよ！なんだよこれ！キヤスターなの!?魔術(物理)なの!？」

五号袋「じゃあ、憐夜は？」

桜逆憐夜 クラス：アヴェンジャー

筋力：A 耐久：B 敏捷：A ++ 魔力：E 幸運：C

スキル 身体強化 E X 直感 E X

五号袋「んなアヴェンジャー居ねえよ」

憐夜「は？」

ラウル「確かにこんな復讐者居ないな」

憐夜「最後にラウル」

ラウル・デス・ムーン クラス：ランサー

筋力：A + 耐久：C + 敏捷：E X 魔力：E X 幸運：

D

魔王の眷族 E X 陣地作成 E X 無窮の武錬 E 魔力放出 E

X 竜種の王 E X

二人「このチート系主人公！」

皆さんも、使ってみては？

アイリス「楽しそうね！作ってみましょうよ！煉獄姫もね」

えー、俺もやるんですかー……………まあいいか。これが私たちのステータスだ！

煉獄姫 クラス セイバー、アサシン

筋力 C 耐久 B 俊敏 D 魔力 E 幸運 E |

直感 B 軍団指揮 C 武具の心得 B 心眼(偽) C 制作 B 諜

報 A

トウカ「なんとも言えないステータスだな」

現代人ですから、魔力がないのはお察しですよ。

幸運は聞かないでいただきたい。

次はトウカさん！

トウカ クラス バースーカー アーチャー、セイバー、アサシン

筋力E X 耐久E X 俊敏A 魔力E― 幸運E―

直感A 隠密A 陣地形成E X アイテム作成E X 戦闘続行E

X 医術A 神殺しE X 挙げたらキリがないので省略

アイリス「なんか両極端なステータスねえ、ていうかスキル多過ぎ」

ライト「というか先輩……………キャスター以外全部なれるんじゃない

ですか？」

トウカ「まあいろんな経験をしてきたからな」

次はアイリスさんです

アイリス クラス セイバー ランサー キャスター

筋力A 耐久E X 俊敏A 魔力E X 幸運D

直感A 魔法の神E X 軍団指揮B カリスマA 戦闘続行E

X

トウカ「なんだこの魔法の神っていう意味のわからんスキルは」

世界において魔法学、魔術学において全てを凌駕したものの称号

このスキルはとてつもない工程と詠唱を無視して大規模魔術や魔法を即座に発動することができる。いわばキャスターのトップの称号。

ライト「つまり魔法においてチートだつてことですね」

アイリス「そういうこと♪」

次はライトちゃん

ライト クラス ライダー キャスター

筋力B 耐久C 俊敏E X 魔力B 幸運B

直感B 軍団指揮C カリスマD 戦闘続行B 神速E X

アイリス「なかなか優秀なんじゃない？」

ライト「ステータス的には団長が一番優秀ですけどね」

アイリス「でも一番いろんなクラスになれるのはトウカじゃない？」

トウカ「まあどのクラスになろうと魔力と幸運が最低なのは変わらないがな」

とりあえず今回はここまで

トウカ「ちなみに次回もコメント返しだからよろしく頼む」

### コメント返し3

アイリス「はい、続いてコメント返しのコーナー」

トウカ「いつのまにかお気に入り登録が600人を越えてたな」

ライト「そうですね！たくさんの人に見てもらえて嬉しいですよ」  
それではコメントを返していきましよう

暑い怠い死にそう（グテ〜）

アナザー「じゃあそのまま死んでおけ」

酷くない?!自分、お仕事がお外だから洒落になんないんだよ?!

アナザー「お前が死ねば俺はそのまま好きなようにだらけていられるからな。寧ろ、何故お前の生存を望む必要がある?」

鬼！悪魔！冥界住人!!

アナザー「冥界住人は貴様だボケが!!」

そうでした。

アナザー「いい加減質問に行くぞ」

おー!

【トウカさんは時間操作系の能力に耐性がある?】

アナザー「……………いや、ネプテューヌ系のキャラに時間操作系の能力を持ったキャラは居ないだろう。うちの世界の転生者や異能保持者でも滅多にいないぞ」

いや、実際問題、不老不死でも加速はともかく巻き戻しを喰らったら死ぬるじゃん?

アナザー「いや、生まれた事がなかった事にされたら耐性持ち以外は普通は死ぬるぞ」

一応、気晴らしに書いてる悪意の天使篇の主人公が時間操作系の魔法使いだから……………しかも、単純な素の戦闘力（魔法・異能無し）だけでも犯罪神と同程度だし

アナザー「ああ、あのふざけてんのかテメエと言いたくなるぐらい強力なBADステータスの強制付与と味方が寝返る洗脳能力を持った主人公か」

しかも、従者のリスティアなんて時間操作系の加速に加えてダメー

ジ9割カットに加えて空間属性を含まない攻撃は完全に無効化してくるマジック級の実力だし

アナザー「……………それ、ネプテューヌ達と戦いながらプラネテューヌを滅ぼせないか？」

いや、プラネテューヌは加速中に意味不明な発展をして返り討ちにされかねないから無理だつてき。ラストイションならノワール様達と戦いながらも滅ぼせるみたいだけど

アナザー「そうか……………長くなつたな。ここらでめるか」

そうだね。それじゃあ、次の更新を楽しみに待ってます。

アイリス「トウカと私には魔法は全部例外なく効かないわよ？」

ライト「そうなんですよ、この2人本当にずるいんですね……………」

アイリス「ズルくないわよ、トウカはずるいけど」

トウカ「自分で作ったんだからズルくはないだろう」

アイリス「いや、あんた自身が自分でも分かってない能力あるのにその上変な機械まで作ってるんだもの、付け入る隙がないわ」

ライト「というわけで、先輩と団長には魔法は効かないんです。先輩の場合は固有能力も効かない時がありますからね……………何なんでしょう？」

次のコメント

次回か次次回辺りがコメント返しの回になりそうな気がしたので、質問を投稿しますよー！

アナザー「……………相変わらず、文章のテンションだけは高いやつだな」

いやいや、くらいい部分を君にあげたんだからそりやそうなりますって！

アナザー「だとしても、変わり過ぎだろう……………普段のお前はどちらかと言うとトウカみたいに表情も口数も口の上手さも無いと言うのに……………どうしてこうなった」

まあ、明るい部分はハクとかにあげちゃってるから良くも悪くも純



粹なだけだよ？それより、質問行っていこー!!

アナザー「……………ああ、これか？」つかンペ

『トウカさん達のお師匠さんってどんな見た目？出来たら着物の柄も教えて♪スタイル（スリーサイズ）は……………トウカさん達が知ってたら知りたい！でも、着物の上でも分かるぐらい大きいとかさう言ったふわつとした感じでも良いので知りたいです！』

アナザー「……………なんだ？これは」

今後のお楽しみみてね♪と言う訳で、返答を楽しみに待ってます！

……………コンコン……………ん？誰か来たのかな？はーい！

アナザー「……………嫌な予感がするから俺は帰る」

えつちよま……………どうかお慈悲を「ダメ♪」ってギャアアアアアア

アアアアアアアドガバキグシャ……………パンパン……………チーン

トウカ「あいつのスリーサイズなんぞ知らん、興味もない」

アイリス「あなたあの人に対して反抗的になるわよね」

トウカ「そんなことはない、着物は2枚着込んでいて、外に着込んでいるのはとても大きな着物だったな。城に住んでいるような。それでいて柄は花、何の花かは知らん。着物の色は外側が白と金色、中に来ているのが桃色だったと思う。」

アイリス「ちなみに髪の色は黒で、目の色は青色だったわ。髪の長さは足くらいかしら？」

トウカ「胸はそんなに大きくないと思うぞ、着物の上はわからんかったからな」

次のコメント

どうも仮面レックスです。(^^ゞ

さて何を話していいのかわからないのでここは時雨ちゃんに任せ  
て…。(。○。;) )

時雨「…もぐもぐ…旨い…」

何食っているの!?時雨ちゃん!?( ; 。 ㇏ )

時雨「特盛パフェだけど何か？」

いやいやいや!ここは普通自己紹介とか質問するとかでしょ!?(。)



次のコメント

ポツチャマには驚いたヴラドです!!

アル「確かにポツチャマ可愛いなアルカディアだ」

ネプ「けど水タイプならミジュマルも可愛いよ?皆の主人公ネプテューヌだよー!!」

トウカさん安否不明は置いて…:サーヴァントにしたら皆さんヤバイですね(?▽?;) )

魔法の神とか神殺しと…

アル「確かにヤバイな…作者の場合はどうなんだ?」

うん?私?私なら…

ヴラド クラス アサシン

俊敏D | 隠密C | 空気B 呪術A++ 悪運A+ 幸運D |

こんなもんかな?

アル「ろくなものがない…な…いや待て呪術A++ってなんだ!」

Σ (?ロ? | | | | )

ネプ「呪術A++とかなにそれ怖い!? Σ (?ロ? | | | | )」

え? いや〜オカルト関連で成功したことがあったので… (?▽?;) )

アル「え…あ、二度とするなよ?」

いやしないよ… (?▽?;) )

さて、それじゃ質問つくよ〜!! ^ (≡▽≡ ^ ) ♪

### 【質問】

そっちのネプ様の一番好きなものは?

あ、ちなみにこっちのネプ様の好きなものは?

ネプ「ねぷ?プリンとアルだけど?」

こんな風に堂々と言っていますのでそっちのネプ様も堂々と答え

てくださいいね♪ (\*・▽・)

ネプテューヌ「プリン!!!」

アイリス「あら、トウカじゃないのね」

ネプテューヌ「うーん?トウカは好きとか以前に居ないと私生きていけないもん。私にとってトウカは私の命みたいなものだから、居て当たり前なんだよ」

アイリス「あ、あら……好きとかそういうレベルじゃなかったのね」

パープルハートの場合

パープルハート「そうね、やっぱり国民のみんなかしら」

アイリス「へー、トウカよりも大事なのね」

パープルハート「あ、当たり前よ……トウカなんてプリン 次の次ぐらいだわ」

アイリス「なら私が貰ってもいいわよね？ 私はトウカのこと一番愛してるものゝ（棒）」

パープルハート「駄目よそんなの!!と、トウカはお姉さんより私の方が好きなんだから」

アイリス「体は私のほうが好みみたいだけど？」

パープルハート「ちよつとトウカ!! 私よりもお姉さんの方が好きってどういうことなの!?!ちゃんと説明して!」

トウカ「いきなりなんだ騒々しい……」 ↑寝てた

次のコメント

進「さ……それじゃさつきとコメントしてこうぜ」

s「相変わらず進くんは展開が早いなく……もう少し落ち着いて行こうよ」

進「黙れこのくそ作者、大体お前は何を見てやがる」

s「え？ 煉獄姫さんの上げた動画だけど？」

進「……なぜ今見てやがる？」

s「ふっふっふ……それはな、実はその動画のおまけで、イツカちゃんと煉獄姫さんのアバターのパンチラが映っているのだよ! 男としてこれは見ねばなるまい!」

進「一片死んで来やがれー!」

s「ギヤアアアア!」

進「へっ……汚ねえ花火だぜ。あ、そうだ……今回は俺の質問です。ちなみに対象は、トウカさん、ライトちゃん、そして、煉獄姫さんです」

質問内容

「怖いものが嫌いなアイリスさんですが、昔は肝試しとかしてたんで

すか？」

進「質問は以上です、皆さんこれからも頑張ってください。それじゃ、さよなら」

トウカ「な!?ナンダコレハ!」↑動画見てびっくりしてる

ああ、これ動画上げてから初めて気がついたんだよ。

俺とトウカさん（イツカ）のパンチラが視聴者に大公開だね

トウカ「最悪だ……一生の恥だ……」

まあ女の子状態の時は恥ずかしいけど、今男状態だから特に恥ずかしくもないんですね。

アイリス「前から気になってたけどあなたってどっちなの」

どっちにもなれますが

ライト「質問返しませんか？」

トウカ「そうだな、アイリスはゾンビや異形の化け物などには強いが怨霊系には滅法弱い。攻撃が効かないからな」

アイリス「むむむむ昔肝試しして本物に会って以来、マジで無理……」

トウカ「そうだ、あの時俺たちは本物に会った、だがその時は捕まえられなかった！くそ、なんて悔しいんだ……」

ライト「先輩、肝だめしの意味わかってますか？」

ちなみにライトも結構怖がりです。

俺ですか？俺は平気ですよ？幼少期から父親に無理矢理ホラー映画とか見せられてたので

トウカ「とりあえず今回はこの辺だな」

まだ残ってるんですがそれは？

アイリス「あと4つくらいでしょ？それなら後書きでなんとかなるわよ」

それではまた次回」

## トウカとの別れ編 彼のいない世界

「いやあピー子も無事帰って来たし、めでたしめでたしだね！」

エディン事件が終結して数時間、ネプテューヌたちはお疲れ様という感じで笑いあっていた。しかしアイリスだけはそんな空気にならない。それもそうだ、目の前で幼馴染が死んだのだから。

「お姉さん? どうしたの?」

「……………ええ? ああ、ちよつと疲れちゃって」

「大丈夫ですかアイリスさん」

「少し休んだら治るわよ」

ちなみにネプテューヌたちには何も話してはいない、トウカは事後処理で忙しいからしばらく帰って来られないとごまかしている。しかし、それも近いうちにバレてしまうだろう。その真実を知った時、彼女は耐えられるのだろうか? もし、耐えられなかったら……………考えたくはない。

自分はある子を頼まれたのだ、だから彼の代わりに自分が守らなければならぬ。それが彼女にとっての……………最後の生きる意味なのだから

「ちよつと外に涼んでくるわ」

そう言ってアイリスはテラスへ出て行った。

無邪気に笑うネプテューヌに真実を伝えなければいけないという重責に押しつぶされそうになってしまふから。

「団長……………」

「どうしたの?」

「先輩に……………何かあったんですよね?」

「……………はあ、そういうことだけは鋭いわね、昔から」

ライトにはアイリスの様子がおかしいことはわかっていた。

伊達に彼女は聖騎士団副団長を務めていたわけではないのだ。

「先輩が……………死んだ?」

アイリスはライトに起きたことすべてを話した。

やはり、彼女も信じられないと言わんばかりに驚きを隠せないようだ。

「ネプさんには……言っていないですよね」

「言えるわけないわよ、そんなあの子がどうなるかなんて分かりきってるもの」

しかし、いつかは言わなければならないときが来る。

いつまでも隠し通せるわけではないのだから、だがその真実を告げるときネプテューヌは彼女のままで居られるのだろうか？

「これからどうするんですか、団長」

「そうですね、正直に言えばここにいる義理なんてないけれど……任されちゃったのよね、あいつから」

彼の最後の言葉を、アイリスは思い出す。

それは彼が自分に託した最後の願い、あの子がトウカたちが居なくなっても大丈夫なように強くするまで見守るといふ役目を……

「とりあえずギアちゃんにも言わないこと、あの子も顔に出やすいから」

「そうですね、てもイストワールさんには言ったほうがいいんじゃないかな……」

「私から言うわ、きつと悲しむでしょうね」

イストワールはトウカが子供のときから今までずっと見てきたからこそ、その悲しみは大きいだろう。それが分かっているから、話すのは辛い。といっても、彼女のことだからもう薄々勘付いているだろう。

「じゃあ行ってくるわ」

「はい」

そうしてアイリスはイストワールの元へと歩き出した。



「やはり、そうでしたか」

イストワールはやはり気付いていたようだ。

アイリスからトウカの死を告げられても驚いてはいない。

「思い返せばもう何百年も前になるんですね、彼と出会ったのは」  
「最初は狼みたいな目つきだったのに、いつのまにか落ち着いた子供にまでなってたわね」

懐かしい記憶が蘇り、お互いに苦笑するイストワールとアイリス、それと同時にもう彼はいないのだと改めて痛感させられる。

「ネプテューヌさんには伝えてないんですね？」

「無神経な私でも言えないわよ」

「そうですか……分かりました。出来る限り伏せておきましょう」

「お願いね」

そう言ってアイリスは部屋を出て歩き始める、もう夜も深い。

空には綺麗な夜空が広がっているが、彼女の気持ちは晴れない。

そんな中、テラスに人がいるのを見かけた。よく見てみると、ネプテューヌの様だ。

「ネプちゃん」

「あ、お姉さん」

アイリスはネプテューヌに声をかけた。

こんな夜遅くにテラスで何をしているか気になったというものがあるが、なんとなく放っておけなかったからだ。

「あんまり夜風に当たると体に悪いわよ」

「あはは、大丈夫だよ」

あはは、と笑うネプテューヌはもう一度テラスから外を見渡した。

「こんな時間に何してるの？」

「……トウカが帰ってくるのを待ってるんだよ」

その言葉が、アイリスの心に突き刺さる。

この子は今でも待っているのだ、トウカが帰ってくるのを。

「トウカはまだ帰ってこないわよ、だって「帰ってくるよ」え？」

「帰ってくるよ……だって、帰って来るって言ってくれたもん

……ずっと側にいるって言ってくれたもん……」

アイリスはネプテューヌの目を見たとき、すべてを察した。

彼女の目は、涙で溢れている。ボロボロと、大粒の涙を流していた。

「私のこと、ずっとずっと見てくれるって言ったもん……だから絶



対帰って来るもん!!!」

そうだ、自分はなんて甘かったのだろうか。

彼女はトウカにいろんなことを教わった教え子なのだ。

そんな彼女が、いつも自分を支えてくれたトウカの変化に気づかないわけがないのだ。

例え忙しくても、重大な事件があつたにもかかわらずネプテューヌの元へと帰ってこないなどトウカにはありえないことなのだから。

意外と彼女は鋭い、だから気づいてしまっていたのだろう。

もうトウカが居ないことに。

「だから私は待つてる、必ず帰って来るから」

だが、それを受け入れることはできない。

認めるわけには行かなかつたのだ。

自分が彼はもう居ないと、受け入れてしまったら、認めてしまったら、まだ生きているというほんの少しの希望を捨てることになる。

それは嫌だった、もう二度とトウカと会えないなんて、考えたくないのだ。

「ネプちゃん、あいつは死んだのよ」

だが、アイリスは彼女の願いを否定し、覆すことができない真実を彼女に突きつける。

「死んでないよ」

「眼の前で見たのよ、あいつはもう居ないの」

「そんな事ない！トウカは強いもん！この世界で一番強いんだもん！死ぬわけないよ！お姉さんの嘘つきー！」

「私だって信じたくないわよ!!!」

ネプテューヌの叫びは、アイリスの怒号によってかき消される。

これまでアイリスがここまでネプテューヌに感情を露わにしたのは初めてだった。

「私だって信じたくないのよ、あいつが死んだなんて、もう居ないなんて、でもね、私はこの目で見たのよ。あいつが死ぬところを」

「やめてよ、やめてよ！聞きたくないよそんなの！」

「聞きなさい!!今逃げてどうなるの!?!いつかは受け入れなきゃいけない

「事実なの！」

耳を塞ごうとしたネプテューヌの手を掴んで無理やり話を続けるアイリス、しかし彼女もまた必死に涙をこらえて叫ぶ。

「ここで貴女が逃げたら、あいつはどう思う？良いの？いつまでも弱いままで、トウカを失望させるつもりなの貴女は!?!」

「違う、違うよ……私は………」

アイリスはネプテューヌの手を離し、ぎゅつと彼女を抱きしめながら言う。もう覆す事ができない、取り返す事ができない事を。

「死んだのよ……あいつは」

「う、う……ウワアアアアアアあああああ!!!」

ネプテューヌは限界を超えて泣き叫んだ。

もつと一緒に居たかった、もつと一緒にいろんな所に行きたかった、もつといろんな事を教えて欲しかった、もつと遊びたかった、もつと一緒に寝たかった、もつと一緒にご飯を食べたかった、もつと一緒に……過ごしていたかった。

どうして最後に、つまらない事でケンカ別れをしてしまったのだろうか、どうして、もつと自分は大人になれなかったのだろうか。あのとき自分がピーシエにプリンを分けてあげていたら、こんな別れはなかったかもしれないのに

でも、後悔してももう遅いのだ。

リアルリトライ  
現実はやり返しなどする事はできない。

もうこの結末を変える事はできないのだ

「ごめんなさい、護ってあげられなかった………」

アイリスはネプテューヌを抱きしめながら、静かに涙を零す。

## 姉妹の道

翌日、ネプテューヌは他の人間にバレないようにいつもと同じように過ごしていた。その様子を、アイリスは不安そうに見つめていたが、誰にも気付かれる様子はなかった。

そしてその日の夜

「ネプちゃん」

「お姉さん、どうかしたの？」

「ちよつと付き合ってくれない？」

そうやってネプテューヌを連れ出したアイリスはプラネテューヌタワーの頂上へとネプテューヌを連れ出した。

空は真つ暗であたりには星がキラキラと輝いていた。

その景色はいつもよりも綺麗で、幻想的な風景だった。

「綺麗でしょ？」

「うん、すつごく綺麗……………」

ネプテューヌはキラキラと目を輝かせていた。

それが、かつての彼とそっくりだったためアイリスはクスツと吹き出してしまう。

「その反応、昔のトウカそっくりだわ」

「そうなの？」

「ええ、昔はトウカもそんなに可愛い顔してたのね」

懐かしむように思い出す、昔から無表情で、目つきが悪いことは変わらなかつたが、子供らしく可愛いところはあつたのだ。

「ねえネプちゃん、トウカって昔何になりたかつたと思う？」

「トウカがなりたかつたもの？ 科学者とかじゃないの？」

「それがね？ 子供過ぎて笑っちゃうわよ？」

かつての彼は科学の道など微塵も志してなどいなかった。

そんな子供の頃の純粋な夢、それを昔この場所で彼は語つたのだという。

「俺は誰も泣かない世の中にしたい、だって」

誰も泣かない世の中にしたい、という子供の頃の夢を語つた彼の姿

をアイリスは忘れない。だが、だからこそ胸が痛くなる。

彼の歩んできた道は誰も泣かない世の中とは真逆の人生だったのだから。

「そっか……………よし……………」

寝転がって夜空を見上げていたネプテューヌはすくつと立ち上がり、手を夜空に伸ばす。

「なら私はトウカの子供の頃の夢を実現する!!」

いきなりの事で、アイリスはネプテューヌを見つめたまま固まってしまう。

「認めるよ、トウカはもう居ないって……………死んじゃったんだって」

「良いの?」

「だっていつまでもメソメソしてたらトウカに怒られるし、それにさ、死んでまで心配掛けたくないんだ」

やはり、辛いのかいつのまにか彼女の目からは涙が流れていた。でも、彼女は笑顔を崩さない。

「それにさ、今までトウカやみんなに守られてばかりだったからさ、今度は私がみんなを守るようになりたい」

今まで守ってくれていたトウカの分まで、トウカが何百年も守ってきたこの国を自分が守り続ける。そうネプテューヌは誓った。

この国の国民がずっと笑顔で居られるような、そんな世の中を作っていく、それがトウカの願いで、今ネプテューヌが決意した事だ。

「ねえお姉さん、手伝ってくれる?」

「……………はあ、めんどくさいとか言ったらあいつに祟られそうね」

「白装束でアイリスさんの枕元にいるかもね」

「怖いような怖くないような幽霊ね」

くすくすと2人は笑いあう。

ようやく2人の間に本当の笑顔が戻った瞬間かもしれない。

「頑張りなさいよネプちゃん、あなたはあいつの教え子だもの。きつと出来るわ」

そう言って、アイリスは小指を出す。

「私はあなたの道を手伝うわ、だから指切りしましょ」

「うん！」

こうしてネプテューヌとアイリスの指は重なり、二人は約束を交わしたのだった。



「ネプさん大丈夫かな」

一方その頃、ライトはネプテューヌの事を案じていた。

アイリスはネプテューヌにすべてを話したと言っていたが、彼女は今日も変わらず笑顔を振りまいて元気そうにしていたからこそ、無理をしているのではないかと心配になったのだ。

「ライトさん」

「あ、ギアさん。どうしたの？」

廊下を歩いていると、ネプギアが彼女に声をかけてきた。

こんな夜遅くにどうしたのだろうと、少しライトは疑問に思う。

「ちよつと、部屋に来てくれませんか？」

「構わないけど……」

急にどうしたのか、少し不安になるライトはとりあえずネプギアの部屋まで付いていく。そして彼女の部屋に着くと、ネプギアはベッドに腰掛け、ライトは近くにあった椅子へと腰を下ろした。

「……トウカさんは……亡くなったんですか？」

ライトは体に電流が流されたのかと思うほどの衝撃を受けた。

どうしてネプギアが知っているのだろうか、全くわからなかったからだ。

「アイリスさんとお姉ちゃんが話しているのを聞いてしまったんです」

「……そっか」

それならば仕方がない、そう思いライトはネプギアに事の顛末をすべて話す事にした。彼女はライトの話を取り乱す事なく、静かに聞いていた。

「これが、先輩の最後だよ」

「そう……ですか……」

何も、言えなかった。

二人の間に沈黙が流れ、重苦しい雰囲気立ち込める。その重々しい沈黙を破つたのは、ネプギアだった。

「じゃあ、これからは私とお姉ちゃんは甘えられないんですね」

「そう……………だね」

今までとは全然違う生活になってしまふのは明白だ。

「お姉ちゃんもいつか、死んじゃうのかな」

命あるものに終わりは来る、それは避ける事のできない事実として生きる者たちに重くのしかかる。それは遅いか早いかの違いだ。

「私は、お姉ちゃんが死ぬところなんて見たくない……………」

「……………ギアさんは似てるね、先輩に」

かつてトウカも、幼馴染である二人を守るために戦っていたのだ。

たとえ自分が国から恐れられようとも、恨まれようとも、蔑まれようとも。二人から恐怖の感情を、負の感情を抱かれる事になったとしても。

「トウカさんは、昔どんな人だったんですか？」

「目的のためなら手段は選ばない人だったよ、人に言えない様な恐ろしい事もしてみたいだよ」

そんな人物が、恐れられないわけがない、嫌われないわけがない。

そんな中で彼は一人で自分の守りたい者を守り続けていたのだ。

結果は、報われることはなかったが。

「私は、お姉ちゃんみたいにしても明るくなんて出来ません」

ネプギアはネプテューヌに比べて地味だなんだと言われてきたが、

本人もそれは自覚しているのだ。

自分は姉の様にはなれない、けれど力はなれるはずなんだと。

だから、今度は自分がトウカの代わりに彼女を守る。それが今ネプ

ギアがやるべき事だと思ったから。

「私はもう、大切な人が死ぬのは見たくくないです。だから、私が守つてみせます」

「先輩と同じ道を辿るっていうの？でもそれは……………」

「わかってます、きつと私じゃ考えられないほどの苦痛でしょうし、重圧もあるでしょう。でも、私はこのまま何もしないのは嫌です」

その目は、どこかで見た様な目だった。

今までの彼女とは、いや、アイリスとの訓練で見せた一瞬の殺気、トウカと同じ才能だ。

そして、アイリスが一番恐れていた事が今起きようとしている。

ネプギアがトウカと同じ道を歩む。

それはつまりネプギアが外道を通り越した悪魔になるという事だ。そうなったトウカを見た事があるライトは、あまり賛成出来ない。

あまりにも、その姿は辛そうだったから、いや、辛いという感覚すらなくなってしまうたのかもしれない。そんな道だ。

「本当に、そんな道を進むの？」

「今すぐじゃないですよ、その時が来たら……私はトウカさんの様に鬼にでも悪魔にでもなつてやります」

ネプギアの目を見たとき、ライトはようやく理解した。

彼女の目は、もはやトウカと大差ない恐ろしい殺気を孕んでいた。

「分かった……じゃあ、私はそれを見届けるよ。私だけは、ギアさんの味方でいる」

「ありがとうございます」

こうして、二人の姉妹はお互いの道を違える事になった。

姉は、自分の師がたどり着けなかった理想の道へ

妹は、憧れていた男がたどり着いた地獄の先へ

確実に、二人の道は変わってしまった。

## 別れの時

トウカが死亡した事実を、ネプテューヌ達はみんなに告げた。

その場に呆然と立ち尽くす者もいれば、聞いた瞬間泣き崩れてしまったもの、そんなことありえないと否定するもの、各々のリアクションを見せた。

とくにノワールとユニ、そしてアイエフはトウカとかなり親しかったこともあり、精神的負担も大きかったのだろう。

ユニはその場で気を失ってしまったのだ。

彼の死が及ぼした影響は思ったよりも大きい、もはやプラネテューヌの、ネプテューヌだけの問題ではなかったのだ。

「さて、それじゃあ帰るか」

そしてついにやって来たプルルート達との別れの日

カイナは先に自分だけ帰ったほうがいいんじゃないかと言ったが、やはり全員で送り出したいとネプテューヌの希望を聞いたのだ。

自分の姿を見たらトウカのことを思い出してしまうのではないか、というカイナの気遣いは必要ないらしい。

「おお、やっぱりチビの方が可愛いな」

「チビじゃありません！（#、A、）」

カイナの世界のイストワールが合流し、次元を超えるゲートを作る準備ができた。ちなみに神次元のラムやロムは知らない間に帰っていた。

「みんな元気にしてるかなあ〜」

「あのアホどもは元気にしてるだろうよ、あ〜でもアイエフのやつはうるせえだろうなあ、連絡入れずにどこ行ってたんだとか」

「え？私がどうかした？」

「ああ、俺は向こうのアイエフと住んでんだよ」

「はあ!？」

今明かされる新事実アイエフはびっくりしていた。

「まあ色々あってな、居候させてんだよ。小生意気なクソガキだけど大人になっても変わらないんだなあって実感したよお前見て、あと



やっぱり胸はぺったんこのままだな」

「なによやっぱりって!？」

「どうやらカイナはアイエフの胸が成長しないことを子どもの頃から予見していたらしい。」

「でも、向こうのアイちゃんと同じくらいカイナさんはピーシエちゃんのことどうして知らなかったんです?」

「俺基本的に放任主義だから、あいつの友達に誰がいるだのシラネ」

全員が苦笑いをするが、カイナはどこ吹く風である。

「それにしてもネプテューヌの奴はどうした?また寝坊か?」

「全くあの子は……………」

それぞれが別れの言葉を伝え、あとはゲートを潜るだけなのだが、未だネプテューヌの姿は見えない。だが、後方から走ってくる影が見えた。

「おーい!」

「全く、遅いわよネプちゃん」

少し呆れたようにアイリスがネプテューヌに言う、彼女はというと、息を切らせて紙袋を持ってきた。

「ピー子、これ!」

紙袋の中に入っていたのは、ねぶのプリンだった。

本当なら大喜びするだろうが、ピーシエはそれを受け取っても疑問を浮かべていた。

「ネプテューヌ、これなに?」

ネプテューヌは一瞬辛そうな顔をする、ピーシエはブラインウォームの後遺症で記憶が消えてしまったのだ。アイリスによれば記憶が残る見込みはあまりないらしい。

「…………世界で一番美味しいものだよ!」

にこりと、太陽のような笑顔でネプテューヌはピーシエに言った。

そして、ついに来た別れの時

「それじゃあ転送を開始します!」

「それじゃあねカイナ、そっちの私に捕まらないように精々頑張りなさいな」

「うるせえよ」

そう言つて、転送が開始された。

その瞬間、アイリスは少しだけ何かが見えた。

後ろを向くカイナの姿が、一瞬だけトウカの姿と重なった瞬間を。

「……………さようなら、カイナ」

その言葉が、神次元に帰ったカイナに告げられたのか、はたまた別の人物に向けられた言葉なのかは、誰も知らない。



「よし、これでok!」

後日、ネプテューヌ達はプラネテューヌを一望できる丘の上にいた。

そしてそこには、一つの墓が

「でも良いんです？トウカさんのお葬式しなくて」

「良いのよコンパ、あの人はそういうの苦手だから」

「そうそう！トウカは人ごみと騒がしいの嫌いだからね！」

それはトウカの墓、アイリスの提案によりあいつが守った国を一望できるところに墓を作ろうという事になったのだ。

500年間にも渡り守ってきたプラネテューヌは、トウカの目にどう映るのだろうか。

「私たちが子どもの頃にも、よくここにきてお昼を食べたのよ？」

「そうなんですか？」

「ええ、最も昔はこんなに大きくなくて、発展もしてなかったけどね」

ここで笑いながら昼食を食べたことを、アイリスは遠い昔のごとく思い出す。もう二度と、あの日々は帰ってこない。

「さあ、帰りましょうか！」

「うんー」

「そうですね」

そうしてみんなは墓から離れていく。

その時ネプテューヌが振り返ると、そこにはトウカが立ってこちらに微笑んでいるような気がした。錯覚だったのか、すぐに消えてしまったが。

（大丈夫だよトウカ、私頑張るからね。トウカが守ったこの国を、絶対に守るから……そこで見ててね）

もう振り返ることはない、今度は自分が守る番だ。

自分はこの国の、守護女神なのだから



カイナ達が帰ってきた数日後の神次元

ダラダラとした日常が相変わらず続いていた。

「だから！姉さんのシスコンをどうにかして治したいのよ」

「なら結婚してやれば良いんじゃないの？」

「適当なこと言わないで！」

カイナは自宅でこちらのラステーションの女神であるノワールに絡まれていた。というより、ユニのシスコンをどうにかしてくれという相談内容で訪れていた。

「ていうかお前の依頼全部めんどくさいんだよ、そのくせ週一ペースで依頼して来やがるし」

「う、うるさいわね！良いでしょ仕事持ってきてあげてるんだから！逆に感謝して惜しいくらいだわ、女神から直接仕事を請け負う店なんてあなたくらいよー！」

「ハイハイイウレシイデース」

「棒読みやめなさいよ！」

ぎゃあぎゃあと言いが続く中、玄関が開き入ってきたのはこちらのアイエフだった。しかし超次元の様に大人ではなく子供だが

「ただいまー、あつノワール様いらっしやい」

「ああアイエフ、お邪魔してるわ」

「おう、手洗えよー」

「分かってるわよ」

意外と保護者らしいことを言っているカイナをよそに、アイエフは手早く手を洗うとカバンを自室において出かける支度をしていた。

「お？出掛けんのか」

「うん、ちよつと教会にね」

「そうかい、道に落ちてるもん食ったりすんじゃないぞ」

「あんたじゃないんだからしないわよバカイナ」

そんな会話をしていたら、玄関先からピヨコツと顔を出した人物がいた。その顔を見た時、カイナは少しだけ驚いた。

「アイちゃん遅いよー！なにしてんのさあー！」

「うるさいわね、もう少し待つてなさいよネプ子、ていうか人の家なんだからお邪魔しますくらい言いなさい」

「お邪魔してまーす！ネプテューヌでーす！」

桃色の髪をした少女、超次元ではプラネテューヌの女神をしているネプテューヌだった。もつともこちらのネプテューヌは髪をロングに伸ばしているが

「あれ……なんでここに……いやでも家に居たしなあ」

「どうしたのよ？カイナに何かついてる？」

「え？いやいや何でもないよ！よろしくカイナさん！」

「おう、うちのバカのこと頼むわ」

「まっかせてよー！」

「逆よ逆！私がネプ子の世話してるんだっての！！」

次元を超えても変わらない二人のやりとりを見て、カイナはふつと笑う。

「んーねえ、カイナさん」

「ああ？どうした」

「カイナさんって兄弟とか居るの？」

「居ねえよ、なんでそんなこと聞くんだ？」

「ううん、気になっただけー！それじゃあ外で待つてるねー！」

そう言つてネプテューヌは外へと出て行った。

「なんか嵐みたいな子だったわね」

「そうだな」

「全くあの子は……最近施設から出てもつとうるさくなるんだから」

「え？施設に入ってたのかあいつ」

「うん、親がだいぶ前に死んだんだって、でも最近になって何処かに引き取られたらしいわよ。そこがよっぽど居心地が良いのかもともと明るかったのがもつと明るくなっちゃって困るのよね」

まあそこが良いところでもあるんだけど、と言い残してアイエフは外へと消えていった。カイナは少し引つかかるものがあったが、まあ良いかと思いを投げた。



神次元のプラネテューヌの少し外れたところにある森、そこには一軒の家があった。もつとも、きちんとライフラインは通っているが。そこには一人の青年がベッドに横になって本を読んでいた。辺りはすっかり夕暮れ時だ。

「ただいまー!」

その家に、元気な声が響いた。

その少女は黒いパーカーを着た長い紫色の髪をした少女だった。

「おかえり、全く………また俺のパーカー勝手に着て行っただろ」

「だって着やすいんだもーん!」

くるくるとその場に回転する少女、ネプテューヌを見て青年は苦笑する。青年は感情表現が乏しいためきちんと笑うことができない、だがネプテューヌはそんなことは関係なしにニコニコしている。青年がとても優しいことを知っているからだ

「すぐご飯作るねー」

「手伝おうか?」

「良いよ、だって下手くそだもん」

「直球だな………さすがに凹むぞ」

「掃除洗濯出来るけどほとんど生活能力ゼロなんだから家事は私に任せといてよ」

「俺は大人しく金を稼げということか」

「失礼なー! 役割分担って言うって欲しいなあ」

そんな話をしながら、ネプテューヌは料理を作り始める。

この時点で、超次元のネプテューヌとは女子力に決定的な違いがある。

「そうだ、プリンが冷蔵庫に入ってるぞ」

「本当!?じゃあご飯食べたら食べよっか!」

「ああ、そうしよう」

ニコツ！と太陽のように笑うネプテューヌを見て、彼は少しだけ微笑んだ。このささやかな幸せに、身を委ねながら

## トウカさんの後任探し

ここのとこ著しいシェア向上が記録されているプラネテューヌの女神ことネプテューヌはご機嫌だった。これも自分の努力の賜物かとニコニコしながら言うが、アイリスがそんな訳ないでしょ、バカねえと一刀両断していた。

「ていうかお姉さんも仕事してないじゃん!」

「おバカ、私はネプちゃんの仕事ぶりを見るって仕事があるのよ」

「何それずるいー!!」

ふふふ、とアイリスは笑うがネプテューヌは頬を膨らましていた。

「でもまあそろそろ職員は増員したほうがいいかもしれないわね」

これまではトウカが教会の半分の仕事を担っていたため、彼がいなくなっただけはとも大きいのだ。そこで、そろそろ人員を増員しようということになった。

「でも普通の人が何人来ても変わらないんじゃない?」

「うーん、そうねえ……どうしようかしら」

うーん、とアイリスは悩んでいた。

当然トウカの代わりになる人間などそうそういない、もしくは存在しないかのどちらかだ。

しかし増員しなければ手が足りないというのも事実

「一人だけ心当たりあるんだけど……まあ当たってみるわ」

「え?そんな凄い人いるの?」

「まあね」

そう言っただけアイリスはネプテューヌの執務室から出て行った。



アイリスが目指す場所はプラネテューヌ郊外にある一つの施設だ。そこに目当ての人間が働いている。その施設は児童養護施設の様で、こんな所で働いてるなんてねえ、などと思いつつその扉をくぐった。

「あれえ?お姉さんだあれ?」

「うーん?ちよつとここの先生用事があつてね」

「お姉さんきれー！髪の毛つやつやだあー！」

「コラッ髪引つ張らない、つていうかよじ登るな！」

慣れない子供に悪戦苦闘していると、青い髪をした若い男が出てきた。子供たちが先生と呼ぶためその男がこの施設の職員なのだろう。「すみませんこの子たちは本当に元気が良くて……所で今回はどの様なご用件で？」

「悪いけど養子縁組の相談じゃないのよ、マリス」

「……まさかプルルー、いやアイリスか……また君に会えるとは！元気だったかい!？」

「まあね」

「とりあえず上がってくれ、積もる話もあるだろう？」

このマリスという青年は昔、しばらくトウカとアイリスと共に戦った戦友なのだ。彼もまたニーム細胞保持者である。

「いやあ、何年ぶりだ？」

「アリストロ戦線が最後だったんじゃない？」

「そうか、プラネテューヌが壊滅的被害を受けたってきいて心配してたんだよ、君が元気ということはきつとカイナも元気なんだろう、よかった」

マリスはトウカの親友だった。アイリスは魔法、トウカが科学、マリスは戦術学を専攻していたため交流は少なくなっていたが、それでもよく時間を見つけては話していた。

「……マリス、カイナはね……もう居ないの」

「居ない？プラネテューヌにはいないってことかい？」

「この世にはいないってことよ」

その言葉を聞いた瞬間、マリスの顔が白くなっていくのが分かった。

驚愕と悲しみ、それらが混じった表情を浮かべていた。

「そんな……まさか！彼が死ぬわけ……」

「死んだのよ、私の目の前で」

アイリスは彼に事の顛末を話す、マリスはその話を黙って聞いていた。



「そうか……まさか彼が僕より先に死ぬなんてね」  
「ホント、びっくりよね……」

トウカの死はやはりそう簡単に乗り越えられることではないようだ。

だが、ネプテユーンが乗り越えようとしているのだから、自分が乗り越えないでどうする。

そう考えてアイリスは明るく振舞った。

「そこで相談なんだけど、あいつの後任が必要なのよ」

「後任、僕に教会で働けつてことかい？」

「端的に言えばそうなるわ」

マリスは少し考えたが、その申し出は受けられないと断った。

「僕がここを離れるわけにはいかないんだよ」

「別にああなたが責任者じゃないんでしょ？」

「そうだけど、いや、建前はよそう。僕がここを離れたくないんだ」

決意は固い、マリスはアイリスをまつすぐに見据え考えを変える気はないという意思を見せる。

「はあ、まあ予想してたけどね。しょうがない、他の奴を探すわ」

「すまない」

「いいわよ、強制するつもりないし」

そうしてアイリスはその児童養護施設をあとにしようとしたとき、マリスが呼び止めた。

「なによ？」

「実は、ヘルナのことなんだけど」

「あいつがどうしたのよ」

「実は、彼女が生きてるみたいなんだ」

ヘルナ、その名前を聞いた瞬間アイリスに戦慄が走り、体から嫌な汗が流れてくる。

「嘘でしょ？」

「残念ながら事実だ……彼女は生きてる、そしてカイナが死んだ今……」

「動き出すつてこと？ちよつと待ちなさい、あいつの狙いはカイナで

「しよ?」

「倒すべき彼がいないとわかつたら……怒りに任せてゲームギョウ界を滅ぼしかねない」

ヘルナとはかつてトウカと最後まで戦い、ギリギリ彼に殺された女性のことだ。

トウカと同じプロトタイプのニーム細胞を持ち、彼と同等の実力を有している。

そして彼女は、トウカと共に研究していた研究仲間でもあった。

「……それは本気でやばいわね」

ヘルナが本気でゲームギョウ界を滅ぼそうとしたら、現状対抗できるとしたらアイリスだけだ。

防ぐことはできても倒すとはできない、ヘルナとトウカはアイリスたちよりも一段階上にいるため彼女を殺せるのはトウカだけだ。

「マルス、その時は悪いけど引きずってでも徴兵するわよ」

「わかってるさ」

そういつて、緊迫した空気の中アイリスは児童養護施設を後にした。

トウカの死は大きな傷を残しただけでなく、新しい脅威の誕生でもあったのかもしれない。

## お祭り準備

「終わりだヘルナ」

雨が降っている。

土砂降りの雨が、あたりを濡らして降り注いでいる中、男と女は居た。片方は、黒い髪に赤い目をした男、その男は白く透き通るような長い髪に青い目をしている女に剣を突きつけている。

「貴様は調子に乗り過ぎたな」

「ふっ、そうかもしれないね……」

はは、と自傷気味に笑う女、その目にはこれから殺されるというのに一切の恐怖などは存在していない。だから、不気味に思った。

「何を笑っている？」

「いいえ、私を殺すのがあなたでよかった……そう思っただけ」

「下らん」

男は剣を振りかぶり女の首を狙う。

「カイナ、私は死なない……必ず生きてもう一度あなたに会う……必ずね」

そう言っただけの不気味な表情を浮かべた女は、その後すぐに首を跳ね飛ばされてしまった。

その女の処刑は、不気味さを残す後味の悪いものとなった。



「おおー、光ってるわねえシエアクリスタル」

シエアの間にいる一同が見たものは、これまででは考えられないほど輝いているシエアクリスタルだった。これもエディンを倒した功績が大きいのだろう。

「これも私の人望のおかげだね！」

「あーそうねー」

「お姉さん返事が適当だよ！」

ふざけた顔でそう流すアイリスにネプテューヌが怒るが、怒られている本人はあまり気にしていないようだ。

「ふっふっふ、まあ私が本気を出せばこんなもんだよ！」

気を取り直したネプテューヌがない胸を張る。

確かに今回ネプテューヌはトウカが居なくなつた分を埋めるために人員の増員と仕事の分配、そして自分自身の仕事も（ほんの少しではあるが）増やしたのだ。

プラネテューヌはかつて無いほどのシェアを誇り、他の3国を大きく引き離しているのだ。言わば、プラネテューヌ大ブレイク中という訳である。

「でもちよつと上がりすぎな気がするけど………」

「確かにねえ」

アイエフとアイリスが少し疑問に思う中、ネプテューヌはお気楽ムードが漂っていた。

「ところで、今回私たちを集めた理由は？」

ライトがそもそもの疑問をネプテューヌに投げかけると、彼女は無い胸を張りながらこう答えた。

「今回の本題はこつちだよ！」

そういつてネプテューヌは画用紙に描かれた絵をみんなに見せた。

「なにこの下手くそな絵」

「あ、アイリスさん！ストレートに言い過ぎです！」

「二人とも失礼だよ！」

ストレートに発言するアイリスとそれをたしなめたネプギア両方に怒るネプテューヌ、気を取り直して概要の説明を話し始めた。

「今回は色々みんなに助けられちゃったからさ、教会の一部を解放してテーマパークを作ろうって話になったんだ」

「へえ、そうなの」

「面白そうですね！ねえ団長！」

「頑張つてね」

「アイリスも手伝うのよ」

そんな馬鹿な、という驚愕の表情を浮かべるアイリス、自分は関係無いとでも思っていたのだろうか。

「私も手伝うの？」

「当たり前でしょ！結構力仕事とか頼むからね！」

「ええ、私お祭りは好きだけど準備するのは好きじゃないんだけど」  
「誰だつてそうですよ団長……………」

結局のところ、アイリスは設営準備に駆り出されることになるの  
だった。



「あーだるいめんどくさい、なんで私が準備すんのかな？ ちゃん  
の企画でしょ？ 当の本人はどっか行っちゃうしどういふことよ」

「団長、それ聞くの40回目ですよ。もう聞き飽きましたよ」

「聞き飽きても聞き続けなさい」

「分かりましたよ……………そうですね」

「なんか腹立つから殴っていい？」

「理不尽！ぐはあ」

いつもより気が立っているアイリスの八つ当たりを受けながらも  
準備をするライトと文句を言いながらもきちんと設営をするアイリ  
スのお陰もあつてかお祭りの準備は着々と進んだ。

いつもよりアイリスが気が立っている理由は別に設営を手伝わさ  
れているからではない（それでも1割くらい苛立ってるが）ヘルナが  
生きている可能性を示唆するマルスの言葉が気になっていたのだ。

「まあなるようにしかならないものね……………」

いざ出てきたときは、自分がやらなければならぬのだ。

もう、トウカは頼れない。

「つていうか終わらないんだけど！ 煉獄姫のやつも今頃USJだし！  
ずるくない!?!」

「リアル世界の話はやめましょう？」

メタイ話はやめていたきたい。

## コラボその1

「さあ始まりました！プラネテューヌVSルウィー、国のシェアを掛けた勝負です！」

ある日のこと、珍しくプラネテューヌとルウィーのシェアがトップ争いをしてきた。これを利用してせっかくだから勝負をしようというネプテューヌからの提案をブランが受け、それぞれの秘書を引き連れてテレビで勝負しようということになった。

ちなみに生放送である。

「はい、それで実況席にはラストイションの女神ノワール様とリーンボックスの女神ベール様にお越しいただいております！」

「よろしく願いますわ」

「ええ、よろしく」

実況席には司会者とノワールとベール、そして観客席にはアイリスやネプギア達がニコニコしながら座っていた。

「それでは登場していただきましょう！まずは……プラネテューヌの明るい女神！ネプテューヌ様！」

「やつほーみんなー！私だよー！今日は集まってくれてありがとうー！」

ネプテューヌが元気に飛び出すと、そこかしらから歓声が聞こえてきた。

「そして、ルウィーの知的で寡黙な女神、ブラン様!!」

「今日は、よろしく頼むわ」

ブランはネプテューヌとは違い落ち着いてステージに出た。それでも観客のボルテージは最高潮だ。

「そして、自他共に認めるブラン様ファン！そして女神の秘書官！それでは登場していただきましょう……細氷ハク様です!!」

その声と共に、ステージに金髪碧眼のイケメンな少年が現れた。

彼の名は細氷ハク、ブランの秘書だ。

「ハク様、今日はよろしく願います！」

「こちらこそよろしく願いますよ！必ずブランを優勝させますか

らね！」

ハクは気合い十分といった様子でブランの横に立った。

ブランはそんなハクを見て少し恥ずかしそうにしていたが、すぐにいつもの様子に戻った。

「そして、皆様は見たことがあるでしょうか？ネプテューヌ様の秘書を……………」

ざわざわと観客席がざわめき始める。

なぜならネプテューヌの秘書は全くメディアに顔を出さず、顔すら知らないという人が多くだからだ。

男か女か、そして何歳なのか、それすら分かっていない。

「そんな神秘に包まれた秘書がいま……………その沈黙を破り今日登場します！それではお招きしましょう、ネプテューヌ様の秘書官、トウカ様です！」

とてつもない完成共に、我らが主人公であるトウカが居心地悪そうにいつものロングコート姿で現れた。

忘れている方もいるかもしれないが、彼は人ごみと騒がしい場所が嫌いである。

「さあトウカさん、今回はよろしくお願いします」

「ええ、お願いします」

……………たった一言、それだけ言ってトウカはネプテューヌの隣に立った。しかし神秘に包まれていた存在が目の前にいるのだから司会者はまだ質問を続ける

「質問なのですが、なぜいままでメディアに登場しなかったんですしよ  
うか？」

「出る必要がないと判断したまでです」

いつものように無表情にそう言った。

「ええっと、秘書をされて長いんですか？」

「長いです」

司会者潰し、と言われてもしようがないほど絡まないトウカに司会者も意地になったのかさらに質問しようとするが

「早く進めませんか？」

トウカは人混み＋出たくもないところに出ている＋テレビという公衆の目に晒されているという不快感から来るイライラを込めた視線を向け司会者を強制的に黙らせた。

「もう！トウカはノリ悪いなあ！」

「こういう場所が慣れていないだけです」

一応公式の場合なのでトウカはネプテューヌに敬語を使っている。

「さあ、勝負の内容はこちら！」

司会者がディスプレイを指差すと、そこにはデカデカと大きな文字が現れた。

「上司と部下の間に絆はあるのか!?どちらがお互いのことを知っているかクイズ！」

ルールは簡単、今から秘書と女神交互に関係しているクイズを出題、3点先取で勝利

「では先ずは女神様に問題です！秘書が好きな色はなんですか！」

「なんだ、こんなの簡単だよお！」

「ええ、これは問題ないわ」

そしてそれぞれがボードに書いていく

「はい！それではお互いに回答を出してください！」

ブランとネプテューヌがお互いにボードをひっくり返した。

ブランの場合は白、ネプテューヌの場合は黒と書いている。

「ネプテューヌ様、根拠はなんででしょうか！」

「だってずっと黒い服着てるもん！一番は黒だよ！」

「なるほど、ブラン様は？」

「昔聞いたことがあるのよ、何色が好きだって」

「そうですか、それではまずハク様から正解をどうぞ！」

「はい、正解は……白です！流石ブラン！俺のことわかってくれたるな！」

「ちよっと、抱きつかないで」

嬉しいのかハクはブランに抱きつき、それを彼女は少し顔を赤くしながら振りほどいた。

「さあ、次はトウカ様どうぞ！」



「はい、俺の好きな色は赤です」

「ええー!!」

なんと、トウカの好きな色は黒ではなく赤ということがわかった。「なんで黒じゃないの!?!いつもコート着てるじゃん!」

「それは……お前がくれたコートだからだ」

「あ、そうなんだ……それなら……いいかな?」

なんとなく照れるネプテューヌといつもと変わらず無表情なトウカ、対照的だが二人はちゃんと繋がっているのだ。その光景を見た人間たちはなんとも言えない表情になるのだが。

「さて、解説のボール様如何でしょう?」

「そうですね、ネプテューヌが秘書のことをあまり理解していなかったということでしょうか」

「あの二人実はあんまり仲良くないんじゃない?」

「失礼なあー!!」

ボールとノワールの解説に憤慨するネプテューヌだが、肝心のトウカはどこ吹く風である。

「それでは第2問行きましょう!」

次はトウカとハク、秘書組が答える番だ。

ネプテューヌがミスしたためトウカがミスすればおしまい、ルウイーの勝ちになってしまう。

「女神様が入浴する際、一番最初にどこを洗うのでしょうか!!」

その質問が出た瞬間うおおおおおおおおお!という歓声がわいた。

会場のボルテージが一気に最高潮まで上がる。

「な、なんだこの質問は!!」

「おお!大胆な質問だねえ!」

プランが顔を真っ赤にしながら怒り、ネプテューヌは目を光らせている。そしてハクは不敵な笑みを浮かべトウカに宣言する。

「トウカさん、悪いけどこの勝負もりましたよ」

「そうか」

トウカ自身速く終わらないかと思っっているので負けたら負けの時である。

「プランが一番最初に洗うのは、すばり胸です！」  
「バカヤロオオオオオオオオ!!」

その瞬間ハクの顔面にハンマーが襲い掛かる。

「なんで胸をチョイスしたんだてめえは!! 違うし悪意あるだろお前!!!」

「そ、そんなことは……………」

「さあ解説のベール様、如何でしょう?」

「プランの胸は一番体の中で洗いやすいと思いますわ、だからハクさんもそう言ったんでしよう、慎ましいサイズですから」  
「ぶっ殺す!!」

プランが回答席を飛び出してベールへと襲い掛かるが、観客席にいたアイリスに羽交い締めによって止められる。

「ほらさっさと座りなさいちっさいのは事実なんだからっ!」

そう言っつてプランを無理やり回答席に座らせるが彼女の怒りはまだ治らない。引き続いて襲おうとするが、今度はハクに止められる。

「まてプラン!あの二人には色々勝てないから!」

「色々ってなんだゴラアアアアアアアアアアア!」

そうして再び矛先がハクへと向かう。

ハクがボコボコにされている中アイリスとベールはニヤニヤとしながら胸を強調してみていた。

その光景を、トウカはただボーツと眺めていた。

「ちよつとトウカ。いったい何を見てるのかしら?」

「別に、さっさとこのクイズを終わらして欲しいと思ってるだけだ。そもそも何でお前は変身してる?」

「トウカが私じゃなくてお姉さんやベールをずっと見てるからよ、あの二人私の秘書を取ろうとするなんて…………トウカは私のものなんだからあああ!」

「意味がわからん座つてろ」

「ふおお!」

ネプテューヌは某サイヤ人の王子のように机にめり込まされてしまじう。

そしてブランが暴れたためセットが壊れてクイズ大会は勝負が付  
かずに終わったのであった。

## ルウィーとの確執

アイリスとライトの協力もあって、お祭りの準備は瞬く間に終わってついに開催にまでこじつけることになった。

そこで、自分たちの国民だけでなく、友達であるノワールとブラン、そしてベールも誘うことにしたためラストイションに集まることになった。

ちなみにどうして四女神が集まるときに必ずラストイションに集まるのかというと、他の三国の丁度中心に位置するのがラストイションなのだ。そのためいちばん集まりやすい、という理由からここに集まる人が多い。

「というわけで、はいこれ！」

ネプテューヌは笑顔で三人にチケットを渡す。

もちろん三人とも来てくれるだろうと思っていた彼女だが、思っていたより三人はあまり乗り気ではないようだ。

「そんなことのために呼び出したの？」

「そうだよ！みんなにもお世話になってるからね！」

そう言うネプテューヌだが、ブランはくだらないと吐き捨てて飛び去ってしまった。

「ネプテューヌ、あなたもう少しデリカシーっていうものを持ちなさいよ」

「え？どういうこと？」

「いいネプちゃん？今までルウィーはラストイションと常にトップを張り合ってきた国、プライドならノワールちゃんと同じ位高いはずよ。でも、今回はこれまでシエア最下位だったプラネテューヌに逆転されただけじゃなくて今のルウィーのシエアは最下位、ブランちゃんにとって屈辱的でしょうね」

「そんな中あなたの国のお祭りに行くのはブランのプライドが許さない、ということですよ」

そういつてブランに続きベールまで女神化して飛び去ってしまう。

5bpの出演依頼も却下らしい、アイリスはけち臭いわねえ、と悪

態をつきながらその光景を見ていた。

「もうほっときなさい、しよせんその程度の器ってことよ」

「ちよっとアイリス、そんな言い方ないでしょ」

「事実でしょ？ちよっとシエアが逆転されたからってへそまげて、体と胸だけじゃなくて器も小さいってことよ。いわば子供と一緒に、自分のことしか考えてない。そりゃあシエアも落ちるわけよ」

「お姉さんーそんな言い方ないよー」

友達であるブランを侮辱されてネプテューヌは怒るが、アイリスは態度を変えない。

「全く、どうして歴代のルウィーの女神って全員あやってプライドだけ高いのかしらね」

はあ、と昔を思い出してため息をつくアイリスを、どうしてかネプテューヌはこれ以上責める気にはなれなかった。

◇◇◇

旧プラネテューヌ国立研究所

はるか昔に建てられたその建物は廃墟になっているものの中には一切人の手が入っておらず、当時のすがたをそのまま残している箇所も多い、現在は厳重な立ち入り規制が敷かれており、ネプテューヌですら立ち入りをトウカから厳しく禁止されていた場所でもある。

そんな場所の一角に、明かりがついていた。

部屋の電気のような明るい光ではなく、パソコンの電源を付けたようなかすかな光。

その場所には二人の少女がいた。

「今回は何か収穫あった？」

「トウカさんの日誌を見付けました。何か書いてるかもしれませんが」

ほんの少しだけ読むことに気が咎めたが、覚悟を決めてネプギアはそのデータを開き始めた。

「いくつか断片的に分けてるので、一気に全部読むことはできないですわね」

「じゃあある分だけ読んでみようよ」

そうして、ネプギアは読み進めた。

15XX年 7月25日

今日からプラネテューヌはルウイーに侵攻を開始した。

魔法が異常に発達した国で、プルルートのやつが戦争が起きる前よく訪れていた国だ。

まああいつは魔法使いだからな、ルウイーはすべての魔法使いの憧れの国だから仕方ない。

プラネテューヌの魔法はルウイーに比べて大きく劣っている、魔法技術を提供してもらおう代わりにこちらは科学技術を提供するという提案をしたのだが、これは拒否されてしまった。

それどころか今戦争中であるタリに手を貸すという情報を得たため今回の侵攻を決定した。

ルウイーとタリが手を組んだら勝機はない、ということはないがかなりの損害が予想されるだろう、だからこそ先にルウイーをたたく必要がある。

たしかプルルートはルウイーの女神と親しくしていたはずだ。

あいつには酷なことをさせてしまおう、できる限りあいつが手を下さず俺がやらなければならぬ、あいつがいらぬ罪を背負うことはないのだから。

滅ぼさず、降伏させるというのはいささか面倒だが、これはプルルートのためでもあり、今後必ずプラネテューヌの役に立つはずだ。

「プラネテューヌは、昔ルウイーと戦争したんですか？」

「戦争………つていうのかな」

ライトは思い出すように、そう呟いた。

彼女に取ってもあまりいい思い出ではないようだ。

「昔ね、タリっていう国があったの。今のプラネテューヌの教会がある地域かな、元々プラネテューヌの領土はもつと小さくてね、そこに隣接してたのがタリだった」

当時大国だったタリは周辺諸国をすべて取り込んでおり、プラネテューヌだけはそれを免れていた。

「プラネテューヌは他の国と戦ってタリと同等の領土を持つように

なって、本格的に戦争が始まったんだよ」

「そして、プラネテューヌが勝った……」

「その戦争に尽力したのが団長と先輩なんだよ」

「活躍したんですね、二人とも」

「団長はタリの1個師団を一人で壊滅させたからね……」

それを聞くだけでも、アイリスが当時からどれほどの強さを持つていたかが伺える。

「トウカさんは……」

「先輩にいたっては一人で首都を陥落させて、女神の首を国民の前で跳ね飛ばしたんだよ」

「トウカさんが……」

ネプギアの中のトウカはとても優しかった。

どんなに忙しい時でもネプテューヌと自分を気にかけてくれ、分からないことは丁寧にいつも教えてくれる。そんな優しいお兄ちゃんのようなトウカが、そんな事をしていたなど思いもしなかった。

一体、どれほどのネプギアの知らないトウカが居るのか、想像も出ない。

「アイリスさんは、どんな気持ちだったんだろう。ルウイーにトウカさんが進軍した時」

「私たちの前では毅然に振舞ってたけど、多分内心穏やかじゃないと思う」

それは、アイリスにしかわからない。

## 自分なりのやり方で

「だあああああ、もうマジで疲れた」

アイリスは祭りの準備に追われ、ついに一般公開されていない広場のベンチに倒れ込んでしまった。やるだけのことはやったのだから後はもうライトやネプギアたちに全て押し付けようという魂胆である。

「あー疲れた、ネプちゃんも頑張るわねえ。そりや国民のためなんだから当たり前なんだろうけど。それにしても、他の三女神はほんとケチくさいわね、特にルウィーなんか滅びればいいのよバーカ」

ネプテューヌのチケットを受け取らなかった三女神に文句を言い、そんなことのために、などと揶揄したブランには完全に敵意むき出しのアイリスであった。

「だからルウィーなんか嫌いなのよ、プライド高くて、他の国と一切面識なくて、自分の言うこと曲げないんだから……」

昔のことを思い出したのか、だんだん顔が辛気臭くなっていくアイリス、それを自分でも気づいたからか、寝返りを打ち本格的に眠る事にした。

「こんなとき、あなたならどうしたのかしらね……」

今は亡き幼馴染のことを思い出しながら、アイリスは眠りについた。

『精神的にまだ立ち直れてないのね、しょうがない子……少しだけ元気つけてあげようかしら』



「んっ?」

アイリスはふっ、と目を覚ます。

するとそこは見たことがあるような部屋で、自分は寝室のツインベッドで寝ていた。この時点でアイリスは自分が置かれている状況がおかしいことに気づく、なぜなら自分は教会のベンチで寝ていたはずなのに、こんな寝室に居るからだ。

「あれ?……って……?」



とりあえずこのベッドにいても仕方が無いと、アイリスはベッドから出て扉を開ける。すると、少しいい匂いがしてきた。先ほど時刻を見たら午前8時、ちょうど朝ごはんの時間帯だ。

「誰か居るのかしら……」

そう思つてキッチンに近づくと、一人の男性がいた。

「ん？今日は珍しく自分で起きたんだな。雨でも降るか」

真つ黒い髪に目つきの悪い目、真つ赤な瞳に相変わらずハイライトは無い。自分にとって切つても切れない縁で繋がれている男が、そこに居た。今はいない筈の彼が

「トウ……カ？」

「寝ぼけてるのか？早く椅子に座つてろ、もう直ぐ出来る」

どうしてトウカが生きているのか、何故自分の朝食を作っているのか、何が何だか全てがわからなくなつてしまった。

「いや、え？なんで生きてるの？」

「生きてたら悪いのか？」

「そうじゃなくて、死んだはずなのに」

「夢でも見たんだろ、ほらとつとと座れ」

そう促されるまま椅子に座つて朝食を食べ始める。

「あなたつて料理下手じゃなかった？」

「お前が必死に教え込んだらだろう、どこまで寝ぼけてるんだ。いよいよボケが始まつたか？」

明らかにおかしい、自分がトウカに料理を教えたことなど一度も無い。そもそもトウカが料理上手になること自体無理というか不可能というか、シチューを作っただけで鍋を溶かす男がどうやって料理上手になればいいのだろうか？

さらに辺りを見渡すと、二人の写真がいくつか飾られていた。その中の一つに驚くべきものがあり、アイリスは自分の目を疑つた。

（え？なに、あれつて私ウエディングドレス着てない？トウカタキシード着てない？もしかしなくても私たち……結婚したことになつてないこれ!?!）

そして自分の指を見ると、指輪をしていることが確認され予想が決

定的になった瞬間である。しかし彼女にとってそれはさらに事態を迷宮へと誘ってしまう余計なものであった。

(なにこれどういうこと? どういう事!?)

事態に混乱してながらもなんとか朝食を食べ終え朝のまったりした時間を過ごす事になった。ちなみに朝食は大変美味しかったらしい。

(この時間に教会に行かないって事は仕事はもう引退したのかしら……………)

「ねえ、教会には行かないの?」

「どうしてだ?」

「いやあ、その……………久しぶりにネプちゃん達の顔見たいなーって」

「どのみち今日は居ないぞ、ラスティションに遊びに行ってるらしいからな」

行く用事は無い、という事はもう仕事は引退済みらしい。

まあ彼は仕事しなくても余りあるくらい財力があるのでおそらく問題は無いだろう。トウカは甘味以外にほとんど物欲が無いためお金を使うことが無く、国のナンバー2の年収が300年ほど続けばそれくらい金額になる。そもそも仕事しなかったのでお金を使っている時間が無かったのも一つの原因だろう。

「何処かに行きたいなら行ってこい」

「いや、そういう訳じゃないのよ、えーと……………なんていうかあ」

全くこの距離感に馴染めていないのだ。

確かにトウカと性行(アイリスが一方的に)は何度も経験があるが、夫婦というのは全く経験したことがないため、一言で言えばどう接しているのかわからないのだ。

(よし、思い切ってやってみようかしら)

思い立った瞬間、アイリスはトウカの座っている隣に座りそのまま横になって彼の膝に頭を乗せる。俗に言う膝枕を勝手にやってみた。

いつもならここで膝から突き落とされて終わりなのだが、今回は当たり前前のようにトウカはアイリスの頭を撫でていた。

(あー、なんか全てどうでもよくなってるわね……………ていうかこつち

が現実見たいな……)

「ねえ、一つ聞きたいんだけどさ」

「どうした?」

アイリスは、たとえ話として先ほどまでに自分が悩んでいた事をトウカに話してみた。どういう状況なのかはわからないが、ここに彼がいるのだ。ちようど聞いてみたかった事を聞いてみる。

「そうか、そうだな……俺なら放っておく」

「ほっとくの!?!」

まさかの発言に驚くアイリスだが、トウカはさも当たり前のように話す。

「自国の祭りなんだから他の国の女神が来なくたって十分盛り上がる、嫌々来ても向こうだって楽しくないだろう。それにこちらとしても無理強いはいしたくない。だから、あちらが参加したくなるような祭りになる様に俺は努力する」

「……流石ねえ、私そこまで考えられなかったわ」

「お前は元々頭が弱いしな」

「なにそれバカにしてる?」

「それに、それは俺のやり方だ。お前のやり方じゃない」

「私の……やり方?」

この意見はあくまでトウカの意見であり、トウカのやり方だ。

もちろん人間の数だけやり方がある、それは当たり前前の事である。

「お前は俺とある意味対極だからな、やり方にも違いが出るさ。だから、俺のマネなんてしなくていいんだ」

自分は、ネプテューヌのためにトウカの代わりにならなければならないと思うていた。彼が守ったあの子を自分が守る、育てる、導く、それが自分の役割だと思ってた。でも、それはトウカのマネをする事ではない事に今ようやく気付いた。

自分はトウカとは違うのだから、自分なりのやり方でやればいいのかと。

「そっか、あなたのマネする必要なんて……どこにもなかったのね」  
どうしてこんな簡単な事に気付けなかったのだろう。

普通なら、誰でもわかつている事なのに

アイリスは起き上がり、扉へと手をかける。

そんなアイリスの姿をトウカは、こうなる事がわかつていた様に微笑む。

「行くのか」

「ええ、たまにはあなたに甘えられてよかったわ」

「そうか……………あの子を頼む」

「任せなさい、あなたと違ってスパルタ教育してあげるから」

そう言つてアイリスは扉を開ける。大好きだった幼馴染に、背を向けながら。



「いざ戻つてくると、寂しいものね」

アイリスは広場のベンチで目を覚ました。

あの空間は夢だったのか何だったのかはわからないが、今はそれは置いておく。

「団長ー！」

「なによライト」

「ネプさん見ませんでしたか！ブランさんに呼び出されて行っちゃったんですよ」

「呼び出された？妙ね……………」

そもそもブランはシェアの回復で躍起になつてゐるはず、そんな時にネプテューヌをわざわざ呼び出すには何か理由があるはずだ。

「なんかキナ臭いわね、ちよつと様子見に行つてくるわ」

「わかりました」

アイリスはそう言つてネプテューヌがブランに呼び出されたところへと向かった。

## コメント返し4

トウカ「最近忙しいらしく、新しい小説を計画中らしいから今回はコメント返しだけらしい」

アイリス「あいつエタってる小説4つもあるのに新作出す気？バカでしょ？」

トウカ「どうも友達にどうしても頼まれたらしくて断れなかったそうだし」

アイリス「あっそ、まあ艦これのssはもう少しで出来るみたいだけど、アカメが斬るなんて目処も立ってないのよね……」

トウカ「とりあえず前回の続きからコメントさせてもらうか、ちなみに連載が終わった方のコメントは今回残念ながら読むことは控えさせてもらおう」

アイリス「ごめんなさいね？」

### 一つ目

物理的に頬つぺたが落ちるって…怖っ！(((;。D)))

時雨「ライトの料理だけ食べたいね、モグモグ…」

ルナ「もきゅもきゅ…」

あの…お二人さんそのプリンはどこから？というよりルナちゃんいつの間に!?

時雨「ルナが特製プリンを持ってきてくれたの…モグモグ」

ルナ「つい…さつき…もきゅもきゅ」

そ、そうですか…私には？(^^;)(^^)

時雨・ルナ「ないー!」

ウソダドンドコードン!!??

時雨「さて作者は無視して質問といこうかな？」

ルナ「…ジョジョの奇妙な冒険で…好きなキャラは？」

時雨「僕は空条承太郎だね」

ルナ「私は…アヌビス神…作者は？」

うう…DIO様にデイエゴです…(TOT)酷い…時雨ちゃんにル

ナちゃん…(TOT) 私には無いなんて…(TIT)

トウカ「ジョジョか、俺はあまり見てないから好きなキャラは居ないんだ」

アイリス「私はジョセフかしらねえ、やっぱりあのチャラけた感じが私と合ってるわ」

トウカ「そういえばライトはどうした？」

アイリス「買い出し」

二つ目

です。???改め、謎の闇(仮)ですわ」

……お願いだから帰ってくれない？」

謎の闇「だめですよ？本編での出番が強引に取られちゃったんですからあ、暇潰……暇潰しの場所はここしかありませんしい？」

……えー、作者の自分は一旦落ちるので、どうか平穩に片付く事を祈ってます。

謎の闇「さて、邪魔なものも居なくなった事ですし、早速、ワタクシ……本編なりの口調に変えて俺(アタシ)と称しましょうか」

謎の闇「この間の問答で気に入ったアイリスに提案なんですけど、俺(アタシ)のお友達(駒)になる気はありません？」

謎の闇「もしも受けるなら、その暗い男(トウカ)一人程度なら容易に叩きのめして好き放題出来るだけの力の供給を約束しますけど」

謎の闇「勿論、俺(アタシ)はその男(トウカ)にはなんの興味もありませんから、襲おうが殺そうが壊そうが誓って一切邪魔立てはしませんわよ？」

謎の闇「……え？その際の俺(アタシ)のメリットはなんだ……と？」

謎の闇「勿論、貴女の持つニーム細胞……でしたっけ？」

謎の闇「アレを含めて貴女の技術や特殊能力が俺(アタシ)のモノに出来る事ですけれど、なにか？」

謎の闇「……ああ、因みに他のお友達(駒)ですけれど、そう言えば妄言が現実に反映される力を持った娘が1人だけですわ。まあ

尤も、自分が守護する民（塵）に裏切られて発狂した挙句に光から闇に堕ちて来たのを拾ったんですけれど」

アイリス「トウカ、なんか黒っぽいホコリみたいなのついてるわよ？」

トウカ「うん？ああ、服が黒いから気づかなかった」（黒っぽいホコリを払う）

セイ「あなた如きじゃこの子たちに勝てないわよ？何兆年かけてもね、今のあなたなら……今のホコリみたいに軽くあしらわれるのが落ちだわ、クスクス……」

トウカ「??何かいなかったか？」

アイリス「ゴキブリとかじゃない？」

トウカ「やめろ」

三つ目

先輩質問です！

トウカさんは世界を滅せる程の強さって言うてましたがそれってどのレベルなんですか？

ロト「いきなり物騒だな」

お？ロトくんじゃん。

どう？うずめちゃん達に絞られてきた？（性的）

ロト「まあ、それなりにな」（説教）

え？

ロト「ん？」

い、いや、あの、その。

ロト「？」

えーと？

DT卒業おめでとう！

ロト「いや、とつくの前に卒業してるけど」

………。

ヒロインs 『『ローロートロー』』

ロト「まずい!？」

ヒロイン s 『『まーりてーりー！』』』

……それでは質問の続きです！本当にゲームギョウ界を消滅させるレベルなのか、生物を根絶やしにして国を崩壊させ自然を破壊する『死んだ世界』にするレベルなのか。

同じ『滅び』でも龍玉の人造人間と完全体セル並みに違いますよね。

トウカ「そう言われてもなあ、やった事がないからわからん」

アイリス「まあ確実に死んだ世界にはできるんじゃない？」

トウカ「消滅させることも可能といえば可能だが、やる意味もないからな」

#### 四つ目

ベールの秘書をしてるミコトだ」

ベルナ「お、同じく別の次元のリーンボックスの女神候補生、ベルナです」

ミコト「トウカ、先輩？やっぱり秘書の仕事って「ストロップ!!」

ミコト「ど、どうした？ベルナ。頭のねじが飛んでるのはねぷ子だけではないんだぞ？」

ベルナ「それはあまりトウカさんの前で言っちゃいけない気が……まあそれはいいや。お兄ちゃんが聞きたいのはそんなことじゃないでしょ」

ミコト「ああ、そうだった。えっと、秘書としてうまくやっていく秘訣を教えてください」

ベルナ「え？どうして？お兄ちゃんはもう十分うまくやれてると思うけど」

ミコト「それはベールだから出会ってねぷ子じゃああはいかないだろう」

ベルナ「そ、それは……確かに」

ミコト「ど、言うわけでどうして先輩はねぷ子がだだをこねるときどうやって仕事させてるのが知りたい。教えてください」

ベルナ「ど、言うわけですのでお願いします。あと、うちの兄が失礼しました」



トウカ「俺は秘書としてうまくやってるのか？」

アイリス「質問に質問返してどうすんのよ」

トウカ「いや、俺はただ当たり前前のことを当たり前前のようにやって  
いるだけだからもつとうまく出来る人間なんて山ほどいると思うん  
だが……」

アイリス「睡眠時間20分の人間なんてあなたくらいよ」

トウカ「そうだな、ネプテューヌが仕事をしないのはいつものこと  
だから、させる方が面倒くさいから自分でやるな」

アイリス「だからねぷちゃんが調子乗るのよ？トウカがやってくれ  
るからいいやー的なノリで」

トウカ「ネプテューヌに無理やり仕事させるよりも自分でやった方  
が面倒な事が少ないし速いからだ」

アイリス「でも女神がサインしないといけない書類もあるでしょう  
？」

トウカ「その時はあいつが楽しみにしているプリンの蓋を徐々に開  
けて行く。そうしたら俺に食べられるという恐怖に怯えて仕事をす  
るからな」

アイリス「あなた、結構なことしてるわね………」

というわけで今回は以上です！

## ルウイーの女神とプラネテューヌの青い魔導師

ブランとネプテューヌは剣を交える。

それはネプテューヌにとつて望んではないことだが、ブランは手加減できるほど甘くは無い。

「やめてブラン！ 私たちが戦うことなんて！」

「お前になくても、私にはあるんだよ!!」

二人の戦いはさらに苛烈さを増していく、そう思われたが二人の頭上から恐ろしい大きさの雷が光の速さで落下し二人をとらえた。

あまりの痛さに二人とも絶叫を上げる。

「コラアそこの二人!! 何やってんのよ！」

二人がフラフラしながら上を見上げると、物凄く機嫌が悪そうな顔をしているアイリスが右手にバリバリと電気を纏いながら電撃で出来た蝶のような羽で空を飛んでいた。

「テメエこそいきなり何しやがる!!」

「それはごつちのセリフよ！ただでさえ忙しいのにうちの女神呼び出してんじや無いわよ!! 用事があるなら自分から来なさいボケ!! ネプちゃんも！自分からお祭りするって言い出したんだから準備抜け出してホイホイ行かないの！」

「ご、ごめんなさい？」

どうして自分が怒られてるのかよく分かっていないネプテューヌはこれ以上火種を撒かないようにとりあえず謝っておくが、隣にいるブランは興奮しきってそうはいかないようだ。

「ふざけんな！これは女神の問題だテメエはすっこんでろ！」

「ちよつとブラン、今お姉さんをあんまり刺激したら……」

「うるせえ！テメエらはどこまで私に舐めたことすれば気が「じゃあかあしわああああ!!」ぐはあ！」

有無を言わさずアイリスはブランの頭にげんこつを叩き込む。

「で、何の用よ？くだらない用事だったらルウイーまでぶつ飛ばすわよ」

「お姉さんは本当に物騒ね……」

「お黙り」

ブランは興奮気味に現在の状況をアイリスにはなす、端的に述べればプラネテューヌのシェアが伸びている分だけ他の3国のシェアが増えている。だからネプテューヌが自分たちのシェアをだまし取ったと言うのだ。

「くだらな、さっさと帰るわよネプちゃん、あー来て損した」

「えっ、ちよっとお姉さん!」

アイリスは心底どうでもよさそうにネプテューヌを引きずってプラネテューヌへ戻ろうとするが、ブランがそうはさせまいと立ちはだかる。

「くだらねえだと!ふざけんな!」

「くだらないもんをくだらないって何が悪いのよ、そもそも頭の弱いこの子がそんな賢いことできるわけ無いでしょ?」

「あれ、さりげなく私馬鹿にされてる?」

ネプテューヌの疑問をスルーして、アイリスとブランは話を続けた。  
いた。

「なら、イストワールやネプギアかもな!」

アイリスはブランが振り下ろした斧を躲しながら会話を続けていく、女神一人の攻撃を簡単に避けるということ自体普通では無いのだが、ブランとてそんなことはとうにわかっている。

「イストワールがそんなことしてる余裕があるわけ無いでしょうが、ギアちゃんだってお人好しなんだからそんなこと出来ないわよ。まあ確かにだまし取られたっていうのは気になるけど、あなたには関係無い話よ」

「何が言いてえ……………」

「本当に突き止めたいなら、こんな所で喧嘩売らないでネプちゃんのお祭りに参加すればよかつたじゃない」

仮にプラネテューヌがシェアをだまし取っていると仮定しているのであれば、直接ブランが教会に行つて調査すれば問題は無いのだ。そしてそれをするには今回のお祭りは絶好の機会、お祭りに遊びに来たふりをして探りを入れれば何か分かるかもしれない。

「もしだまし取ってたとしても、こんな馬鹿正直に突っ込んだってしゃべるわけじゃないじゃない。頭に血が昇るのはわかるけど、その辺きちんと考えなさいよ」

「そんなもん、袋叩きにしてから聞けばいい話だろうが!!」

そしてもう一度振り下ろされる斧を、アイリスは片手で掴んで止めた。ブランは距離を取ろうとするが全く動かない。

「…………ちなみにこれでも私女神のエージェントだから、私はネプちゃんを守る義務があるの。これ以上攻撃するなら…………ルウイーがどうなるか分かんないわよ」

ゾワリツと、これまでに感じたことの無い怖気がブランの中に駆け巡る。殺気というには生易しい、初めて殺されると思った瞬間だった。自分はこの女には勝てない、分かってはいたが改めて思い知らされてしまう。だが、自分は女神なのだ、弱みを見せてはいけない。

「やめてお姉さん!ルウイーとは友好条約を結んでるのよ!!」

「だから何?先に攻撃してきたのは向こう、私たちは防衛するだけ、友好条約に違反してるのはルウイーよ。他の国からも責められることは無いわ」

「そういうことじゃない!ブランは、ブランは大切な友達なの!」

友達、という言葉が、アイリスに昔の記憶を思い出させる。

かつてのプライドの高い友達を、そのプライドを完膚なきまでにズタズタに引き裂いたある男のことを

「あなたは優しいわねネプちゃん、こんな奴のことまだ友達だって言っただげるなんて」

自分にはない優しさを持っているネプテューヌ、彼女のそんな姿を見てトウカもこんな気持ちになったのだろうか。

「シエアをだまし取ったってタカくくって友好条約を無視して攻撃してきて、友達だったらそんなことする?表面上の調査だけじゃなくて、きちんと調査した上で、それでも怪しかったら直に話すのが友達っていうものじゃないの?」

「それは、ブランはちよつと喧嘩っ早いだけよ」

「それでももしあなたが重傷を負ったら?ギアちゃんやライトは絶対に

ブランちゃんを許さないでしょうね」

それだけではない、国のトップが重傷を負ったなどということが国民にしてたら大惨事が起きる。プラネテューヌのルウイーに対する心象は下がり、ルウイー自体のシェアも下がってしまうだろう。

「自分の国の不利益が生じる、そこまで考えたんでしようね？ブランちゃん」

「それは……………」

そこまでは考えることができなかった、という顔をしている。確かに冷静な判断ができない状態だった。しかし、一国のトップはそれではいけない。アイリスは、ブランの首を力を込め掴む。

「二国を治めてる女神が、そんなことも考えないでどうするの!!! 貴女には自覚つてもんが足りないのよ、自分の行動の一つ一つが国を動かすつてことを自覚しなさい!!」

「っ……………てめえに、てめえに何が分かるんだよ!!!」

怒鳴られたことに反射的に言い返してしまい、咄嗟に武器を振るう。

それをアイリスは腕で弾いて、ブランの腹に膝蹴りを見舞った。

腹が破れるかと思うほどの衝撃に悶えながら、ブランはアイリスを見据えるが、アイリスは彼女の顎を蹴り上げた。蹴り上げられた衝撃で目の前が湾曲し、それでもなんとか体制を立て直した。

「私はあいつみたいに優しくないから、攻撃してきた奴を簡単に許したりはできないの、だから……………全力でかかってきなさいよ。そうすれば、貴女を殴る大義名分が出来るから」

アイリスはブランを睨みつけ、腕に電撃を纏った。